

アーマードコア・オルタネイティブー 白い鳥 ー

カズヨシ0509

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類種の天敵が討たれ、数週間が経過――。

アーマードコアネクストの大半は姿を消し、表舞台から退場した。時代は再び、リンクスからレイヴンへ――。

しかし、突如として枝分かれした世界同士が融合を果たす。

アーマードコアシリーズとマブラヴオルタとのクロスものです。アンチヘイトは念の為。

無謀と知りつつやっちゃった感があります。

マブラヴオルタは未プレイで、動画視聴とwikiから知識を引っ張ってるので、ちぐはぐ、矛盾、整合性の欠如、何じゃコリヤ？などが多数含まれ、ご都合主義、オリジナル設定、駄文も多数織り込んでいます。

気分を害される方は、読まない事をお勧めします。

ACは基本、NX系を主体としていますが、ハイブーストやブーストドライブといったV系作品の動作も行える仕様です。

他にも必要であれば設定を追加するかも知れませんが、暇潰しにでもなれば幸いです。

目次

登場人物	1
序章―異形の邂逅―	4
第1話―燃ゆる空―	26
第2話―オーメル、光線級漸減作戦―	50
第3話―オーメル、光線級漸減作戦2（二人の少女）―	73
第4話―微動、日本帝国―	98
第5話―洗脳級BETA 出現―	122
第6話―投石級BETA 出現―	146
第7話―夢見た、燃ゆる都―	173
第8話―人類種の天敵を見た、ヒト―	206
第9話―国家解体は成らず―	227
第10話―交易所防衛線―	250
第11話―交易所防衛線2―	271

登場人物

主人公

火無Ⅱ飛鳥（ひむ あすか） 14歳時

イメージCV（オツス！オラ、野沢○子ッ！この道ウン十年の
でえベテランだッ！ぜってえ見てくださいよなッ！）↑主人公本人の口調
は全然違います（笑）

センター分け、黒髪。

何処と無く中性的な顔立ちで麗人といった容姿である。

虹彩異色症、蒼色と橙色の瞳を持つ。

身長 165センチ。

体重 46キログラム。

国家解体戦争で、国家軍が大敗し政府が国家解体を宣言したと同時に誕生した。

国家解体後の世代である。

生まれてすぐ養護施設で育てられ、7歳時点で食料プラントで強制労働の身分となる。

地上側の貧困層の人間。

父母の顔も知らず、典型的な戦災孤児。

しかしふとした事で、自由を得る手段を知り 僅かな資金と努力で、MTの操縦に高い適性を示す。

その後の待遇は劇的に向上し、同年代の子供達とは比較にならない程の収入を獲得。

更に勉学を重ね、作業用ノーマルの操縦技術も会得した。

それからは、各方面の工場施設を転々としながら日銭と糧を稼ぎ、生活水準を引き上げる。

ある程度自立の手段を得た彼は幼いながらも、工場施設街を出奔。

薄汚れた地上を転々とする事になった。

自分に操縦技術が備わっている事を知り、遂に傭兵であるレイヴンを志す事となる。

紆余曲折を得て、レイヴン養成学校へと入学。

座学の担当教導官も彼と同じく日本人で、事ある毎に国としての矜持や民族としての精神を説き、国家解体を憂いていた。

しかし飛鳥本人にとっては、国という概念の重さは薄く、あまり拘ってはいない。

A Cに関しては、癖の無い基本的な操縦技術で、面白味がないと教導官から評されていた。

故に、突出した能力はなく、成績も中の中という至って平凡な目立たない。

人当たりは決して悪くはないが、積極的に友人を作るタイプではなく、話し掛けられれば答えるという人柄でもあり、今迄親しい間柄の友人は居ない。

修練と勉強に励み見事レイヴン試験に合格、14歳の時レイヴンへと登録された。

元々大人しい性格で、少々人見知りのする傾向があるが、生来のお人好し。

困窮している人を見過ごせなかったのか、見ず知らずの二人の不審者に助け舟を出してしまった。

それが縁で彼等からのサポートを受け、次々と依頼を完遂し、同時期の傭兵よりも遥かに高い収入を得ていた為、間借りしていた部屋は質素ながらも、生活水準は高い部類に入る。

身体能力は極めて高く、生身で粗製リンクス相手にも引けをとる事はないが、余り勝ち癖がない為に自分は弱いと思いついでいる節がある。

オリキヤラ？

ギンⅡユウキ（銀Ⅱ優紀） 19歳時

イメージC V（梶○貴 俺達は……自由だッ!!）

縮れた焦げ茶の髪形で、気さくな容貌ながらも何処と無く鋭い瞳を持つ。

身長 181センチ

体重 68キログラム

リンクス戦争の後の時代で、戦場を駆け巡った元リンクスという肩書を持つ。

カスミ・スミカと言う女性を伴い、都市機能を持つ巨大交易所へと辿り着いた当時は、重傷を負っていた。

住む場所も無く行き場に困窮していた彼等は、火無飛鳥と出会い、質素ながらも部屋と生活環境を与えて貰った。

恩義を感じた彼は、飛鳥の専属整備士を買って出、全力でサポートに当たる。

それだけではなく今まで培った戦技や戦術をも飛鳥に授け、少しでも恩義に報いようとしている。

過去に何かあったのだろうか？

クレイドルに拘りを見せるなど、時折感情の揺らぎを見せる事がある。

序章―異形の邂逅―

アーマード・コア（ACC）
作業機械であったMT（マッスル・トレーサー）にコア思想を取り入れた

CMT（COREDMT）をさらに戦闘用に発展させた兵器。

強力なジェネレーターを内蔵した基本シャーシたるコアの各部にハードポイントを設け共通規格による様々なアタッチメントを接続しあらゆる状況に

対応する汎用性を持っているのが最大の特徴であり、その形態は人型に留まらない。

戦車やヘリといった既存の兵器を超えた、高い戦闘能力を誇る戦場の花形である。

鋼鉄の巨兵、異形の怪物。

次元を跨ぎ両者は激突す。

（詳しくはWikiってくだち！）（。∀。）、

人類種の大敵。

そう呼ばれた一人のリンクスが存在した。

彼は、もう一人のリンクス『オールドキング』と共に、巨大航空プラットフォーム『クレイドル』を襲撃。

述ベ一億人もの人々を殺害。

クレイドルを管理していた『統治企業連盟』通称『企業連』はこの異常事態を憂慮し、厳選されたリンクスと彼等の駆る人型兵器『アーマードコア・ネクスト』と投入。

抹殺を図る。

結果。

オールドキングを消す事には成功したが、代償として人類種の天敵は生き残り、討伐に赴いた彼等は全滅した。

或る者は死に、或る者は再起不能に追い込まれ、人類種の天敵に対抗できる戦力は無きに等しくなった。

……

否。

たった一人だけ、天敵に対抗出来る人物が存在した。

—— ホワイトグリン ト ——

独立海上自由都市『ラインアーク』に所属する非企業のリンクスと機体である。

形振り構わなくなった企業連は、恥も外聞もかなぐり捨て彼に討伐を依頼する。

斜陽のラインアークを再建できる程の膨大な額と技術を報酬に――。

人類種の天敵とホワイトグリン ト、両者が戦場で激突した。

コジマ汚染が進み、最早人が住むに適しない汚れ切った戦場で

……。

結果はホワイトグリン トが、辛うじて勝利し生き残った。

企業連の惜しみない助力を受けながらも人類種の天敵は強大で、ホワイトグリン ト自身も表舞台から退場する。

クレイドルが全滅し、経済の寄る辺を喪失した企業連――。

止む無く彼等は汚染され尽くした地球を離れる決意を固め、残された余力を振り絞りながら宇宙の進出へと舵を切った。

ささやかながら、汚染され尽くした地球に一時の平穏が戻った。

だが新たな戦いは、直ぐ其処まで忍び寄っていたのだ。

宛も、『燻^{あたか}ぶりの湖』の如く――。

人類種の天敵とホワイトグリントの激戦が終わり、縦横無尽に戦場を駆け巡った人型兵器『アーマードコア・ネクスト』の殆どが姿を消し、彼等も歴史の表舞台から退場した。

企業連は総力を結集し、汚染物質であるコジマ粒子を使用するネクストに代わり、量産型であるノーマル以上の高性能化を目指した新型兵器の本格的な製造に着手。

膨大なデータと蓄積されたノウハウを駆使し、ごく短期間の内に新型アーマードコアを完成させるに至った。

――アーマードコア・ハイエンドノーマル――

（人類種の天敵が倒れて数週間しか経過していないが、ACハイエンドノーマルの設計、構想自体は、リンクス戦争時代から練られている）

コジマ粒子を全く使用する事はなく、ネクスト程の超高性能を發揮する事もないが、ノーマル以上の互換性や拡張性を誇る。

また、ネクストに必要な『A?S適正』を有する条件もなく、ある程度の量産にも融通が利いた。

戦場の支配権は再び、『リンクス』から『レイヴン』へと移り変わろうとしていた。

そう――。

移り変わるのだ――。

兵器が。

戦争が。

地上が。

地球が。

空が。

—— 世界が ——

空間を跨ぎ。

時代を跨ぎ。

宇宙を跨ぎ。

そして……。

次元を跨ぎ……。

世界が融合する。

『作戦を説明する、雇い主はいつものG A。今回の目標は、欧州広域に墜落したクレイドルの調査だ。イかれた『人類種の天敵』が遺した忌々しい爪痕つてやつさ。まあ、あの時からそこそこに時間は経つちまったが、あの施設は技術の結晶だからな、他の企業に独占されるのは此方としても面白くはないのさ。現場に到着次第、可能な限り残骸の回収と生存者の調査だ。この作戦には大規模な部隊が投入され、既に他の企業も動きを見せていやがる。あまり無意味な戦闘は避けたい処だが奴等が攻撃してきた場合は遠慮は要らんぜ、その時は存分に暴れな。報酬も前金ありで準備しておいた。お前等新人のレイヴンにとつちや、十分な準備資金になるだろう？ どうだ、やるか？ 悪い話じゃないと思うぜ？ 返事を待つ』

狭い自室に備え付けられた端末から依頼が舞い込んで来た。

レイヴンの適性試験に合格して以来、いつもお世話になっている巨大企業『G A社』からの依頼だ。

相変わらずの砕けた口調で、大まかな説明を聞き入る一人の新人レ

イヴン。

まだ14になったばかりの少年『火無・飛鳥』は、あの惨状を思い返す。

人類種の天敵がクレイドルを墮とし、その後更に破壊活動に手を染めた。

数え切れない程の人命が奪われ、結果的に彼は討たれたものの地球は最早、修復不可能なほどに汚染され尽くしている。

管理機構である企業連は宇宙への脱出を計画している様だが、独立傭兵の道を選んだ自分は地上に残されるだろう。

既に治安維持も疎かな程に、企業連も社会も疲弊し切っているのだ。

恐らくこの地球は無法地帯となり、遠からず戦乱の時代が幕を開けるだろう。

その時生き残るには、やはり『力』が必要不可欠となる。

何ものにも屈せず、自らを貫き通すだけの純然たる『力』が――。

今の内に資金を溜め、機体を改造強化し、自らを更に鍛え上げ知性と能力を磨く。

そうしなければ、生きるには厳しい時代なのだ。

――好きなように生き、好きなように死ぬ：誰の為でもなく――

誰かの言葉だっただろうか。

自分達レイヴンに伝わる、言わば信仰に近い言葉だ。

自分もそうありたい。

故に、この道を目指し念願叶いレイヴンと成ったのだ。

意識を現実へと引き戻し、少年は受諾の項目を押した。

その瞬間に画面から自分の残高が現れ、見る見る間にその数値が上昇してゆく。

前金が振り込まれたのだ。

リンクス基準からすればその金額は微々たる額だが、彼等レイヴン

にとつてはこれだけで十分な準備を整える事が出来る。

況してや彼の様な新人には尚更であつた。

恐らく他の同業者達も、同じ依頼を受けている筈だ。

彼は席を立ち上がり、作戦の準備に取り掛かる為に自室を出た。

—— 作戦決行の日 ——

飛鳥が拠点としている所は、欧州のアジア寄りに位置する大規模な巨大交易所だ。

其処には、多種多様な組織や集団が取引の為に訪れる場所でもあり、一種の都市と化していた。

これ等の交易所は世界各地に点在し、汚染された地上に取り残された人々にとつては一種の楽園ともいえる。

当然これら交易所は、企業連の管理下ではあつたが、クレイドルが崩壊し疲弊に疲弊を重ねた企業連の監視が緩まりつつある。

それにより、入居者の審査や違法取引の審査が有耶無耶となり、彼が住まう交易所にも様々な輩が群がり、混迷の度合いが増していた。

彼の住まう交易所は、数在る中でも大規模な部類に位置し企業連直轄の企業が介入する事も多々ある。

「A C 起動準備完了」

火を入れ、起動の為の手順を手際良くこなし、何時でも動ける状態へと移行する。

「おおー！中々サマになつて来たじゃないか、お前も！」

整備士の青年は、マイクから彼の機体へと語り掛ける。

「貴方の腕前と教導のお陰ですよ！」

飛鳥は、若い整備士の男へと返した。

「この整備士——。」

元はリンクスという経歴を持っていた。

ごく最近この交易所へと流れ着き、その当時は酷い重傷を負っていた。

その青年は若い女性を伴い、彼女とは師弟を含んだ家族関係だと言

う。

当時レイヴン試験に合格したばかりの飛鳥は彼等と出会い、困窮していた二人に部屋を提供した。

資金に殆ど余裕も無く、狭く必要最低限の環境しか提供してやれなかったが、彼等は大いに飛鳥へ感謝した。

それが縁で二人は協力してくれる事となった。

若い男はACに対して深い操縦のノウハウと整備知識を有し、若い女性も元リンクスでありながら高いオペレーターとしての技術を有していたのである。

まだ経験の浅い飛鳥にとって、二人の存在は非常に頼もしい事この上なかった。

若い整備士の男からは生き残る為のコツと戦術を学び、若い女からは的確な情報提供で数々の作戦を完遂できた。

それにより、新人ながら彼が得た報酬は同業者達を遥かに凌ぎ、結果二人を養う事も苦ではなかったのである。

『大規模作戦の前には中々に落ち着いている様だな。その調子を維持しつつ戦場で取り乱すなよ』

モニターからオペレーターである彼女の声が聞こえて来た。

「ええ、勿論！今回もたっぷりと稼いできます、スミカさん！」

彼女の名前は、カスミ・スミカと言うらしい。

現役時代、別名義で活動していたらしいが、此処に流れ着いた時から本名をな乗る事にしたようだ。

名前から察するに、彼女も自分や整備士の青年と同様、日本人なのだろう。

因みに元リンクスである整備士の名は、ギン・ユウキと言う。

「何か不測の事態が起こった時の為に、今回は俺達も同行する。安心して作戦に励んで来い！」

『お前はまだ、人を殺めた経験は無かった筈だ。何時かは覚悟を決める時が必ずやって来る、案外それは今日かも知れん。肝に銘じておけ！』

今回の作戦には、二人も同行してくれるらしい。

しかしスミカの言葉は、飛鳥にとって重く押し掛かった。
そう。

彼はまだ、人を直接殺めた事が無い。

今迄の作戦でも、何度か敵を撃破し成功を収めてきたが、それは標的を守るガードメカや無人機といった類の自律兵器ばかりだった。

しかし今回の作戦は、様々な陣営の部隊が入り乱れて行うものだ。今迄とは勝手が違い、若しかしたら有人機を相手にする場合もあり得るだろう。

「セレナ……つと、スミカさん！コイツには、まだ少し早くありませんか？」

『何を寝ぼけた事言っている？この平和な空間で腑抜けたか？遅かれ早かれ誰もが通る道だ、覚悟が無ければ傭兵など務まらない！昔の前はそれを理解していた筈だが？』

「……！」

——この二人の過去に何があったのだろうか？

俄かに感情的になる、ユウキとスミカ。

この場合、スミカが正しい。

まだ経験の浅い飛鳥ではあったが、この位は理解していた。
そうだ。

傭兵稼業を続ける以上、敵は無人機ばかりとは限らない。

何時かは人が乗る有人機を相手取る日が必ず到来する。

依頼内容によっては、それがターゲットとなり得る場合もあるのだ。

彼女の言う通り、それは今日訪れるかも知れない。

中途半端な情に駆られ、攻撃を躊躇っつていては死ぬのは自分自身なのだ。

生きている以上、人には必ず死が訪れる。

しかし、傭兵として生きていくと決めた。

レイヴンとして日が浅い内に死んだのでは、何の為にレイヴンと成ったのが無意味になる。

覚悟を決めねばならない。

「ユウキさん、彼女の言う通りです。その時が来れば引き金を引きま
す！——生きる為につ！」

「……」

『忘れるなよ、その決意』

一通りの通信を終え、飛鳥の駆る機体は輸送車へと移動を開始し
た。

依頼主である『GA』所属の輸送車だ。

そして二人も追うように彼の乗る輸送車へと搭乗する。

その後、彼等と同じくこの作戦に参加する数多くの傭兵達が、各々
の輸送車両へと乗り込み現場へと発車した。

荒地地を走行する輸送車両に揺られながら、飛鳥はふと疑問を口に
する。

「何故今回に限って、空路ではなく陸路での輸送を？」

誰かに意図して口にした訳ではなかったが、彼の質問には専属オペ
レーターであるスミカが質問に答えてくれた。

『ごく最近の出来事だが、ここいら一帯で輸送機を使えば必ずと言っ
ていい程、レーザー兵器で撃墜されてしまうのだ。その命中率は、ほ
ぼ100パーセントと言っている程に正確無比だ』

今までACの輸送は航空機を使用した空路が常套手段であった。

わざわざ障害物や悪路を苦勞して乗り越える陸路を選択する理由
は、ほぼ皆無と言っている。

制空権が敵に握られているなら話は別だが。

しかし、数週間ほど前から欧州全域では航空機の飛行が困難となっ
ていた。

下手に飛べば、何処からともなく多数のレーザーが照射され、撃墜
されてしまうのである。

その命中率は極めて正確で、高速機でさえ撃ち落としてしまう程
だった。

対レーザー用の装甲を備えた極超音速機なら辛うじて突破出来る
に留まり、下手をすれば企業の切り札『アームズフォート』すら撃墜

されてしまう始末だ。

故に、どの企業も空路での移動は困難を極め、こうして陸路での移動を余儀なくされていたのであった。

現在、レーザー照射の元凶を調査中ではあるが、派遣した部隊の悉くが消息を絶ち、行方が分からず仕舞いとなっている。

「一体何が起こっているのか……」

揺れる身体をシートベルトが抑え込み、腕を組みながらユウキは思案に耽る。

——まるで『アサルtsel』の地上版だな。

彼は衛星軌道上に陣取る、無人無差別攻撃兵器『アサルtsel』を思い返していた。

『見えてきたぞ。墜落したクレイドルの残骸だ！』

スミカの声に飛鳥は映し出されたモニターに目を向け、ユウキは窓越しにその光景を直視する。

人類種の天敵による攻撃と、墜落の衝撃で破壊され尽くし、無残な姿で横たわるクレイドルの残骸。

作戦内容には生存者の調査と救出も含まれてはいたが、正直可能性は限りなく低いだろう。

「これでは生きている人達が居るかどうかも……」

「——諦めるなっ！……頼むっ……！一人でも多く……助け出してくれ……頼むっ……！——」

「——!?ユウキ……さ……ん？」

素人目に見ても、生存者の存在など最早絶望的と悟らざるを得ない程に、クレイドルは歪みに歪み原形を留めてはいなかった。

その映像を目にした飛鳥に、ユウキは悲痛さを込め呻く様な声で、生存者の救助を願う。

彼の言葉は果たして飛鳥に向けられたものだろうか。

それとも……。

『ユウキ……』

誰にも聞き取れない小声で、スミカは一人彼の名を呟く。

嘗てはリンクスであり、今は整備士として今を生きる若い青年の名を。

クレイドルの輪郭が近付くにつれ、ノイズ交じりの音声が彼等の輸送車へと流れ込んで来る。

『なんだ？向こうでは随分混乱しているな』

輸送車の運転を担う、G A社の運転手は聞き取れない音声に訝んだ。

『此処から先は少々危険だ。停車してくれ、A Cを向かわせる』

『り、了解！』

長年の経験から来る勘なのだろうか。

スミカは輸送車を停車させ、其処からA Cを出撃させる考えだ。

『飛鳥。此処からA Cで出撃し、状況把握に努めろ。ノイズが酷く、真面に聞き取れやしない。お前の機体を中継すれば幾らかマシにはなる筈だ。だが決して警戒を怠るな！私の経験上、かなりの確率で戦闘が予想される。しかも、ノイズの状況からして相当の混乱状態と来やがる。いいか、覚悟を決めつつ慎重に行け！』

『飛鳥！危険と判断したら、迷わず逃げろ！体裁なんか気にしなくていい！生き残れば次が有る、忘れるなよ！』

オペレーターであるスミカと、専属整備士であるユウキから激励が飛ぶ。

「――了、任せて下さい！」

二人にそう返し、飛鳥は機体を起動させた。

停車した輸送車から後部のカーゴロックが開き、中に搭載されていたA Cが起き上がり大地へと降り立つ。

『起動完了！何時でも行けます！』

機体のコックピット内にO Sの合成音声の流れ、何時でも動かせる状態に移行した事を告げた。

「ではA Cハイエンドノーマル『白天翼』出撃しますっ！」

白を主軸とした青と赤のスリートンカラーで塗装された彼のA C『白天翼』はブースターを吹かし、現場まで一気に駆け抜けた。

彼自身まだまだ新人の域である為、機体構成もほぼ支給品で構成さ

れていたが、それでも総合性能は従来のノーマルに勝り、ブースター速度は200Kmに達していた。

クレイドルは非常に巨大な構造物であり、落下した衝撃と桁外れの質量エネルギーで、地面に深いクレータが形成され其処に半ば埋まった形だ。

現場に近付くにつれ、ノイズ交じりの通信が徐々に鮮明になる。

彼のAC『白天翼』が現場に到着し、丁度クレーターに埋まったクレイドルを見下ろす形で頭部のメインカメラを下に向けた。

その瞬間、飛鳥の表情は驚愕に染まった。

彼の眼下には信じられない異様な光景が広がっていたのだ。

『ぎゃあああああつ!!』

『や、やめろおおつ……!』

『く、来るな…来るなああつ!!』

『いっつ、いでえええつ、いでえええよおおおつ!!』

「……」

言葉が浮かばなかった。

多数のMTやノーマルが、見た事も無い異様な生き物に捕食されていたのである。

文字通り。

その生き物は、不気味な色合いで構成され不自然に長い腕と巨大な口部を持ち、機体に取り付いたかと思えばそのまま外部装甲ごと噛み付いていた。

そしてそのまま装甲を食い破り、租借し貪り食っていたのであった。

「…ア…ああ…何…だ…これ…?…」

初めて目にする光景。

どう形容して良いのかも分からない。

次に何をすべきなのか。

どう動けばいいのか。

取るべき選択肢は。

何も思い浮かばない。
思考が上手く働かないのだ。

『い、嫌だあつ……じにだぐねええつ……!!』

『ぐぎいやあやあああつ!!』

『腕があつ……俺の腕があ……!!』

『嫌あああ、ダレがあつ……!!』

飛鳥は只々呆然とカメラに捉えるのみ。

動かなかつた……否……動けなかつた。

機体の装甲を食い尽くせば、やがて中の搭乗者が露出する。

コックピットからの脱出もままならず搭乗者はシートベルトを外せぬまま、座席ごとその怪物に生きたまま喰われていたのである。

しかも質の悪い事に、頭部から喰われるのではなく末端部、即ち手足から食い千切られ断末魔の絶叫を上げながら食い殺されていくのだ。

無造作に流れて来る音声は、金属と肉の潰れ合う音と彼等の泣き叫ぶ悲鳴に支配されていた。

その地獄絵図が周囲に広がり、至る所で犠牲者が続出していた。

所々では、生き残った者達が必死の抵抗を続けている。

自分と同じくハイエンドノーマルのAC達は、まだ奮戦していた。

その姿が飛鳥の意識を現実へと引き戻し、彼は通信回線を聞く。

「す……スミカさん見えますか、この光景が……!!」

遙か後方にて待機する輸送車両に語り掛けた。

彼のACが中継地点となり、映像と音声のノイズを除去しながらデーターを増幅し輸送車両へと送信する事で、彼等にも鮮明な状況が伝わっていた。

『ああ、此方でも把握した。そんな事よりも早く臨戦体制を取れ！化け物がお前に迫っているぞ、複数だ!』

スミカの怒鳴り声が飛鳥の耳を劈き、彼は急いでレーダーを確認した。

気が付けば、あの異様な怪物が直ぐ此方に迫っていた。

「——う、うわあああつ！」

身の毛もよだつ醜悪な怪物に、飛鳥は叫び声を上げ咄嗟に射撃を開始する。

ACのマニピュレーターが始動し、ライフルの引き金を引いた事で銃口から弾丸が射出された。

60ミリの徹甲弾だ。

彼の機体『白天翼』が装備しているライフルは『CR—WR69R』と呼ばれる支給品で、所謂初期ライフルとも言われていた。

当然、必要最低限の性能しか持たない銃だが、装備した際の機体負荷が軽く弾薬費も非常に安価と言う利点を備えている。

ハイエンドノーマルが世に出回った事で、この武器も市場に流れる事となったが、銃本体も非常に易く量産が利くため、時にはノーマルが無理にでも装備する事がある位に需要が高い。

CR—WR69Rから放たれた弾丸が、怪物の顔面に吸い込まれた瞬間、グチャリと減り込み肉片と血を撒き散らしながら体組織を破壊。

突撃した勢いそのまま倒れ込み、そのまま動かなくなった。

「——つ!?!……死んだ……の……か……?」

その姿をモニター越しに確認し、視線が釘付けになりながらも飛鳥は言い様の無い手応えを感じていた。

今迄撃ち落としてきた無人機やガードメカとは違う奇妙な感覚。

操縦桿から伝わる、言葉に出来ない何時もと違った感触が彼の脳裏を支配する。

そう——。

彼は今日、初めて生き物を手に掛けたのであった。

「……」

言葉も無く、彼は茫然と怪物の死体を見つめていたが、スピーカーからの怒号が彼を瞬時に現実へと引き戻した。

『ボサツとするな！まだ居るぞ、喰われたいのかっ!』

オペレーターであるスミカの怒鳴り声で彼は我に返り、尚も殺到す

る怪物にライフルを立て続けに発射し、次々と怪物を仕留めてゆく。気が付けば5体の怪物が地面に倒れ伏し、ピクリとも動く事は無かった。

『ようし、一発で一体ずつ確殺出来たな。甘ちゃんにしては、射撃の腕は及第点か。罪悪感など感じている暇は無いぞ！周りの連中みたいに死にたくはあるまい？』

「はあ…、はあ…、はあ…、ええ…、その通り…です…。僕は…食われる為に此処に来たんじゃない！」

——支給品のライフルだが、当たれば死んでくれるな…この怪物。得体の知らない生き物の命を奪った現実が彼を苛むが、此処はもう戦場なのだ。

たとえ相手が生き物であっても、生きるか死ぬかの命のやり取りが此処には在る。

中途半端な良心や薄っぺらい博愛精神を振り翳す事に意味は無く、故に現実が其処に在り人間性が発露する。

だから君…闘志を恐れるなかれ。

さあ、われら闘争の時だ！

(推奨BGM AC4 — Panther)

飛鳥の周りには生き残った部隊が未だ怪物相手に奮戦している。一々驚いてはいられない。

「これより、怪物との戦闘に移行します！」

まだ拙いながらも戦闘機動で機体を加速させながら、怪物の群れへと突撃した。

その動きに反応したのか多数の怪物は一斉に此方へと振り向き、次々と迫り来る。

——動きを止めれば、噛み付かれて一巻の終わりだ！

目の前で無残に食い殺されたパイロット達の光景が頭を過り、彼はライフルを連射——。

射撃手段が無いのだろうか。

怪物の群れは成す術も無いまま、此方に到達する事も無く次々と倒れ伏す。

だがそれは、彼にとって幸いとも言えた。

殺到する怪物は優に百を超え、もし遠距離手段が備わっていれば瞬く間に此方が討ち取られていただろう。

しかしライフルの弾丸とて無限ではなく、既に50%を切っていた。

弾切れを懸念する飛鳥ではあったが、怪物が彼に向いている間に体勢を立て直した友軍からの援護が彼を救う。

群れを成した怪物に多数の弾丸が撃ち込まれ、その一群は殲滅された。

だが息をつく暇もなく、次々と他の群れが此方に向かって来た。

『う、うわあ！こ、こいつらだ！こいつらの所為で、味方があつ……！』
生き残った誰かが叫ぶ。

「何だ？・さつきまでとは違う種類だ……」

先程までの戦闘で目にしたのは大半が、赤く顎で機体ごと搭乗者を噛み砕いた種と、白色の上半身が人に似た小型の怪物だった。

しかし今此方に迫り来るのは、全部が甲羅の様なナニカで覆われた大型の怪物だ。

更にその突進速度はノーマルやハイエンドノーマル程ではないにせよ、かなりのスピードを誇っていた。

『クソっ、やっぱり速いぞコイツ等！』

『つべこべ言わず、火力を集中させろっ！』

『うわっ来るなあ、来るんじゃねえ！』

予想以上の突進速度を誇る新手の怪物。

生き残った友軍は、すぐさま群れに一斉射撃を試みた。

MTやノーマルが放つ弾丸の雨が群れに吸い込まれるが、怪物の突撃は衰える事が無い。

『ちくしょう、コイツ等の装甲には歯が立たねえ！』

怪物の前面に当たる部分は装甲なのか甲殻と言うべきか、とにかく非常に堅牢で打ち込まれた弾丸はほぼ全てが弾かれ、有効とは言い難

い。

無論飛鳥の白天翼も、攻撃に参加していたが初期ライフルでは効果が薄く結果は変わらなかった。

『おい誰でもいい！飛び上がった後ろから攻撃しろっ！』

ノーマルの誰かがオープンチャネルで呼び掛ける。

どうやらこの怪物の後方は、甲殻には覆われておらず無防備だと言うのだ。

「――僕が行きます！」

逡巡している暇は無い。

飛鳥は透かさず飛び上がり、怪物の頭上を飛び越えブースターの出力を抑え滞空しながら空中後方から射撃を浴びせた。

ライフルから放たれる弾丸は柔らかい肉質に吸い込まれ、その怪物は斃れ地面に横たわる。

「よし、情報通りだ！後方なら効果はあるぞ！」

結果に気分を良くした飛鳥は更にブースターを吹かし、機体の高度を上げる。

『止せえ！それ以上高度を上げるなあっ!!』

突如としてスミカの怒号が彼の耳を打った。

余りの感情の籠もった彼女の叫び声。

それが原因だったのだろうか。

「――うっ……！」

突如として頭にナニカをぶつけられたかのような感覚に見舞われる。

一瞬ではあったが、確かに熱を帯びたナニカをぶつけられたかのような、奇妙な感覚。

彼は半ば反射的に本能的に、操縦桿とフットペダルを踏み付け、それに反応した機体は横方向にブースターを吹かす形となった。

その起動は『ハイブースト』と呼ばれる動作で、一瞬だがブースターを高出力で噴射する事で機体を瞬時に移動させる事が出来る。

主に緊急回避や相手を攪乱する為に使われる事が多いが、代償としてエネルギーを大量に消耗し、そう多用出来るものではない。

況してや、ほぼ初期機体で構成された今の白天翼では、尚更だ。

しかし、本能的とも言えるその行動が彼の命運を分けた——。狙ったものではないとは言え、彼の行ったハイブースト。

それと同時に光の帯が、白天翼の直ぐ傍を通り抜けたのだ。

「——!?」

『直ぐに高度を下げろ！死ぬぞっ！』

驚く飛鳥を余所に、スミカの怒号が畳み掛けられ彼は咄嗟に高度を下げる。

そして再び、光の帯が夥しい程の数で頭上直ぐ上を通り抜けた。

——あれは…、レーザー！

『そういう事だったのかっ……！』

『これで分かっただろう、航空機が使えない理由が』

スミカとユウキが語っていた、空路が使えなくなった理由——。

一定の高度を上げた飛翔体は、皆例外なく正体不明のレーザーに貫き焼かれてしまうのである。

オーメルサイエンスの誇るアームズフォート『イクリップス』でさえもだ。

『今のは高度300メートルだ。レーザーで死にたくなければ、それ以下の高度を維持しろ、いいな！バカヤロウがっ……！』

「は……はい……！」

被弾する事は無かったが、彼は身を以てレーザーの洗礼を受け恐怖を覚えながらも低空飛行を維持する。

そして自分の役割を思い出し、再び甲殻を纏った怪物の後方を次々と打ち抜いた。

「くそっ、もう弾が……！」

CR—WR69Rの装弾数は、約120発。

度重なる怪物との戦闘で、既に残り段数は10発以下となっていた。

一応支給品であるレーザーブレードも装備しているが、あの怪物相手に通用するか未知数であり、とてもではないが今の自分では接近戦を挑む気にもなれない。

そんな彼の元へユウキから通信が入る。

『もう戦闘はいい、データーは充分に取れたからな！それよりもマーカを送る。そっちの方角に民間人が居る筈だ！』

「――民間人!？」

ユウキは飛鳥へとデーターを送信し、ACのメインモニターにはマーカーが表示される。

飛鳥はマーカーの示す方角へとカメラを向けた。

「――あの人達はまさか、クレイドルの生き残り!？」

彼のモニターにはクレイドルの居住ブロックから脱出を試みる10名足らずの人々が映った。

周囲に漂う汚染物質『コジマ粒子』を懸念しているのだろう。

全員が宇宙服に似た防護服を身に付け、一際体躯の小さい人物が数名存在していた。

「幼子も含まれているのか!」

『その通りだ。恐らくお前よりのまだ幼い子供達だ！頼む、助けてやってくれないか』

『救出するにせよ、このまま撤退するにせよ、迷いは戦場で死を招く。即断即決だ、躊躇うな!』

ユウキの頼み、スミカの叱咤が飛んで来るが、既に飛鳥の意思は決まっている。

「これより救出任務に移行します!」

飛鳥は直ぐにでも方向転換し、墜落したクレイドルへと機体を躍らせた。

「僕や大人は兎も角、小さき幼子に罪はない!」

『すまない。本当なら俺が行ってやりたかった……』

「……ユウキさん……」

飛鳥がクレイドルへと移動する際、ユウキの無念さとやるせなさの入り混じった声が聞こえて来る。

しかし飛鳥は一瞬だけ彼へと意識を向けたが、直ぐに気持ちを切り替え救出作業へと専念した。

「クソ、外も怪物だらけだ!」

「そ、そんな……」

「折角ここ迄、脱出したのに……」

「う、うう……こわいよお……」

クレイドルの隔壁版を取り外し、外へと脱出に成功した生き残り達。

人類種の天敵は確かにクレイドルを攻撃したが、それはエンジン部やコジマエネルギーを推進力に変える部位に絞られ、居住区を直接攻撃する事は無かった。

最も落下の衝撃と爆発で、殆どの住人は死滅したのだが。

しかし、運良く助かった人々が居たのも事実であり、彼等はそんな人達の一部だ。

落下して暫くは避難区で生活していたが、或る日を境に正体不明の怪物が生き残りである彼等に襲い掛かった。

彼は武器を取り必死に抵抗し、更に生き残った命を散らす事になる。

今日まで運良く生き残り、何とかクレイドルから脱出できた彼等ではあった――。

しかし、喜びもつかの間。

外にもあの不気味な怪物が其処彼処に存在していた。

「も……もう……駄目だ……」

生き残りの一人が膝を落とし項垂れる。

そうしている間にも、赤い怪物の一体が彼等を察知し此方へと迫って来た。

異様に長い手を器用に駆使し、壁面を難なく登攀しながら彼等を捕食せんと迫る。

「――ううっ！く、来るな……来るなあっ!!」

一人は叫び、ハンドガンを乱射するが急所には当たっていないのだろう、赤い怪物は御構い無しに大きく口を開け、まず小柄な子供へと狙いを定める。

子供は恐怖のあまり泣く事も忘れ、呆然と怪物を見る事しか出来なかった。

——その時である。

突如、怪物の頭部が弾け飛び更に白い金属物に激突し、彼方へと吹き飛ばされた。

『——無事ですか!?!』

「…………お…おお…………!?!」

彼等にゆっくりと降り立つ白い鋼鉄の巨人。

『掌に乗って下さい、この場から脱出します!』

その白い巨人から発せられる少年の声。

差し伸べられる白く巨大な掌。

彼等は戸惑いながらもその上に乗し、振り落とされぬ様、マニピュレーターや僅かに盛り上がった突起物を掴む。

——あまり過度な速度で飛ぶ事は出来ないな。

下手に高度を上げれば先程のレーザーで打ち抜かれ、速度を上げれば折角救出した民間人を振り落としかねない。

飛鳥は最低推力でブースターを吹かし、高度約100メートル前後を維持しながらクレイドルから飛び放つ。

彼ら民間人には、その白く巨大な機械は救世主にさえ見えていた事だろう。

嘗て戦場を縦横無尽に駆け巡り、戦線を支配した兵器。

国家解体戦争、リンクス戦争、ORCA^オルカ^カ旅団の襲撃、人類種の天敵、歴史は過ぎ去り再び戦場を駆け巡る。

時代は再び求めているのだろうか。

最強の人型兵器。

彼等は、こう呼ぶ——。

——
アーマード・コア
——

機体アセンブル

頭部：CR—H69S

胴体部：CR—C69Y

腕部：C R | A 6 9 S
脚部：C R | L H 6 9 S
ジェネレーター：C R | G 6 9
ブースター：C R | B 6 9
ラジエーター：C R | R 6 9
FCS：M F 0 1 | M U R E X
右手武装：C R | W R 6 9 R
左手武装：C R | W L 6 9 L B
右背部武装：C R | W B 6 9 R A
左背部武装：C R | W B 6 9 M

レイヴン

アーマード・コア（A C）を操る傭兵の名称。

基本的には何処にも属さない独立傭兵が大半を占めるが
時折、企業に与する専属のレイヴンも存在する。

ネクストの大半が姿を消した今、再び鴉が大空を飛翔する。

（詳しくはWikiってください！）（。▽。）、

第1話―燃ゆる空―

アーマード・コア・ネクスト

嘗て存在した企業軍の新型アーマード・コアの総称。

『アーマード・コア・ネクスト』が正式名称だが、単純に省略して『ネクスト』と呼ばれることが最も多い。

これに対し、従来のACは『ノーマル』と呼ばれる。

国家解体戦争にてパックス（企業グループ）側により初めて実戦投入された。

なお、ネクストのパイロットは「繋がる者」という意味で『リンクス（Link s）』と呼ばれている。

他のACに比べて高速スピード戦に特化しており、プライマルアーマー、クイックブースト、二脚型ACでのキャノン兵器の構え無し自由射撃が標準になっているなど、極めて高性能である。

基本シャーシ部であるコア（胴体パーツ）を中心にユニット化された各パーツや武装を任務や戦況、戦術に応じて換装して機体を構成するという点では既存のACたるノーマルと同様だが、コジマ粒子を応用したコジマ技術、生体制御機構アレゴリーマニユプレイトシステム（AMS）、そして圧倒的な火力を誇る武装を装備しており、従来の機動兵器を大幅に凌駕する戦闘能力を持つ。

特にクイックブーストやオーバードブーストによる圧倒的な高速機動性と、プライマルアーマーによる防御力はネクストに従来の兵器とは次元を異にする戦闘力を付与しており、国家解体戦争ではパックスはたった26機のネクストを以って国家の解体を成し遂げることが成功した。

しかしながら、操縦システムであるAMSは操縦者に適性が無いと操れず、仮に操縦が可能であっても適性が低いリンクスは強い精神負

荷による凄まじい苦痛を伴う。

さらにネクストは生体に悪影響を及ぼすコジマ粒子を常に放出し、瞬間的に音速を突破する殺人的加速やキャノン兵器の自由射撃等によつて齎される肉体への負担など、ネクストに乗り続けることによつてリンクスの受ける心身へのダメージは計り知れず、リンクス達は短命な者が多いと謂われている。

国家解体戦争からリンクス戦争にかけての時代においては、ネクストは戦場の覇者にして各企業の保有する最大の戦力となっており、まさに優秀なリンクスとネクストをどれだけ保有するかがその企業の力の大きさを表してたとも言える。

だがリンクス戦争においてリンクスの希少性、そしてその希少性を機械的手段で完全に代替することが現状不可能であるという事実が露呈すると、リンクス戦争後の時代を描いたAcfAではアームズフォート（AF）による物量戦が各企業の基本戦略となり、新装備の開発こそ行われるものの、リンクスとネクストは専ら企業が地上で繰り広げる小競り合いの尖兵として使い潰されるだけの存在と化していく。

とはいえ、アームズフォートでは対応困難な作戦が存在することも事実であり、ネクストはAFと比較して遥かに小型で機動力と隠密性に優れていることから、ある意味ですみ分けができている状況になつたとも言える。

（詳しくはWikiってくだちー！）（。▽。）ゝ

白天翼の掌には、10名足らずだが民間人がしがみ付いている。

彼等は振り落とされない様、必死にマニピュレーターに捕まっているが、下手にブーストで加速すれば彼等を振り落とす可能性があつ

た。

万が一振り落とされようものなら、彼等の命運は一目瞭然。すぐさま、あの怪物の餌食となるだろう。

飛鳥は細心の注意を払い、ブースターの出力を調整しながら低空飛行でクレイドルから飛び去った。

——高度300メートル以上は、あのレーザーの的だ。この人達を抱えたままの回避は絶対に無理。

高度約150メートル前後で、時速100kmの低速低空の飛行を続ける。

周囲を見渡せば、まだ生き残り達が怪物との戦闘を続けている。

GA、オーメル、インテリオルの各陣営が入り乱れ、最早乱戦と化していた。

其処へオペレーターからの通信が入る。

(推奨BGM Liquid Cinema — Deimos)

『——此処から退避しろ、命令だ！企業の奴等、砲撃で一気にカタを付ける気だぞっ!!』

「——!?ど、どういう事ですっ!?!」

『——説明は後だ、早くしろ！巻き込まれたいのか!!』

——クソつたれッ！

思いもよらぬ状況の変化に飛鳥は僅かに舌打ちした。

更に彼女から立て続けに怒号が飛んで来る。

既にミサイル攻撃は実行され、此方に向かっているのだ言う。

「なんてこった！まだ友軍が戦っているのに……!」

企業連は、味方ごと此処を吹き飛ばす算段なのだろう。

生き残っているのは友軍の彼等だけではない。

恐らくクレイドル内には、まだ立て籠っている民間人も居る筈だ。

混乱の極みにある戦況に業を煮やしたのだろう。

企業上層部は、砲撃で早期殲滅を図る積りだ。

「くっ!」

飛鳥は友軍から目を背け、輸送車両の居る方角へと加速しようとする。

『早く！ミサイルが着弾する！いや、もう間に合わねえっ！』

ユウキからの諦観に似た叫び声が聞こえて来た。

飛鳥は透かさずレーダーを確認する。

白天翼の肩部には、索敵兵装のレーダーユニット『CR—WB69RA』が搭載されている。

初期型の支給品だが、頭部ユニットのレーダー機能よりも遥かに優れ、未だ経験の浅い彼とつて無くてはならない装備だった。

そのレーダーユニットが大型ミサイルの機影を捉え、瞬時に危険信号へと変換され機体のモニターへと投影される。

企業連の放ったミサイルは予想以上に高速で、既に直ぐ其処まで接近し、着弾は時間の問題となっていた。

「——う!?ミサイルがっ……」

飛鳥が気付いた時には、頭上に大型のミサイルが数十発、降り注がんとしていた。

しかしミサイルが着弾する寸前、突如として光線の束がミサイルを貫き、数十発のミサイル全て爆発を起こす。

「……」

爆散したミサイル群は奇妙な粒子を撒き散らし、消失した。

そう、この空域で飛来する物は例外なくレーダーの餌食となるのだ。

「——た…助かった…のか?」

高度を上げればレーザーで打ち抜かれる状況が、今は彼を救った。結果的に助かり命拾いをする事になったが、オペレーターから再度通信が入る。

『今のは、レーザーを減衰させる攪乱膜弾頭弾だ！今の内に脱出しろ！直ぐに本命の第二波が来るぞっ！』

「——り、了……」

折角拾った命だ。

生き残った友軍を見捨てる形にはなってしまうが、むぎむぎ此処で

果てる訳にはいかない。

今の彼にも守るべき民間人達が居るのだ。

運良く友軍が自力で此処を退避する事を祈ろう。

——申し訳ない……。

飛鳥は心の中で未だ奮戦する友軍へ詫びながら、再度ブースターを加速させる。

機体の掌へしがみ付いている民間人は、全員が防護服を着用していた。

これなら多少加速しても、彼等に負担は掛からないだろう。

後は振り落とさない様に注意を払いながら、彼はクレイドルの墜落現場から退避し脱出に成功する。

その後間も無く、膨大な砲弾と大型のミサイルが現場へと降り注ぎ、現場一帯は爆発の嵐に見舞われた。

退避した飛鳥と現場は、かなりの距離が開いていたが、それでも爆発の衝撃と轟音が此処まで伝わって来る。

彼は一旦ブースト移動を停止させ、現場へと視線を戻した。

「…あ…あれは…コジマ爆発っ……！」

視線の先には、緑色に発光した爆発現象が巻き起こっていた。

企業はコジマ粒子を使用した、戦術級コジマミサイル大規模破壊兵器を使用したのだらう。

コジマ粒子を使用した兵器は、深刻な汚染を引き起こす事を代償に莫大なエネルギー付加価値を齎す。

嘗てアーマードコアネクストが、この粒子を使用し戦場を支配していた。

その結果、この地上は人が住めない程に汚染が進み、人々は空へと生活の場を移す。

しかしコジマ汚染から逃れる為の航空プラットフォーム『クレイドル』が、コジマミサイルによって破壊され尽くし終焉を迎える。

何と皮肉な結果だろうか。

「ああ…クレイドルが……」

「我々は、これからどうすれば……」

「悪夢だ……」

民間人達もその光景に息を呑み、途方に暮れていた。

『……移動を再開します。捕まっています。下さい』

飛鳥は彼等に呼び掛け、再び後方へと移動を開始した。

尚も続くコジマ爆発を背に……。

……

あれから無事、輸送車両へと帰還した飛鳥。

カスミ・スミカからの小言は飛んで来たが、彼女もユウキも飛鳥の無事を喜んだ。

救出した民間人を輸送車両に乗せ、彼等は一路GAグループの駐屯地へと向かう。

其処では複数の部隊が駐留していた。

どうやら、あの作戦で生き残った友軍が他にも居たらしい。

その中には、クレイドルに立て籠っていた民間人も含まれ、飛鳥以外にも生存者救出を優先した部隊が居た様だ。

問題は彼ら民間人の処遇だが、GAグループが民間人を保護した後、自分達の本拠地へと連れ帰るとの事だ。

彼等にどの様な生活環境が提供されるかは、分りかねる。

願わくば、心身共に疲弊した彼等に平穏が訪れん事を――。

飛鳥達は今回の民間人救出を基に、依頼成功と見なされ報酬が振り込まれたのを確認した。

しかしGAグループは正体不明の怪物についての記録映像や戦闘記録のデータ譲渡を要求する。

「当然、見返りは有るのだろうか？」

威圧的なGA社員の対し、カスミ・スミカも負けじと凄味を利かせた口調で交渉(?)を開始。

莫大な追加報酬をせしめた。

「うお、相変わらず……怖い怖い……」

「……凄い迫力だ……」

ユウキと飛鳥は、彼女の醸し出す殺気を含んだ迫力に慄きながら、成り行きを見守る事しか出来なかった。

一連のやり取りを終え、一行は交易所へと帰路に着く。

「そう言えば気になっていた事があるのですが？」

『どうした？』

飛鳥は再びACへと戻りコックピットから語り掛ける。

「GA駐屯地でヘルメットも無しで顔を晒していた人達が居たのですが」

『ああ、それな』

国家解体戦争から始まった今日までの紛争で、地上は深刻な汚染状態の極みにある。

それはコジマ粒子に起因し、生態系に悪影響を及ぼす。

当然呼吸系統にも影響し、そんな粒子が蔓延したこの地上は、人が住むに適した環境ではなくなっている。

その地上に留まるには最低でも防護服が必須となり、生身を晒すのは自殺行為に等しいのだ。

にも拘わらず、先程の駐屯地では防護服も無しに素顔を晒していた人が複数に居たのであった。

『実は今、現在進行形でコジマ粒子の濃度が急激に下降しているんだ。計器を見てみるといい』

飛鳥の質問にユウキが答え、飛鳥はモニターに在る大気の粒子濃度計に視線を向ける。

「――なっ…、コジマ粒子濃度…：殆ど…：ゼロっ!?!…：これは一体…：」

あり得ない事だった。

コジマ粒子は長期間大気中に滞留し、それが深刻な汚染問題の最大要因となっているのである。

そして今も徐々にだがコジマ粒子の濃度が下がり続けていた。

『残念だが原因は分からん。あの化け物といい、コジマ粒子霧散といい、何かが変わり始めているのは確かだ。恐らく世界規模でな』

『世界規模…：ですか…：』

スミカの言にユウキが反応する。

「あの怪物関連の依頼、また来るかも知れませんか」

そんな二人に対し、飛鳥はあの怪物と今後も関わるのではないかという懸念を示す。

各々が、地球に世界に対し疑念を抱きながらも輸送車は交易所へと向かっていった。

……

飛鳥達が拠点としている交易所は、数ある中でも大規模な部類に位置し、環境面や衛生面にも配慮がなされコジマ粒子が流入しない様に、何重もの装甲壁がドーム状で交易所を覆っている。

その為、此処の住人達は防護服無しでも気楽に外出する事が出来た。

天井も装甲壁に覆われている故に、空を見る事が出来ないのは難点だったが、既にコジマ粒子で汚染され尽くした地上だ。

空は常に灰色に染まり、時折汚染水と放射能を含んだ灰が降り注ぐのが当たり前の環境――。

国家解体後に生まれた世代は、空が青いという事さえ知らない為、さして気にする事でもなかった。

飛鳥もそんな国家解体後に誕生した世代の一人――。

彼は、政府が国家解体を宣言した時と同時に、この世に誕生したのであった。

交易所へ帰還した後、ACを整備ハンガーへと移動させ、機体整備と弾薬の補充を整備士達へと依頼した。

彼の専属整備士を買って出してくれたユウキも、修理作業へと乗り出し、飛鳥自身も手伝おうとしたが“ゆつくりと休め”とユウキに言われ今こうして一人、公園のベンチに腰かけていた。

汚染された地上とは違い、この公園には多種多様な木々や花が生い茂り、保護された鳥類が解き放たれていた。

今の時刻は夜で、天井の装甲壁に備え付けられたライトが外の昼夜

に応じて空の色を演出する仕組みだ。

そのライトが夜を演出する為、公園は暗かったが地面に設置された多数の電光飾が上向きに光を発していた。

その電イルミネーション光コンライト飾に照らし出された植物群は、何とも幻想的で魅惑的な光景を演じ、その目当てにこの公園を訪れる利用客も多い。

飛鳥もそんな中の一人で、戦場で擦り減り摩耗した人間性を癒すかのように、暇な時はよく此処へと脚を運んでいるのである。

何をするでもなく、何かを考えるでもなく、目を閉じゆっくりと深呼吸を繰り返す飛鳥。

「やっぱり此処に居たんだな」

突如として声を掛けられ、慌てて振り向くと其処にはユウキが立っていた。

(推奨BGM 初代アーマードコア ガレージBGM)

「ユウキさん……。もう修理は終わったのですか？」

「ああ、何時でも出撃出来る状態なんだが。今回の依頼で、かなりの追加報酬が入ったろ。そこで、その金を使ってお前の機体を強化しようと思ってるな。一応お前の意見を聞きに来たんだ」

何とも律義な青年である。

確かに飛鳥が養った身ではあるが、戦闘経験も技術も彼等の方が遙かに上なのだ。

強化だけ済ませ、後付けで報告しても飛鳥には文句を言える程、成熟はしていない。

だからこそ、こういった真つ当な人間性を持つ彼等だ。

飛鳥も難無く受け入れ、二人を信頼している訳だが――。

勿論彼に提案を拒絶する理由など無く、機体強化については賛同の意を示した。

「今回の依頼で、あの怪物の数がかなり膨大である事が明らかになってな。しかも全世界規模で繁殖しているらしいぜ？」

「――全世界でっ!?なんてこった！」

ユウキの告げた事実には、飛鳥は驚きの表情を見せる。

墜落したあのクレイドル周辺だけでも、数千という数が明らかとなった。

今回、飛鳥が担当したあの一帯は、クレイドルのほんの一部分に過ぎず、人類種の天敵が手に掛けたクレイドルは数十機にも及ぶ。

つまり今回の様な依頼が世界各地で行われていた訳だ。

しかも、あの気味の悪い怪物は皆例外なく、クレイドル周辺に生息していたのだと言う。

「お前の懸念した通り、これから先あの怪物と遭遇する事も、想定しておいた方が良い」

「……」

世界中で怪物が跳梁跋扈しているとすれば、今後遭遇戦となる事は容易に想像できる。

たとえ怪物とは無関係な依頼であったとしても、偶発的な遭遇戦となり得る可能性は充分にある訳だ。

飛鳥は暫し押し黙り、今後必要と強化個所を思索した。

一応ユウキに全て委託してとしても、彼なら上手く飛鳥に合わせて強化を施してくれるだろう。

しかしそれでは、彼に依存する事になり何時まで経つても一人立ちする事は出来ない。

「以前彼等から」何時までも一緒にはいられない」と言われ事があった。

信頼に足る二人だけに、この事実は少々残念に思う。

故に、自分で判断し自分の意思を伝える事に意味がある筈だ。

「ジェネレーターとブースターの強化を重点的に……」

「——追加の射撃武器も必要になるかな」

ジェネレーターは、ACのあらゆる行動に必須となるエネルギーを生み出す言わばエンジン部分でもある。

今迄使っていたのは、支給品である初期型とも言える機材で、生み出すパワー、余剰エネルギーを蓄電し容量を司るコンデンサーも、あまり良好とは言えず、ブーストパワーを上げて加速すれば、瞬く間に

エネルギーが枯渇してしまうのだ。

そして今のブースターも、推力の割には消費に見合うだけの推力は得られず、些かの不自由さを感じてはいた。

もしハイブーストを3連続で使用してしまおうものなら、アツという間にブースト用のエネルギー切れを起こし、強制的に緊急チャージへと移行してしまい、その間はほぼ無防備に近い態勢となってしまう。

あの怪物でそんな事態に陥れば、直ぐにでも生きたまま食い殺されてしまうだろう。

クレイドル周辺で見た、生きたまま食われてゆく友軍機達。

恐らくブーストエネルギーを使い切った状態を補足され、餌食となつたに違いない。

MTやノーマルACだけでなく、ACハイエンドノーマルも含まれていたのだから。

ユウキの追加案の様に、射撃武器も考慮する必要があるだろう。

実際、弾切れを起こしかけ、初期ライフル一丁ではとてもではないが弾薬が足りない。

千や二千を超える怪物に、弾数百発そこそこの銃一丁——。割に合わない過ぎる。

今のブレードは、幸いにも予備兵装として格納可能だ。

今後は両手に射撃武器を装備する事が推奨される。

「分かった。その案でいこうか」

「僕も手伝いますよ。そろそろちゃんと自分で覚えなないと」

既に休養は充分だ。

戦闘だけでなく、整備や保全業務にも心血を注がねば、いざという時頼れるのは結局は自信の力量なのだ。

何時までも誰かに依存する訳にはいかない。

飛鳥はベンチから立ち上がり、ユウキと共にAC格納ハンガーへと向かった。

二人はまだ気付いていない。

交易所を覆う装甲壁の向こうでは、空の色が元の青色を取り戻しつ

つあるという現実には……。

AC格納ハンガーにて強化作業を終えた二人は、換装したパーツの性能を試す為、演習場へと機体を移動させた。

一応この演習場は交易所の外に位置し、野外という事になる。

装甲壁屋内で、爆発物や実弾を放とうものなら忽ち硝煙が充満し、居住区の環境汚染に直結するからだ。

主に交換したのは、ジェネレーターとブースターで、右手用のライフルもワンランク上の物に交換し、加えて左手用のライフルも追加購入し装備させる事となった。

初期型のジェネレーター『CR-G69』を『CR-G91』換装し、出力とコンデンサ容量が大幅に完全され、エネルギー管理もより緩和される。

そして初期ブースター『CR-B69』を『CR-B81』に変更。このブースターは、推力よりも消費エネルギーを抑えた持続型に分類されるパーツだ。

それでも初期のCR-G69に比べれば、パワーも高く速度と連続噴射時間の強化が両立できた。

そして右手用の初期ライフル『CR-WR69R』を『CR-WR73R2』に変更し、装弾数、威力、射程距離などの総合火力が増した。

加えて左手用のライフル『CR-YWH05R3』を追加する事で、手数が増強が実現できた。

まだまだ強化する余地は残っているが、初期と比べれば総合性能は増したと言えるだろう。

演習場へと出た飛鳥はAC白天翼に乗り込み、早速挙動の違いを確かめる事にした。

ブースターを吹かし、一定時間加速と飛行を行う。

「おおー！ 加速力も飛行時間も見違えるようですよー！」

内装系を強化した事で、早くも機動性の違いに飛鳥は興奮気味だった。

ブースター速度は300km近くを弾き出し、連続滞空時間も飛躍的に増加した。

これだけの強化でも、機体の機動性は見違える程に進化し、行動の選択肢も大幅に増す事になる。

『よし次は射撃を試そう。的に向かって撃つてくれ!』

ユウキが機器を操作し、演習場に幾つかの動くのが出現する。

飛鳥はすぐさま的をサイトに捉え、左右のライフルを試射した。

使用しているのは訓練用の模擬弾ではあったが、実弾と何ら変わらぬように設計されておりデータ取得に貢献する仕様になっている。

主兵装である右ライフルに加え、左ライフルも追加されたのだ。

単純火力も倍以上に跳ね上がっていた。

「これはすごいっ!少しパーツを変えるだけでここまで違いが——」

劇的に増した機体性能と火力に飛鳥の意識は高揚していた。

しかしである。

突然ユウキから通信が割り込んで来た。

『——飛鳥!今直ぐ、空を見ろ!空が燃えているっ!』

「——っ!」

焦りを滲ませたユウキの叫びに、“何事か”と飛鳥は直ぐに頭部カメラを上方へと向けた。

「……!!」

信じ難い光景が上空を支配していた。

(推奨BGM Liquid Cinema | Of Fire
and Iron)

空が燃えていたのだ。

文字通り——。

「燃えて……いる……空が……」

夜空一面に広がる、紅くも輝かしい光の絨毯^{じゅうたん}。

更に注視すれば地上から上空に向けて、夥しい数の光が昇っている。

「あれは……まさか……」

天に昇り行く光の束——。

その光には見覚えがあった。

先程の作戦で、何度か狙撃された正体不明のレーザー光線だ。

そのレーザーが膨大な数を伴い、上空に照射されているのだ。

そしてレーザーの行く先には、紅く橙色に輝きを染める夜空――。

しかしレーザーの数は過剰な程に膨大だ。

遠間から観測している為、正確には把握出来ないが、恐らくレ―

ザーの数は千や二千どころではなく、万の位は軽く凌駕するだろう。

『お…おい見ろよ、あの空をつ！』

『燃えてやがるぜ……！』

『最近、変な事ばかりが起きやがる』

『この世界も、もうお終いかもね』

燃えゆく空に異常を感じたのだろう。

居住区から住民達が次々と演習場や野外に出て、この異常事態に騒

ぎ立てている。

更に区内速報ニュースが流れ、今の異常事態を交易所全体に流していた。

矢張りというか何と言うか。

住民の中には、防護服も付けず生身のまま野外に身を置いている者

達も居た。

どうやら此処でもコジマ粒子が霧散しつつあるようだ。

今迄この様な現象は一度も無かったというのに。

「それにしても、あのレーザーは何を撃っているでしょう？」

『“アサルトセル”だ。あのレーザーは、アサルトセルを焼き払って

いる』

「アサルトセルですって!？」

飛鳥の問いにユウキが通信越しに応える。

衛星軌道上に設置された、無差別迎撃端末アサルトセル。

とある企業が、宇宙へと進出する他企業を妨害する為だけに設置さ

れた、悪意と傲慢の象徴シンボル。

射程距離内へと侵入したありとあらゆる物体を、無差別に攻撃する

自動端末だ。

しかし、ただそれだけの為に無計画に設置した結果、皮肉にも人類

宇宙進出の夢は閉ざされてしまった。

過去に反企業グループ『ORCA旅団』が、閉ざされた宇宙への道を切り開こうと暗躍したが、人類種の天敵とオールドキングの虐殺行為により水泡と帰した。

そして今もアサルトセルは衛星軌道上を支配し続け、宇宙進出を計画していた企業連は頭を悩ませていた。

『企業連の望む方向に…流れたか』

「宇宙進出への動きが加速するという事ですね」

『…：…どうだろうな』

今もこうしてアサルトセルは焼き払われつつある。

結果として宇宙への扉は、確かに開かれたと言っていないだろう。

しかし、今尚徘徊している得体の知れない、あの怪物達。

今も遥か遠方から照射し続けている、正体不明のレーザー群。

何らかの関連性はあるだろう。

それ等の問題を放置し事を急いだ処で、打ち上げ途中の宇宙船ごとレーザーで貫かれるのは明白だ。

長らくとは言わないが、仮にも世界を統治してきた組織だ。

何らかの手は打つだろう。

——この世界で、何が起こってるんだ？

燃えゆく夜空——。

昇りゆく光の束——。

光に焼かれ火に染め上げる一面の空を仰ぐ、住人達。

飛鳥は一抹の不安と疑念を抱きながら、上空を見上げていた。

…

—— あれから一週間 ——

(推奨BGM アーマードコア・プロジェクトファンタズマ Gri
p)

強化されたACで、数々の依頼を達成した。

—— 廃工場にて ——

廃棄されて久しい、その施設。

或る小企業が、その施設の権利を買い取り再利用を画策していたが、未だ稼働し続けるガードメカに頭を悩ませていた。

そのガードメカを排除し、安全を確保するという飛鳥の得意とする分野だ。

強化されたACにとって、旧式の無人兵器など最早居ないに等しく、難無く排除を完了。

目的達成を確認し帰投しようとした瞬間、奇襲を受けた。忘れもしない、あの薄気味悪い怪物だった。

クレイドルで大半を占めていた、赤く異様な手足と顎を備えた個体が襲い掛かって来たのであった。

工場内という閉所での戦闘。

不利を悟った飛鳥は、必要最小限の反撃で一旦工場外に退避し、待ち伏せしながら赤い怪物を迎撃し、次々と殲滅。

総数150体を越えていたが、全滅させる事が出来た。

そしてこの戦闘で、初めて接近戦も経験する事になった。

生理的嫌悪感を催す風貌だったが、意外にも体組織は脆く、初期のレーザーブレード一閃で容易に切断する事が出来た。

—— 小規模交易所にて ——

ミグラントや残骸回収業者などが集まり、細々とした取引を行う為の小さな交易所。

其処へ突如と来襲した、あの怪物達——。

50を超える甲殻を纏った種と、300を超える白く手足と歪な頭部を備えた小型の個体で構成された群れだった。

甲殻を纏った種は、前方に対して高い対弾性を誇っている。

しかしクレイドル墜落現場で遭遇し、後方は無防備である事は既に理解していた。

飛鳥は機体を跳躍させ低空を維持しながら、上空後方からの射撃で次々と仕留めてゆく。

白い小型種は数が多く、弾薬数に不安を覚えたがレーザーブレードや蹴りなどで容易く仕留める事が出来た。

それ程頑丈ではないのだろう。

武装した歩兵や正体支援火器でも充分に対応が叶い、地元の警備隊との共闘で殲滅に成功。

無事に依頼を達成できた。

—— 欧州北部での荒野 ——

インテリオルユニオン主導の、光学兵器試験運用の護衛任務の時だった。

またもや、あの怪物が群れを成して現場へと来襲。

今度は、1万を超える驚異的な群れを形成していた。

対して此方の戦力は、飛鳥のACを含めてMT20、ACノーマル6の余りに寡兵——。

真面にぶつかり合えば、瞬時に飲み込まれるのは明白だ。

しかしユニオンの試験兵器が此処で真価を發揮した。

幾つもの多連装レーザーキャノンが、その威力を大いに振るい怪物の群れを焼き払った。

それは量産型アームズフォート『ランドクラブ』に搭載されていた主砲を改良した代物だった。

ユニオンは、GAグループからランドクラブを鹵獲または数台購入し、主砲を自社の兵器へと換装していた。

その主砲は掃討戦用の多連装大型レーザーキャノンで、実戦でも運用されていた。

今回の試験兵器は、その主砲を流用し更に小型化と汎用性を向上させた物だった。

この試験運用では設置型のみだったが、主電源用の大型車両とケーブルで繋がっており、ほぼエネルギー切れを起こす事無く多連装レーザーを怪物に向けて拡散照射を繰り返す。

アームズフォート用の主砲と比べれば威力は格段に劣るが、連射性やエネルギー効率にも優れ照射範囲の調整にも融通が利く設計となっていた。

結果、残り百体足らずが討ち漏らしとなったが、それだけの数ならば脅威とはならず、護衛部隊が瞬時に全滅させた。

思わぬ形で試験は大成功を収め、気を良くしたユニオンは飛鳥に追加報酬を上乗せする事となった。

(推奨BGM 初代アーマードコア ガレージBGM)

目を追う毎に増大してゆく怪物との遭遇戦。

種別にもよるが怪物単体の質は、ACハイエンドノーマルの敵ではなく戦術や環境次第では、ACノーマルは無論の事MTや武装歩兵でも十分対応出来た。

しかし脅威なのは、その数である。

依頼を遂行する度に、怪物の数に物言わせた質量戦術。

生半可な少数部隊では、その膨大な質量に押し潰され怪物の餌食と成り果てるのであった。

かと言って高度を上げ下手に飛行すれば、何処からともなく飛来するレーザーに撃ち抜かれてしまう。

度重なる怪物との戦闘で飛鳥は、その戦技と戦術を高めていったが彼自身にも深刻な現実が立ちはだかっていた。

「弾切れ……か……」

AC格納ハンガーにて端末に映し出された映像を見ながら、飛鳥は呟く。

「ACの武器も、本来はあの怪物を想定してなかった筈だ」

飛鳥の傍にはスミカとユウキも同伴していた。

「あのバカげた数を相手取る為に、ACは造られていない」

「あれだけの大群だ。AC用の武器では装弾数に不安が残るな」
スミカとユウキがそれぞれ見解を述べる。

大部隊で怪物に対応するなら、まだ解決策は存在するだろう。

しかし飛鳥は独立傭兵という位置付けにあり、基本的に単機で行動する。

もしも一万や二万を超える大軍勢と遭遇した場合、単機で対応するのは現実的ではない。

ほぼ姿を消した『ACネクスト』でも、無補給でそれだけの数を戦い抜けるかは疑わしい。

AC用のマシンガン『WR04M―PIXIE2』と呼ばれる銃器が存在し、その装弾数は1000発を超えるが生産数が少なく市場に流れ次第、即座に熟練のレイヴンや組織に買い占められてしまい中々此方には回って来なかった。

兎に角、装弾数の多い武器が必要となる。

多少威力が低くとも、怪物の皮膚は脆弱で小口径弾でも容易に貫通できるのは、せめてもの救いだ。

「二応、提案があるんだが……」

ユウキは、モニターに一つの銃器を閲覧させた。

「マシンガンに見えるが……この銃、正規品ではないな」

モニターに映し出された銃を見たスミカは、それはAC用ではないと直ぐに見切った。

「実は……」

ユウキは映し出された銃について説明を始めた。

モニターに映し出された銃は、とある回収業者ミグラントから横流しされた非正規品だった。

スミカの見解通り、AC用の武器ではなく別種の兵器用に設計された代物らしい。

口径そのものは36ミリ弾を採用しているらしく、威力としてはAC用のマシンガンに比べ劣るようだが、装弾数は驚異の2000発を誇るという。

更に銃身上前部にはアタッチメント備え、大口径砲を装備できると

の事。

しかし、ユウキが指し示したこの銃には大口徑砲は付属しておらず、代わりにロングバレルが装着されていた。

貫通力と命中射程距離を伸ばし支援用として運用される事を想定しているが、ロングバレル状態でも連射は問題なく可能であるという。

因みに表記されたこの銃の名は『WS-16C』と呼称されていた。

「多少威力は落ちるが、ロングバレル化で威力は上乘せされ装弾数連射性も申し分ないが、どうする…購入しておくか？」

「……」

ユウキの案に飛鳥は暫し考え込んでいたが、意を決したのか購入の意思を伝えた。

「あの怪物大半の防御力は、MTや歩兵用の重機関銃でも貫く事が分かっていきますからね。威力よりも、装弾数を重視すべきでしょう。それにロングバレル化が成されているのなら、ライフルとしてもマシンガンとしても臨機応変に対応出来ます。多数の怪物相手には、有利に働くかと」

「OKだ。じゃあ早速、購入手続きに移るぜ」

「そろそろ機体の外装も取り換えた方が良い」

飛鳥の意を受けユウキは購入手続きに移るが、そこへスミカが機体外装の強化案を提示した。

飛鳥のAC『白天翼』は、未だ外装は初期のままであった。

決して性能は悪くないのだが、今の状態では機体性能を十分に引き出すには少々役不足でもあった。

初期の外装パーツは、言わば癖を無くし生存性向上の為に比較的重装甲を施してある。

しかし彼自身の戦術は、やや高機動よりの戦術を多用していた。それなりの依頼を成功させ、資金にもそこそこの余裕がある。

外装パーツを取り換え、更なる強化を図るには良い時期でもあった。

スミカの追加案に飛鳥は深く頷き、機体性能の強化も行う事にす

る。

こうして三人は、再び遭遇するであろう怪物との戦闘に備える為、各自動き始める事になった。

機体の強化が一通り終わり、見た目も性能も初期とは比較にならない程に変容した白天翼。

試運転と演習を済ませ、幾許かの時が過ぎた。

—— 数日後 ——

『ミッションの概要を説明しましょう。依頼主はオーメル・サイエンス社。目標は正体不明の怪物、通称“BETA”群の殲滅です。この作戦には多数の部隊や軍が参戦し、国連軍の一方面軍でもある“ソ連軍”も参加する事になっています。今回貴方の目標は、BETAの忌々しい光線級を殲滅させる事にあります。勿論、貴方一人にお任せする訳はなく、ソ連軍特殊部隊、オーメル専属の傭兵部隊との共同作戦となります。細やかな作戦、情報詳細は現地にてお伝えいたしますので、報酬のみならず情報入手という観点から鑑みても非常に意義ある依頼ではないでしょうか。オーメルサイエンス社との繋がりを強くする好機です。そちらにとっても悪い話では、なあいと思えますが？』

自室の端末より通達された一つの依頼。

今回は『オーメルサイエンステクノロジー』からの依頼だった。

それにしても、気になる単語が幾つか存在していた。

「“国連”？“ソ連”？……馬鹿な。国家は解体された筈だ」

既に“スミカ”“ユウキ”の二人も飛鳥の部屋に集まり、国の存在を仄めかすオーメル仲介人の言葉に眉を顰める、カスミ・スミカ。

「それだけではありません。あの怪物“BETA”とか言っていますか？」

今迄あの怪物の固有名称が明らかになっておらず、漸く怪物の呼び名が判明した事にユウキは情報の出所を探ろうとする。

「だけど、あのレーザーの正体は、BETAでしたか？その怪物の仕業

だという事がこれでハッキリしました！」

今日まで、一定高度にて狙撃される正体不明のレーザー群。

その主体が怪物であるという事が、暫定的ながら判明したのである。

「請けるんだろ？」

「ええー！」

スミカの問いに飛鳥は短く頷く。

どんな作戦であれ、あの怪物の情報が手に入るのだ。

オーメルとの繋がりを深めるのは少々抵抗感は否めなかったが、国連やソ連といった言葉も心残りではあった。

今この世界で何が起きているのか。

たとえ全容を把握できなくとも、情報の有無は生死に直結すると言っても過言ではない。

どうやら自分の目標は、あのレーザーを撃つ怪物『光線級』とやらの殲滅らしい。

参加する事で、戦術や怪物の情報が手に入るだろう。

高額な報酬以外にも参加する理由は、十分にあった。

飛鳥は受諾のボタンを押し、作戦参加の意を送信する。

矢張りと言うか、画面上に表記された自分の残高の数字が上昇し、前金が振り込まれたのを確認する。

作戦決行は二日後。

機体の強化は今の所、充分だろう。

三人は各自準備に移り、飛鳥は機体の調整と戦闘訓練に時間を割いた。

世界は変わりつつある――。

確実に――。

次元は既に融合していた――。

枝分かれした様々な世界――。

起こり得なかった結末――。

イレギュラーの存在――。

リンクス

ネクストは操縦にアレゴリーマニピュレイトシステム（AMS）と呼ばれる搭乗者の脳と脊椎に直接接続し、脳波を読み取る装置を使用する。このAMSを使用するためには先天性の特殊な知覚能力が必要であり、これをAMS適性という。

この才能を持ち、ネクストと『繋がる（LINKする）』者という意味で、搭乗者達はリンクス（LINKS、またはLINK）と呼ばれる。

AMS適性の数値自体にも保持者によって個人差があり、操縦が可能であっても適性が低いリンクスは強い精神負荷による凄まじい苦痛を味わい、中には耐え切れずに心身に変調を来たしてしまう者もある。

またネクスト自体が生体へ悪影響を与えるコジマ技術の塊であり、AMSによる精神的負担と殺人的な機動による肉体的負担もあって、リンクスは短命であると言われている。

（一部例外も存在する）

基本的にリンクス達は企業管理機構に登録されており、それぞれ管理ナンバーが振られている。

特にネクストが最初に実戦に投入された国家解体戦争に参加した

26人のリンクスは『オリジナル』と呼ばれ、その時の功績の大きさ順にNo. 1〜26までの管理ナンバーが当てられており、実戦経験の豊富さと高いAMS適性から総じて優れた戦闘能力を誇る。

No. 27以降は国家解体戦争後に登録されたリンクスたちであり、単純に登録した順番になつてゐるためリンクスとしての実戦経験はオリジナルに劣るものの、中には被験体などとしてネクストの搭乗歴自体は長い者や、上位オリジナルを凌駕する実力を持つ者もいる。

また、企業に与せず、登録ナンバーを持たない『イレギュラー』と呼ばれるリンクスも少数ながら存在している。

リンクス戦争後の時代では、各企業がリンクスの占有権を表面上放棄、企業連管轄下のリンクス管理機構カレードに管理を委ねており、リンクス達にはその実力の順にカレードランクと呼ばれるナンバーが振られている。

希少なAMS適性保持者かつ一騎当千の戦闘力を誇るネクストを駆る存在であることから、リンクスにはプライドが高く一種の選民的意識を持つ者も多い（特にオリジナルや歳若いリンクス）が、AMS適性はあくまでも『ネクストの操縦に必要な不可欠な能力』に過ぎず、それだけでは戦闘力に直結しない。戦術的な判断力や火器の運用技量などは別個の能力であり、高いAMS適性を持ちつつ兵士としても優秀な実力も兼ねるリンクスは自ずと限られることになる。

そのため、アマジューグやアナトリアの傭兵等のようにAMS適性が低いにもかかわらず、戦闘経験と技術そのものを生かしたり、敢えて心身への負荷を受け入れて自身を追い詰めるなどして高い戦闘能力を発揮するリンクスもごく僅かではあるが存在する。

ちなみにAMS適性が低い上に戦闘技術も低いリンクスは粗製と呼ばれ、リンクス達の間では侮蔑の対象とされている。

（詳しくはWikiってくだち！）（。▽。）ゝ

第2話―オーメル、光線級漸減作戦―

コジマ粒子

国家解体戦争の7年ほど前に発見された新物質。発見者の名を冠して「コジマ粒子」と呼ばれる。

通称はKP (Kojima Particle)。

設定上はコジマ粒子発生機構を用いて「コジマ物質」に定量で安定した電気エネルギーを加えることで発生するとされている。

高い軍事活用の可能性が見出されており、クイックブースト、オーバードブースト、プライマルアーマー、コジマキャノンといったネクスト技術の根幹を成すさまざまなテクノロジーに応用されている。

また、スナイパーライフルの弾丸に対する空気抵抗を軽減させるコジマゼリー塗装なども存在しており、ネクスト用の武装にコジマ技術を意識していないものはほぼ存在しない。

その反面、広範かつ長期に渡って生体活動に深刻な悪影響を及ぼす環境汚染原でもあり、稼働時にコジマ粒子を大量に放出するネクストは、防衛や占領などには非常に不都合であり、作戦時間やプライマルアーマーの展開などに制限が課せられることも多い。

しかし、リンクス戦争後の大規模な汚染に伴い人類の過半数が航空プラットフォーム「クレイドル」へ居住区を移した事で、ネクストはそのような制限から開放され、更にアンサラーやソルディオス・オービットのような大規模にコジマ粒子を用いる事を前提としたアームズフォートの登場も促している。

また、BFFが管理する南極のスフィアに代表されるように、コジマ粒子を用いた発電施設も存在する。

(詳しくはWikiってください！) (。▽。)

(推奨BGM Muv-Luv Alternative——Bringing)

欧州東寄りの荒野に、数多くの部隊が集結していた。作戦立案者である、オーメル陣営の主力部隊。

オーメル傘下の企業である、ローゼンタール、テクノクラート、アルゼブラの機動部隊。

聞き馴れない国連組織などと名乗る一方面軍、『ソ連軍』率いる大部隊。

そして何処にも属さない、フリーランスの独立傭兵達。通称“レイヴン”——。

独立傭兵を除く各陣営は役割分担が明確なのだろうか、部隊編成には統一性が見られた。

やや遅れて、飛鳥のAC『白天翼』を積んだ輸送車両も、駐屯地へと到着する。

「……かなりの大部隊だ」

飛鳥は既に機体へと乗り込み、コックピットのモニターから外の映像を見ていた。

投影された画像には実に様々な兵器群が集結しており、戦車やヘリと云った通常兵器からMT、ACノーマル、ACハイエンドノーマル、そして少数だがアームズフォートも映し出されていた。

「これだけの大戦力、今回の作戦は激戦が予想されるという事か」アームズフォートまでも投入した今回の作戦——。

未だ嘗てない激しい作戦を予期し、飛鳥は機体内で身を強張らせる。

『だが気になるのは、あのACに似た人型兵器群だな。初めてお目に掛る』

オペレーター席からスミカの声が聞こえて来た。

集結していた兵器群には見た事も無い2脚型の人型兵器が多数、見受けられスミカもユウキもその機体に関心が向いていた。

『あの兵器が所持している銃、WS-16Cに酷似しています!』

2脚の人型兵器が所持している銃にユウキは言及した。

映像を部分拡大してみると、現在AC『白天翼』が装備している銃に何処と無く似ている。

『成程、市場に横流しされたあの銃は、あの兵器の為に開発されたという事か』

WS-16Cの出所が気になっていたスミカは、一人腑に落ちた様子だった。

——それにしても、かなりデカイ機体だ。サイズはネクストを凌駕しているぞ。

見た事も無い機体からして、あの兵器群が『ソ連軍』とやらを名乗る組織なのだろう。

飛鳥はそう見切りを付ける。

戦車に分類される車両、約80両。

ヘリなどの航空戦力、約30機。

企業専属、無所属含めたMT、約100機。

同じくACノーマル、約80機。

AC『白天翼』を含めたACハイエンドノーマル、8機。

アームズフォート『ランドクラブ』、1機。

同じくアームズフォート『カブラカン』、1機。

そして『ソ連軍』所属の大型人型兵器、約40機。

これだけの戦力が揃えば、ACネクスト単機になら十分太刀打ちできる程の戦力だ。

程無くしてオメルから集結部隊に対し通達される。

どうやら作戦内容の詳細を説明すべく、各参加者達に呼び掛けている様だ。

全参加者は駐屯地に設置された簡易司令本部へと向かうべく、機体を降り其処へと向かった。

降りてみて分かるが、無所属の傭兵達の服装は実に多種多様で統一

性が無い。

「逆に言えば、個性が際立っているとと言える。

安全性と生存性を重視し、パイロットスーツを纏っている者。

それとは真逆に、目立ちたがり屋なのか虚栄心を満たす為なのか、派手な服装で飄々と振舞う者。

飛鳥は当然前者で、生存性を重視したパイロットスーツに身を包んでいる。

そして企業専属側の兵士達は、傭兵に比べ装備に統一性が見られる。

しかし最も異質だったのは、ソ連軍を名乗る兵士達の服装だった。大まかに見た限り、パイロットスーツなのだろう。

だが、男性はまだしも女性パイロットの服装には正直、目のやり場に困っていた。

裸体と変わらぬ程に、ボディラインの強調されたデザイン。

特に胸部や股間部は顕著で、胸の先端部が分かる程に体の線が強調されている。

しかもどう言う訳か、若い女性パイロットが異様に多く、中には自分と年齢の変わらない少女まで多数存在しているではないか。

『おいおい、何だよありやあ？』

『誘ってんじゃね？』

『ちげえねえ！』

『作戦が終わったら、ベッドで仲良くしてえぜ！』

扇情的な格好のソ連軍女性パイロット達に、好色の目を向ける傭兵やオーメル陣営の男達。

それとは対照的に、女性パイロット達はそんな視線にも平然としている。

飛鳥もそんな彼女達に視線を向けていたが、横から声を掛けられた。

「……お前も年頃なのは分かるが、見過ぎだ」

「目の保養も結構だが、先ずは任務遂行が最優先だぜ？」

スミカとユウキだった。

何故か二人とも顔がニヤニヤとしている。

「——なっ!?茶化さないで下さい!そういう目で見てたんじやないっ!」

「全く……マセてるな」

「青春だねえ……お前も」

飛鳥は必至に弁明するも、スミカとユウキには軽く往なされてしま
う。

そんな三人のやり取りに、一人の少女がふと視線を向けていたのを
彼等が知る由はなかった。

「余所見をするなイーニア。もう直ぐ説明が始まる」

「——え?あ…うん」

青味を帯びた長い銀髪の少女は、もう一人の背の高い銀髪の少女に
窘められ慌てて視線を戻す。

作戦の詳細が説明された。

——が。

先ずは、あの正体不明の怪物についての情報が開示された。

件の怪物は、『BETA』と呼称されている。

Beings of the

Extra

Terrestrial origin which is

Adversary of human race

“人類に敵対的な地球外起源種”という意味だ。

信じ難い話だったが、彼等は地球外から飛来してきた生命体で、ど
う言う訳か人類を敵と見なし積極的に攻撃して来る生物だった。

その事実は無所属の傭兵達は、俄かに騒めき始め飛鳥達も例外では
なかった。

彼等は皆、怪物のルーツは何処かの企業が造り上げた生物兵器では
ないか、と憶測を立てていたからだ。

しかしその憶測は大きく外れ、BETAなる怪物は地球外生命体だ
と言うのだから、騒ぎ立てるのも無理はない。

そして、BETAの種類についての情報が開示される。

それ等は皆、人に対し非常に危険な種別ばかりで、特に脅威と見なされているのは光線級と呼ばれる個体であった。

一定高度に飛び上がった飛翔体を文字通り高出力のレーザーで撃ち落とし、この個体種のお陰で弾道ミサイルや航空機による空爆の優位性が、実質消滅した言っても過言ではない。

小柄な体躯に巨大な眼球らしき体組織を備え、其処から高出力光線を放つという。

レーザーの出力と共に、射程距離、命中精度は極めて高く、制空権はBETA側にあると言つてもいい。

だが逆を正せば、この光線級を無力化させてしまえば、空爆やミサイルと云った支援攻撃の効果は劇的に増すという事だ。

今回の主目的は、この光線級の殲滅が最優先される。

他にも危険な種が紹介されたが、実質光線級のみが遠距離攻撃を有し、他は近接戦闘しか攻撃手段を持たない。

そして作戦説明は佳境に移り、光線級殲滅の為のプランが幾つか提示された。

先ず第一段階として、対レーザー砲弾『AL弾』と呼ばれる弾頭弾で砲撃を行う。

当然、光線級はレーザーで迎撃するので、破壊されたAL弾は重金属粒子を展開させ粒子雲を形成する。

その粒子雲を通過したレーザーは著しく、拡散、減衰され、その威力を大幅に低減させる事が可能。

光線級の習性を逆手にとった、戦術だった。

第二段階として、更にAL弾と通常砲弾を交えた飽和攻撃を行い、多くのBETAに対し損害を図る。

一定濃度の重金属粒子雲を維持しながら継続的に追加砲撃を行いつつ、第三段階に移行。

機を見計らい、此処でACハイエンドノーマルと人型戦術歩行戦闘

機を主軸とした混成部隊を投入。

そこで、再突入殻と呼ばれるカーゴブロックに機体を搭載させ、VLSで高度2000メートルまで打ち上げる。

突入殻はその高度で分離し、BETA軍へと降下突入を図る。

分離の際、突入殻には対レーザー処理が施されAL弾と同様の効果を持つ為、対レーザーの盾としても機能する。

また分離した突入殻は先行して地上に落下し、その重量と質量兵器としてBETAを押し潰す役割も併せ持つ。

突入を果たした混成部隊は、そのまま光線級を目指し漸減を図る。

そして最終段階として、MT、ACノーマル部隊が全力進撃を行い、アームズフォートの支援砲撃を交えつつ『カブラカン』で地ならし、BETA群を殲滅するという作戦だった。

当然この作戦、特に突入を担当する混成部隊には極めて高いリスクが伴い、ハイエンドノーマルを駆る傭兵からは不満の声が続出した。

しかし、幾ら彼等が反論した処で作戦要項に変更はなく、予定通り決行される事となる。

そんな傭兵達に比べ、企業、国家所属の正規兵達は無言で敬礼するのみだった。

作戦説明が終わり、各陣営はそれぞれ持ち場へと慌ただしく動き始めた。

「結局、『国連』とやらの詳細を聞く事は叶わなかったか」

「仕方ありませんよ。あの怪物：『BETA』でしたか？アレらの情報が入っただけでも良しとしましょう」

持ち場に就いていた、スミカとユウキ。

彼等はアームズフォート『ランドクラブ』に設置されている、第2ブリッジへと移動していた。

その場所で、友軍機の管制や各戦況分析を行う為だ。

尤も雇用した傭兵達の、不正や反逆を監視すると言う意味合いも含まれているが。

飛鳥もACを起動させ、アームズフォートのVLSへと移動を開始

していた。

彼の『白天翼』はハイエンドノーマルに分類される為、対光線級の先鋒としての役割を与えられていた。

VLS発射と機体オペレートは基本的にランドクラブで行われ、カブラカンはあくまで残敵掃討用を使用される予定だ。

「ACの外装は、対光学兵器を考慮しているのか？」

「ええ、一応は……しかし、ACの装甲だけであの高出力レーザーを照射され続ければ、一溜りも無いのは確実です！」

スミカの問いにユウキは応え、白天翼の外装は全て換装を終え、その外観は最早別物と言っていいだろう。

頭部を初期の『CR—H69S』から『CR—YH70S2』へ換装。

この頭部は、CR—H69Sを改修したもので、基本性能に優れたパーツだ。

装備負荷はやや上昇しているものの、防御力も実弾、対光学兵器とも上昇している。

次に腕部を初期の『CR—A69S』を『A01—GALAGO』に換装。

これも機体重量の増加を代償に、優れた防御力をと射撃適性を誇るパーツだ。

腕に続き脚部も換装。

初期脚部『CR—LH69S』を『LH01—LYNX』に変更。積載重量を犠牲にしたが、初期に比べ更なるレーザー防御効果を獲得。

但し、機体負荷の増加とブースト燃費の悪化を招く事になった。

最後にACの核となる胴体部のコアパーツ。

これも初期の『CR—C69U』から『CR—C75U2』へと変更し、総合性能向上を獲得するに至った。

多少対レーザー防御を代償に支払ったが、汎用性は大きく上昇している。

更には、冷却器であるラジエーター、FCS、等も変更を加え、近

接武器であるブレードにも若干の変更が加えられた。

機体の外観と共に挙動も大きく変化し、白天翼は一定の防御を維持した運動性よりの汎用型となった。

特化した性能ではないが、総合的バランスに優れた扱い易い機体と言える。

今後は作戦内容に応じて装備を換装する事で、戦術に幅を持たせる事が出来るだろう。

しかし、まだまだ改良の余地は残されている。

これから技術が進歩し、更なる高機能を備えたパーツが現れるかも知れない。

AC『白天翼』は、まだまだ進化の可能性を秘めていた。

『こちら白天翼、出撃準備整いました。オペレーター、聞こえますか？』

VLSに収納されたACから通信が入る。

VLSには再突入殻が収納され、その内部には飛鳥のACが格納されていた。

いつでも発射できる態勢だ。

「ああ、よく聞こえる。もう間もなく作戦が開始されるが、今度はかなり難度が高い！集中力を切らすなよ！」

『はいっ！』

スミカなりの激励を受け、飛鳥は待機状態を維持する。

砲撃が開始され、ある程度のBETA群に被害を与える迄、基本的に飛鳥達の出番はない。

彼はコックピット内で静かに目を閉じ、ソ連軍所属の人型兵器を思い返していた。

——戦術歩行戦闘機…か…ACとは違った兵器だったな。何故今更あんなモノが…？

各部パーツを変更する事で、あらゆる戦況に対応出来るAC。

しかし先ほど見た戦術歩行機は、各部パーツに統一性が見受けられ、どちらかと言えばACノーマルに近い印象を抱かせていた。

——それに『国連』に『ソ連』…。既に国家は解体された筈なの

に、未だに国そのものが残存しているかのような発言……。国が復古したのだろうか？

十数年前にACネクストによって国という概念が破壊され、世界は企業が統治する事になり今に至っている。

様々な憶測を立ててはみるものの、結局明確な答えなど出る訳もなく、飛鳥は気持ちを落ち着かせ静かに時が来るのを待つ事にした。

一方、作戦第一段階に向け、各部署の兵士達は慌ただしく動き回り、着々と準備を進めていた。

『戦車部隊、自走砲部隊、ロケット砲を含めた各種車両部隊、配置完了！』

『砲撃型MT、狙撃型ノーマル及び支援射撃型ノーマルの、各機準備宜し！』

『各種砲台へのAL弾、装填終わる！』

『先行突入部隊のVLS、発射準備完了！』

『各部隊へのデータリンクを確認、目標誤差修正よし！』

各部署からの準備完了の報が、次々と旗艦を務めるランドクラブへと寄せられ、いよいよ作戦開始は秒読み段階へと移る。

『ランドクラブ主砲び副砲、砲撃地点へと目標合わせ！』

『BETA群、依然動きなし！』

『作戦開始まで、3：2：1……。』

『——ミッション開始っ!!』

『——一斉砲撃始めえっ!!』

ランドクラブ第一ブリッジにて、作戦開始と同時に砲撃命令が下された。

Muv—Luv Alternative——It!

ランドクラブの主砲、巨大口径の3連装砲が上空へと火を噴いた。

41センチ口径3連装4基の計12砲身から大型のAL弾が投射され、それを合図に多数配置された副砲、MT、ノーマル等の各砲撃部隊が一斉に砲弾を放つ。

全砲撃部隊から投射される、膨大な数のAL弾。

砲撃の反動で発生した振動は、ランドクラブ内のVLSにまで伝わっていた。

——始まったっ！

VLSから再突入殻、そしてACコックピットにまで到達する振動。

それを感じ取った飛鳥は、目を見開き姿勢を正す。

否が応にも気持ち昂り、緊張感が身を強張らせた。

これからあの薄気味悪い光線級の群れへと突っ込むのだ、文字通り。

被弾こそしなかったものの、あのレーザーの恐怖は今でも鮮明に覚えていてる。

間違い無くレーザーの嵐に晒され、一步でも判断を誤れば、そこで一巻の終わりだ。

一応、対光学兵器用の盾が支給品として、再突入殻に格納されていた。

オームルの説明では、AC用ではなく本来は戦術歩行戦闘機用に開発された代物らしい。

気休め程度かも知れないが、防御用の兵装があるのなら有効活用しない手はない。

少しでも生存率を高める為には、使える物は何でも使う必要がある。

戦場とはそれ程に過酷な環境なのだ。

だが、気を張り詰めているのは自分だけではない筈だ。

自分と同様に、突入部隊に組み込まれた、幾多の友軍機達。

彼等も差異こそあれど同じ気持ちを抱いているだろう。

飛鳥は何気無く、側面に意識を傾けた。

何か確証がある訳でもない。

ただ気になるのだ。

漠然とした何か——。

「何だろうっ……包み込むような柔らかい圧を感じる」

五感ではない。

非常に曖昧な何か、側面から流れて来るのだ。

依然『クレイドル』調査で迂闊にも高度を上げ、レーザー群に晒された。

しかし狙撃される直前、頭に何かをぶつけられるかのような圧迫感と熱を直感的に感じ取り、半ば反射的に機体を動かし、偶然レーザーを躲す事が出来た。

今感じ取れる感覚は、その様な圧迫感とは、また異質のものだ。

何処と無く柔らかく包み込まれ、安堵感さえ覚える。

「どうしてしまったんだ僕は……、だけど……悪くない……この感覚……」

暫しの間意識を傾けていたが、やがて視線を戻し、その感覚に身を委ねながらも自分の出番を静かに待つ。

時を同じくして――。

あるVLS内部にて――。

「橙色……あつたかい」

「どうした、イーニア？」

戦術機コックピット内で、二人の少女が乗り込んでいた。

「橙色の火……今は……とても小さく、優しく、暖かい……」

その戦術機は複座型の特別製で、Su-27ジュラーブリクをベースに強化改良された機体だ。

「一体どうしたと言うんだ？さっきの作戦説明でも、余所見ばかり……」

座席後部の銀髪の少女、クリスカ||ビャーチエノワは苦楽を共にして来た同胞を気に掛けた。

既に作戦は開始され、間も無く第二段階へ移行しようとしている。

一瞬の迷いが、死に繋がる作戦だというのに。

「クリスカ、大丈夫。寧ろ、すごく落ち着く……こんな事……初めて」

「イーニア？」

クリスカの心配を余所に、イーニアの口調は芯の通ったものだった。

少々気になったのは、彼女が側面に意識を向けている事か。

——側面に何か有るのか？こんな事は一度も無かったぞ。

過去に前例のないイーニアの奇行に、クリスカは眉を顰め同じく側面に意識を傾けるが、何も感じる事は無かった。

——まあいい。我々は役割を果たすだけだ。

クリスカは、気持ちを落ち着けゆつくりと呼吸を整える。

その頃戦場では、過剰とも言える砲撃がBETA群に降り注ぎ、至る所で激しい爆発が巻き起こっていた。

『重金属粒子雲！一定濃度に到達っ！』

『光線級のレーザー減衰率、50%を維持！』

多数のAL弾がレーザーに撃ち落とされ、その砲弾に内包された粒子が散布され粒子雲を形成した。

その粒子は光線級のレーザーを、減衰拡散させる効果を有す。

アームズフォート内の各通信士からの報告で、重金属粒子雲が一定濃度に達した事を告げられ、次第にAL砲弾が迎撃される数を減らし着実に地上へと着弾している。

様々な大口徑砲弾が炸裂し、その爆風で多数のBETAが吹き飛ばされた。

しかし、万を軽く凌駕する大群の前には、今の被害は無きに等しい。

『これより第二段階へと移行！通常砲弾とAL弾を織り交ぜよ！多弾頭ミサイル攻撃も加える、発射用意っ！』

作戦第二段階を宣言した指揮官は、適度にAL弾を織り交ぜつつ通常砲撃とミサイル攻撃を指示した。

その命を受けた砲撃部隊は、通常砲弾へと切り替え手順に移る。

ミサイル攻撃を担当していた部隊は、既に装填を終え命令が下り次第いつでも発射できる態勢だ。

装填されたミサイルは範囲攻撃を重視した弾頭が大半を占め、中には多弾頭ミサイルも含まれていた。

GAグループの子会社『MSAC社製』の多弾頭ミサイル『SALINEO5』を装填したノーマルも存在している。

この多弾頭ミサイルは、嘗て『人類種の天敵』を屠ったACネクス

ト『ホワイトグリント』が装備していた事でも有名で、その知名度は極めて高い。

本来はACネクストの武装ではあるが、今回の作戦用にACノーマルでも運用できるように、急遽改造を施していた。

そもそも、データーリンクはアームズフオートから提供される為、SALINE05を装備しているノーマルは発射するだけで良いのである。

『——てえっ!!』

指揮官からの発射命令が下され、各部隊は再び砲撃を開始。

通常砲弾、ロケット弾、各種ミサイルを織り交ぜた飽和攻撃が開始された。

作戦第二段階へと移ったのである。

上空高く打ち上げられた各種弾頭。

当然、BETA光線級は逸早くこれを察知し、一斉にレーザーを解き放つ。

光線級、重光線級の放った怒涛のレーザーが弾頭に命中し空中で爆散するが、撃墜を免れた砲弾が明らかに増加していた。

先程放ったAL弾が功を成したのだろう。

形成された重金属粒子雲が、透過したレーザーを乱反射や減衰を齎し、その威力を低減させていた。

第一段階とは比較にならない程の砲弾が地表に着弾し、次々とBETA群を爆散、粉碎させた。

最も生息比率の高い『戦車級』と呼ばれる個体種は無論、前面防衛に長けた『突撃級』、高い防御と攻撃力を有す『要撃級』も、砲弾とミサイルの餌食となり成す術も無く犠牲となる。

『命中を確認！効果有りを認む！』

『宜しいっ！AL弾も混ぜつつ砲撃を続けよっ！』

順調に第二段階も進行し、『オーメル』『ソ連』の連合軍は着実に成果を上げる。

だが怒涛の砲撃は光線級には未だ到達しておらず、尚も彼等は健在であった。

大まかな位置を特定は出来たが、光線級は基本、BETA群の最後尾近くに陣取る事が殆どで、大抵は大型種のBETAに守られている。

今回の主目的はあくまで、BETA光線級の排除と有用な戦術構築にある。

『BETA群、進軍を開始！真つ直ぐ此方へ突撃して来ますっ!!』

第一ブリッジ内のオペレーターから、焦燥を含んだ声音で報告が来る。

『慌てるな予定通りだ！これより第三段階へと移行！突入混成部隊、射出用意っ！護衛部隊は砲撃部隊前へと展開、BETA群の進撃を食い止めよっ!』

この動きも想定内なのだろう。

司令官は眉一つ動かす事なく、作戦を次の段階へと移行させた。

突撃級を前面に押し出したBETA大群が連合軍本隊へと迫り来るが、逆に光線級から引き離す事にも繋がる。

その隙を利用し、混成突入部隊を投入すれば光線級撃破の成功率も、より上昇するというものだ。

指令からの命が下り、護衛を担当していたMT、ACノーマル、戦術歩行戦闘機は陣形を組み、BETA進軍を持ち構える。

VLIS内に設置された再突入殻。

突入担当のACと戦術機の彼等にも、作戦第三段階の報が告げられた。

『いよいよだな、敵陣真つ只中に突っ込んでの戦闘だ！未だ嘗てない程の過酷な激戦となる、しかし不様でもいい、危険だと判断すれば即退避しろっ、いいな!』

「ええっ！承知しています!」

アームズフォート第二ブリッジから、通達されるスミカの声。

一応、作戦に参加しているとは言え、飛鳥は独立傭兵という立場だ。仮に敵前逃亡したとしても、依頼主からは評価と信用を落とすだけ

で済む。

ベテランリンクスでもあったスミカにとって、企業連のやり口は嫌という程に熟知している。

何も命と身命を掛けて迄、忠義を尽くすには値しない組織だ。

本当に危険と判断すれば、即退避を通達する積りでいた。

一応彼女等はアームズフォート内に居る為、半ば監視状態ではあるが、いざとなれば生身で脱出する位の實力を有しているので、二人に關しては特に問題ないだろう。

「ふうう〜……、いよいよか!」

コックピット内にアラームが鳴り響き、射出が近い事を飛鳥は悟る。

『混成突入部隊、第一陣としてAC部隊が投入される。奮闘を期待する!』

オーメル専属の通信士から通達が入り、カウントダウンに移った。

——国連に戦術歩行戦闘機……聞いた事も無いが、気にするのは生き残ってからだ!

(推奨BGM Muv-Luv Alternative——Chi
W O H o s s o r u S e n j o u)

『スリー、ツー、ワン……ゼロ!』

やがてカウントがゼロを指し示し、同時にVLSハッチが開く。

そして再突入殻のエンジンユニットに点火、勢いよくロケットノズルが噴射し再突入殻が、天高く打ち上げられた。

どうやら飛鳥の再突入殻が最初に射出されたらしく、続けて次々とACを内包した再突入殻が打ち上げられる。

ロケットノズルから噴煙を撒き散らし、宛らミサイルの如く天空へと昇り行くAC達。

目指すは高度2000メートル。

順調に高度を上げるAC達であったが、案の定レーザーの洗礼を受ける事になった。

幸か不幸か真っ先に狙われたのは、飛鳥を収納する再突入殻だった。

重光線級の放った高出力レーザーが、再突入殻を照射し容赦なく焼いてゆく。

実は再突入殻の信頼度は91%と言われており、100機中9機が何も出来ぬままレーザーの餌食になると言う。

故にこの再突入殻は、棺桶とも比喻されていた。

『——不味い！飛鳥がっ、オートパージはッ……機能しないかつ！』

『焦るなユウキ、此方から信号を送り、遠隔操作で強制解除させる！』
一応、目標高度に到達する前に照射を受けたとしても自動でパージされる機能は有していた。

しかし、確実に機能するとは限らず、いつの世でも不測の事態は発生するものだ。

当然オペレーター側からも、飛鳥の様子はリアルタイムでモニタリングされており、彼が真っ先にレーザー照射を受けている事は把握していた。

だが自動解除は機能不全で、焦るユウキを余所にスミカが強制解除の信号を飛鳥へと送信した。

『……強制解除、機能せず……！』

『——ちっ！オーメル共め、不良品を寄越しやがっつてっ！』

信号を何度も送信し強制解除を試みるものの、再突入殻は微動だにせずレーザーに照射され続けていた。

今の所何とか耐えていられるのは、AL弾の重金属粒子雲が機能しているからだ。

自然状況下でレーザーが放たれていれば、とっくに爆散していただろう。

『クソつたれ！反応が無いっ！』

『飛鳥、飛鳥あつ！聞こえるかつ！中から何とかして脱出しろ！内部温度が危険域に上昇している！』

『——もうやっつてますっ！ええいクソつ、やたらと頑丈だ、このカーゴブロック!!』

数秒とはいえ重光線級のレーザーに長時間晒され、殻の外装部分は赤熱化し、それに伴う高温は内部にも影響を及ぼしていた。

飛鳥とて他力本願で静観していた訳ではなく、内部から脱出を試みていたが殻の対弾性、耐熱性の構造が完全に裏目となりビクともしない。

「——だ、駄目だっ、爆発する……!」

既に内部で小規模の爆発が至る所で発生し、爆散は時間の問題となっていた。

——が、その時である。

偶然の産物か運命が味方したのか、レーザーが殻のロックユニットを焼き切り、自動解除プログラムが作動。

再突入殻は爆散と同時に分離し、損傷は有るもののロケットブースターが点火する事で、ACよりも先に地上へ向け落下を開始した。

当然、分離した再突入殻もレーザーに晒されるが、底面部分は特に対光学兵器を重視して造られている。

更に粒子雲で、減衰したレーザーに耐えながら地表へと落下を続けた。

「……な…なんとか、助かったっ……!」

爆発に巻き込まれ若干の損傷はあれど、戦闘そのものに何ら支障はなく、取り敢えずは安堵した飛鳥。

『——おいつ!無事なのか?!』

「何とか生きてます!これより降下を開始します!」

『……ふう…、ヒヤッとしたぜ……』

爆散の映像はオペレーター側にも届いていた為、最悪の状況を覚悟していたが、飛鳥の無事を確認しユウキは大きく息を吐く。

『オーメルめ…ミッションが終わったら覚えていろよっ……!』

不良品を掴まされた事に、スミカは静かながら激しい怒りを顕わにしていた。

(推奨BGM Armored Core3 — Artifical Sky III)

予定の高度には到達出来なかったが、何とか再突入殻から分離に成功しAC『白天翼』は、ブースターを吹かしながら自由落下の速度を上乗せし、地表へと高速落下を開始。

AL弾の効果は未だ残ってはいたが下手に上空に留まれば、再度光線級の的になるのは自明の理。

——！っ来るっ！

異様な圧迫感を感じ取り、再度スラスターを吹かし機体を横方向へ僅かにズラす。

すると、間も無くして高出力のレーザーが横を通り過ぎた。

そして後から鳴り響く、熱源接近の警報。

「——ポンコツめ！役に立ってないじゃないかっ！」

この作戦に合わせて、オーメル陣営からレーザー回避プログラムが支給されていた。

しかし、その精度は見ての通り、お察しの水準である。

飛鳥はレーザー回避プログラムを停止させ、自分の勘を信じる事にした。

そもそもレーザーに撃たれてからプログラムが作動しているようでは、只の重荷にしかないのだ。

その後も次々と感じ取る不快な圧迫感——。

飛鳥はその圧を信じ、機体の姿勢を捻り、小刻みにブースターで軸移動し、ハイブーストで射線を外しながら、絶え間なく雪崩れ込んで来るレーザーの嵐を悉く躲す。

とは言え、数百を超える全てのレーザーを全弾回避出来る訳にはいかず、一、二発は、接触を許す事になった。

尤も、それ等は全て支給された追加装甲^盾で遮断したが。

幾ら高出力とは言え、初期照射の間に照射地点をズラしながら回避行動を執れば、十分に凌ぐ事が出来た。

元々は戦術歩行戦闘機の為の防御兵装であったが、オーメルが独自に改良を施し対光学処理を上昇させた代物であった。

——と言った処で偽りの善意、実験の意味合いも兼ね死んだ処で、

大した痛手とはならない傭兵に支給する事で、運用データを取ろうとする企業連独特の思惑が働いてはいるのだが。

「——よし！もう直ぐ地表だっ！」

高度200メートルを切り、夥しいレーザーも殆ど殺到する事は無くなった。

ACより先んじて落下した再突入殻の残骸は、幾つかのBETAを押し潰し損害を与え、その役割を果たしていた。

——あの個体種、確か『要撃級』と言ったか？

飛鳥はツルハシ状の腕部と歯を喰いしばったかの様な尾を持つBETAに、狙いを定める。

そしてそのまま自由落下に任せ、盾の先端部を要撃級の背に突き刺した。

要撃級の背は盾の先端部に深く食い込み、赤い体液を撒き散らしながらACを振り解こうと暴れ狂う。

この盾は先端部を尖らせる事で、打突兵器としての機能も付加されていた。

BETAとの大群と真正面からぶつかり合う事を想定しての配慮だった。

「——大人しくしろっ！」

飛鳥は、もう片方に装着されている『WS-16C』を顔に似た尾節部分に弾丸を3点射。スリパーリスト

続いて盾を引き抜き、その傷口に向け弾丸を2発叩き込み『要撃級』を沈黙させた。

——顔に似た部分、確か感覚を司る器官だったか。一応それだけでも破壊すれば、戦闘力を大きく減衰させる事は可能か。

主目的はあくまで光線級だが、進軍に脅威となる個体種は状況が許す限りで倒せばいい。

たとえ確殺に至らずとも、後続の友軍機や砲撃が止めを刺してくれるだろう。

直ぐ其処までBETAが群れを成して此方に殺到している。

十中八九、標的は彼とACだろう事は間違いない。

飛鳥は小ジャンプで無力化した要撃級から離れ、只管に光線級の陣取る陣地を目指す事にした。

飛鳥の上空では、先程から機体が爆散する音と分離した再突入殻が落下し、周囲のBETAを押し潰す様が見て取れた。

恐らく哀れにも空中でレーザーの餌食となった友軍機、そして分離を終えた友軍機が入り混じっているのだろう。

彼等への意識を必要最小限に留め、突撃級、要撃級に飛び乗りながら上方、或いは後方側面から、BETAの戦闘力を次々と消失させた。

止めには至っていないが、弾薬も無限ではない。

最悪攻撃力や機動力さえ奪えば、後続の味方が止めを刺してくれる。

現に降下を成功させたAC達が順次、BETAとの戦闘を繰り広げていた。

皆状況を理解しているのか一路、光線級の方へと向かおうとしている。

光線級の陣地へはまだまだ距離があり、一気に飛行したい処だが下手に高度を上げる事は出来ない。

現在AC『白天翼』が装備している突撃砲は、WS-16Cにロングバレルを装着した本来狙撃や支援に威力を発揮するタイプだ。

しかし飛鳥は長砲身が齎す弾道安定化による威力上昇に目を付け、これをACのライフルに見立て運用していた。

威力が上がれば結果的に弾薬の節約にも繋がり、大群を相手にする状況では経戦能力が重視される。

一応、弾薬補給の為にコンテナが投下される事は作戦説明で聞いていたが、この乱戦状況では真面に補給する事は容易では無いだろう。

飛鳥の得意とする距離は近距離と中距離戦ではあったが、ロングバレル化を施したこの突撃砲は、彼にとって都合が良かったのだった。

貫通力を増した銃で急所さえ射抜けば、『戦車級』なら一撃で仕留める事が出来る。

飛鳥はジャンプ攻撃と小刻みなブースト機動を織り交ぜながら、殆ど脚部を地に着ける事無く単発でBETAを仕留めてゆく。

戦況は佳境を迎えようとしていた。

機体アセンブル

頭部：CR|YH70S2

胴体部：CR|C75U2

腕部：A01|GALAGO

脚部：LH01|LYNX

ジェネレーター：CR|G91

ブースター：CR|B81

ラジエーター：CR|R76

FCS：MF03|VOLUTE2

右手武装：WS|16C

左手武装：追加装甲防盾・オメル仕様（CR|YWH05R3は盾にマウント）

右背部武装：CR|WB69RA

左背部武装：CR|WB69M

左格納武装：WL01LB|ELF

クレイドル

超巨大航空機。

リンクス戦争によりコジマ粒子で汚染された地上から避難するために建造された居住用の高空プラットフォームである。

高度7000m（アサルト・セルの影響を受けない限界高度）を半永久的に飛び続けるようで、その構造から地上への着陸は想定されていないと見られる。

GA製とインテリオル製のものがあり、それぞれ企業ごとに航行ルートが制定されている。また他の企業はどちらからレンタルしており、企業連の盟主たるオーメルもその例に漏れない。

エネルギー供給を地上からの送電設備アルテリアに完全依存した設計であるため、飛行ルートはアルテリアのエネルギー供給可能範囲内を辿るような形になる。

また、アルテリアに何らかの障害が発生するなどした場合には、基幹インフラに相当の影響が出る。

企業連設立時の時代では、人類の過半数がこのクレイドルに移り住んでいる。

また、企業の要人は有澤隆文等の例外を除いた殆どがこちらに住んでおり、この時代の企業支配体制を指す言葉でもある。

ただし、クレイドル間での移動は、“一旦地上に降りてから別のクレイドルに飛び立つ”という手法がとられており、自ずとクレイドル同士での交流はかなり少ないようである。

中央ブロックにはアルテリアからエネルギーを受け取る受信板がある。

(詳しくはwikiってくだちー) (。▽。)

第3話―オームル、光線級漸減作戦2（二人の少女）―

国家解体戦争

人口爆発による食料不足。

エネルギー資源の慢性的な不足。

国家はその統治能力を失い

頻発するテロや暴動が相次ぎ

それに対応するため軍隊は高度に機械化され

国家に兵器を供給する企業は徐々に力を付け

いくつかの企業が強力な軍産複合体を形成し

その影響力を次第に強めていった。

そして遂に経済システムの存亡の危機に陥る程に国家は破綻し始めていた。

新たなる統治体制の確立を目指し、その時実質最高権力として存在していたのが、巨大軍需産業複合体でもある企業であった。

巨大企業は幾つものグループを形成し、国家政府に見切りを付け、全世界に対し宣戦布告を宣言。

人はその戦争を

―― 国家解体戦争 ――
と言う。

国家解体戦争は企業側の一方的な奇襲から始まり、企業側の戦力は30機にも満たない新型ACを主力としたものだったが、その新型アーマード・コア・ネクストは国家側の全ての兵器を敵に回しても、それ等を圧倒した。

コジマ粒子と呼ばれる新物質を軍事転用し、最新技術を盛り込んだACネクストの前に、国家側の主力である従来のACは成す術もなく

敗北し、開戦から一ヶ月で企業側の圧倒的勝利で国家解体戦争は終結した。

そして始まる——パックスエコノミカ。

利権、利益、収益、合理、排除、其処に聖も邪も無く、唯々肥え太るのみ。

心を壊し、精神を置き去りにし、活きるのではなく生かされる。

何時しか諦観し、壊死した魂。

最早人類など、何処にも存在していなかった。

(推奨) BGM Armored Core 4 — Sound You Smash)

『ミサイル、命中を確認!』

『範囲内のBETA、要撃級92、突撃級807、消失!』

『しかし光線級、尚も健在! レーザーによる脅威度変わらず!』

矢継ぎ早に送られて来る報告の数々。

通常砲撃に加え、多弾頭ミサイルや大型ミサイルが着弾し、範囲内のBETAは粉碎されていた。

だが、肝心の光線級には影響が及んでおらず、未だ多くが健在だった。

試しに広範囲を狙った砲撃で、しらみつぶしに光線級の破壊を試みるも、精々餌食となったのは僅か数匹と数えるほどだ。

既に全突入部隊は射出済みだ。

VLSに現在搭載されているのは、ACや戦術機ではなく通常のミサイル兵装である。

「もし突入部隊が失敗するようであれば、最終段階を強行するしかない……」

指揮官は、第一ブリッジ内で一人呟く。

専用のモニターには、レーザーで捕らえた敵味方のアイコンが乱立していた。

突入部隊は奮戦しながらも、光線級が居ると思わしき場所を目指している様だが、未だに肉薄出来ていないのか、それ等の趣旨の報告は上がっていない。

砲撃で再び畳み掛けても良かったが、正確な位置が掴めない以上、効果の程は定かではない。

光線級はレーザーを放つ際、桁外れの高熱を放出し上昇気流と重金属粒子が混ざり合い、レーザークラウド光線属種積乱雲と呼ばれる特殊な雲が発生する。

その雲を目安に砲撃を行っているのだが、決定打には今一つ欠けていた。

更なる精密な位置情報が必須となる。

光線級に接敵した機体が、何らかのアクションを起こしてくれば、直ぐにでも傍受できるのだが。

弾薬とて無限ではないのだ。

レーザーの発射位置を特定出来ればいいのだが、その為には航空機を飛ばし、空中から観測する必要があった。

しかし闇雲に飛ばせば、レーザーに即撃墜されてしまうのだ。

もし突入部隊が壊滅しようものなら、切り札であるアームズフォート『カブラカン』で強襲を掛ける算段でいた。

カブラカンの外部装甲は、アームズフォート内でも屈指の装甲厚で非常に強固だ。

その防御性能は、ACネクストの火力を以てしても、容易に破壊出来るものではなく、重光線級の高出力レーザーにも約15分は耐え得ると言われている。

カブラカンを前面に展開し、その脇をMTやACで固め、全軍で突撃を敢行。

それはカブラカン前面に装着されている、チエーンソーとローラーユニットで“地ならし”を行いながら、MT、AC部隊による一斉射

撃で駆逐すると言うのが作戦の最終段階であった。

『混成突入部隊の被害、30%を超えました！AC3、戦術機4、共に喪失！』

突入部隊は被害を被るも、光線級に到達している機体は未だ皆無であった。

「……」

表情には出さないものの、指揮官は次第に焦りを滲ませ始めていた。

跳躍ユニットから推進力を得、機体は高速移動で地表すれすれを駆け抜ける。

数えるのも辟易する程に夥しいBETA群が迫り来るも、突撃砲から放たれる36ミリ弾はBETAを挽肉と変えてゆく。

『イーダルーより各機へ、本機に続け！』

ソ連軍に籍を置く戦術機で編成された小隊だ。

その隊長機は、軽快な動きでBETA戦車級の間を擦り抜け、同時に突撃砲で仕留める。

『「——了解——」』

その隊長機に呼応し、部下達が追従しながら次々とBETAを駆逐していた。

——思った以上に、距離が開いているな。光線族種はまだか！

イーダルーというコールサインを名乗った戦術機の衛士、クリスカ
||ビャーチエノワもまた焦りを滲ませていた。

同行していた別の戦術機一個小隊は、BETAにより壊滅していた。

残存するソ連軍所属の突入部隊は、8機。

加えて8機居たACも残り5機となっている。

可能な限り、BETA群との戦闘は最小限に留めていたが、想定以上に壁は厚かった。

だが彼女の焦る最大の原因は、そこではない。

彼女の意識は、寧ろ更なる前方に注がれている。

濃密なBETA群の壁を隔て、数機の人型兵器が奮戦を繰り広げていた。

時折彼女の視界に映る、白い人型兵器――。

――必要最小限にブースターを吹かし、BETA『要撃級』の頭上に飛び乗り、数発弾丸を発射。

歯を喰いしばった顔部に酷似した感覚器官を粉碎し、すぐさま盾を要撃級へと突き刺す。

透かさず盾を引き抜きつつ、その傷口へと弾丸を2発ダブルタツプ。

絶命したかどうかは疑わしいが、戦闘力は著しく低下した筈だ。

だがそれを、一々確認している時間はない。

その白い機体、AC『白天翼』は撃ち終わつたと同時に跳躍し、次のBETAに飛び乗り再び、上方からのトップアタックを繰り返す。

飛び乗っては撃ち、撃ち終わっては飛び移る。

カエル飛びの様な動作を繰り返しながら、白いACは次々と『要撃級』を無力化させつつも、光線級へと接近して行く。

要撃級は高い防御力と高い旋回能力を有し、真正面からの交戦は得策ではない。

だが要撃級に手間取れば、その隙を突かれ突撃級や戦車級の奇襲を受ける事も多々ある故に、その脅威度は跳ね上がる。

先程壊滅した戦術機一個小隊も、要撃級に時間を割かれ横腹の奇襲を許した為に餌食となった。

要撃級のみが少数なら何の問題も無いのだが、多数且つ別の個体種をも入り交ぜた密集突撃戦術。

どうしても進軍速度が滞ってしまう。

AC達は業を煮やしたのか忍耐が欠如していたのか、堪らず空中を飛翔したが、故にレーザーの餌食となり爆散するか墜落し、そこを突撃級に押し潰され或いは戦車級に貪り食われていった。

既に飛翔高度150メートル以下でも、レーザーが飛来し始めている。

ますます空中からの攻撃は困難となっていた。

逆を正せば、光線級に近付きつつあるという裏返しでもあるのだが。

『何を手間取っているイーダルー！あの白いACに続け！』

「——イーダルー、了解！」

コックピットに響く、上官からの叱責。

——我ら誇り高きソ連軍が、あんな薄汚い傭兵に劣るといふのか！
クリスカ焦燥の原因——。

その真の要因が、白いACであった。

白いACの執った戦術により、要撃級はほぼ無力化され容易に止めを刺せた。

前面の防御力に長けた『突撃級』の存在があつたが、それ等の大半は最前衛を担いアームズフォートへと殺到している。

したがって残る脅威は『戦車級』となるのだが如何せん数が多く、仕留めた死骸が障害物となり進軍速度が遅れていたのも一つの原因だろう。

しかし、白いACの後に続けば他のルートに比べ、遙かに進撃は楽であつた。

現に、生き残った他の突入部隊も白いACに追従しつつある。

AC『白天翼』は要撃級を無力化させ、小ジャンプで跳躍——。

「——っ!？」

刹那、彼の機体目掛けて数束のレーザーが襲い掛かった。

咄嗟に盾受けで凌ぎ、間髪入れずに受け角度をズラしながらハイブーストで位置を変える。

——この高度で撃たれた!？

戦術高度は60メートルを切っていた。

『飛鳥！その戦法はもう使えんが、目標は近いぞ！気を入れ直せっ！』
「——了っ!？」

オペレーターのスマカから通信が入り、モニターに移ったマーカーを確認する。

機体背部ユニットに装備されたレーダーユニットは、光線級の座標を補足しており漸く主目標が近い事を悟った。

——ここからが正念場だっ！

飛鳥はブースターを吹かし滑る様に地表を突進。

其処へまたもや新たな要撃級が立ち塞がるが、飛鳥はすぐさま射撃で器官部を優先して破壊する。

「歯茎みたいなのは、感覚器官だという事は知っている！」

尾節部分を破壊した後、左右小刻みに蛇行しながら接近。

そのACに目掛けて多数の戦車級が殺到するが、必要最小限の単射で戦車級の顎部分のみを狙い撃ちにした。

飛鳥自身、起動しながらの単発射撃で急所を射抜くだけの技術は有している。

戦車級の恐ろしさは、何と言っても強力な顎で得物を捕食する事にある。

その咬筋力は、戦術機は無論ACの装甲さえ噛み砕いた。

だが、その顎さえ無力化させれば、例え生きていようと攻撃力は激減し、人型兵器の敵ではない。

それ故、止めは後続の部隊にでも任せておけば良いのだ。

そして死骸の間を擦り抜ける様に要撃級の脇を抜けようとするも、主力武器である前腕部を振り翳しACを叩き潰さんと迫る。

「——それを待っていた！」

予測していたのか、前方にハイブーストと大地を蹴る事で更に加速——。

(推奨BGM Armored Core4——Speed)

見事、要撃級の前腕部は空振りに終わり、感覚器官を破壊された要撃級は旋回対応力が著しく低下していた。

飛鳥のACは振り返る事も無く、擦れ違いざまに後方へ向けて要撃級へと三点射。スリーバースト

要撃級はACの動きに対応し切れず、後方部分は脆いのか敢え無く絶命する。

前進を続けながら、更に殺到する戦車級を避け、迎え撃ち、狙い撃ち、凌ぎつつ、遂に目標の光線級を視認する事に成功する。

「——見えたっ！」

待ちかねた主目的との遭遇。
随分手こずらされたものだ。

思わず意識が高揚し、操縦桿を握る手に力が籠る。

——その時である。

「!!!」

突如来る圧迫感——。

間髪入れずに襲い来る、光の洗礼——。

反射的に地を蹴り、ショートステップでレーザーを躲す。

——クソっ！簡単に撃たせてはくれないか！

目視できるという事は、BETA側も射線を確認できていると言う
事実——。

ここ迄近付けば、地上であろうと空中であろうと問答無用にレ
ザーに晒されるという事だ。

そして間断なく迫り来る、多数のレーザー群。

レーザー攻撃は止む事なく、ACを容赦なく責め立てる。

今のブースター速度を止める事無く続ければ、被弾する事は無いだ
ろう。

しかし、何れはエネルギー切れを起こし、その隙を突かれるのは明
白であった。

ブーストエネルギーを節約しつつ、ステップ移動と壁蹴りブーストドライブ（この
場合は地面を深く蹴り込む）で何とか敵射線を避けつつ回避を続けて
いるが、飛鳥自身は只の人間だ。

永続的に集中力が続く訳ではない。

「——なんてこったッ、どうするっ!?!」

このままではじり貧だ。

焦りが彼の感情を支配しようとした、その時である。

『——飛鳥！訓練を思い出せ！何の為に、回避と反撃の一体化を教え
たと思ってるんだっ!』

「——ユウキさんっ……!」

唐突に寄せられたユウキからの通信。

今日に至るまで何度も繰り返した、回避と反撃の一体化。

文字通り回避機動を取りながら反撃を見舞うという、単純な戦法だが言うほど易い技術ではない。

状況にもよるが、高い技術と集中力を要し、慣れと習熟した練度も要求される。

また自分と敵との相対速度が高まれば、その難度は際限なく上昇しようというもの。

回避だけでも地形把握、空間認識力が必要となり、周囲が入り組んだ地形なら尚更だ。

光線級の動作自体も素早く、当然敵も動き位置を変える。

それに伴い、狙いながら反撃を見舞うのにも、極めて高い技量を要するのだ。

その相乗効果は神経を凄まじい早さで摩耗させ、心身共に負担を強いるだろう。

だが、それに見合うだけの効果を齎してくれる。

回避と反撃の一体化が実現できれば、無駄な動きを省略し最小限の動作で攻撃を加える事が可能だ。

そして現に、飛鳥は撃たれ続けている。

光線級、重光線級のレーザー攻撃は照射時間に限りがあり、次の照射までには幾許かの時間を必要とし、その間は無防備となる。

しかし、それはBETA自身も自覚しているらしく、その弱点を補うかのように他の光線級が間隙を埋めるのである。

故に照射された側は、切れ目なくレーザーの波に晒され、直接に光線級を殲滅するには極めて高い技量を必要とするのだ。

更に光線級のレーザー照射の命中率は尋常ならざる精度を誇り、飛来する空中物体を正確に撃ち落とす。

また高出力故に射程距離も長大だ。

現に、衛星軌道に陣取っていた『アサルトセル』を消滅させたのも、BETA光線級の仕業である。

光線級の存在は戦争の概念すら覆し、航空戦術の消失を意味していた。

尤も光線級の殲滅は、空爆や長距離砲撃などの優位性を復活させる

要因とも言え、非常に重要な戦略的意味合いを持つ。

だからこそ光線級殲滅は、世界のあらゆる組織が連合を組み、多大な犠牲や物資を消耗してでも達成する価値があった。

——ブーストエネルギーも4分の1を切った、何処か身を隠せる場所はあるか!?!

絶え間なくレーザー攻撃を受け、節約を交えたブースト移動で回避運動に専念するも、限界が近い。

回避と反撃の一体化も訓練では何度も実践していたが、いざ本番となると区切りと仕切り直しが必要となる。

まだ飛鳥自身、瞬時にそれに切り替えられる程、習熟してはいなかった。

『——お前から見て9時の方角に岩場がある、其処で一旦呼吸を整えろ!ただし10秒が限度だ、精々なっ!』

スミカからの通信で、近くにやや大き目の岩場の存在を告げられ、飛鳥は間髪入れずに機体を移動させ一時身を隠す事に成功した。

「ふう…、はあ…、助かった…」

岩場は、AC全体を覆う程の高さがあり、岩盤もそれなりに分厚く多少は凌げるだろう。

その間、飛鳥は呼吸を整え、既に融解寸前となっていた盾を投棄する事にする。

AC本来の左手用のライフルは、盾内側に担架させていた。

まずは右手に装備していた『WS-16C』のマガジンを交換。

殆ど単発射撃で並み居るBETAを仕留めてきたが、それでも残弾数は500を切っていた。

多少の余裕はあったが、此処で弾倉マガジンを交換するには打って付けのタイミングと言えよう。

その後、盾を岩場に置きマウントさせていた左手用ライフル『CRYWH-05R3』を装備する。

『気を付けろ!光線級の野郎、岩ごとお前を焼く気だ!あと5秒っ!』

「——5秒もあれば充分!いつでも行けますっ!」

スミカからの通信で、光線級のレーザーが岩盤を溶かし、岩場諸共

A Cを焼かんとしていた。

だが、僅かな時間にブーストエネルギーのチャージは完了し、機体温度も安全圏に戻っている。

既に呼吸は整い、準備は完了した。

『残り3…2…1…行けっ！』

スミカのカウントダウンを合図に、A Cは瞬時に飛び出すと同時に赤熱化した岩場は溶け崩れ瓦解する。

「照準よし…今っ！」

掛け声と共に光線級に向かって射撃。

今度は突撃砲を連射で弾幕を張りつつ、左手のライフルで別地点の光線級を複数貫いた。

「先ずは8…おっとっ！」

突撃砲で5、ライフルで3体仕留めるが、別方向からのレーザーが彼を襲う。

しかし、例の圧迫感で事前に察知出来ていた為、機体の上半身を捻る事でレーザーを回避し同時にその射撃地点へと応射。

そして位置を変えつつ的確を絞らせぬよう配慮しながらの移動射撃で、その地点の光線級4体を仕留める。

こうして次々と光線級を仕留め続け、かれこれ50体を仕留めた辺りである。

「味方機はどうしたんだ？…まさかっ…!？」

戦闘に意識が向いていた為、此処で友軍機が到達していない事に気付く。

——既に全滅しているか最悪…僕は見捨てられたか…!…！
企業連のやり方は良く知っている。

他陣営は無論の事、必要とあらば自勢力すら見捨てる事も躊躇わない。

だがそんな推察を許してくれる程、BETAも甘くはない。

更に別方向からのレーザーが彼を襲い、その方角から多数の戦車級と突撃級の混成部隊が迫りつつあった。

「新手の光線級まで少し遠いが、やるしかないか！」

此方の有効射程外からの狙撃で、またもや移動する必要に迫られる。

手間は掛かるが自ら肉薄し殲滅に動かなければ、待っているのは死あるのみだ。

飛鳥はフットペダルを踏み込みブースト出力上げようとした、その時である。

「——っ!？」

突如として、後方から複数の噴射炎が通り過ぎた。

——ミサイルっ!？」

小型のミサイルが6発、後方から飛来し前方のBETA群を爆散させる。

そして立て続けに後方から姿を見せた、黒い機体。

「AC……」

その機体見た飛鳥は微かに声を漏らす。

それは黒いACハイエンドノーマルで、やや細身のパーツで組み立てられていた機体であった。

『小僧……加勢してやる』

「——!？」

間髪入れずに割り込んできた通信。

静寂ながらも、底に響くかの如き男の声。

言い様の無い迫力に満ち溢れていた。

何者なのか訊ねる暇もなく、黒いACは加速し、ブースター機動で残りのBETA群を瞬く間に殲滅。

そして一呼吸置く事なく、先に居るであろう光線級へと向かい飛び去った。

「……。今のAC……一体……」

飛鳥は呆然とACの向かった方角へと頭部カメラを向ける。

『高機動型だな、あのアセンブル』

「ユウキさん。高機動型という事は、それだけで手練れという事です
よ」

飛鳥のAC白天翼よりも遙かに高速で飛び立ち、向かい来るレー

ザーを息をするかの如く躲しながら、一切無駄を省いた機動で去って行った。

僅か数秒にも満たない動作ではあったが、AC、レイヴン共に、今の自分より遙かに優れた練度を誇っていた。

もし敵対するような事態に陥れば、今の自分では瞬時に殺されてしまおうだろう。

『——こちらイーダルー！その白いのっ、いつまでボサっとしている！良い身分だな!?!』

「——!?!」

そこへ耳を劈く様な声が割り込んで来た。

若い少女の声の様だ。

声の方角へ頭部カメラを向けると、ソ連軍所属の戦術歩行戦闘機が4機立ち並んでいた。

(推奨BGM Muv-Luv Alternative——Platoon Advance!)

『フンッ！多少出来るかと思っただが、こんな所で油を売るとはな。戦場を無礼^ナているのか!?!』

尚も容赦なく侮蔑の言葉を投げ掛ける少女。

「……………」

飛鳥は無言で、その機体を見据えるのみだった。

『何とか言ったらどうなんだ?!』

「……………」

『……まあいいっ、死にたくなければ我々と共に来いっ！装備している武器は、支援突撃砲だろう』

少女の言葉に、飛鳥は右手用の武器『WS-16C』に視線を向ける。

それはロングバレル化が施され、射程距離と命中精度を引き上げ本来は支援用として運用される。

『貴様是我々の後方に就き、ラッシュ・ガード打撃支援として動け、いいなっ!』

飛鳥本人の了承を待つ事なく勝手に話が進められ、自身は急いでスミカへと通信を送る、無論秘匿回線で。

『こちらとしては戦術機とやらの情報も欲しいのでな、面白い。生意気なお嬢さん方に証明して見せるといい、お前の有用性をな』

「そういう事なら」

スミカのお許しを得、飛鳥は『イーダルー』を名乗る少女に“了”とだけ答え、彼女等と歩調を合わせる事にした。

それは彼女本名ではなく、恐らくコールサインである事位は理解出来ていた。

飛鳥本人としては、先程の黒いACがどうしても気になるのだが、今は光線級を討つ事が先決だ。

此処は彼女等と共闘し、効率化を図るべきだろう。

些か腑に落ちない部分もあるが、飛鳥は戦術機部隊と行動を共にする。

「コールサインはいいの、クリスカ？」

前部座席のイーニアが、飛鳥のコールサインが設定されていない事に疑念を抱く。

「どうせ短い付き合いだ。精々『白いの』で事足りる、さあ行くぞー！」

「……」

——さっきまで暖かい橙色が、冷たい透明になっちゃった。

イーニアは後方にいる飛鳥に独特の感性で、意識を向ける。

即席だが、ACを加えた戦術機との共同戦線。

進軍を再開し、そう時間を置く事なくBETAの一群が迫り来る。

(推奨BGM Muv-Luv Alternative——血を欲する戦場)

「各自、一斉しゃげっ——おいっ!？」

小隊長を務めるクリスカが指示を出す前に、最後尾からの射撃——

その犯人は、言わずもがな。

BETAの来襲を誰よりも逸早く察知していたのは、飛鳥であった。

クリスカの指示を待たず、瞬時に反応。

『WS-16C』で多数押し寄せる戦車級の顎部分を破壊し、『CRY

WH-05R3』で突撃級の脚元をを迎撃し摺り寄せ、仕留め切れな
いまでも出鼻を挫いた。

『——どう言うつもりだ、白いのっ!』

コックピットに、クリスカの過剰な音量が響き渡る。

思わず耳を塞ぎたくなる衝動を抑えながらも、飛鳥は射撃を継続し
独りBETAを迎撃していた。

『こんな奴等に、構っている暇は無い。今の内に間を擦り抜け『光線
級』を目指すべきだ!』

飛鳥自身の弾薬はまだまだ余裕はあったが、彼女ら小隊の残弾数が
どれ程かは正直疑わしい。

肝心の光線級に接敵した時、いざ弾切れでは笑い話にもならない。

可能な限り消耗を抑え、主目的である『光線級』を討つべきと、飛
鳥は進言する。

『——言われる迄も無い、全機私に続け!』

——傭兵風情がっ!

苛立ちを露にしつつも、クリスカは小隊各機に指示を飛ばしBETA
A群の間を器用に擦り抜けながら、光線級の陣地を目指す。

その間も、小規模なBETA群が立ち塞がるが、連携を駆使し進軍
速度を緩める事なくBETAを駆逐してゆく。

そして目標である、光線級集団の反応をレーダーが捕らえた。

『よし、捉えたぞっ!各機、攻撃かい!——色が来た!『圧が来るぞ!!』
——』

漸く主目標である光線級を補足し、攻撃に移ろうとする最中、不意
にイーニアと飛鳥の怒号が飛んで来た。

『——っ!?ぜ、全機散開っ!』

クリスカは殆ど本能で、散開指示を飛ばし回避行動を促す。

それとほぼ同時に陣形を組んでいた地点は、レーザーの嵐が過ぎ
去ってゆく。

解明したい疑念は幾つも有る。

しかし、此処で反撃を躊躇している暇は無く、クリスカは小隊に反
撃を指示し光線級の漸減に移った。

ソ連製戦術機『Su-27ジュラーブリク』で編成された小隊は、一斉に射撃を開始。

一機につき、両腕と担架ユニットの副腕部分サブアームを駆使した、合計4門の36ミリ突撃砲の弾幕射撃。

それが4機合わさり、計16門から濃密な弾幕が繰り出された。

弾丸の雪崩は、並み居る光線級を片っ端から肉片へと変え、36ミリ弾は容赦なくBETA群の体組織に抉り込み破壊する。

無論、飛鳥のACも射撃に参加し、イーダル小隊全機は濃密な連射を形成しつつ射線を変えながら、光線級を含むBETA群を殲滅してゆく。

——それにしてもさっきの通信、イーニアと同時に叫んだあの白い奴。レーザー射撃を予測したとでもいうのか？

小隊の弾幕射撃で光線級は確実に数を減少させ、多少の余裕が生まれたのかクリスカは先程の通信を思い返していた。

光線級の放つレーザーは当然光速で、視認してからの回避など事実上不可能。

回避するには事前に予測するか、センサーやOSで回避プログラムに頼り自動回避させるのが定石であった。

だがクリスカの相方であるイーニアは特殊な出自を持ち、レーザー攻撃を事前に『色』というイメージで察知する事が出来る。

故に、回避プログラム以上の精度で、レーザー攻撃を予測し回避する事が出来た。

そして先程のレーザー回避も、イーニアの察知により普段通り成功した訳だが、彼女の警告と同時に飛鳥の通信も割り込んで来たのである。

その言葉は、イーニアとは違い『色』ではなく『圧』という、特殊な単語で。

——……まさか……な。

イーニアと同じ能力を、よもやあんな傭兵如きが？

あり得ない事だ。

改めて頭の中で湧いた疑念を否定し、クリスカは意識を戦闘に傾け

た。

損耗しつつも、他のACや戦術機も追い付き、光線級は確実に数を減らす。

順調に戦線は押し上げられ、光線級の数は残り僅かとなりつつあった。

その時である。

『な、なんだ!?このデカイのはっ!?』

別のACから聞こえて来た通信。

残存する光線級は、20前後となった処で突如立ち塞がった巨大な体躯のBETA。

『どうとうお出ましか、要塞級!』フォート級

「あれが、ブリーフィングで説明していた……」

クリスカの声に、飛鳥も反応しデーターベースを回覧した。

全高約60メートルを超え、複数の脚付近には光線級が複数、寄り添うように隠れていた。

『気を付けろ!尾節先端部分には、衝角腕が内包され接触と同時に強酸を噴出させるぞ!』

「酸……か」

クリスカの説明に、飛鳥は秘かな戦慄を覚える。

ACの装甲は対弾性耐熱性には長けているが、強酸と云った液体に対しては殆ど考慮されていない。

だが、脅威なのは酸だけではない。

鉤爪状の衝角先端部は、モース硬度15以上の高度を誇り、生半可な装甲は容易に貫通させる程の威力を有している。

万が一コックピットに触手が到達し、酸でも噴射されようものなら、結果は最早語る迄も無いだろう。

また要塞級は防御力にも優れ、弱点と言えば三胴部分を形成している継ぎ目ぐらいしか見当たらない。

——最初だ!初撃さえ見切れば、何とかか!

余り悠長に構っている時間はないが、先ずは最大の武器である衝角腕さえ破壊出来れば、自ずと勝機は見えてくるだろう。

「触手の最大射程は？」

『……50メートルだ。どうする気だ……？』

触手の射程距離の情報を聞き出し、飛鳥は単機前へと踏み出した。「光線級が顔を出したら、直ぐに撃破してくれ。僕は触手の集中だけで手一杯だ！」

『止せ！自殺行為だ！』

飛鳥の提案など到底承諾できるものではなく、クリスカは直ちに制止を呼び掛けるが、飛鳥本人は行動を変えようとする気はない。

「……案外優しいんだな。僕が死んだ処でそっちには大した痛手にはないだろうに……！」

『——なっ!?!／／／』

軽口半分、本音半分で、飛鳥はクリスカに語り掛ける。改めて言われればそうだ。

所属も志も何もかもが違う見知らぬ傭兵が一人居なくなった処で、クリスカ率いる小隊には何の痛手にもならないのだ。

飛鳥に凶星を突かれ、クリスカは面食らいながらも僅かに顔を朱に染める。

『／／／ちっ！勝手に死ぬ！／／／……イーダール1より各機へ、光線級が射線に入り次第即時撃破、良いな！』

『——了解！』

顔を紅潮させ悪態を付きながらも、飛鳥を援護する為に部下へと指示を飛ばす。

飛鳥は意識を研ぎ澄ませ、歩行移動で要塞級へと距離を詰める。

——60メートル：55メートル：51メートル……。

距離を詰めるに従い、呼吸が荒くなり鼓動が速くなる。

——50……46……この圧っ!!

45メートルを切った瞬間、要塞級の尾節から瞬時に赤い衝角腕が射出された。

脳裏を過る押し潰す様な強い圧迫感——。

飛鳥は反射的に機体の上半身を傾け、鉤爪状の先端部はAC頭部を擦り抜けた。

「——今っ！」

先端部を繋ぐ紐状の体組織は非常に柔らかくしなやかで、飛鳥のA Cは太い触手部分を右腕部へと巻き付ける。

「——即撃っっ！」

要塞級のサイズは非常に巨体を誇り、素人目に見ても外観だけで相当な脅力を備えているだろう事は、容易に想像が付いた。

ならば振り回される前に此方が動くまでだ。

飛鳥は間髪入れずに、左腕のライフルを連射——。

——即座に触手部分を撃ち抜き切断する。

その隙を目掛けて光線級が飛鳥を狙うも、クリスカ率いるイーダル小隊が次々と撃破する。

衝角腕さえ封じてしまえば、要塞級の武器は脚部分のみとなる。

周囲には他のBETAの姿は無く、後はこの要塞級のみとなっていた。

「各機、滑空砲用意……撃てっ！」

脅威度が大幅に低下し、クリスカは好機とみたのか小隊全員に滑空砲射撃を命じた。

戦術機の突撃砲には、120ミリの大口径砲がマウントされている。非常に威力が高く大物を仕留める際、非常に重宝する武器だ。

小隊が一齐に放つ大口径弾の豪雨——。

動き自体は緩慢な要塞級は弱点部位を悉く破壊され、碌な抵抗も出

来ないまま撃破された。

要塞級はその場から崩れ去り、射撃が終わった頃には生命活動を完全に停止。

「要塞級及び追従する光線級撃破完了……。……この地点は粗方片付いたか」

クリスカは周囲に残敵が居ない事を確認し、ここ一帯の光線級撃破と判断する。

『残りの光線級を始末しないと』

「貴様に言われる迄も無い」

飛鳥の言葉に、クリスカは素っ気なく返す。

『——飛鳥、ガキ共！聞こえるかっ！』

突如としてオーブンチャネルで通信が割り込まれた。

「——スミカさん!？」

『良くやったと言いたい処だが、間もなく本隊からの砲撃が飛んで来るぞ！早く其処から退避しろ、命令だ！』

「——何ですって!？」

スミカの説明では飛鳥達の戦闘で、オーメル軍は光線級の正確な位置を割り出したとの事だ。

光線級の脅威が殆ど消失し、本隊は砲撃とカブラカンを駆使した地ならし戦術で、一気に制圧を図る算段らしい。

つまり作戦は、最終段階に入ったという事だろう。

「我々に命令するな、何者だ貴様！」

『——黙って従え……死にたいかッ!?!』

「——つう……」

「——ひっ……」

見知らぬ女にいきなり命令されクリスカは反発するも、有無を言わせぬ彼女の迫力に、イーニアまでも短く怯えの悲鳴を上げた。

得体の知れぬ女に心底の恐怖を植え付けられ、彼女達も仕方なく了承する事にする。

「これより撤退する」

「……我等も続くぞ」

飛鳥とクリスカ達はそこから退避し、間もなくして過剰な程の砲撃が実施され、オーメル本隊の蹂躪が始まった。

アームズフォート『カブラカン』を前衛に展開させ、その両サイドをACノーマルとMT、ソ連軍の戦術機部隊が固め、射撃を継続しながらBETA残存群を掃討してゆく。

途中、戦車級などがカブラカンに取り付くも、搭載した自律兵器とACや戦術機部隊が引き剥がしにかけられ、そこから先は一方的な勝利で幕を降ろす事になる。

戦いは終わった。

因みに今回のBETA総数は、2万5千を超えていたと言う。
クリスカ||ビャーチエノワ、火無||飛鳥。

両者は機体越しに暫し対峙する。

(推奨BGM Armored Core 4——Rain)

「……」

「……」

言葉も無く両者は視線を交わしていたが、飛鳥が口を開く。

「ソ連というのは、あの『ソビエト社会主義共和国連邦』の事を指しているのか？」

「そうだ。我等が誇る超大国、ソビエト連邦」

飛鳥の問いに対し、誇らし気に語るクリスカ。

「それはあり得ない、国家は解体された筈だ！あの戦争で——」

クリスカの答えに飛鳥は即座に反論する。

飛鳥が誕生した日と同じ時間に宣言された国家解体の報。

世界中で発生する慢性的なエネルギー不足、食糧危機、貧富の格差、政治の腐敗、^{モラル}道徳の低下、止まぬ紛争、そして相次ぐテロ。

それ等の負債が、清算不可能な程に降り積もり、国家は次第に統治能力に陰りを滲ませる。

腐りに腐り切り、繁栄の火は陰っていたのである。

そして唐突に勃発したクーデター。

営利団体である『企業』は、奇妙な人型兵器『アーマード・コア・ネクスト』を開発し、世界中の国家に戦争を挑んだ。

人類誰もが、国家側の勝利を信じて疑わなかった。

—— その時が訪れるまでは ——

26機——。

たった26機のACネクストは国家軍を打ち破り、その戦争は企業側の圧勝に終わる。

企業群に完全敗北した国家は、解体を迫られその統治権を譲渡する事になった。

とある場所で調印式が締結され、その瞬間、国家という概念は完全に過去の遺物となった。

後に始まる、企業が統治する時代。

—— パックス・エコノミカ ——

限りある資源の節度ある再分配。

人々は『コロニー』と呼ばれる居住区を兼ねた収容所へ強制移住させられ、糧食と生活用品を得る為だけの労働に従事する生活を強いられる事になる。

後にこの戦争は、人々の間でこう呼ばれた。

—— 国家解体戦争 ——

「……」

飛鳥の言葉に無言で耳を傾けるクリスカ。

「……それはお前達の歴史でだ」

「——!? ……どういう意味だ?」

「そのままの意味だ。国家など解体されていないし、我等が『ソ連』は不滅の超大国だ。企業如きに滅ぼせよう筈も無い!」

「……っ!」

クリスカは意味あり気な言葉を発し、国家という概念は滅んでいない事を告げる。

「これ以上の議論は無意味……もう会う事もあるまい。ではな……」

最早話す事はないと言わんばかりにクリスカの部隊は反転し、その場を去る。

「また会おうね、不思議なあなた!」

対照的にもう一人の少女『イーニア』は、友好的な言葉を投げ掛ける。

「……まるで、世界が二つ在ったかのような言い草だったな」

砂塗れの風が吹き荒ぶ荒野に、飛鳥のACは取り残された。

あの激しかった戦闘は既に影も形も無く、オーメルを主軸とした企業は、撤収作業に移っていた。

唐突に飛鳥の周りに黒い影が差し込み、飛鳥はハツつと我に返る。

彼は、ふと頭部カメラを上へと向けた。

「!?……あのAC……」

小高い崖を見上げ其処には、あの黒いACが此方を見降ろしていた。

友軍機の間をも借りる事なく、単機で戦場を駆け巡り、並み居るBETAを平らげていた黒いAC。

札を言うべきなのだろうか？

些かに惑いを見せる飛鳥だった。

だが黒いACは直ぐに飛び去ってしまう。

「まるで……黒い鳥……みたいだ」

あのACに抱いたイメージ。

戦場を跳び縦横無尽に駆け巡り、宛らそれは『黒い鳥』を彷彿とさせた。

黒いACが飛び去った方角を見つめ続ける飛鳥。

『おっ！っ！っ！いつまでそうしてる気だ？帰るぞっ！』

呆然と立ち尽くす飛鳥に、ユウキからの通信が入る。

「すいません！今行きます！」

飛鳥は我へと返り、気持ちを切り替え輸送車へとACを格納する。

成功報酬は既に振り込まれ、この時点で『オーメルサイエンステクノロジー』の依頼は完遂した。

幾つもの疑問は残り、飛鳥自身何か釈然としないモノは残っていたが、今は無事ミッションを終えた事を喜ぼう。

ソ連軍に所属していた二人の少女。

その一人から告げられた、未だ残る国家。
ACとは、似て非なる戦術歩行戦闘機。
地球外生命体、BETAの存在。
薄れゆくコジマ粒子の汚染濃度。
レーザーで焼き尽くされたアサルトセル。
そして『黒い鳥』を思わせる謎のAC。

多くの疑念を残しながらも、飛鳥達一行は巨大交易所へと帰還する。

今はゆっくりと休もう。

戦いは、まだまだ続くのだから。

スカレットツインズ
紅の姉妹、後に関わる事ならうとは、今の飛鳥には想像すら出来なかつた。

企業連

国家解体戦争より後に勃発した、リンクス戦争で崩壊したパックスに代わり組織された新たな企業連合体。

正式名称は統治企業連盟。

リンクスの共同管理機構としてカロードを設立した。

企業社会における秩序と平和の維持を目的とする組織だが、

——当然のように、機能していない——

設立からそう時間を経ずして形骸化し、現在の役割は企業の意志を発言する場としての価値しもなく

発言力の高いオーメル・サイエンス・テクノロジーの意志を“企業の総意”として代弁しているに過ぎない

ということが多く見られるようになってきている。

基本的にこの組織からの依頼はラインアークやリアナ等の反企業勢力の排除・討伐の依頼が中心となる。

また、後の反抗組織『ORCA旅団』の依頼は原則として企業連の依頼となる。

歪みを受け入れた世界は、突き進むのみである。

理性はなく、感情も無く、志も無い。

物欲だけがそびえ立ち、宛らそれはタワー如きであった。

第4話―微動、日本帝国―

パックス・エコノミカ

“経済による平和”の意。

国家解体戦争後の世界を統治する企業連合体の掲げたスローガンであり

これが転じて企業連合体の採る行政体制の通称 “パックス” となった。

企業は、このシステムを以て、限りある資源の節度ある再分配を最適に実現するものであると喧伝したが、世界を明確に階層化する新システムは

ある意味で社会主義的、さらに言えば奴隷制度的ですらあった。神に祝福されし者のみが、楽園に居座り続ける事が許される。楽園に蔓延るは、無痛と富める深海の膿――。そこに色も生も無く、唯々灰色に降り注ぐ楽園の彼方。

(推奨BGM 初代アーマードコア ガレージBGM)

欧州に位置する、都市機能を備えた大規模交易所。

その居住区一角に、決して広いとは言えない小さな部屋にて、三人の男女が端末を操作していた。

「国家の存在は、確定だ」

一人の女性、カスミィスミカは国家の存在を認める発言をする。

「…貴方がそうおっしゃるのなら、間違い無いのでしょうか」

一人の若い男性、ギンⅡユウキも賛同する。

カスミ・スミカと言う女性、昔は腕利きの元リンクスで、嘗て国家解体戦争にも密に関わった人物だ。

その国家解体に関わった人物が、国家解体を否定するのだ。

認めざるを得ないだろう。

「——だとしても、BETAの存在、そしてあのACノーマルに酷似した戦術歩行戦闘機、一体どう言う事でしょう？」

一人の少年でレイヴンでもある火無Ⅱ飛鳥は、BETAや戦術機について言及する。

オーメルサイエンスが主導となって先日行われた、光線級BETA漸減作戦。

参加部隊には、国連の一方面軍である『ソビエト連邦』なる部隊も参加し、そこで初めて遭遇した戦術歩行戦闘機。

そして一時的に共闘する事となり、コールサイン『イーダール1』を名乗る少女に告げられた一つの事実。

『それはお前達の歴史でだ。国家は解体されていない』

あの言葉が今も心に残っている。

三人は暫く無言で考え込んでいたが、やがてスミカが静かに語り出す。

「並行宇宙論……実在するのもかも知れんな」

「並行宇宙論……」

スミカの言葉に、飛鳥とユウキは反応し振り向く。

並行宇宙論、所謂パラレルワールドである。

此処とはまた異なる次元に存在する、別の世界線。

様々な可能性が複雑に絡み合った結果、全く別の現実が展開されている世界が幾つも存在しているという理論だ。

例えば、地球には人類という種が最初から存在していない世界。

戦争など起きず、平和を享受している理想に近い世界。
若しくは、全くの真逆な世界。

剣と魔法が発達し、冒険と興奮に満ちた世界。

神々が実在し、生命の火が宿った後に陰りを見せ、死の息吹が蔓延した暗い魂の世界。

そんな多様な世界が、我々の認識できない次元で存在しているというのだ。

一応飛鳥本人も、最小限の知識としては記憶している。

尤もそんな世界が描かれるのは、精々娯楽小説や物語と云った類のものだ。

故に、現実に取り得たとしても、そう鵜呑みに出来るものではなかった。

「まあ何にせよ、情報が不足し過ぎてやがる。オーメルの連中に問^物詰^理めたが、奴らダンマリを決めこみやがった」

スミカ自身も、今の世界の在り方には思う処があった。

そこで適当なオーメル社員を確保し、有形無形^{襟首}の慈愛^んに満ちた^壁交渉^下を行ってはみたのだが、成果の程は今一つであった。

「…ハハハハ…」

そんなスミカに、二人は苦笑いで返すしかなかった。

「とは言え、BETA：特に光線級の情報や、それに対する戦術を入手できたのですから、今後の俺達にとって有用に働きますよ」

「今や、世界中各地でBETAとの戦闘が相次いでいるそうです」

「ああ…。今後も関わるだろうな」

ここ最近流れて来る区内速報は、専らBETAとの抗争状態が主を占めていた。

『人類種の天敵』の件と『クレイドル墜落』の件は一先ずの区切りを迎え、世界は荒れ果て混乱しながらもささやかな平穏を迎えていた。

しかし、それも束の間――。

BETAなる『人類に敵対的な地球外起源種』の跳梁跋扈で、世界は再び戦乱の渦に飲み込まれた。

何時の日かこの交易所も安全ではなくなるだろう。

その時脱出するにせよ、最後まで抵抗するにせよ、財力と力を蓄え備えるのは必須というもの。

自分自身を貫く為。

何者にも屈せぬ為。

好きなように生き、好きなように死ぬ為に。

誰の為でもなく。

だがそんな時代は、終焉を迎えようとしているのかも知れない。

世界は変革を欲しているのだろうか。

それは誰にも分からない。

「さて…私は寝るかあ……。流星に疲労困憊だ」

ゆっくりと体を引き延ばし、スミカは欠伸をした。

そしてユウキも作業を一段落着け、スミカに倣う事にする。

「お疲れ様です、二人とも。ごゆっくり！」

飛鳥は二人に労いの言葉を掛け、見送った。

二人が自室を出た後も飛鳥は一人、端末に映し出された画像に目を向ける。

其処に映る画像は、先日の黒いAC。

あの時の邂逅は、今も飛鳥の心に刻み込まれていた。

「……黒い鳥……」

飛鳥は、一人呟く。

誰に対するでもなく。

—— 数日後 ——

(推奨BGM アーマードコア2 Cord e)

人々の往来著しい商業通りで、それは起こった。

高級な背広と帽子を身に纏った、紳士風の男。

スミカとユウキの前に忽然と現れ、訝しむ二人に臆する事無く自身を名乗った。

名を—— 鎧衣 左近（よろい さこん）——という。

掴み所の無い独特の口調で話し、貿易商を自称する不思議な人物であつた。

彼はゆっくりと話ができる場を探している様で、スミカは近隣のカフェに案内した。

多少の料金は掛かるが個室を貸し切り、三人は其処へ入室する。

「これは有難い。機械尽くしの派手な街並みに少々気が滅入つておりましたが、麗しい美女に、この様な落ち着ける場所を提供して頂けるとは」

左近なる男、一見口調は軽いがその瞳と眼力は、此方を値踏みしているのが分かる。

「鎧衣左近さん…だっけ？名前からして日本人だが、『有澤統治区』からやって来たのか？」

スミカの隣席に座る、ユウキが訊ねた。

「とんでもない。『国家解体』など起きてはおりませぬよ、リンクス君？」

「……貿易商が聞いて呆れる、諜報員」

短くも本質を突く、眼前の左近という男——。

そもそも唯の貿易商が、理由も無く二人に近付く筈が無いのだ。

スミカとユウキの素性を知った上で、接触を図つて来たのだろうか。

彼の言では、企業が治める有澤統地区ではなく、国として存在する『日本』だというのだ。

正確には、日本でもなく『日本帝国』であるのだが。

そして告げられる新たな事実。

次元を隔てた世界は幾つも存在し、何らかの切っ掛けで枝分かれした世界同士が融合したのだと語る。

俄かには信じられない話だが、数日前のオームル、ソ連、共同の大規模作戦といい、戦術歩行戦闘機なる兵器といい、BETAと呼ばれる怪物と云つた存在を目にしては信じざるを得ないだろう。

二人は、そう抵抗なくその事実を受け入れた。

「流石ですな。私の高尚な恥部を見抜いてしまうとは」

——あくまで此方を手玉に取る積りなのか、それともコイツの『素』なのか。只者でない事だけは確かだ。

ユウキも僅かなやり取りで彼の正体を漠然と見抜き、左近は尚も飄々とした態度を崩さなかった。

「まあいい要求を聞こう、鎧衣とやら」

このまま言葉の応酬を繰り返したのでは埒が明かず、長引けば長引く程相手側に主導権を握られる恐れがあった。

悔しいが、交渉術は相手側に分があるようだ。

スミカはすぐさま、本題に移る。

「これは残念。麗しき貴女様の美声を堪能したかったです、致し方ありませんな」

そんな表情は微塵にも出さず、左近は応じる。

彼がこの交易所に訪れた理由——。

それは『リンクス』でもある二人を通して、アーマードコア・ネクストを入手して貰いたかった。

日本帝国は既に有澤重工と協力関係にある。

しかし、些か隔たった兵器群を製造する有澤重工。

帝国側としては、他企業の兵器を入手し未知の技術を手中に収めたという思惑があった。

その為、過去に活躍した元リンクスである二人に、近付いた次第である。

二人の素性に関しては有澤からG A、G Aから企業連を経由して調べる事で、情報を得る事が出来た。

「既に表舞台から消え去ったとは言え、ネクストは強力無比な潜在能力を有しております。購入の際には、このカードをお使い下さい」

左近は懐からキャッシュカードを取り出し、スミカに差し出した。

「…周到的な事だ。国で管理するこのカードで取引させれば、直ぐに此方の足取りを追う事が出来る」

「これは手厳しい。我が祖国の友好の証として受け取って頂きたい」

データ化され企業間でしか取引できない様に、細工済みのカードだ。

仮に持ち逃げした処で、不正使用できる場など限られ、直ぐに履歴が残るように施されていた。

つまり公の場でしか使用できない代物だ。

「いいだろう、幸いアテがあるのでな。……どうせ貴様の事だ、それも想定済みなのだろう？」

「ハハハ、話が早くて此方も助かります。……それともう一つ……寧ろこつちが本来の目的と言つても良いですか」

スミカは過去に、インテリオルユニオン系列の企業と繋がりがあった。

その伝手を辿れば、ACネクストの入手はそう難しくはない。

しかし左近は、もう一枚の記録媒体を取り出し、二人に差し出す。

その媒体は、日本帝国上層側に属する一人の軍人の声明が記録されていた。

実はこの左近も、その人物に依頼され此処まで馳せ参じたのである。

無論、他にも細々とした目的はあったが、この二人に接触し今の記録媒体を渡すのが主目的であった。

こうして謎の人物、鎧衣 左近との会見は終わり、二人は早々に居住区へと戻った。

鎧衣 左近：彼は日本帝国に所属する諜報員で、『帝都の怪人』とも言われていた。

部屋に戻った二人は、彼から託された記録媒体を端末のスロットに差し込み、起動させた。

そしてモニターに投影される、一人の若い男とメッセージ——。

見え隠れする階級章から察するに、恐らく上級仕官なのだろう。紳士的な態度ではあったが、何処となく腹に一物を抱えた男に見えた。

それが切っ掛けとなり、彼等との交流が繰り返し行われる事となった。

(推奨BGM Muv-Luv Alternative 咆吼する魂)

日本海側に位置する帝国軍港基地。

海面に浮かぶ、その威容は『船』と言った処で、誰も信じる者は居ないだろう。

アームズフォート、ギガベース。

全長600メートルを超え、全高250メートルをも誇る、水陸両用の拠点型兵器だ。

その巨軀に唯々唾然とする群衆。

言葉も無く口をポカンと開け、見る事しか出来ない人々。

何処に斯衛の矜持など存在しようか。

常に帝国国民の模範となり、規律となり、前へと立ち続ける、帝国軍独立精鋭部隊。

「おやおや。『鬼姫』と呼ばれし程の御仁が、涎を垂らしているよ」

「——っ!?!」

軍服に身を包み、穏やかな表情で語り掛ける青年に、『鬼姫』と呼ばれた人物は“ハッ”と我に返る。

「——も、申し訳ありません、少佐!」

「ハッハッハ、呆けるのも無理はない。私でさえ、この巨影には面食らうばかりだよ、恭子」

「斑鳩少佐……」

斑鳩と呼ばれた男は、微笑しながらもアームズフォートに視線が向いていた。

「さて、この旅路。未知なる邂逅数多だ。世界の情勢を君自身の目で確かめて貰いたい」

「ハッ! 身命を賭して!」

「尤も、君の任務はそれだけではないのだけれど。まあそれは、彼の領域だ」

斑鳩の視線は他の集団に向けられ、恭子と呼ばれた斯衛軍衛士『崇宰Ⅱ恭子』も彼に釣られ視線を傾ける。

斯衛軍衛士とは別の集団に、彼はいた。

「済まんな榮二、俺の娘を唯依を頼む」

「ああ任せておけ。だからと言ってお前も無理はするな。何せBET Aの群れに飛び込むような旅なのだから」

一人の男は自身の娘を、巖谷Ⅱ榮二と呼ばれる男へと託す。

榮二にとつては、託された彼女は娘の様に思っている。

それ自体は何ら負担とはならず快諾するも、彼は眼前の男の身を案じた。

「この旅には、お前のみならず数多くの企業も参加している。まさか五撰家の一角、崇宰家も参加するとは予想外だ」

榮二は、斯衛軍衛士の集団に視線を向けた。

「それだけ誰もが重要視しているという事だ。見極めねばなるまい、世界の情勢を。そして知る必要がある、例の人型兵器を——」

娘を託した男、篁Ⅱ裕唯（たかむら まさただ）はギガベースに搬入されつつある戦術機『TSF—Type82瑞鶴』を見つめていた。

——俺の開発した『瑞鶴』をベースに、例の人型兵器の技術を組み込む技術検証。それが俺の任務だ。

遅かれ早かれ後数年もすれば、衛士の訓練を受けている娘は戦場に立つ事となる。

少しでも新技術を導入し、戦力の底上げを図る。

この愛すべき祖国の為にも、何より愛しき家族の為にも。

「後は頼んだ、榮二！」

榮二は力強く頷き、無言で裕唯の肩を叩く。

「二それでは我々も行つてまいります！」

裕唯に同行する、他の技官らも榮二に敬礼した。

榮二も数名の技官に、敬礼で返し乗艦する彼等を見送った。

「それにしても、途轍もない企業だな。こんなバカでかい兵器を造り

だすとは」

アームズフオート『ギガベース』を製造したのは、アメリカに本社を置く『GA』と呼ばれる巨大軍需複合産業である。

そして『GA』と提携し、緊密な関係にある日本の軍需産業、名を『有澤重工業』という。

有澤重工業自身は、巨大兵器であるAアームズフオートFを所有しておらず、急遽GAに連絡を入れ、購入に至ったのである。

元々ギガベースは拠点型に分類され、陸、海、問わずに運用が可能。故に長距離を航行するには、打って付けの兵器だった。

有澤重工は購入したギガベースに独自の改良を施し、この旅の為に準備を整えてきた。

次々と旅に必要な物資、人員が乗り込み、その中には技術仕官や研究員、政治家なども含まれる。

『食料コンテナは3番通路だ、急げえ！』

『おい、ノーマルと戦術機を接触させるんじゃないぞ！』

『MTの搬入も忘れんなよ！ある意味最も重要な物資なんだからよ！』

『VIP待遇の方々は、丁寧にご案内しろ！くれぐれも粗相のない様になー！』

喧騒音と怒号が飛び交い、ギガベース内外では尚も作業員達が忙しくなく右往左往している。

「斑鳩Ⅱ崇継 少佐殿、少し振り…ですか？」

「おお…、これはこれは社長殿！」

五撰家の一角である斑鳩Ⅱ崇継（いかるが たかつぐ）は、後ろから声を掛けられ振り向いた。

其処には、体躯の良い壮年の偉丈夫に数名の屈強な大男達が同行していた。

「此度の旅路、貴方様は同行されないと聞きましたが？」

「その通り。まあ此方は此方の事情があるのでね。故にこの任は彼女と彼等に担って頂く」

斑鳩Ⅱ崇継の傍に佇む、若い女性衛士『崇宰Ⅱ恭子』と彼の側近、真壁Ⅱ介六郎（まかべ かいろくろう）。

真壁Ⅱ介六郎は、赤い強化装備に身を包む斑鳩家に仕える家系でもあり、山吹色の強化装備に身を包む譜代武家の衛士を数名引連れていた。

彼等は隆文に敬礼で応える。

「私は、有澤Ⅱ隆文（ありさわ たかふみ）と申します。お見知り置きを！」

崇宰Ⅱ恭子、真壁Ⅱ介六郎も敬礼で返し、簡潔に自己紹介を交わす。『社長、お時間が迫っております。例の方々は既に乗艦を完了しております故に——』

「む、理解した」

重役に促され、有澤Ⅱ隆文は崇宰Ⅱ恭子ら斯衛軍と共に、ギガベースへと移動する。

「有澤殿！あの機体には、もう乗らんのですかな？」

斑鳩に背後から声を掛けられ、隆文は僅かに振り向く。

「……これ以上の汚染は、本意ではありませぬ故」

そう告げ、そそくさとギガベースへ姿を消した。

「……確かに。コジマ兵器など、『G弾』と何ら変わらんからな。あの二人にも宜しく頼むよ、介六郎」

斑鳩は一人呟き付き添いの衛士達と共に、ギガベース出航を見届けた。

ギガベースの出向には、軍関係者だけでなく多くの報道関係者までもが、詰め掛けていた。

当然安全面を考慮し、一定の区間からは立ち入れないよう措置を取っている。

それでもこの異様な兵器『ギガベース』が珍しいのだろう。

五撰家の次期当主と期待されている崇宰Ⅱ恭子などそっちのわけで、カメラのフラッシュはギガベースへと釘付けになっていた。

尤も、恭子自身は清々していたのだが。

「艦長、出港に移れ」

「ハッ！」

専用の執務室ではなく、いきなり艦橋へと姿を現した有澤Ⅱ隆文。若干の驚きを見せるも、艦長は直ぐに己が職務に移り、出港の命を下す。

『全主機の出力安定。問題、認められず！』

『天候、晴天なれど波高し。だが、航行に支障なし！』

『抜錨開始！機関始動！』

『機関良好！』

「両舷前進微速！」

艦長の号令によって、ギガベースはゆつくりと確実に、その巨体を動作させた。

『おお！本当に動いたぞ！』

『あんな巨体が、どうやって浮いてるんだ！』

『戦艦大和が、小舟に見えるぜ！』

一方軍港では、多くの人々が驚愕を交えた歓声が沸き上がり、報道陣は命一杯カメラを回し撮影に全力を注ぐ。

『艦長、出港完了致しました！』

「航海長操艦。両舷前進原速、赤黒なし」

出港完了の報を受け、艦長は航海長へと操舵権を渡す。

『頂きました、航海長。両舷前進原速、赤黒なし』

操舵権を渡された航海長が、暫くは操艦する事となる。

ギガベースは、原速12ノットの速度で舞鶴基地から脱し、日本海をゆつくりと進んだ。

目指すは、英国圏の巨大軍港――。

接触目標は、巨大軍需産業インテリオルユニオン――。

(推奨BGM Muv-Luv Alternative 決断)

「此方になります」

ギガベースに乗組員に案内され、着いた場所は豪勢な船室だった。

「……これはすごい。大和ホテルも顔負けね」

その船室に感嘆の声を漏らす一人の女性――。

白衣に身を包み、その下には上級仕官である軍服を纏っている。

背の低い少女と数名の女性衛士を伴い、その女性は入室し、手頃なソファアームへと腰掛ける。

「それでは、ギガベースでの船旅を存分にご堪能くださいませ」

恭しく頭を垂れ、乗組員は早々に姿を消す。

「さつ、アンタ達も適当に寛いで良いわよー」

白衣の女性、香月Ⅱ夕呼（こうげつ ゆうこ）は同行した数人の女性達にも声を掛ける。

「香月博士、些か、はしやぎ過ぎではー」

同行した衛士の一人でもあり友人でもある、神宮寺Ⅱまりもは呆れ顔で溜息を吐く。

「なあに言ってるのよ！休める内に休んどかないと、この先もたないわよー！さあ、霞も楽になさい」

夕呼はヒラヒラと手を振り適当に流しながら幼い少女、社Ⅱ霞にも休息を促した。

――これ程の遠出、本当に久し振りね。碌な思い出なんか無かったけど。

まりもは、部屋の窓から何気なく外を眺める。

祖国日本を離れ、否が応でも思い出す大陸での戦い。

彼女の部隊は壊滅し、実質一人生き残った。

――新井…。

訓練兵時代、共にしのぎを削り対立しながらも、互いを認め合う関係となった。

しかし彼は重光線級の犠牲となり、機体ごとレーザーで蒸発させられた。

彼女を庇って――。

今回の作戦も、多くの同胞が犠牲となるのだろうか。

そんな悲壮感ばかりが脳裏を過る。

「――どうされました？」

同行した衛士の一人、藤澤Ⅱ月子（ふじさわ つきこ）が、まりもを気遣う。

「いや、大した事じゃない。少し過去を思い出したただけだ、気にするな」

「……失礼しました」

まりもは気遣い無用と直ぐ平静に戻り、月子は敬礼で応える。

過去に初陣で大陸へと赴き、BETA群と戦った。

結果は大敗を喫し、多くの戦友を失う羽目となり、今も彼女の心に深く刻み込まれている。

既にギガベースは動き出し、舞鶴軍港基地は微かに輪郭を残すのみだった。

今回の長旅も祖国を離れ、欧州へと赴くのだ。

概要は事前に聞いていたが、海路で目的地へと到着した後は、陸路で欧州へ朝鮮半島まで横断するという旨を聞いていた。

普通に考えれば、先ずあり得ない程に荒唐無稽な作戦であった。

よく通ったものだ。

少し思案に耽った後、まりも自身も寛ぐ事にする。

「皆も楽にしている。今の内に寛いでおけ」

彼女は部下に告げ、伊隅みちる（いすみ みちる）藤澤月子（ふじさわ つきこ）三浦園子（みうら そのこ）竹宮千夏（たけみや ちなつ）等も敬礼で応え、各々が楽な体勢を取った。

「正直に言えば、未だに信じられません。異なる世界同士が融合したなど——」

香月Ⅱ夕呼の護衛として同行していた女性衛士『伊隅みちる』は、姿勢を崩しながらも世界の現状に疑念を呈す。

「認めなさい伊隅。その事象の結果が、今此処に在るのよ。あくまで、結果の一端だけどね」

夕呼達が乗艦する、この巨大な拠点型兵器『A.F・ギガベース』も、世界が融合し折り重なった結果の一因子に過ぎない。

コジマ粒子、巨大企業、国家解体戦争、パックスエコノミカ、アサルトルセル、クレイドル、そして——。

——アーマード・コア——

——レイヴン——

人類の存亡を賭けBETAとの戦争に明け暮れる、今迄の世界。

しかし、人類同士の戦争で、地上は汚染され尽くし滅び去る運命を孕んでいた、もう一つの世界。

幾つもの可能性が枝分かれし、それぞれの道を歩んだ結果、突如融合を果たした今の世界。

滅びの道を歩んでいた二つの世界が重なり、どの様な未来を突き進むのか。

それは誰にも分からない。

「寧ろアタシはチャンスだと踏んでいるわ！例の計画を完遂させる為にもね！」

人類と世界をBETAから救い出す為の計画。

様々な障害と妨害に遭い、計画自体は難航していた。

しかし別次元の技術を吸収し、融合し変わり果てた世界を観測する事で、得るものが必ず有る筈だ。

このまま研究室に籠もり、書物や資料と格闘していたのでは、永久に悲願が成就される事はない。

逆に、あの計画が実行され地球は最悪、見捨てられる事になるだろう。

「ですが、『統治企業連盟』という組織集合体。米国が主導としているあの計画を支持しているようです」

夕呼の秘書官を務める軍人、イリーナIIピアティフは米国と企業連について言及した。

「……」

夕呼は無言で、巨大複合産業『企業連』に思案を巡らせた。

「そもそも、この有澤重工とて、企業連に名を連ねる組織です。帝国に力を貸す姿勢を見せられますが、余り過度に信用するのはどうかと……！」

衛士の一人、竹宮千夏も有澤重工に対して意見する。

「有澤の力は必要よ、敵に回すべきではないわ！」

些か感情的になる竹宮千夏に、夕呼はやや強め口調で諭す。

「確かに三大企業、G A、オーメル、インテリオル。有澤はG Aの傘下企業にも拘らず、その全戦力は帝国全軍にも匹敵するわね」

「唯でさえB E T A相手にひつ迫しているのに、企業まで敵に回すのは上策とは思えません」

まりも、ピアティフも言葉を付け加える。

ここ近年日本帝国は、アメリカ合衆国国連軍最大の国力と軍事力を持つ米 国との関係が悪化していた。

アメリカは現在、世界唯一の超大国と言っても過言ではない。

そのアメリカに企業連の三大組織の一角G Aグループが加わり、アメリカは更に国力を増大させた。

そしてG Aの総意は、米国が主導するある計画を全面的に支持し、資金、技術、人材面で大いに貢献している。

一方アジア地域では、オーメルサイエンステクノロジーがソ連や中華人民共和国と云った国々と協力関係を結び、軍事面や経済面で多大な影響を及ぼしていた。

残るインテリオルユニオンも欧州圏に本拠地を置き、英国を全面的に支えている。

世界が融合した事で、企業連の台頭が世界に多大な影響を与えているのであった。

その所為で懸念材料は、B E T Aのみならずパワーバランスまで大きな変革を齎していたのである。

G A、オーメル、インテリオルの三大企業には、数多くの傘下企業が付き従っている。

G A傘下の有澤重工業も、その内の一つだ。

尤も、有澤重工は従属というよりも提携と言った方が正確で、G A自身も基礎技術面では有澤に頼る部分も大きく、両者の関係は概ね良好と言えた。

実際、有澤重工業の総合力は、G Aに及ばないまでも世界に与える

影響力は多大だ。

車両や榴弾技術に目が行きがちだが、インフラ、福利厚生、食料、娯楽、一通りのノウハウは有していた。

また有澤重工自身は地元住民との交流と支援にも力を割き、大いに支持を集めていたのである。

下手に関係を悪化すれば、帝国にどれだけ悪影響を及ぼすのか計り知れない。

「それに有澤重工は、此方の計画にも理解を示してくれているわ。だからこそ、こうして同行を許されたのだけれどね」

数ある企業の中でも有澤重工は、夕呼の計画にも一定の理解を示し、既に巨額の投資を受けていた。

逆に成果を示さねば、完全に切り捨てられるという示威行為でもあるのだが。

加えて、有澤重工からGA通じて米国との交渉役にも、一役買ってくれるだろう。

味方にこそすれ、敵に回すには余りにデメリットの方が大きい。

「さて！作戦会議までまだ時間もあるし、シャワーでも浴びてきますか！霞、アンタはどうする？」

夕呼はベッドに腰掛け無言でいる少女に声を掛けた。

「……後でいい」

「そ。じゃあ、先に頂くわね！」

霞は短い言葉で応え、夕呼は特に何を意識するでもなく早々にシャワー室へと移動した。

「味方が増え、同時に障害も増えた……。だけど必ず成就してやるわ！全人生を賭してでも！」

脱衣所の洗面台で、夕呼は一人呟いていた。

—— オルタネイティブIVを ——

鏡に映る自身の顔——。

彼女の眼には、確かな決意と覚悟が宿っていた。

(推奨BGM アーマードコア3 Artificail Sky I

I)

「隆文、入ります」

一際豪華な扉のノブに手を掛け、丁寧な仕草で入室する有澤隆文。「体調の方は如何か、叔父貴」

彼の眼前に居たのは、車椅子に腰掛け日本古来の正装である『黒紋付袴姿』の老人であった。

「よう来たの、隆文や」

「お変わりなくて、何よりだ」

車椅子の老人は、有澤ありさわ隆彦たかひこ。

有澤重工業の会長であり、隆文の叔父にあたる。

既に95を超える高齢で心身共に衰えていたが、その眼光は未だ鋭く精気と決意がみなぎっていた。

「例の計画：オルタネイティブVの進行状況は……？」

「ハッ！アサルトセルが崩壊した事により、進行速度に拍車が掛かっております」

「そうかそうか」

会長、隆彦は満足そうに微笑んだ。

「しかし、私には分かりかねます。企業連と米国が推進するオルタネイティブVを支援しておきながら、何故なにゆえ叔父貴はオルタネイティブIVをも支持なさるので？」

隆文は訪ねる。

有澤重工業もGAグループに属し企業連の一員である事には、何ら変わりはなく基本方針はGAに傾いていた。

オルタネイティブVという計画。

それは、BETA由来の産物である兵器『G弾』の集中運用で、地球上のBETAを環境ごと殲滅。

加えて選別した10万人の民を宇宙船に寄せ地球を脱出し、バーナード星系へと移住させる計画だ。

その計画は表面上、保留という形はとっているが、実際は水面下で着々と進行中なのである。

企業連は、米国が提唱しているこの計画に賛同し、全面的に協力援助を惜しまなかった。

それは、クレイドル体制が崩壊した事で経済の基盤を失い、汚染され尽くした地上での活動が困難と判断し、企業連自身も宇宙脱出計画を推進していた事にも大きく起因していた。

しかし有澤重工だけは、香月夕呼のオルタネイティブⅣにも一定の理解を示し、資金や物的援助を惜しまなかった。

有澤隆文には、それがどうしても腑に落ちなかったのである。

それを聞いた隆彦は、ニイツと口端を吊り上げた。

「ククク……邪魔なのだよ！米帝の亡者も、中華の蛮族共も、ロシアの獣共も……な！」

「——っ!?それはっ……どういう……」

隆彦の真意を汲み取れず、豪胆で滅多に動揺しない隆文も、驚愕の表情を浮かべる。

隆彦の真意——。

オルタネイティブⅤを推進させ、更なる計画拡大へと誘導し10万人などと言わず、世界中の人間を他星系へと移住させたかった。

そして自分達日本民族は、この地球に留まり営みを続けるのが、彼の目的であった。

「日本という国は、古来より自然と神々を敬う高潔な精神性を重んじた国であった。しかし、今はどうだ！」

皺だらけの隆彦の表情が一層険しくなり、惚けた瞳が人間性を取り戻したかの如く、鋭さを増した。

荒廃と衰退を重ね、拳句の果てに世界の国家は解体され、残ったのは利権と物質の世界が蔓延した。

そこには何の精神性も無く思想も無い、物欲と管理のみの社会。

ACネクストにより国家は解体されてしまったが、隆彦は秘かに計画を練っていたのである。

経済力と軍事力を更に増強させ、GA、オーメル、インテリオル、三大企業に肩を並べる組織へと成長させる事。

その力を用いて、再び『日本』を復古させるのが、有澤孝彦の悲願

であった。

即ち彼は、日本という国そのものを愛し、精神の寄る辺でもあった。彼にとつて日本とは、『篝火』の如きヨスガでもあったのだ。
あたか宛も、羽虫が火に惹かれるが如く。

「だが、思わぬ形で祖国が復活したのだ。ならば、今度こそ我が『有澤』の力を注ぎ込み、神国『日本』に御奉公する使命を賜ったのだよ！それが、我々が地球に…神々に…自然に対する贖罪となり赦免しゃめんともなろうぞ！故につ！無駄な人口など目障りでしかないのだよ、隆文よおつ！！」

隆彦の本心を受け、隆文は言葉を失っていた。

よもや、そんな事を画策していたとは。

余りに違い過ぎる次元の精神性。

それとも生まれ得た時代の差異によるものなのか。

「し、しかし、叔父貴よ。G弾を集中運用されては、それこそ国の再興など水泡に帰すではないですか？」

彼の言う事も尤もである。

半永続的に重力異常を引き起こし、環境を破壊する兵器、G弾。

それは此方側が嫌という程引き起こした、コジマ兵器と何ら変わらない悪夢の産物だ。

オルタネイティブVは、G弾の集中運用を前提に執行される作戦。

「なあに、BETAを地球上から駆逐出来れば、G弾のバラまきなど起こりようもなくなる。環境を残しつつ、邪魔な多民族などは地球から去ってくれば良いのだ！その為のオルタネイティブIVよ！」

「……。お言葉を返すようですが、全てが思い通りに行くとは限りませぬ。世界と例イレギュラー外は決して切り離せぬ、因果の鎖。何人たりとも覆す事は叶いませぬかと」

「くつくつく、それこそ例イレギュラー外が台頭する時ぞ！可能性はソコソコに在るつ！」

「……。失礼致します」

隆文はそれ以上言葉を返さず、静かに部屋を退出する。

——確かに、日本復古は俺とて望んでいた悲願。それは叔父貴と何

ら変わらん。寧ろ、それ自体は有澤全体の総意と言っている。

「だがあの御仁の思想……些かに狂気すら滲ませている。……いや、俺らしくもない！今成すべきは、忌々しいBETAに抗する術を確立する事だ！」

隆文は独り、言葉を零しながら自室へと戻った。

舞鶴軍港を離れ、ギガベースは海を掻き分け突き進む。

—— 1週間後 ——

(推奨BGM アーマード・コア2 BGM Roundabout)

『ミッションの概要を説明いたしましょう。依頼主はオーメルサイエンス社。目標は、廃棄軍事施設の制圧となります。この施設は元々、リンクス戦争時に使われていた施設だったので、戦火拡大の煽りを受け止む無く廃棄されたという過去があります。しかし驚く事に、一部の設備が未だ稼働状態にあり、目を付けた我々が接収する事になった次第です。廃棄施設には、ガードメカを始めとする無人兵器が徘徊している事でしょう、全て排除して下さい。……あの時と比べれば少々地味で報酬も少額ですが、オーメルサイエンス社と繋がりを強くする好機です。そちらにとっても悪い話では、なあいと思えますが？』

自室の端末に送信される、オーメルからの依頼。

特定地での無人機排除という、ありふれた依頼だ。

飛鳥にとって最も得意とし、普段からよく請け負っていた仕事内容でもある。

「確かにあの大規模作戦に比べりや、パツとしない仕事だな。……でも請けるんだろ？」

横から覗いていたユウキに、飛鳥は短く頷いた。

「独立傭兵である僕には、こういう作戦の方が性に合ってます。一々軍部からの指図も受けなくて済むので」

「はは、それもそうか」

「だが気を抜くな。BETAの奇襲も考慮しておけ」

「——でしようね。WS-16Cも装備しておくとしましよう」

以前にも廃工場内で、BETAからの奇襲を受けた事があった。

とにかく生息数が多く、懸念となるのは銃の装弾数だ。

下手に接近すれば密集した戦車級に取り付かれ、装甲ごと食い千切られる可能性もある。

出来るだけ、射撃戦で仕留めたいものだ。

ユウキの横に居たスミカの意見に従い、飛鳥は戦術機用の銃も装備を視野に入れる。

「よし、そうと決まれば、請けましよう！」

飛鳥は意を決し、依頼承諾の意を送信した。

信号を受け取ったオーメル側は、受諾の返信を返す。

その後、何時も通りACの出撃準備を整える為に、席を立ち上がる飛鳥。

「ああそうだ、そろそろお前一人で準備を整えてみるか？いつでも独り立ち出来るようにな」

「……そう、ですね。そうしましょう」

立ち上がる飛鳥に、珍しくスミカから声が掛かった。

彼女の言葉に些かの逡巡を見せるが、飛鳥は承諾しACハンガーへと向かい自室を出た。

「……」

「……」

飛鳥が居なくなり彼の自室には、ユウキとスミカの二人きりとなる。

若い男女が部屋に二人きり。

もしこれが平和な時代であれば、さぞ華やかな物語りが展開されたのだろう、若しくは背筋凍り付く修羅場か。

しかし二人の表情は、硬く険しいものだった。

——飛鳥の気配は感じない。まあ盗み聞きするような奴じゃないしな。

仮に飛鳥が聞き耳を立てようとも、この部屋は安いながら防音処理が成されており外部から会話を盗み聞きする事は叶わないのだが。

「メールが来ましたよ、アイツらからです」

「……全くマメな連中だ……！」

ユウキは携帯用の端末をスミカに見せる。

画面には、メールが映し出されていた。

「……そうか、分かった。今回の作戦が終われば赴くとしようか」

「了解です、スミカさん」

「馬鹿野郎が、今は誰も居ないのだぞ」

「……そうでしたね、セレン・ヘイズ」

嘗てセレンヘイズを名乗っていた、カスミ・スミカ。

二人は何処と無く穏やかな表情で見つめ合っていた。

それは飛鳥にも見せた事の無い、二人だけの確かな繋がり。

翌日、交易所にオーメル陣営の輸送車が到着し、飛鳥達一行はそれに搭乗し現場へと向かう。

それ程遠方ではないのか、予想以上に現場へは早く到着する事が出来た。

「AC『白天翼』起動します！」

慣れた手順でACを起動させ、主脚での移動を開始した。

「外縁部に、直掩機が存在確認できず！」

背部のレーダーユニットが作動し、施設広域をスキャンするものの敵機の姿は無かった。

『了解だ、そのまま施設内部へと向かってくれ。地味な作戦とはいえ未知の地域だ、慎重に行けよ』

「——了！」

スミカの命を受け、飛鳥は周囲索敵を厳にしつつ、施設内部を目指した。

カレード

リンクス管理機構。

リンクス戦争の教訓からか、企業が直接リンクスを所有し運用する方式を改め

カレードを介した共同管理とした。

が、実際は、個体依存性への危険性を知りながらも、捨てることのできないネクスト戦力の魅力

ネクスト無しとした場合の対ネクストへの企業の恐怖感など矛盾への妥協の結果ではない。

しかし、年月の経過と共にその機能・存在意義は薄れ、実質企業専属リンクスが多く存在していた。

今では、リンクスやネクストすら過去の遺物と化している。

だがそれでも、組織や企業は追い求め欲すのだ。

それ程までに魅惑な圧倒的戦力――。

たとえば世界が崩壊の未来を辿ろうとも。

第5話―洗脳級BETA 出現―

MT（マツスルトレーサー）

正式名称は、マツスルトレーサー。

元は各種作業や工作を担う、作業用重機を発展させたもの。

大量生産を意識したことから高性能機を意識したもので、多種多様な派生機が存在する。

量産機は構造が非常に単純で、生産コストも安価に加え、操縦系統も簡略化されている。

それ故に、操縦者の育成が早期に成り立ち好条件と素質が重なれば、僅か数日で戦場に送り出す事も可能だ。

それ等の量産機は、ACを運用するだけの資力の無い傭兵がMTを用いる場合もある。

一部の例外を除けばACよりも安価で数を揃えやすく、企業やテロリストにとっての主力兵器となっている。

性能を特化させた期待は、一部でAC（ハイエンドノーマル）を凌駕する性能を發揮する事もある。

マツスルトレーサー。

この存在は人類にとって、地球外起源種の切り札となり得るだろうか？

（推奨BGM アーマードコア3 ― Bravado）

廃棄施設外縁部に敵の姿は無く、施設内部へとACを移動させた。

内部へはスロープ状の坂道で繋がっており、地下へと通じている様だ。

『高確率で閉所での戦闘となる筈だ、特にBETAとの密集格闘戦には警戒しておけ！』

スミカから通信が入る。

これまでの作戦でも、施設内部は狭く入り組んだ構造で、ACを扱った戦闘は行動に制限が掛かっていた。

もしも、BETAの大群に遭遇すれば、脚を止めての射撃戦か格闘戦に発展するだろう。

彼等は、ほぼ確実に群れで行動し、起動が制限される閉所での戦闘は此方にとって不利に働く。

万が一反応が見られた場合は、すぐさま外部へと退避し、野外戦闘に持ち込むのが得策だろう。

飛鳥は、後方にも意識を向け警戒する事にした。

閉所での挟撃は、危険極まりない状況に陥るからだ。

歩行移動で内部を慎重に探索し、レーダーユニットをフル稼働させる。

「……レーダー反応を認む、ガードメカ……にしては若干違う様な……？」

レーダー波が敵機を察知するが、普段見慣れた反応とは若干の違いが確認された。

『ここからでは、断定できん。更に進軍し、敵を直接スキャンしてくれ』

「了！」

スミカの要求通り、飛鳥は更に内部へと突き進む。

どの道ガードメカは排除しなければならぬのだ。

『システム・スキャンモード』

飛鳥はスキャンモードに切り替え、索敵に特化した形態で探索を続行する。

この形態では戦闘力は著しい制限を受けるが、索敵範囲と精度に拍車が掛かり情報収集には最適だ。

「もう直ぐだ」

レーダー反応が増大し、敵機を示すマーカーが増加しつつアラーム音も激しく鳴り響く。

ACの目の前にはゲートが存在し、近付くと自動的に開閉する仕組みの様だ。

飛鳥が手前まで近付くと、ゲートが開かれる。

やや広めの空間が眼前に広がり、其処には多数のガードメカやMT、ACノーマルが此方を待ち構えていた。

「――敵機発見！これより排除する！」

無人機が一斉に此方に反応し、密集形態で突撃してきた。

「――何だ、こいつ等の動き？それに無人機の筈なのに、僅かな生体反応が……？」

まるで群がる様な陣形で、ACに迫り来る無人機の群れ。

そして、無人機である筈の機体から、微弱だが確かな生体反応が検出された。

「どういう事だ!?ガードメカやMTは、まだ分かる。だけど、ノーマルからも生体反応が……まさか!」

殺到して来るガードメカやMTは、明らかに人が乗るには適していない形状をしている。

故に有人機でない事は、飛鳥にも理解出来た。

だが、ACノーマルに関しては断定しかねた。

人が乗っている有人機の可能性も、否定出来なかった。

『此方でも確認したが、そのノーマルはコックピットブロック非搭載型だ。確実に人は乗っていない!』

AC『白天翼』から送信された画像を、ユウキが解析しノーマルにも人が搭乗していない事実を伝えた。

そのノーマルはGA社製のノーマルだが、コックピットブロックの代わりに制御ユニットが搭載されているタイプであった。

「無人機にも拘らず生体反応あり！オマケに戦術行動を無視した密集陣形……。この動き……まるで……」

『呆けている場合か！奴等はBETAと違って撃つて来るぞっ!』

「——っ！」

(推奨BGM アーマードコア4 —— Blind Alley)

無人機の異様な動きに戸惑う飛鳥。

スミカの叫びが耳を打つと同時に、無人機群が攻撃を仕掛けて来た。

最前衛に陣取っていた浮遊型のガードメカと逆関節型のMTが、機銃を乱射する。

ガードメカからは12.7ミリ、逆脚MTからは20ミリ機銃弾が放たれた。

無数の弾丸がACに殺到するが、狭い通路では十分な回避行動も執れず、各部装甲を穿つ。

「——くっ！——一旦退避する！」

ACの装甲は堅牢で、軽量級ACでも30ミリクラスの弾丸なら辛うじて耐える事が出来る。

飛鳥のAC『白天翼』は中量2脚型で装甲もそれなりの厚さを備え、ガードメカやMT程度の機銃で傷付く事はない。

だが、撃たれ続けるというストレスが彼に耐えず襲い掛かり、飛鳥は堪らず通路からの退避を試みた。

——何てこった！僕とした事が、後手に回ってしまうとは！

出鼻を挫かれる形となり、飛鳥はL字型の曲がり角で待ち構えた。

——敵機接近…、3…2…1…。

モニターに映る敵機マークーと、無人機接近の動作音がコツクピツト内に響く。

「——今っ！」

敵機が姿を現したと同時に、飛鳥は射撃を開始。

右手のWS-16Cを連射で迎え撃ち、次々と殺到するガードメカとMTを順次破壊した。

「——敵機破壊を確認！残りはノーマル12機編成のみ！」

無人機群の最後尾に位置するのは、ACノーマル12機だ。

『野外にて対応しろ！ノーマルの機種はGA社製のGA03—SOLA R W I N D！奴等、ロングライフルで武装してやがる！』

「——了！野外へ脱出します！」

スミカの通達で、ACノーマルには強力な武装が施されている事を知り、飛鳥は出口へと脱出する。

ノーマルの武装は対ハイエンドノーマル用の特殊仕様で、直撃すれば無視できないダメージとなる。

それが複数で一斉射撃されれば、一溜りも無いだろう。

況してや閉所では、動きが制限され回避もままならない。

この場合、開けた野外での戦闘が望ましい。

BETAの介入を懸念しつつ、飛鳥は施設野外へと脱出に成功しノーマル群に備える。

「…そう言えば、さっき撃破した敵機に赤い蠢く物体が密着していたような気がするんですが？」

『——その事か。私も気になっていてな、もし可能なら、その奇妙な物体だけでも回収できないか？』

「…やってみましょう」

L字型通路で敵前衛群を迎撃した際、敵機に奇妙な物体が取り付いていたのを思い出す。

無人機である筈の自律兵器に、生体反応が検知されたのは、その物体が恐らく原因であろう事は容易に想像できた。

原因究明の為に、回収し分析する必要がある。

尤も専門的な設備と知識が必須となるだろうが、それは依頼主に託せば良い。

サンプル譲渡を引き換えに、優先的に情報を回して貰うと云った交渉材料にも出来る。

「——来るっ！」

ノーマル群が直ぐ近くに迫っている事を察知し、飛鳥は左手用ライフル『CRYWH—05R3』と背部武装『CR—WB69RO』の小型ロケット弾も展開した。

そして敵ノーマルが姿を見せたと同時に、AC『白天翼』の全火器

を駆使したフルバースト射撃を見舞った。

左右の銃と肩のロケット弾が、無数の火線を描き敵機集団に吸い込まれて行く。

着弾と同時に大小様々な爆発が巻き起こり、敵ノーマルは次々と粉砕された。

幾ら装甲の厚いGA社製ノーマルと言えども、ハイエンドノーマルのフルバースト射撃を真面に食らえば無事では済まず、残り一機を残り壊滅する。

「敵、残り一機！」

『よし、あの奇妙な物体を確保しろ！』

一機だけ残った敵ノーマル。

やはり人が乗っていないのだろう。

残り一機になろうとも、敵ノーマルは此方に突進しロングライフルの乱射を浴びせてきた。

「——遅いっ！」

敵単体で真正面からの射撃など、飛鳥にとって回避は造作もなく、ブースト移動すら使わずショートステップのみで避け切る。

それと同時に、カウンターで応射を開始。

先ずロングライフルを撃ち落とし、両腕部分を撃ち砕き、肩部ミサイルランチャーと両脚部も破壊し切った。

四肢を完全に腕がれ、残すは頭部と胴体部分のみとなる。

その無残な姿に若干の同情も湧き起こるが、相手は敵で無人機だ、情けは無用。

戦闘力の喪失した敵ノーマルの背部には、赤く蠢く物体が脈動しながら取り付いていた。

——本当は近付くのも嫌なんだが。

生理的嫌悪感を催す薄気味悪い外観をした、生物らしき物体。

飛鳥はACのマニピュレーターで、その物体をノーマルから無理矢理引き剥がし、握り潰さない適度な握力でそのまま掴む。

(推奨BGM アーマードコア2——Roundabout)

「……えく…、確保…成功…でしょうか？このまま掴んでおけば宜しいので？」

『ああ、直ぐオーメルに通達する。気味悪いだろうが、少し辛抱しろ！』

そもそも捕獲自体が即席で思い付いたプランである為、専用の道具など持ち合わせてはいなかった。

スミカは即座にオーメルへと連絡を入れ、直ぐに返信が来た。

『オーメルから専門の捕獲部隊を寄越すそうだ。誤って殺すなよ、追加報酬が減るぞ』

「……早急に来て貰いたいものです」

直接肌で感じ取れる訳ではないが、機体越しとは言え、今もウネウネと蠢く物体を掴んでいるという事実が、飛鳥の嫌悪感を加速させた。

正直叶うなら、このまま手放し止めを刺したいのが本音であった。

——どうでもいいから、早く来てくれ！

そんな飛鳥の願いを知ってか知らずか、予想以上にオーメルからの部隊が現場に到着する。

『お待たせ致しました。では例の生物を此方に……』

捕獲部隊は飛行型ノーマルで構成され、超低空飛行で此処まで移動して来たのだと言う。

確かにBETA光線級が制空権を掴んでいる以上、航空機での移動は自殺行為に等しい。

同じ陸路でも地面ストレスの低空飛行なら、車両を用いるよりも遥かに素早い移動が可能だ。

捕獲部隊は専用のコンテナを展開させ、飛鳥のACは蠢く物体を投げ入れる。

「ああ、気味悪いッ！」

コンテナハッチを閉める迄、蠢く物体はウネウネと動き回り時々飛び跳ねてもいた。

蛭ヒルに似た人間大ほどのサイズに、腹部には多数の触手が生え先端部は

棘状になっていた。

その棘状の先端部で機械に取り付き、自立プログラムを支配していたのだろうか？

専門家ではない飛鳥達には、それは分からなかった。

『調査結果が確認され次第、最優先であなた方にデーターを送信致します。今後もオーメルを御鼻肩に、ではこれにて！』

捕獲部隊は用が済むや否や、すぐさま引き返して行った。

「ま、信用しないで待つておくさ」

スミカは無表情で、去り行く捕獲部隊を目で追っている。

『成功報酬の振り込みを確認、これにて依頼完遂を終了とする…つてな！』

ユウキからの通信で今回の成功報酬が振り込まれた事を確認し、飛鳥達は交易所へと帰路に着く。

「それにしても奇妙な依頼でした」

『全くだ。BETA以外にも、あんなのが居たとはな』

『何にしてもお疲れさん！後処理は俺達に任せてお前はゆつくりと休みな！』

「ええ」

そんな他愛もない会話を繰り返しながらも交易所に到着し、飛鳥達は一日を終える。

—— その翌日 ——

オーメルから約束通り結果報告が届いた。

あの奇妙な蠢く物体は、BETAである事が確認された。

それ単体では戦闘力は皆無に等しく、歩兵の拳銃でも充分死滅させる事が出来る程に、脆弱な構造をしている。

しかし自律兵器に取り付き、その制御回路を支配するという特殊な能力を有していた。

当然、支配された自律兵器は、人類側に牙を剥く恐るべき存在へと成り果てる。

つまり、人類側の無人兵器がBETA側の戦力へと寝返ってしまう訳だ。

そして支配された自律無人兵器を『汚染AI』、蠢く物体を『BETA洗脳級』と呼称されるようになった。

そしてそれ等の情報は、オーメルから『企業連』所属の全企業へと通達され、国家へと広がる事となった。

無人兵器を頼りにしていた組織は、更に頭を悩ませる結果となる。

—— 更に翌日 ——

「二人共、お気をつけて」

「では行って来る」

「余り無茶はするなよ」

カスミ・スミカ、ギン・ユウキの二人は飛鳥に見送られ、交易所を後にした。

二人は、英国圏を本拠地とする軍需産業『インテリオルユニオン』に用があるらしい。

元々スミカは、インテリオルの前身『旧レオーネメカニカ』所属のリンクスであった。

その縁で、知人から呼び出されユウキと共に赴く事となった。

二人は其処で数日間滞在するらしく、直ぐには戻っては来れない。「独りで依頼を受けるのは構わんが、分不相応な難易度に吞まれるなよ?」

「可能な限り用事は早く済ませる積りだが、無茶して死ぬんじゃないぞ!」

「勿論です。二人の教えを生かせるか否か丁度良い機会です」

こうしてスミカとユウキは、輸送車へと移動し目的地へと向かった。

——あの二人の雰囲気、旅行に行くって感じでもなかったな。矢張

り仕事関連だろうか？

二人が居なくなつた後、飛鳥はそんな憶測を立てていた。

「さて、他のレイヴンのアセンブルでも調べておくか」

特にこれといった依頼も無く休暇を兼ね、飛鳥は暇潰しにと他勢力のレイヴン達を研究する事にした。

一般人立ち入り禁止区域に在る、サーバー施設へと移動する。

飛鳥は基本的にどの勢力にも所属していない、所謂根無し草ではあつたが、歴としたレイヴンでもある。

こう云つた機密施設への利用は認められていた。

自室の端末からでもアクセスは出来るのだが何分安物の中古品であつた為、処理速度が劣悪であつた。

そういう意味でも施設の端末を利用した方が、遥かに効率が良いのである。

「お金もかなり貯まつて来たし、そろそろ買い替え時かな」

そんな独り言を言いながらカードキーでセキュリティチェックをパスし、最上階のサーバールームへと向かつた。

—— インド洋・マダガスカル島近海 ——

(推奨BGM マブラヴオルタ —— 軍靴の足音)

AFギガベースは現在40ノットの巡航速度で、目的地へと航行していた。

ギガベース内の作戦会議室で、複数人の上級将校が何やら話し込んでいる。

「洗脳級BETA……か」

ギガベースの所有元である有澤重工業の社長『有澤隆文』は、唸るような低い声でモニターに目をやる。

画面には、赤く不気味に蠢く奇妙な物体が映し出されていた。

数日前、独立傭兵でもあるレイヴンによって捕獲された、まだ見ぬ

種でもある。

無人自律兵器に取り付き、人類へと嗾ける特性を持つ。

取り付かれた自律兵器は『汚染A I』と呼ばれるようになった。

それを皮切りに、世界各地で遭遇例が相次ぐようになっていた。

「これで人類の敵は、B E T Aだけでなく汚染A Iとやらも追加されたという訳ですか？」

「この戦闘記録、アテになるのですか？」

「コンピュータの、モデル映像ではないのかね？」

「いえ、歴としたリアル画像です！」

帝国海軍将校や陸軍将校の間で議論が交わされていた。

モニターには、飛鳥が戦った廃棄施設での映像が映し出されている。

この戦闘記録：提供されたオーメルが独占しても良かったが、イメージアップと信頼拡大の為に、敢えて未編集のまま各地へと拡散させたのである。

故に、当時の戦闘内容がそのまま記録されており、当然会話内容までもが赤裸々に彼等に届いていた。

「この『飛鳥』と言う少年の素性はさて置き、未編集で送信されたこの記録、信用に値するのではないでしょうか？」

「あたしも同意見だわ。もし本当だとすると、これまでの対B E T A戦術も見直しが必要となるかもね」

五撰家の一角、崇宰たかつかさ 恭子きょうこと香月こうげつ 夕呼ゆうこは、その戦闘記録に支持を表明した。

自律無人機は大半のB E T Aとは違い、多種多様なバリエーションが豊富に存在する。

浮遊するメカ、高機動特化型、そして殆どの自律兵器は飛び道具を有している点だ。

それ即ち、射撃を仕掛けて来るといふ現実に直面するのである。

しかも射撃は、実弾兵器が圧倒的割合を占めた。

「つまり今後は、対実弾射撃戦も考慮した運用を構築しなければなりません」

兵器の研究開発を担う筈たかむら まさただ 祐唯も、汚染AIに深い警戒感を示す。「何はともあれ、先ずは他企業の兵器も入手し、研究開発を推し進めねばなりませんな」

「左様。有澤重工の兵器も悪くありませんが、如何せん偏りが見受けられますからな」

有澤重工は、車両と榴弾技術に優れた企業で、産出される兵器もそれに準じたものが多い。

しかし、MTやACノーマルも車両型に特化し武装にも榴弾特化型と云った、明らかな隔たりがあった。

帝国本土がBETAの脅威に晒されている現在、あらゆる可能性を模索しなければならぬ程に状況はひっ迫していた。

故に他企業の兵器を入手し、研究開発を推し進める必要に迫られていたのである。

特に、光学兵器開発に重きを置く『インテリオルユニオン』は、新たな可能性を模索するのに打って付けの相手と言えた。

一応GAグループとは敵対関係にはあったが、BETAという共通の敵が存在し且つ純粋な取引ともなれば、インテリオル自身もそれ程頑なな態度は示さなかった。

尤も思わぬ処で——騙して悪いが——をされる可能性はゼロではなかったが……。

光学兵器開発に優れるインテリオルの技術を手でできれば、光線級に対しても対応の幅が拡大できる。

光学兵器の技術を有しているという事は、対光学技術にも優れているという事だ。

インテリオルの開発する製品は対光学防御に優れる品が数多く、傘下企業にはコジマ技術に優れた『トラス社』も控えている。

光学技術に後れを取っているGAグループには、是が非にでも入手した技術だ。

当然それに見合う代価を要求されるであろう。

此方も出し惜しみせず、ありとあらゆる技術と製品を提供しなければ、交渉は成り立たない。

下手をすれば、此方が下手に出る事も吝かではないだろう。ある意味、有澤陣営も捨て身の覚悟で挑まねばならなかった。

「全く、我が社の兵器の何処が不満だと言うのか。不愉快千万だ！」
「まあ社長、今度ばかりは我慢して下さい。企業だけの問題ではないんですから」

「フンっ！」

「「ははははは……」」

少々不満気な隆文を、重役や帝国軍人たちが宥めに掛かり、会議室は少しばかり和んだ空気が変わっていた。

「……こうしている間にも、大陸では多くの同胞達が——」

崇宰恭子の隣に居た独りの女性衛士が、静かに口を開く。

彼女は赤い軍服に身を包み、五摂家を守護する有力武家『如月家』の者であった。

「今は堪えて、如月きさらぎ佳織かおり。忍従の時なの」

「——ハッ！」

大陸：アジア東方面では、人類とBETA群との激しい戦いが繰り広げられていた。

その中には当然帝国軍人も含まれ、斯衛軍人も多くが参戦している。

戦技向上と技術研鑽のという名目ではあったが、日々寄せられるのは戦死者の名義だけだった。

実際戦況は芳しくないのだろう。

如月佳織という女性衛士は、使命感と厳格さを併せ持った人物で、本音を言えば大陸側の同胞達を支えたい想いを募らせていた。

つい本音を漏らし、恭子に窘められてしまった。

普段軍務中において、その様な素振りは一切見せない彼女ではあったが、このギガベース内は有澤重工が運営している。

此処では普通の軍規も多少緩和されているのか、彼女自身も知らず知らずの内に気が緩んでしまったのだろう。

だが正直な処、大陸戦線に参加したいのは彼女だけではなく、他の軍

人達も同じ想いを抱いている者は多かつた。

しかし、此方には此方の役割が有る。

技術を入手し、それを持ち帰り、BETA襲来へと備える。後に続く後進の為にも。

ミミル軍港に到着した後は、陸路で欧州と朝鮮半島を横断する計画だ。

その際、大陸戦線にも介入する予定ではある。

その時期が来る迄、今は堪える必要があるだろう。

如月佳織は、今の役目に最善を尽くす事にした。

それから数日後、ギガベースは長い航海の時を経て、イギリス圏に在る巨大軍港『ミミル軍港』へと辿り着く事が出来た。

しかし構造が複雑な入り江をしたミミル軍港。

既存の艦船を遥かに凌ぐ巨大なギガベースは軍港近海で駐留し、施設までは小型船で向かう事になった。

—— 数日後 ——

(推奨BGM マブラヴオルタ —— 戒厳令)

ミミル軍港の一角に在る部屋にて。

机を挟み、数名の人物が向かい合っていた。

片方は、赤や山吹色の軍服を纏った、日本帝国所属の軍人達。もう一方は、一組の男女。

双方から発せられる、張り詰めた空気。

皆が皆、鋭い目付きで互いを見つめ合っていた。

いや、睨みを利かせていたと言った方が正しいか。

赤い軍服の青年が口を開く。

「やはり我等に付く気は無いと言うのだな」

涼やかながらも鋭き刃の如き眼光で、眼前の男女を見据える。

「そういう事だ六郎、諦めな！」

「——貴様あ！仮にも有力武家である真壁様に向かつて——！」
男の方はぶつきらぼうに流し、山吹色の軍服を纏った軍人が激昂する。

「真壁介六郎よ。お前達の要望通り、パーツは揃えてやった筈だ。それに加え、まだ要求すると言うのか？」

女の方も言葉を付け加えた。

彼女の言葉を要約すれば、パーツ単位で分解したACネクストを用意しておいたという事だ。

五摂家の一角、斑鳩家当主『斑鳩崇継』は密使を送り、彼等と幾度か接触を図っていた。

ACの最高潮に位置する超兵器『アーマードコア・ネクスト』を手に入れ、戦力化させる為に。

「ギン・ユウキ、お前も誇り有る日本人なのだぞ。帝国と…、我等と轡を並べるべきだ！」

「…確かに、幾らネクストを入手した処で、AMS適性が無ければ何の意味もない。ネクストとリンクス、両者が揃って初めて機能する。…ま、専用の設備とコジマ対策が必須となるけどな」

「その通りだ。お前達を送ってくれた専用の検査機で、あの御方にもAMS適正がある事が判明した」

「そいつあ、すごい！俺なんか必要ないだろ？」

何度目かのやり取りで、ユウキ達から帝国へAMS適性を簡易的に検査する機器が、斑鳩家へと送られた。

試しに崇継が検査した処、高くはないが中程度のAMS適性が備わっている事が判明したのである。

しかし、適性があるからと言って、リンクスとしてネクストを駆るという事は、心身共に莫大な負荷を強いる事になり、様にリンクスは短命であると言われていた。

「斑鳩公が聡明である事は、私でも理解出来る。それ程の男が、悪戯にコジマ汚染を引き起こすとは考え難いのだが？真壁介六郎よ」

ユウキの隣に居た女、カスミ・スミカは斑鳩崇継の真意を問い質そうとしていた。

汚染を引き起こすと知りながら、何故ネクストを欲するのかを――
「カスミ殿、あの御方は安易にACネクストを運用する気などは、ありませぬ。全ては帝国と愛しき国民の為、茨の道を歩もうとしておられるのです」

介六郎は思い返していた。

斑鳩崇継は、自らの身体を実験台としAMSの致命的負荷を軽減または中和させる方法を模索していた。

物理的に機械と肉体を接続していた訳ではないが、疑似接触だけでも相当な負荷を強いられ、普段掴み所のない崇継が苦痛に喘いでいた。

――あの方の痛ましいお姿、これ以上見るに堪えぬ！

「だからと言って、俺達がそっち側につく理由にはならんぜ。俺はもう……リンクスとして戦場に立つのは御免だ」

「……どうしても……か……！」

「……どうしてもだ……」

二人の思惑は交差する事なく、並行を辿り続ける。

――致し方なし、か。

介六郎は、譜代武家の側近達に目配せをし、彼等も視線だけで応える。

出来得る事なら、使いたくはなかった最終手段。

武力行使――。

いつの時代、何処の世界でも、望みを叶える為に行使する最も安易な装置。

如何にこの二人が歴戦のリンクスであったとしても、生身での白兵戦はどうだろう。

山吹色の彼等は、数ある武家の中でも上級に位置する武人の集まりだ。

武芸、学問共に高水準を納め、単独でも統率を執れる程に優秀さを持つ。

況してやそれが6人――。

部下達は一瞬の内に、その場から消えた――。

――かに見えた。

「……馬鹿な……」

介六郎は信じられないといった、驚愕の表情を浮かべている。

「……うううう……、あああ……」

「か……らだ……が……」

「き……貴様……何を……した……」

「う……うぐ……かな……い」

「お……己……れえ……」

「こん……な……事……が……」

机を乗り越え、ユウキとスミカに対し確保を試みた、斯衛の衛士たち。

しかし彼等は全員、床に倒れ伏し動かぬ体を必死に起こそうと藻掻いていた。

「安心しな、痺れているだけだ」

ユウキは椅子に座ったままで、忍ばせていた拳銃をチラつかせていた。

彼が使用したのは、個人携行用の電磁パルスガン――。

暴徒鎮圧用に、或いは護身用に開発された非殺傷武器だ。

――あり得ん！厳選した手練れが、いとも容易く！

僅か一秒未満でユウキはパルスガンを抜き、斯衛衛士全員を撃ち抜いていた。

瞬きする間に部下が全滅した事に、介六郎は狼狽えていた。

「こ……これが、リンクスの力だともいうのか……!?!」

「あく……まあリンクス全員が、こうって訳じゃあない。俺達も伊達に修羅場を潜ってはいないってこった！」

「では我々は帰るとする。あの男にも宜しく言っておいてくれ」

ユウキとスミカはゆっくりと席を立ち、部屋を後にしようとする。

「――ま、待て！待ってくれ！」

介六郎も透かさず席を立ち、二人の前に回り込んだ。

「頼む！力を貸してくれ！これ以上……これ以上あの御方に、重荷を

背負わせたくはないんだ！」

深く頭を垂れ、彼は二人に懇願した。

「わ……我々からも、お頼み申す……」

「ど……どうか、御助力を……」

「帝国の……曳いては……力無き人々の……為に……」

ユウキのパルスガンで、未だ回復し切っていない斯衛達。

しかし痺れる身体を必死に押し、ユウキ達に懇願する。

「……」

ユウキは無言で介六郎に視線を向ける。

「頼む！ユウキ！」

尚も面を上げる事なく、頼み込む介六郎。

「……卑怯者め、ホラよっ！」

「……？」

暫しの後ユウキは、或る物を投げて寄越した。

介六郎には、一枚の記録媒体が有った。

「あの男の事だ。精神負荷やコジマ汚染を排除した高性能機の技術開発に着手しているのだろうか？」

スミカは、斑鳩崇継の成そうとしている事を推察する。

「——！知っていたのか？」

「まさか。ただあの男なら、その位は画策するだろう。そう思っただけだ」

「その媒体に、必要としている情報が詰まっている筈だ。後は自分達でやりな！」

ユウキか寄越した記憶媒体——。

それには、今迄リンクスとして活動してきた記録や生体情報、ネクストのデーター等が記録されていた。

「俺は首輪」から解放された。同時に、新たな枷を自ら課したんだ。俺には俺の道がある、残念だがこればかりは譲れないのさ」

「ユウキ……」

介六郎はユウキの目を見る。

彼の過去に何があったのかは、よくは知らない。

しかし、何処か哀しみと何かを模索しようとする決意だけは、彼にも伝わって来た。

「それじゃあ今度こそ俺達は行くぜ。また生きて会えたら、何処かで飲もうや、六郎ー!」

「斑鳩公に伝えておいてくれ。我々を信頼してくれた事、誇りに思う……とな」

「ユウキ…、カスミ殿……」

こうして二人は部屋から立ち去り、真壁介六郎を含めた斯衛衛士達だけが残された。

「……真壁様、追跡致しましたようか?」

痺れから回復した衛士達。

「もう良い。ただでさえ、ネクストのパーツ一式を揃えてくれた上に、生体情報まで頂いたのだ。これ以上の高望みは外道に値しようというもの。……任は果たした。ギガベースへ戻るぞ!」

「……ハッ!」

——また会おう、ユウキ……!」

介六郎の顔に僅かな笑みが零れ、一行はギガベースへと帰還した。

(推奨BGM アーマードコア3 Silent Line ——
Mode)

「貴社の技術を以てしても、戦術機への光学兵器搭載は容易ではないと?」

「ええ。搭載自体は概ね成功しているのですが、実戦での運用にはまだまだ課題が山積みです」

戦術機開発を生業とする技術仕官、篁裕唯の問いにインテリオルユニオンの女性社員が答えた。

彼女の名は、ウィンDファンション。

嘗てカロード上位ランカーのリンクスとして、数々の戦場を渡り歩いてきた企業専属の傭兵であった。

現在はリンクスとしてでなく、一社員としての新たな人生を送って

いた。

ミミル軍港の一区域に、崇宰恭子を始めとした斯衛軍の士官たちが集結し、数名のインテリオルの社員が応対していた。

「搭載には成功と仰っていましたが、どの様な問題が発生したのです？」

五大撰家の崇宰恭子が、現在の問題点を訪ねる。

「此方の映像を、ご覧下さい」

ウインドが指し示すモニターには、見た事もない銃を装備した戦術機が映し出されている。

『F-5E ADV トーネード』と呼ばれる戦術機に、『YWH07-DRAGON』と言うレーザーライフルが装備されていた。

この武器は機動戦を想定した光学兵器で、エネルギー消費が非常に軽いという特徴があった。

間も無くして、戦術機がスラスター移動を開始しながら射撃を始める。

するとどうだろう。

10発と撃たない内に、跳躍ユニットの噴射が停止し戦術機の動きは停止する。

「ん？推進剤の枯渇か？」

篁裕唯の言に、軽く首を振るウインド。

「いえ、パワーダウンとシステム障害を同時に引き起こしたのです」

モニターに移る戦術機は、停止したまままで再び動き出す気配はない。

射撃とそれに伴う動作の為にエネルギーが武器に持って行かれ、機体の稼働エネルギーが不足してしまっただけに起きた現象である。

原因は至極単純。

エンジンユニットの出力不足に起因していた。

元々、先程の光学兵器もACの運用を想定し開発された代物だ。

ACのジェネレーターと戦術機のエンジンユニットとは、設計思想も構造も根本からして違う。

かと言って、ACジェネレーターを戦術機に無理やり積もうものな

ら、その莫大なパワーに耐え切れず、配線が焼き切れ、部品単位で熱暴走や損耗を引き起こし、最早使い物にはならないのであった。

「正直私も、この様な装備でBETAに挑みたくはありません。間違い無く、餌にされてしまう事でしょう」

ウインDは、苦笑いを浮かべる。

「うむ。——となれば、構造そのものを見直すしかない訳か。下手に現地改修し搭載が実現した処で、実戦で使い物にならないのでは……」

篁裕唯は顎に手を当て、深く思案に耽る。

「映像の銃よりも、負荷の軽い武器は幾つか存在します。それ等なら或いは……」

ウインDが言うには、今の銃よりも小型且つ負荷の軽い武器が幾つか存在するようだ。

「待って、篁少佐。何も光学兵器に固執する必要はないわ」

「——と、言いますと？」

崇宰恭子の言に、裕唯は視線を向けた。

「幸い現行の火器でもBETAには充分抗し得ているわね。何かを削り戦術機の機能を犠牲にするよりは、アクチュエーター ジェネレーター電装系や主機の強化開発に目を向けるのも、一つの選択肢ではないかしら。我々当面の目的は、対光学兵器への技術と機体性能そのものを向上確立させる事、そうよね？」

インテリオルの技術は、何も光学兵器だけではない。

それに連なる、稼働エネルギー効率や電装系、そしてアビオニクスと云った各種技術も高い水準を確立している。

「……………、言われてみれば確かに」

——ほう、流石は五大撰家の一角。唯のお嬢ちゃんではないという事か。

恭子の言葉に裕唯は頷き、ウインDは彼女を値踏みしていた。

「早速購入手続きに入りたいのですが、宜しいでしょうか？」

「畏まりました。直ぐに専門の職員に対応させましょう」

ウインDは恭しく頭を下げ、担当の職員に対応させる。

恭子ら一同は、モニタールームを出て別の場所に移動した。

しかし一人の衛士だけは残り、部屋にはウインDとその女性衛士だけとなる。

「……………」

「……………」

両者は互いに無言で鋭い視線を交わす。

「…恭子様を値踏みしていたようだが、余り調子に乗らない事だ。本来なら貴様如きが、口を交わす事もままならぬ身分なのだからな！ウイン・D・ファンションとやら！」

「…くくくくく、井の中の蛙というやつか？小娘！」

「貴様……………」

両者の空気は急激に張り詰め、殺気すら放ち始めていた。

「惜しいなあ、カオリ！キサラギよ！」

「なに?！」

烈火の如き殺気を溢れさせていた両者ではあったが、意外にもウインDが先に殺気を解いた。

「この際ハッキリと言ってやろう。あの崇宰という女よりも、貴様の方が遥かに指導者として向いている。要は強者であるという事だ」

「…………何を言い出すかと思えば戯言を」

如月佳織は、ウインDの言葉を一蹴しようとしたが、彼女は構わず言葉を続ける。

「あの女、平穏な時代なら才覚を遺憾なく発揮できただろう。だが型を外れ、我道を往くという事には、不得手の様に思えた。確かにあれは優れた人間だ、それは私も認めている。しかしだ……、真に追い詰められた時、あの女は決断を下せるのだろうか？」

「……………斯衛としてでなく、一人の人間としてなら完全に否定はせん」

「ほう」

「だがな、人は絶えず変わり行く！恭子様も、私も、貴様もな。貴様とて、生まれつき強者だった訳ではあるまい？たとえ何人がどの様な言を紡ごうとも、我が道は変わらん！それが我が覚悟、斯衛の矜持だ！」

あくまで有力武家として、そして帝国軍人としての道突き進む如月佳織。

「……そうか。……ま、今のは私の独り言だ。では私はこれにて失礼するよ、カオリ嬢キサラギ殿？」

少しばかり無言でいたが、ウインドはそのまま如月佳織の横を通り過ぎ、出口へと移動する。

如月佳織も無言のまま部屋を出ようとした。

「好きに生き、好きに死ぬ。そんな道も在るのだぞ？」

「——既にそうしている！」

去り際、ウインドから投げ掛けられる言葉。

しかし、佳織は振り返る事なく部屋を出た。

——武家の女として好きに生き、武家の女として好きに死んでやるさ！それが私の歩む道なのだから……！

有力武家として、五摂家を補佐し守護する使命を与えられたのが彼女だ。

他人からどう見られようと、彼女の意思は揺らぐ事は無いだろう。

新たな決意を胸に、彼女は恭子達の後を追う。

如月佳織、ウインドファンション。

もしも平穏な時代にこの二人が出会えば、彼女等は良き友人同士になれただろうか？

そのの応えられる者は誰も居なかった。

その後、企業や官僚たちの会合は続き、互いの技術交換や物資の取引、今後の協力関係などを確認し、時が過ぎ去っていった。

国家の統治能力低下に伴い、多数の顕著化したテロや暴動は、主力兵器に遊撃戦適正を求めるようになり、そこで開発されたのが、“圧倒的な火力、制圧力を実現する人型汎用兵器”すなわちノーマルである。

開発当初は単にAC（アーマードコア）と呼称されていたが、ネクストの登場により区別するために、ノーマルと呼ばれるようになった。

アルドラ社のアクチュエータ複雑系と、レイレナード社の実用燃料電池の新技術により開発された。

戦闘力は一部の新型や特化型を除いてネクストやハイエンドノーマルには遠く及ばないが、企業の主力部隊の量的中核である。

パーツ換装に於いては、同一企業間のみ融通が利くというものであり、ネクストやハイエンドノーマルに比べ、比較的自由度は低下している。

一方で、ネクストと異なり量産に向き、企業軍の量的な中核という地位は健在であり、コロニーあるいは武装勢力のレベルでは、ノーマルが未だ最強の部類に属する。

第6話―投石級BETA 出現―

ミグラント

交易を生業とする「運び屋」たちの総称。

各種の生活必需品を運ぶ行商人としての役割を担う一方、武器や弾薬などを扱う死の商人でもある。

主に大型の輸送ヘリや車両で移動し、各地を転々とする。

運び屋行商を主な生業とするが、時に武力を売り込むミグラントも存在し

ときに傭兵として振舞う者も存在する様だ。

“渡り鳥”や“移民”といった意味合いを持つ。

『ミッションの概要を説明致します。ミッション・オブジェクティブは、ユニオン輸送部隊の支援及び護衛です。輸送部隊は欧州西方から大規模交易所まで東進します。しかし近年脅威と化している、BETA群の襲撃が予想され、護衛戦力抜き突破は極めて困難となるでしょう。従って、貴方には先行してもらい進行ルート上のBETA群を駆逐して貰いたいのです。勿論、複数の友軍機を同行させていますので御安心を。ユニオンは、貴方を高く評価しています。よいお返事を、期待していますね』

端末に送信された依頼を確認する飛鳥。

「インテリオルユニオンか。そう言えばユウキさん達が、インテリオル傘下の拠点に出かけたきり、連絡が来ないな。……あの二人の事だ、無事だとは思うけど、請けてみるか」

報酬と作戦内容を再確認し、身の丈に合っているかをシミュレート

した。

「輸送部隊の向かう先って、……この交易所か！一体何を運んでいるんだ？」

護衛対象の積み荷が些か気にはなるが、飛鳥はこの依頼を受ける事にした。

レイヴン試験に合格して以来、スミカとユウキのサポート無しで依頼を遂行するのは、久し振りであった。

——もうあの時とは違う。そもそも本来は、一人で依頼を完遂していくのが、独立傭兵としての在り方だ。

過去に、ユウキから告げられた事がある。

——いつまでも、お前の傍に居られんぜ——

——本当に一人立ち出来るか否か良い機会じゃないか、やってやる！

何れは一人で生きていかななくてはならない。

彼等との出会いは偶然で、サポートを受けられたのは幸運が重なった結果と言えよう。

本来なら、他の傭兵達は一人で依頼を遂行するか、企業に斡旋されたオペレーターや整備士を雇う事で、サポートを受けていたのである。

カスミ・スミカのように、非常に有用な戦術や追加報酬の交渉などを受け持ってくれる事など、先ずあり得ないのだ。

——正直僕は恵まれ過ぎていた。今一度、性根を叩き直すべきだな。

飛鳥は己を律し、ミッション承諾を送信し請け負う事にする。

受諾の手続きを済ませた飛鳥は、自室を出てAC出撃準備を整える事にした。

出発は明朝。

「資金には余裕があるな。たまには奮発して、先に美味しいモノでも食うかあ！」

ユウキやスミカも居ない。

作戦前の景気付けにと食堂街へ脚を運び、少々贅沢な食事を楽しむ事にした。

—— 作戦当日 ——

交易所まで迎えに来たインテリオル所属の輸送車にACを格納させ、飛鳥は作戦現場へと向かった。

—— 大規模な作戦が増えたな。

現場には、MTやノーマルといった部隊が集結していた。

殆どは自分と同じく、雇われのフリーランスなのだろう。

機種に統一性が無く、フロートタイプや飛行特化型のノーマルも存在している。

BETAが存在してからというもの、明らかに共闘任務が増えた様な気がする。

レイヴン成りたての頃は、単独作戦が圧倒的割合を占め、同業者と共闘するという事など殆どなかった。

護衛対象は、大型の輸送装甲車で10台以上にも上る。

何が積んであるのかは知らないが、BETAにとっては格好の獲物となるに違いない。

だがインテリオル専属の護衛部隊には、あの『多連装レーザーキャノン』を搭載した機体が幾つか見受けられた。

以前、実験兵器の実地運用試験でお目に掛った事がある。

当時、万を超えるBETA群に襲撃されたが、試験兵器が真価を發揮し殆どを殲滅できた。

かなり小型化されている。

4脚型ノーマルや車両型MTに搭載されていた。

—— BETAの群れは脅威だが、アレが有るなら少しは心強い。
飛鳥のAC『白天翼』は、面制圧に適した装備^{アセンブル}ではない。

プラズマキャノンやグレネードで武装する選択肢もあったのだが、下手な重装備は重量過多を引き起こし、著しく機動性を損なう。

だが今後は、火力重視のアセンブルも視野に入れておいた方が良さ
だろう。

『それでは総員、配置に就いて下さい。ミッションを開始します』
インテリオル専属のオペレーターが作戦開始を宣言し、各機は配置
に就いた。

飛鳥は事前説明の通り最前衛の配置となり、進行ルート上の障害を
排除する役割を担う事となる。

一見貧乏くじの様だが、インテリオルは彼に対し、それなりの評価
を下していたのだ。

過去に、クレイドル墜落現場の調査くオメール・ソ連軍の光線級漸
減作戦の戦果を記録しており、彼はそこそこの注目を集めていたの
である。

『それではレイヴン、良い働きを期待しています』

「——アー！こちらACC『白天翼』、状況を開始します！」

オペレーターの声を合図に、飛鳥はブースターを吹かし先行を始め
た。

飛鳥の初動に呼応するように、各部隊も進行を開始する。

……

暫くの間は特に反応もなく、進行は順調といえた。

「……………」

レーダーユニットには何の反応も示す事無く、時間ばかりが経過し
てゆく。

——そろそろ、BETAなり汚染AIなり出現してもいい頃なん
だ
が。

別に好き好んで敵と戦いたい訳ではない。

何も無ければ無駄に弾薬費も損傷も負わずミッションを達成し、成
功報酬を受け取る事が出来るのだ。

寧ろそれが理想であろう。

しかし飛鳥の経験上、そんな肩透かしを食らう依頼など、これまで
皆無であった。

——……、試しに飛び上がってみるか。

飛鳥は、ブースト推力を上げ飛翔高度を上げる。

——高度100:150:200:300:350:...

ぐんぐん高度を上げ、周囲に頭部カメラを向ける。

——これだけの積み荷だ。仮にBETAでなくとも、無法者のミグラントや武装勢力が狙っていても不思議じゃない。

『レイヴン! ——圧が来たか!』 高度を上げ過ぎです!』

奇しくも圧迫感の察知とオペレーターの警告が同時であった。

その瞬間、或る方角から多数のレーザーが飛来する。

「——居たぞ! 2時の方角、光線級のレーザーだ!」

一斉に60を超えるレーザー群がACを墜とせうと、地上から照射された。

「——レーザーの数は約60!」

初期照射を受けるまでもなく、飛鳥は一気に高度を下げレーザー群を回避した。

「BETAの総数は不明! 故に、これより接敵し総数の把握と駆逐に移行する!」

『此方オペレーター:…って、ええっ?! 正気なの貴方!? 無茶よっ!』

オペレーターは新人なのだろうか?

飛鳥の提案に素っ頓狂な反応を見せ、制止を試みた。

「——規模が分かれば、それだけ対策も立て易い筈です!」

当然飛鳥は、考えを改める気など毛頭ない。

(推奨BGM アーマードコア3 —— Artificial Sky
y i i i)

一旦地上へと降り立ち小ジャンプ移動とブーストドライブを駆使しながら、光線級が居ると思わしき地点を目指した。

小高い岩場や崖を乗り越え、それを蹴り込み更に推力を得て突き進む。

「——よし! レーダー反応有りを認む。BETA突撃級多数ツ! 数の把握はそちらに一任する!」

ACのレーダー波がBETA突撃級の群れを捉え、モニター上に赤点で表示され始めた。

唯、余りに数が多く、とてもではないが数えながらの戦闘起動は不可能だ。

生息数の把握をオペレーターに一任するも――。

『え、え……ええつと！数は……どうするんだっけ……！』

――……なにやってんだ？あの女！

やはり経験の浅い新人なのだろう。

口調も感情的で、声音もかなり幼い感じがする。

オペレーターはアタフタしながら、困惑するばかり。

――……スミカさんの有能さが証明されたな。

飛鳥はこの時点でオペレーターをアテにするのを止め、独自の判断で動く事にする。

「こちらレイヴン！光線級の撃破を優先する！」

飛鳥は低空飛行で、突撃級スレスレを跳び越える。

そして低高度を維持しながら、上空後方から戦術機用の突撃砲WS

―16Cの弾丸をバラ撒き、突撃級を撃破しつつ光線級を目指した。

――かなり居るな、ざっと見積もっただけでも6000は確かか。

目測で生息範囲を計算し、6000以上と憶測を立てる。

この分だとBETAの総数、10000以上は存在するだろう。

突撃級の大群を抜け、次に要撃級の大群が此方に殺到した。

――こいつ等撃ってこないのが、せめてもの救いだ。

以前の戦術で凌ぐ事を選択し、まずは食い縛った歯に似た部分を銃撃で破壊する。

飛鳥は三点射で、並み居る要撃級の顔部を次々と破壊した。

絶命には程遠いが、感覚器官を優先して破壊すれば著しい戦闘力減衰が期待でき、後続の部隊が容易に止めを刺す事が出来る。

「よし、頃合いか。後は光線級を――っ!?何だっ!」

群れを成す要撃級の戦闘力を軒並み減衰させ、光線級を目指そうとした矢先である。

突如として、コックピットから警報が鳴り響いた。

——何だと、対空警戒つ!?まさかBETAが空をつ!?
一旦要撃級から距離を放し、カメラを上方へと向ける。
映像を拡大し、空から丸まったナニカが降って来た。

「オペレーター、聞こえますか!?状況を把握したい!何が起こってるんです?」

『——そ、そんな事アタシにだつて分かんないわよっ!』
半ば逆上気味で、叫び出す新オペレーター。

「……」

——アテには出来ないか。

『もう一体何なY…つて、え!?ちよつ…』——どけっ!』なにすん…
きやああっ!!』

「——?」

管制室で何かあつたのだろうか?

新オペレーターの短い悲鳴が聞こえ、何やら争う音が此方にまで
伝わる。

『飛鳥、気を付けろ!上空からBETA戦車級が来るぞっ!しかも大
量だ!』

「——了っ…つて、その声…スミカさん?何でっ!」

唐突に真面な指示が来たかと思えば、彼の良く知る声に驚きを隠せ
ない。

『後で話す!先ずは対空射撃で迎撃しろっ!それと突撃級の幾つかが
反転してお前に向かっていて、気を付けろ!』

「——了、お任せを!」

心強いスミカからの指示で、対空射撃体勢に映る。

何故、BETAが空から降って来るのかは定かではない。

上空に、飛行型BETAでも居るのだろうか?

だが、それを調べるのは後で良い。

今は赤く丸まり降り注ぐ戦車級を迎撃するのが先だ。

「撃ち落とすっ!」

両腕に装備した火器を駆使し、上空の戦車級を次々と撃ち落とす。
しかし火器が足りず、幾つかの戦車級は地面へと着地し、飛鳥のA

C目掛けて迫って来た。

後方から反転した突撃級の群れ、周囲は着地した戦車級、前方は要撃級の大群、最も手薄なのは皮肉にも…上空だった。

——不味いな！強行突破して、仕切り直すか？

このまま包囲されたまま戦闘を続けるのは、ハイエンドノーマルと言えども不利だ。

更に地形は凹凸に富み、岩場や窪みと云った障害物も周囲に広がり、平地は乏しい。

安易なブースト移動は制限され、機動性が損なわれてしまう。

「こうも入り組んだ地形では…：…ん？入り組んだ地形——!？」

何かが閃いたのか、飛鳥は周囲にカメラを向ける。

『少しは成長した様だな。お前の技量なら僅かな障害物をも足場にして、ブースト^壁ドライブ^蹴で切り抜けられる筈だ!』

周囲には壁蹴りに利用できそうな、障害物が幾つも存在していた。

これ等を駆使すれば、迫り来るBETAの包囲網を突破する事は可能だ。

尤も、それを実現するには一定水準の操縦技量と練度が必要不可欠となるのだが。

「——やるしかないっ!」

迷っている暇は無い。

足元にまで戦車級が迫っている。

戦車級がACに取り付こうと掴み掛るが、振り上げた腕は空振りに終わった。

飛鳥は小ジャンプで障害物へと跳び込み、蹴り込みながらブーストを吹かしブーストドライブ。

岩場や大地を次々と蹴り込み連続ブーストドライブで、一路光線級へと向かった。

『そうだ！お前が率先して引き付ける必要ない。後続の連中に仕事をさせればいい』

——そうだな、友軍をアテにするでしょう。

そのまま障害物を伝い、光線級へと迫る。

そろそろ障害物が疎らとなった途端、またもや上空から反応があった。

『警戒しろ！空から要撃級だ！』

「——なっ!？」

ほんの数体だが、今度は上空から要撃級がAC目掛けて降り注ぐ。飛鳥は反射的にブースターを吹かし、回避起動しながら高度を上げてしまった。

高度を上げるといふ事は——。

「——ぐあっ!しまったっ!」

空中の獲物^AをBET^CAが見逃す筈も無く、光線級の放ったレーザー照射を受けてしまった。

白色に輝く光線が装甲を焼き溶かし、徐々に赤熱化が始まる。

『——落ち着け!直ぐに射線軸をズラせば良い!』

「——!!」

飛鳥は直ぐにハイブーストで、機体を軸移動させレーザー照射から逃れた。

光線級の放つレーザーは、尚もACを捉えようと追い続ける。

飛鳥は一旦高度を下げ、障害物の多い地形に身を忍ばせ、近くの岩場に不時着した。

「あ…危なかった…」

何とかレーザーの奔流から逃れ、息を乱す。

『良いか!光線級のレーザーは初期照射で目標を補足し、後に数秒で最大出力で仕留めに掛かる。つまり最大出力に達する前に、射線から逃れれば十分回避は間に合う。これは戦術機にも採用されている最も基本的な回避方法だ。戦術機よりも装甲に優れたACハイエンドノーマルに出来ない道理は無い、よく覚えておけ!』

「りよ、了…介です!」

余程の軽量級ACでもない限り、装甲防御は戦術機よりも優れているのが、ACハイエンドノーマル。

対光学兵器に重きを置いたアセンブルなら、重光線級のレーザー最大出力でも約10秒は耐えられる。

飛鳥が、依然オーメルから支給されたレーザー回避プログラムがあつた。

当の本人は、撃たれてから警報が鳴るといふ仕様に憤り、欠陥品扱いしていたがそれは大きな思い違いだ。

実際は、初期照射の時点で熱源センサーが感知し、その情報を頼りに危険警報を促す仕組みとなっていたのである。

——成程、オーメルのあのプログラムは欠陥品ではなく、真面に機能していた訳か。だが、初期照射でも被弾し損傷を負う事には変わらない。

「——ならばっ！」

何を思ったか、飛鳥は再び高度を上げ空中に陣取った。

『——おいつ、どう言うつもりだっ!?!』

飛鳥の不可解な行動にスミカは訝しむ。

当然、光線級や重光線級のレーザーが束になって、ACに襲い掛かった。

「センサーの熱源感知機能を最大まで引き上げます！上手くいけば、光線級のレーザー予備動作を感知出来るかも知れません！」

AC各所に備わった各種センサー類。

そのセンサーの熱感知機能を最大まで引き上げ、光線級の眼部の熱源を拾おうという企みであつた。

光線級は間違い無く巨大な眼球にエネルギーを収束させ、それを光線として撃ち出す。

当然、眼部にはエネルギーが収束し高熱を発する筈だ。

その熱をセンサーで拾う事が出来れば、レーザー攻撃の予測の指標となるのではないか。

飛鳥はそう考えていた。

もし上手く事が運べば、レーザーを予測し易くなり回避機動に伴う負担も少しは軽減される筈だ。

自分の直感だけを頼りに今迄レーザーを回避していたが、意識をそこに割かねばならず正直負担が増大し異常な速さで疲労が蓄積するのだ。

過度な疲労は判断力や実行力を鈍らせ、自信の戦闘力低下に直結する。

——モノは試しだ！

並み居るレーザーを回避しながら、コンソールボックスを開きセンサー設定を熱感知特化に変更する。

『レーザーを手動で回避しながら設定変更とは……器用だな……お前』
その様子をモニタリングしていたスミカは、感心するやら呆れるやらである。

これまで多くの戦士を見てきたが、回避しながら設定を弄る人物は飛鳥が初であった。

「設定変更完了……さあっ！どう来るっ！」

飛鳥は空中に留まり、軸を軽くズラしながら光線級の様子を窺う。未だ頭部カメラでは、光線級の姿を捉える事は出来なかつたが、居ると思わしき箇所から熱源感知のマークが表示され同時に危険信号音も鳴り響いた。

そして直ぐに、レーザーがAC目掛けて殺到する。

「——よしっ！成功だっ！」

飛鳥の目論見は的中した。

熱源感知の警報が鳴り、その地点からレーザーが襲い掛かる。

事前予測が成り、難無くレーザーを回避。

攻撃されるのが事前に察知出来れば、回避は非常に容易。

神経を擦り減らす事もなく、極論で言えば素人でも回避出来るだろう。

その位に難度が引き下がった。

「スミカさん！データ蓄積をっ——!!」

『言われる迄も無い、調子に乗ってしくじるなよ！』

暫くこの設定でレーザーを開始し続け、データを蓄積させればいい。

十分に蓄積したデータを基に回避プログラムを完成させれば、今後に大きな助けとなるだろう。

そしてそのプログラムの完成度を更に高め、有償にせよ無償にせよ

拡げれば、対BETA戦において有利に事が運ぶ筈だ。

ある程度データを蓄積させれば、センサー設定を元に戻せばいい。

他機能を犠牲にして熱感知に特化させたのでは、汎用性に難が生じるからだ。

「あいつ、何時の間に此処まで成長していたんだ？」

「お前が教えたんだろ？」

「あんな変則的なやり方なんて教えてませんよ。精々教科書通りになるな”位にしかね”

指揮者の管制室で、飛鳥の行動を具に見ていたスミカとユウキ。

スミカの傍に居たユウキは、飛鳥の思わぬ行動に感嘆していた。

——こりゃ、今の内に詰めれるだけ詰め込んだ方が良いかもな。

ユウキは自分の持てる知識と技術を、可能な限り飛鳥に伝授させる事を画策していた。

暫くの間レーザー回避に専念し、頃合いを見計らい反撃に映る事にした。

高度を下げつつ光線級へと距離を詰める。

その最中——。

「……、何だ、アレ？」

光線級を視認可能な距離まで詰めた際、今迄見た事もない奇妙な生物が複数存在していた。

逆関節型の2本の脚部、その上に繋がる蛇腹状の胴体部、そして頭部は平べったい板状という奇妙な外観だった。

更にその板状の上には、複数の戦車級が搭乗していた。

「こ、こちらレイヴン！見えていますか、今の映像！」

そろそろBETAにも見慣れていた飛鳥ではあったが、この奇妙な生物には些か取り乱し慌てて通信を送った。

『ああ、よく見えている。随分デカイ上に、頭に戦車級が乗っかってやがるな』

奇妙な生物の大きさは要塞級にも比肩し、色は灰色であった。

恐らくはBETAなのだろう。

じっくりと観測し、生態調査と行きたい処だが、眼下には多数の光線級、重光線級が蔓延りレーザー照射の準備に移っている。

悠長には構ってられない。

『飛鳥、調査は後だ。まずは目障りな光線級を始末しろ！』

このままでは再びレーザーに晒されてしまう。

飛鳥はレーザーを回避と反撃を織り交ぜつつ、光線級を確実に仕留め漸減を図った。

WS-16CとCRYWH-05R3から吐き出された弾丸は、光線級の眼部を粉碎し重光線級の体組織を破壊し尽くす。

運よく弾幕から逃れ、要塞級から姿を覗かせた光線級がレーザーを照射するが、分かり切った照射など息をするかの如く回避した。

飛鳥は間髪入れずに応射を見舞い、光線級は身を隠す暇もなく粉碎される。

周囲の光線級を粗方仕留め、目視の範囲で残っているのは要塞級一体、そして見知らぬ逆節型の大型BETAのみだ。

——あの変なBETAは後回しでいい。まずは厄介なコイツ要塞級を始末しないと。

飛鳥は眼前の要塞級に狙いを定めた。

幸い要塞級の特徴は知っている。

たった一度だけだが、オームル、ソ連との共同作戦で討伐したという実績は飛鳥に大きな糧となっていた。

だが以前の様にワザと敵の射程内で戦う必要はない。

要塞級の主力武器である触手状の『衝角腕』と『強酸』さえ無力化できれば、その脅威度は大幅に激減するのだ。

しかし、相手の射程距離に入らねば、あの衝角腕を振るう事はなく収納状態のままだ。

収納状態で下手に射撃を浴びせた処で、モース硬度15以上、韌性も戦術機の装甲以上と言われている先端部を破壊する事は出来ない。

別の部位に大口徑弾で攻撃するか、若しくは危険を冒し格闘戦で弱点部位を直接攻撃するかだ。

飛鳥は敵の射程外で何とか衝角腕を破壊したかった。

——奴の動きが鈍い事は幸いたな。ならばっ……！

先ずWS—16Cの連射で収納状態の衝角腕を攻撃する。

無論刃物の如き先端部には効果が薄く、36ミリ弾程度で粉碎できるものではなかった。

だがそんな事は飛鳥本人も承知済だ。

御構い無しに射撃を継続し、数十発の弾丸を衝角腕に当て続けた。

確かに鉤爪状の先端部は非常に堅牢だが、収納部の周り或いは付け根部はどうだろう？

徐々にだが収納部の付け根部が削れ始め、少しずつ衝角腕の鞭部分が露出しつつあった。

「——時は今っ！」

僅かに露出した鞭部分に狙いを定め、左手用ライフルCRYWH—05R3と背部兵装のCR—WB69ROのロケット弾を同時に叩き込んだ。

肉質の柔らかい鞭部分はロケット弾の爆風とライフル弾の貫通エネルギーで、無残に破壊され衝角腕は無力化された。

最早こうなれば、要塞級の破壊は造作もなくなる。

全体通して高い防御力を誇るが、三節胴体部分の付け根は弱点部位となっていた。

今更ながらに飛鳥のACを脅威と感じたのだろうか。

要塞級は無謀な突進を繰り出し、強靱な多脚部でACを串刺しにしようとする。

しかし比較的緩慢な要塞級の動きでは、ACを捉える事はなく飛鳥はハイブーストで難なく回避。

そして後方に回り込み、弱点部位を攻撃。

無数の弾丸が、三胴部を形成している接合部に直撃。

要塞級はバラバラに崩れ去り、完全に生命活動を停止した。

「——要塞級撃破を確認っ！」

大型のBETAを破壊し、次の目標に狙いを定める。

それと同時にあの逆接型BETAが、板状頭部に乗せていた複数の戦車級を、空中高く投擲していたのだった。

逆接脚部を屈伸状態からグンッと伸ばし、蛇腹状の胴体部をバネの様にしならせ、その勢いで頭部に搭乗していたBETAを放り投げたのである。

——な…何だ…アレは…?!?

「ス、スミカさん…今のっ!？」

『落ち着け、よく見えている。ふん……まるで、投石機だな』

BETAの挙動に飛鳥は取り乱し、スミカに通信を送る。

彼女が比喻する様に、その様相は宛ら“投石機”そのものであった。

『よもやBETAをブン投げる個体種が居たとはな。飛鳥、そいつは破壊して構わん!もう一ヶ所に、別の投擲野郎が居る筈だ。そいつを上手い事捕獲してみようか』

「分かりました、では遠慮なく!」

投擲した複数の戦車級は、友軍部隊が撃破するだろう。

飛鳥は指示通り、逆接型BETAを破壊する事にした。

要塞級に匹敵する程の巨躯を誇り、それ自身の戦闘力は未知数ではあるが、早急に破壊した方が良いだろう。

外観も比較的分かり易い構造で、先ずは脚部の破壊を試みた。

突撃砲とライフルの射撃で、逆関節の脚部は赤い体液と肉片を撒き散らしながら碎け散った。

「脚部、片方破壊!意外と脆いな」

呆気無く破壊できた事に飛鳥は意外そうな表情をする。

『甲殻に覆われていない部位は、案外こんな物だろうな。引き続き、破壊を続行しろ!』

「——了っ!」

指示通り、もう片方の脚部も射撃で破壊。

片方を失った時点で、既に逆接型のBETAは体幹を崩し倒れ込み、真面な移動も抵抗もままならない状態であった。

地面に横たわり、無様に藻掻くだけのBETA。

生体反応が消失する迄、飛鳥は弾丸を叩き込み止めを刺した。

「BETA撃破を完了!スミカさん次の目標を——」

『撃破したか。次のマーカーを表示させる、其処へ向かってくれ！さつきから、戦車級がドカドカ降って来て敵わん…』

モニター上にマーカーが表示され、次の目的地が提示され飛鳥はその方角へとA Cを移動させた。

輸送部隊に群がるB E T A群は数を減らしつつあるが、僅かずつではあるが友軍機にも被害が及んでいる。

余り悠長に構えている時間は無い様だ。

「――居たっ！」

飛鳥は別地点のB E T A群を補足し、同時にレーザーが襲い掛かる。

センサー設定を変更した事により、熱源を捉えた事による予測で回避は容易だ。

全てのレーザーを容易く躲し、そのまま射撃で反撃。

光線級7、重光線級1を破壊し、B E T A側の光線級の殲滅を終えた。

残りは小規模の要撃級と戦車級に加え、2体の逆接型B E T Aだけである。

これ以上B E T Aを輸送部隊へ投擲されては堪ったものではない。

飛鳥は直ぐに攻撃を仕掛け戦車級を殲滅し、続いて要撃級も仕留め切った。

そこへスミカから通信が入る。

『2体居る内の一体は捕獲を試みてくれ。それと、そいつは“投石級”と呼称する事になったそうだ』

「“投石級”……。確かに、投石機さながらにB E T Aを放り投げてましたからね。それにしても……僕がB E T Aなら光線級を放り投げて多方向からのレーザー攻撃を仕掛けるのですが、不思議と光線級は投擲していませんでしたね」

幾度か投石級がB E T Aを投擲していたが、目に付いたのは戦車級と要撃級くらいであり、光線級が降って来る事はなく、飛鳥は疑問を口にする。

『その事か。降って来た戦車級や要撃級の一部は着地に失敗し、その

まま間抜けにもお陀仏してやがった。恐らく光線級や重光線級の体組織じや、着地に耐えられんのだろう。——でなくば、最初から光線級を投擲し戦術に幅を持たせていた筈だ』

「……成程」

スミカの話聞きながら飛鳥は一体の投石級BETAを撃破し、次の投石級に狙いを絞る。

一応自衛力は備わっているらしく、残り一体となった投石級が此方へ突撃し板状の頭部で叩き潰そうと迫る。

当然、飛鳥もその様な攻撃を食らう積りはなく、宙高く跳び上がり上空からの射撃で脚部のみを破壊し、逃走手段を喪失させた。

既に光線級は殲滅している。

レーザー照射の懸念はなかった。

『よし、脚部を破壊したな。これで、もう逃げる事が出来ない筈だ。直ぐに回収部隊がそっちに向かう。悪いがお前は、輸送部隊の直衛に入ってくれ。数に押され始めた』

「——分かりました、直ぐに向かいます！」

動けない投石級は最早何の脅威にもならない。

此処は後から来る回収部隊に任せ、飛鳥はブースター移動で輸送部隊へと向かった。

『畜生！数が多過ぎる！』

『死骸が邪魔で、輸送部隊が通れねえ！』

『おい！あのレーザーキャノンはどうした!?!』

『駄目よ！最充填まで、早くても30秒！』

『や、やめろ…来るなああつ！』

『ぎゃああああアあつ！』

『あ、脚があつ…つ、俺の脚があつ！』

『おいっ！上空へ一時退避しろっ！』

『——そうかつ！光線級は、もうっ！』

『空から攻撃すれば何とかっ！』

——思ったよりも、被害が拡大してる！

程無くして飛鳥のACが現場へと到着する。

既に幾つかの機体はBETA群に食い尽くされ、輸送部隊はBETAの死骸が積み重なった事で足止めされていた。

このままでは輸送部隊にも被害が及ぶ。

『来たか飛鳥！お土産を渡すから、こつちまで来てくれ！』

「ユ、ユウキさん!?!:了です!」

現場に到着するなり、ユウキからの通信が入る。

何の事かは理解出来なかったが、飛鳥は指示通りスミカ達が搭乗している車両へと移動した。

飛鳥のACが着くなり車両の後部ハッチが開き、中から作業用MTが姿を現す。

『よし、手持ちの武装を全てパージしろ。コイツはかなり負荷が高いからな!』

作業用MTから通信が入る。

どうやらユウキが搭乗している様だ。

MTのアームには、ボックスタイプのランチャーらしき代物が保持されていた。

「ユウキさん、お土産ってソレの事ですか?」

『おうっ!まだ試作段階で、実用に足るかどうかも未知数だが、試験も兼ねて実地試験といこうぜ!』

ユウキはそう答えるなり、飛鳥のACを所定位置にて固定させ、そのランチャーを装備させる。

MTのアームからACの腕部ユニットへとランチャーが手渡され、飛鳥は腕部を操作し保持体勢に映る。

「な!?!警報が複数一気にっ!」

保持し、運用プログラムをダウンロードした瞬間、コックピットのモニターに警戒信号が鳴り響いた。

「腕部重量過多!脚部重量過多!出力不足警戒域!」

『無理もない、まだ試作段階で、実働データの蓄積もこれからの段階だからな』

『よく聴け!エネルギーが枯渇する前に、出来るだけ多くのBETA

群を殲滅しろ！いいなっ！』

そのランチャーは余りに重く、腕部と脚部に多大な負荷を負わせ命中精度と機動力に大きな制限を掛けた。

また稼働にも膨大のエネルギーを必要とし、ジエネレーターの大半をその兵器に割かねばならず、今の状態では撃つだけで精一杯だ。

更に兵器自体もかなりの大きさと嵩張り、他の装備を無理矢理外す必要があり、正直実用に足るとは言い難い。

しかしユウキ達が、それを承知の上で装備させた理由。

その兵器は、インテリオル製の多連装レーザーキャノンをACハイエンドノーマル用に小型改良した代物であったからだ。

ACノーマルや専用MTが運用出来ているのは、ハイエンドノーマルに比べ稼働システムが簡略化されている事と、専用に低出力化および軽量化されている為である。

「分かりました！この武器、有り難く使わせて頂きます！」

『よっしゃ！不様に食われんじゃねえぞ！』

「——了っ！」

多連装レーザーキャノンを受け取り、稼働状態にさせた飛鳥は主脚による歩行移動で、迫り来るBETA群へと立ちほだかる。

無駄なエネルギーは一切使えない。

出力不足が効いているのだろう。

普段なら余剰エネルギーが予備コンデンサへと廻されるのだが、警報メッセージが示す通り可動エネルギーの大半は多連装レーザーキャノンへと回されていた。

そのお陰で、FCSも不調でロックシステムにも悪影響を及ぼしていた。

——これだけ密集してれば、狙いを定める必要も無いな！

「レーザー拡散率、横軸7、縦軸3に固定。発射態勢は既に完了！」

多連装レーザーキャノンを両腕で保持し、殺到する突撃級を始めとしたBETA群へと砲口を向けた。

縦横5×5の25連装で構成された砲口はしっかりとBETA群を捉え、発射エネルギーが充分蓄積された状態だ。

「レーザー発射——今っ!!」

飛鳥は叫ぶと同時に、マニピュレーターを操作しトリガースイッチを始動させた。

25連装の砲口から無数の光が迸り、放たれたレーザーは広範囲に拡散照射された。

レーザー1発1発でも、軽装甲MTなら十分穿てる程の威力を誇り、それが広範囲にマシンガンの如く乱射。

堅牢な突撃級の甲殻でも、そのレーザーの嵐を食い止める事は叶わず、甲殻ごとハチの巣にされ倒れ伏す。

「ううおおおおおおあああああつ!!」

飛鳥は雄叫びを上げ、多連装レーザーキャノンを左右に薙ぎ払う。殺到するBETA群は、次々とレーザーに焼かれ貫かれ、その生命活動に終止符を打った。

前面防御に長けた突撃級ですらレーザーの雪崩には抗えず、戦車級や兵士級など成す術も無く穴だらけにされた。

その後続く要撃級も同じ運命を辿り、大群の密集陣形で迫るも無数のレーザーに貫かれ倒れ伏す。

その際BETAの死骸が障壁となる筈だが、飛鳥はそれをも見越し収束範囲を集中寄りに変更しながら照射を続行。

無論、収束された分レーザーは威力を増し、死骸をも貫通し後続のBETA群をも纏めて仕留めた。

『エネルギー残り30%、残存BETA31%!』

——くっ、もってくれ!

可動エネルギーも見る見る間に減少し、飛鳥は額に汗を滲ませる。

『エネルギー残り10%、退避しろ、命令だ!』

「——!?り、了!」

可動エネルギーを9割消費した処で、スミカからの退避命令が下った。

何も戦っているのは飛鳥一人ではない。

飛鳥が多連装レーザーキャノン照射している間、友軍部隊が体勢を立て直し残り僅かとなったBETA群に殲滅を仕掛けていたのだ。

『稼働エネルギーを全て使い切れれば、機体が完全停止してしまうからな。もし万が一、一体でも討ち漏らせば忽ち餌食だ！それに少しは奴等にも仕事をさせんとな』

残存BETAは40体を切っており、後は造作もなく友軍によって全滅させられ戦闘は終結。

『BETA群の殲滅を確認した。捕獲部隊も無事、投石級の確保に成功したとの事だ』

「ふうく…、終わったか……」

『まだ気を抜くなよ？成功報酬を受け取り、お家へ帰る迄が任務だ』

近隣のBETA襲撃を全て撃破し、護衛部隊は警戒態勢のまま目的地へと進軍を再開した。

敵性勢力の妨害が懸念されたが、特に何事も無く輸送部隊は大規模交易所へと辿り着いた。

『今回の任務達成、誠に感謝いたします。新種のBETA捕獲の件を鑑み、追加報酬にて報いらせて頂きます。ミッション達成ご苦労様でした、レイヴン』

インテリオルユニオンから成功報酬と追加報酬を受け取り、飛鳥達は居住区へと帰路に着く。

「それにしても、ユニオンは何を運んでいたんでしょうか？」

結局、荷降ろしの現場まで立ち合う事は許されず、最後まで積み荷は分からず終いであり、飛鳥は気になっていた。

『大体の察しは着く』

スミカがぶつきらぼうに答える。

飛鳥達の住むこの巨大交易所も、BETAおよび汚染AIの襲撃に危機感を抱き、防衛力を強化するとの方針を固めていた。

インテリオルユニオンの件も、それに関連しての事だろう。

恐らく、あのだ連装レーザーキャノンも積み荷の中に含まれている筈だ。

そして交易所管轄の企業連も、部隊を割き此処へと向かっているらしい。

此処は欧州でも、屈指の規模を誇る貿易の要であり、多くの人々が行き交う施設でもあった。

世界中で国家が復活した今でも此処を手放す気など毛頭なく、徐々に国までもがこの交易所を意識し始めているほどだ。

今後も多くの人々が訪れるだろう。

「ACCの整備が終わったら、ゆっくり休もうぜ！」

「そうですね。終わったと思ったら、どっと疲れが出てきましたよ」

こうしてミッションは成功し、飛鳥達は生還する事が出来た。

—— 数日後 英国圏・ミミル軍港 ——

(推奨BGM マブラヴオルタ—— 疑念)

ギガベースに大小様々な輸送船が向かう。

インテリオルから購入した兵器や物資を搬入させる為だ。

また物資だけでなく人員の補充も行われ、ACCハイエンドノーマル製造に長けた『クレスト・インダストリアル』『ミラーージュ』の元職員をも積極的に採用していた。

こうした戦力拡大へと突き進む有澤重工・日本帝国連合軍——。

物資の搬入が行われるギガベースを余所に、ミミル軍港の一角に在る会議室では各企業的首脳陣や帝国の衛士達が集結していた。

『これが、我が社で捕獲した新種のBETA、『投石級』と呼称させて頂いております』

明かりを落とし暗室となった部屋に、突如スクリーンに投影された何とも奇怪なBETA。

逆関節型のMTを彷彿とさせる脚部に蛇腹状の胴体部、そして頭部は板状で構成され、その上には複数のBETAが搭乗していた。

そして、脚部や胴体部のバネを生かし板状頭部に搭乗していたBE

TA群を、空高く放り投げている様子が映し出されている。

その映像は、先日インテリオル輸送部隊から送信された戦闘記録が元となっていた。

——「ス、スミカさん、見ましたか、今のっ!？」

『落ち着け、よく見えている。ふん……まるで、投石機だな』

『よもやBETAをブン投げる個体種が居たとはな。飛鳥、そいつは破壊して構わん!もう一ヶ所に、別の投擲野郎が居る筈だ。そいつを上手い事捕獲してみようか』

「分かりました、では遠慮なく!」——

その時の音声も同時に流れ込んで来る。

そこから先は、投石級の挙動や戦闘記録までが映し出された。

「まさかBETAが空から降って来るとは……」

「要塞級がBETAを運搬するのは知っていますが、放り投げるとは何とも……」

「立て続けに、新種のBETAですか……頭痛の種ですな」

俄かに会議室が騒めき口々に無責任で無意味なが議論が交わされる。

その中で一人……いや、二人の女性は投石級BETAに加え別視点に着眼していた。

やがて会議は終わり、それぞれは本来の居場所へと戻る。

有澤ギガベースも今日この軍港を発つ予定で、物資の搬入肯定も終了間際となっていた。

ギガベースへと向かう『崇宰恭子』率いる斯衛部隊——。

五撰家の護衛を務める有力武家の一人『如月佳織』が口を開く。

「それにしても『洗脳級BETA』と言い『投石級BETA』と言い、対BETA戦術の見直しが急がれますね」

洗脳級が自律兵器に取り付く事で誕生する『汚染AI』、そしてBETAを遠方へと投擲し強制的に飛ばす『投石級BETA』の存在。

今迄多くの犠牲を払いながら蓄積されてきた戦術が、覆されようと

している。

一刻も早く本国へと帰国する必要があるだろう。

その言を受け、崇宰恭子も言葉を返す。

「確かに忌々しき問題ね。……だけど、もう一つ気になった事はない？」

「気になった事……?……強いて挙げるなら、あの多連装レーザーキャノンでしょうか。あれを我が戦術機レベルで運用出来れば、対BETA戦に於いて有用に作用する筈です！」

先程、投影された戦闘記録映像には、インテリオルが誇る多連装レーザーキャノンが猛威を振るい、並み居るBETA群を駆逐していた。

幸いな事に例の多連装レーザーキャノンは、設置式の大型、起動兵器搭載式の小型含め、各種入手に成功しており既にギガベースに搬入されている。

「……ええ、あの兵器も有用なのは認める。……他の皆はどう?何か他に着目している部分はない?」

恭子は周囲の部下にも質疑を投げ掛ける。

彼女の部下である、譜代武家、外様武家の面々も顔を見合わせては首を傾げるばかりで、明確な答えは帰って来なかった。

「そう……。洗脳級、そして今回の投石級……戦うにせよ捕獲するにせよ、各作戦に同じ人物が関わっていたの覚えてる?」

これら新種のBETA捕獲には、一人のレイヴンが関わっているのを恭子は注目していた。

しかし、彼女以外の面々は極めて反応が薄く、余り印象には残っていないようだ。

唯一人を除いて。

「もしや貴女も、同じ考えで?」

突如後ろから声を掛けられ、恭子率いる部隊は後ろを振り向く。

「おや、貴女は」

声の主。

其処には、軍服の上に白衣を羽織った女性と少女、そして数名の仕官が追従していた。

お互いが敬礼を交わす。

「香月夕呼博士……矢張り彼の少年に……？」

「ええ、私も例の少年が気になっていてね。良ければ、ギガベース内で話しましょうか？」

本来なら恭子率いる斯衛団は、香月夕呼の不敬な態度を諫めようとするのだが、恭子本人が部下を制した上に香月夕呼は軍部の中でも特殊な立場にいる人物だ。

敢えて声を荒げる事はせず、成り行きを見守る事にする。

恭子と夕呼はじつくりと話す事にし、ギガベースへと歩を速めた。

ギガベースへと帰還し、空きの客室を借りた香月夕呼と崇宰恭子は、ゆつくりと語り合った。

「あの飛鳥と言う少年……どこまで知っているの？」

先ず夕呼から話し出した。

「調べた限りでは、独立傭兵の駆け出しレイヴンと言う位しか……」

恭子は現時点で知り得る限りの情報を吐露する。

氏名、年齢、所属先、身体的特徴、これまでの経歴。

一応他の視点からデータを調べてみたのだが、それ以上の成果は見られなかった。

経験の浅い駆け出しレイヴン――。

火無飛鳥と言う少年の世間的評価は、それ以上でもそれ以下でもなかった。

「もう一度これを見て頂けるかしら」

夕呼は先程の会議室での映像記録を見せた。

彼女専用の情報端末を此処に持ち込み、その画面上にあの戦闘記録が映し出される。

だが場面は少々違っており、投石級との戦闘記録ではなく、それ以

前の主に光線級との戦闘に関して映し出されていた。

「何か気付いた点はない？」

夕呼は試すかのように恭子に語り掛けた。

もし此処に他の斯衛軍人が居れば、間違い無く激昂し斬り掛かられていただろう。

「レーザーを回避しているわね。……それにしても、随分高い回避率を誇るけど……、何か特殊な機能や回避プログラムを？」

本来、戦術機がレーザーを躲すには、自動回避プログラムか初期照射を受けてからの回避行動で凌ぐ。

しかし、自動回避プログラムは改良の余地が多分に残されているのか、全てを避け切るのは極めて困難で高度を上げるのは危険行為とみなされていた。

「もし違うとなれば、この『アーマードコア』の性能かしら？」

恭子は何度も映像を見直し、飛鳥がレーザーを悉く回避している様子を確認する。

「確かに、ACハイエンドノーマルはアセンブル次第で超高性能機に変貌する。それもあると思うけど、あたしは違うと思うの」

「……どういう事かしら？」

アーマードコアはの情報には有澤重工業を通じて、日本帝国にも伝わっていた。

当然ゴジマ粒子や、それをふんだんに利用したアーマードコア・ネクストについても。

「この飛鳥とかいう少年、回避プログラムを切っているわ」

「——!!」

夕呼の指摘に、恭子は声にならない驚きの声を上げる。

夕呼は映像を巻き戻し、飛鳥が自力でレーザーを回避している事を指し示した。

「コイツ、手でレーザーを回避してるわ！」

アームズフォート

企業間戦争におけるパワーバランスの調整の果て。

希少なリンクスへの個体依存性に強く影響するネクストACCから

大勢の凡人による総合制御に生まれた、超巨大戦略兵器。

大艦巨砲主義を地で行く無駄なほどの巨大さと

それに似つかわしい圧倒的火力と物量で戦場を蹂躪する、まさに機械仕掛けの決戦兵器。

ネクストですら、その火力と射程に苦戦を強いられることが多く、

相手取るのにヴァンガード・オーバード・ブースト（VOB）と呼

ばれる長距離飛行用の特殊パーツで

相手の射程を掻い潜ることから始まる任務も多い。

ジャイアントキリングとは、文字通り奇跡の親戚に過ぎなかったのである。

第7話―夢見た、燃ゆる都―

ブースト・ドライブ

所謂壁蹴りの事。

脚部で壁や障害物を蹴り込み同時にブースターを点火する事で、推力の相乗効果が見込める。

その応用度は高く、ブースター性能以上の高機動や変則的な機動戦を展開する事も可能だ。

また蹴り込みの反動を利用する事で、推進剤やブーストエネルギーの節約にも繋がる。

しかし、この軌道を行うには一定水準以上の操縦技術が必要となる。

未熟な者が無理に行えば、却つて的と化すだけだ。

夜：だろうか？
黒味がかつた紺碧色の空。

その夜空に不釣り合いな程に、赤く紅く染まりゆく天。

何処か遠方で炎上しているのだろうか。
きつとそうだろう。

炎の影に反響する雲は、妖しき明かりで地上を照らした。

赤黒く輝く地上を埋め尽くし、突進する異形の怪物群。

その怪物に対峙する、鋼の巨人達。

尽きる事なく天から降り注ぐ、火を纏いし砲弾。

鋼の巨人から放たれる、雨嵐の如き弾丸の奔流。

人類の反抗をもとめせず只管に突き進む怪物の大群。

此処は何処だろうか？

そして何時だろうか？

場所も、時間も判らず、僕は唯々それ等を見る事しか出来ない。まるで僕は其処に居ないかのようだ。

それでいて、ヒシヒシと感じる奇妙な現実感。

だが分かる――。

この光景は正に――。

―― 戦争だ ――

少なくとも怪物には見覚えがある。

――と言うよりも、忘れ様がない。

さつきまで戦っていたじゃあないか。

嫌という程に――。

BETAだ――。

この状況、判らないようで解る。

BETAと戦っているんだ。

BETAに立ち向かっているの機体は何だろうか？

形状や装備からして、ACでない事は確かだ。

思い出した。

確か、人型戦術歩行戦闘機と云ったか。

見た事もない機種だ。

何処の所属だろう。

あの『ソ連』とは違う形状をしている。

それによく見れば、肩部に白と赤のエンブレムが目につく。

『四角い白の中心に赤の丸』という極めて単純明快なシンボル――。

僕はこのエンブレムに覚えがあった。

日の丸だ。

国家解体以前、厳然と存在していた確かな象徴。

そうだ。

レイヴンを指す過程で、教導官より教わった魂の容。

—— 国旗 ——

そしてあの国旗は、教導官がやたらと拘っていたのをよく覚えていた。

『いつ如何なる時も、忘れてはならんぞ！我等の誇り。我等の魂。我等の故郷』

—— 日本 ——

そうか。

今戦っている戦術機は、日本所属の部隊なのか。

しかし、どうして日本所属の部隊がこんな所に？

いや、そもそも此処は本当に何処なんだろう？

僕の住んでいる交易所には、こんな山岳地帯は存在していないし、植物だってこれほど生い茂ってはいない。

場所も、状況も、何故此処に僕が居るのかも、全く解らない。

僕は眼前で繰り広げられる戦場を、ただ見る事しか出来ないのだ。

中隊規模だろうか？

十数機の三部隊で編成されていた。

ひたすら前進を繰り返す突撃級の群れに、各小隊がローテーションで突撃砲で迎撃している。

中には、赤塗装の機体と山吹色塗装の機体が混ざっている。

隊長機なのかそれとも識別の為の処置なのかどうかは、分かりかねた。

一見善戦している様に見えるが、正直隊長機以外の挙動に“ぎこちなさ”が見える。

経験の浅い新兵かもしれない。

僕も最初はあ・あ・あだった。

いや、もつと酷かった記憶がある。

時々復習を兼ね、当時の起動訓練時の映像記録を見返せば、我ながら羞恥が込み上げる位だ。

未だに思う、とても人様に見せられるレベルではないと。

当時の僕に比べれば、あの部隊はまだまだ動けている方だろう。

そんな戦場を観測している僕に声が聞こえて来る。

誰の声かは分からないが、若い女性の声だというのは確かなようだ。

『――無駄弾を使うなバカ者ツ！早く跳べえツ！』

理屈は分からないが、何故かは理解出来る。

赤い機体を駆る女性の声だ。

その女性が、ある白い機体に怒鳴っているのだ。

怒鳴られた機体は、突撃砲に付属していた120ミリ砲を乱射している。

大口径徹甲弾だけあって、真正面からでも突撃級の甲殻に有効打を与えていた。

しかし、あの銃身と弾倉の大きさでは、装弾数には限りがある筈だ。

『――うっうっうっうっ……!!』

怒鳴る女性とは別の声が響き渡った。

やはり理解出来る。

滑空砲の乱射する機体から、怯えと緊迫に満ちた悲鳴に似た声が、僕の耳を打つ。

かなり若い声だ。

赤い機体の女性よりも、更に幼い感じがする。

彼女の言う通り、早く跳ばないと突撃級に轢かれてしまう。

現状を理解しているのだろうか。

未だに滑空砲を乱射し数匹の突撃級を仕留めたものの案の定、弾切れを起こした。

言わん事じゃない。

幾ら高威力を誇る武器と言えども、あの大群だ。

とても凌ぎ切れる弾数ではない。

僅かに舌打ちした赤い機体が、遠隔操作で何やら外部的作用をあの弾切れの機体に施した様だ。

どうやら平常心を失い恐怖心に駆られ、滑空砲を乱射していたらしい。

まあ無理もない。

僕もBETAと会敵した当時は、恐怖に煽られ真面な思考も働かず、結局スミカさんの叱咤で何とか対処出来た程だ。

僕は今でこそ多少の慣れはあるが、とても彼女達を嘲笑する気にはなれない。

『訓練を思い出して志摩子ッ!!』

山吹色の機体に乗る少女が、錯乱し弾切れの機体に言葉を掛けた。

どうやら錯乱していた少女の名は『志摩子』と言うらしい。

『デストロイヤー突撃級の弱点はッ!?!』

別の機体からも声が投げ掛けられた。

そうだ。

突撃級は基本、真正面からの対応は推奨すべきではない。

あの防御の硬さは、そこいらの銃器では歯が立たないのだから。

やるとすれば戦法は限られる。

突如、弾かれたように跳び上がった志摩子の機体。

彼女は上空から突撃砲を2丁持ちで、突撃級に照準を合わせていた。

『うわあああああッ!!』

そうだ、それでいいんだ!

突撃級の後方防御は、無防備と言っている。

志摩子と呼ばれた娘は、突撃砲で次々と仕留めていく。

それに連動するかの如く、小隊単位で突撃級に36ミリ弾を浴びせていった。

だが不意に、志摩子という少女は何やら喚き散らし始める。

一体どうしたんだろう?!

『私ッ——私は——足手まといなんかじゃないッ!!』

『志摩子?!』

志摩子の機体は何かに取り付かれたかのように、上空で銃を連射しながら突撃級に浴びせていた。

未だ平静さを取り戻せていないのだろうか？

その動きは半ば、盲目的とも言える。

大丈夫だろうか？

錯乱状態で、この戦場を生き延びるのは少々厳しいかも知れない。願わくば彼女の無事を願いたい。

『——私はっ、お荷物なんかじゃないよねっ!?!』

『えっ……っ?』

『——唯依のお荷物なんかじゃないよねえっ!?!』

志摩子という娘は、涙混じりの声で必至に語り掛けていた。

そうか、あの山吹塗装の機体には、『唯依』という名の少女が乗っているみたいだ。

口振りからして親密な間柄なのだろう、きっと。

二人の間はどういった経緯があったのかは分からないが、強い繋がりを感じ取れる。

だがそんな思考に耽る間もなく、志摩子の機体はグングンと高度を上げながら攻撃を続行していた。

駄目だ！高度を下げないとっ！

相手がBETAなら、高度を上げるといふ行為が如何に危険かわかる筈だ！

付近には光線級が居るっ！

間違いないっ！

これだけ降り注ぐ砲弾は十中八九、面制圧と誘導照射を兼ねた支援砲撃だ。

あのオーメル・ソ連との共同作戦でも実施されていたから、良く分かる。

砲撃の着弾位置から鑑みるに、かなりの近隣に存在しているのだろう。

そんな位置関係で、それ以上高度を上げればどうなるか！

——早く高度を下げろっ！

僕は声を張り上げ叫んだっ！

——つもりだった。

反応が無い。

多分誰にも届いていないのだろう。

どう言う訳か、自分の肉体の有無を確かめようとする発想すら湧かなかった。

上昇し続ける彼女に、怒号が飛ぶ。

『——高度を下げるバカ者オオツ!!!』

『——え……』

赤い機体の怒鳴り声に漸く反応したみたいだ。

しかし同時に志摩子の機体にレーザーが照射され、その着弾点が赤熱化を始めた。

だがまだ間に合う。

光線級、重光線級のレーザーは常に最大出力で照射している訳じゃない。

BETAのレーザーには初期照射という補足段階が存在し、その間に高度を下げるなり回避起動に移るなり生き残る術が在る。

回避行動を執るんだ！

まだ初期照射の段階だ。

僕が叫んだ処で、彼女には届かない事はもう分かった。

『——志摩子ッ!』

あの唯依っていう娘を始めとした同僚の叫ぶ声が、僕にも直接響いて来る。

恐らく僕が直接干渉できる事は、何も無いのだろう。

それでも志摩子の無事を願わずにはいられない。

『……これ……なんっ……だっけ……っ?』

だがその望みはもう薄いだろう。

もう最大出力寸前だ。

機体の装甲はいよいよ融解を始め危険域に到達している筈だ。

彼女は相変わらず自身に何が起きているのか、把握し切れていない様子だ。

どうにも緊張感に欠けたポカンとした表情で困惑するばかり。

『——志摩子オ、はや——ッ?!』

唯依が叫ぶも手遅れだ、残念だが。

既にコックピット内は光が逆流し、彼女の顔は融解を始めていた。不謹慎ではあるが、長い艶やかな黒髪を後ろで赤いリボンで束ねた志摩子という娘は、正直すごく可愛い娘だと思う。

僕だって女の子に興味が無い訳じゃない。

仲良くなれる機会があるなら、是非ともそうしたいものだ。

そう思わずにはいられない程の美少女だった彼女の運命も、尽きようとしていた。

一瞬の出来事の筈なのに、彼女の顔が徐々に溶け内部が膨れ上がり破裂と蒸発が同時に起こる。

過去に何度も見た、眼を背けたくなるほどの光景。

だが僕は一部始終を見届けていた。

目を離す事が出来なかった。

機体のコックピットが爆散するまで。

……

彼女は死んだ。

彼女の機体はレーザーに貫かれ、爆発しながら墜落した。

過去の作戦で幾度と繰り返し返された惨状だ。

光線級に撃ち落とされた、典型的な撃墜例——。

志摩子の同僚達が泣き叫んでいる。

何度も何度も彼女の名を叫びながら。

あの赤い機体から怒鳴る声が木霊する。

『——自分の目で見て納得したかッ?!寝惚けてなきや、初期照射を受けてからでも充分回避できるッ!——戦友が遺した戦訓、無駄にするなよッ!』

『『——了解ッ!!』』

『『『——了解ッ!!』』』

……了っ……!

中隊と共に僕も無意識の内に、了解の意を示していた。

それにしても驚きだ。

赤い機体を除き、此処の部隊は皆少女ばかりだ。

そう言えば、あのソ連の部隊も何故か女の比率が圧倒的割合を占めていた。

何か理由が有るのだろうか？

志摩子という戦友を失いながらも、中隊の戦闘は続いた。

……………

『——フアング3、フォックス1！』

フアング3なるコールサインを持つ機体が長距離狙撃で、遙か遠方の光線級を仕留めた。

僕の突撃砲と同じだ、ロングバレルを装着した長距離仕様だ。

それにしても凄いな。

『すごい……13キロ先の小型種を……!?!』

どうやら唯依も同じ感想でいるみたいだ。

仮に僕が“同じ事をやれ”と言われればどうだろう？

……自信がない。

戦術機のFCSが、どれ程の精度を誇っているのかは、僕には測りかねる。

しかし同じ条件下で僕が実行しようとしても、外す確率の方が高いだろう。

僕の得意とするレンジは、近・中距離の機動射撃戦と格闘戦にある。

正直なところ、遠距離、超長遠距離戦は苦手な部類。

あのフアング3なる人物、相当の実力者だ。

先程犠牲となった志摩子とは、似ても似つかない凜とした気配を纏っている。

王族か貴族に身を置く特殊な存在なのかも知れない。

『——お生憎さま……—^{レーザー}光線級2体を補足』

その間にもフアング3は、新たな光線級を2体射程内に納め狙撃準備を整えていた。

『——させませんわ』

瞬間、狙撃で2体とも滞りなく始末する。

この小隊……いや、彼女の実力は突出しているみたいだ。

自らの役割を弁え、平静を保ち、任務を遂行する。

それでいて、彼女だけではない。

彼女に率いられている小隊は己が役割を理解し、障害となるBETAを寄せ付けぬよう奮戦している。

チームレベルで高い実力が維持されている証拠だろう。

だがBETA側も一筋縄とはいかず、絶命したつもりでも再び起き上がり彼女等に牙を剥く。

『——ちっ！』

ファング3がロングバレルの突撃支援砲で、手負いの要撃級に止めを刺した。

『——止めは必ず刺しなさい！——ファング6の二の轍は——もう誰にも踏ませませんわ……!!』

『——了解ッ』

彼女の叱咤を受け、小隊は一層奮励し任務を続行した。

何だ？これ？

戦術機が手負いの要撃級にやられている。

僕の脳裏に、そんな映像……いや誰かのイメージ……記憶だろうか？

——流れ込んで来る。

『——くっ！』

ファング3の銃撃が要撃級に止めを刺し、仇を討つたみたいだ。そうか。

ファング6と言うのは、彼女の同僚なのだろう。

『潰したはずの敵に殺される、無意味で憐れな死——それが、戦場にありふれた死の現実……』

ファング3の独白が僕にも聞こえて来た。

『兄様たちの死の様は、勇猛果敢で見事な散り際……そう伝えられた』
そうか、彼女には兄が居たのか……それも複数形だ。

『兄様たちの自己犠牲で、多くの同胞が救われた——そう伝えられた』

それ程の気高い死……、僕は見た事も無い。

『くっ！』

既に絶命している要撃級に無意味な弾丸を叩き込むファング3。

『この戦場に……本当にそんな綺麗な死が!？』

……僕もそう思う。

少なくとも、そんな尊い死を迎えたレイヴンを目にした事などは無い。

BETA相手に勇猛果敢に立ち向かう傭兵達は、確かに何人も居た。

寧ろそっちの方が多いい位だろう。

だが、尊い高潔な自己犠牲を貫ける者など居ただろうか？

裏切り、謀り、騙り、持ち上げ、利用し、墮とす。

そんな悪意と無法に満ちた現実だけは、戦場を常とし裏切る事が無い。

そしてその現実が、戦場の死神が司る唯一のルールなのだ。

雇い先の企業連でさえ、僕もろとも砲撃で焼こうとした位だ。

即席の共闘でも、騙して悪いがは存在する。

よくよく考えれば、スミカさんやユウキさんは極めて希少な分類なのだろう。

困窮した当時の彼等に手を施した僕も僕だが、そんな見ず知らずの僕を裏切り財産を奪おうと思えばできた筈だ。

しかし彼等はその様なモラルに反する行動は執らず、僕に知識と技術を伝授してくれた上に戦場でのサポートまでしてくれている。

もし高潔な精神を有すとすれば、そんな彼等の事を言うのだろう。

『——ファング1より中隊各機ツ！敵第3波の掃討完了っ！——後方3000、野戦補給場まで後退するぞッ!!』

『『『『——了解っ!!』』』』』

一つの節目を付けたのだろう。

赤い機体、つまり中隊率いる中隊長機の指示で、一旦後退し態勢を整える様だ。

彼女等は中隊長機に追従し、一時後退を凶った。

……

あれからどの位経ったのだろうか？

上手く認識する事が出来ない。

ファングのコールサインを持つ中隊はい幾許かの被害を出しながらも、戦闘を続けている。

そんな中、一機の戦術機がBETA要撃級相手に戦いを繰り広げていた。

『……はあ、はあ、はあ……——グラップラー級要撃級ッ！』

要撃級に近接戦を仕掛け、手にした実体式の剣で切り裂いた。

『——BETA群に於ける大型種の約6割を占めるっ！』

茶系の短髪をした快活そうな少女だった。

彼女は勇猛果敢に次の要撃級に飛び掛かり、小隊の仲間達と連携しながらBETAを切り伏せる。

若干不慣れに見えるが、僚機と連携すれば危険を伴う接近戦でも要撃級の撃破は可能だ。

あの実体式の剣、当たりさえすれば下手な火器よりも遥かに高い攻撃力を有すだろう。

『——2対の前腕衝角による打撃っ！近接範囲、最大直径約39メートルっ！！』

要撃級の特徴を復唱しているのだろうか？

彼女は何度もうわ言の様に繰り返し、要撃級に挑んでいた。しかしこの流れは良くない。

徐々にだが、感情の昂りに身を任せつつあるように見える。連携行動に乱れが生じていた。

『——3機連携よファング8っ！2機じゃないことをもつと意識して！！』

その証拠に山吹塗装の機体から通信が入る。

『——機動特性は2次元的っ！だがその驚異的な定常円旋回能力は警戒しなければならぬッ！！』

彼女の言う通りだ。

僕も何度か戦ったが、要撃級の旋回対応能力は予想外に高く、生半

可なり回り込みでは直ぐに対応され、結局真正面で応対されてしまう。だがそれは、食い縛った歯に見える尾節部分に起因している。あれは感覚を司る器官らしく、言わばレーダーの様な役割を果たしているらしい。

どの様な生体なのかは判らないが、先ずあの尾節部分を破壊出来れば、定常円旋回能力も著しく低減する事が分かっていた。

だが、フアング8のコールサインを持つ彼女は、尚も接近戦を挑んでいた。

恐らく補給を受ける前に、BETA群と接敵したのだろう。弾薬を節約しながらの戦いを強いられているに違いない。

『くそうっ！まだかよっ!!』

『敵に引つ張られているぞ、第2小隊っ！——陣形の規定距離を忘れるなッ!!』

『くそっ！基本から外れるッ！あとちよつとなのにッ!!』

彼女は何かに拘っている？

まるで強迫観念にも似たナニカが今の彼女を振るい立たせ、同時に敵に意識が向き過ぎている様に思える。

殆どスタンドプレイに近い状態だ。

フアング8が、エース級の実力を有しているなら話は別だが、今の戦い振りを見る限りそれだけの実力者には見えない。

尤も、僕も人の事を偉そうに言えた口ではないが——。

『前腕衝角は硬度ッ、韌性共に既存物質を凌駕しているッ!——よって衝角を避けて砲撃するか、より強力な火力を以て対応すべし!』

彼女は要撃級の特徴を口に出しながら攻撃するも、遂に弾切れを起こす。

『なにっ!?!』

その隙を逃さず、別の要撃級が前腕をフアング8に振るった。

——が、バックステップで何とか回避に成功。

射程距離外へと後退する。

『——その脅威的な定常円旋回能力はっ——……』

彼女は言葉を続けるも、要撃級は更なる突進で前腕部を振るい、遂にフアング8の機体を捉えた。

『——うあああああつ?!?!』

直撃。

他に言う事はない。

素人でも分かる程の直撃だ。

その一撃で彼女の機体は横倒しになり、地面へと横たわる。

あの志摩子という娘に続いて……彼女もか……くそっ！

僕の視界は暗転し、気が付けば操縦席の中だった。

これはまさか、戦術機のコックピット内か。

警報音が鳴り響き、赤いアラームランプが点滅している。

『——安芸ッ！』

そうか、彼女は安芸あきという名なのか。

彼女の身を案じ、同僚たちが脱出を促している。

そうさせてやりたいのは、僕とて同じ。

だが——。

『くそ……、口の中を切ったか……鉄の味がする……』

それだけで済めば、どれほど救いようがあったらろうか。

『——いいかつ！殺すのは光線族種レイザーだけッ！——他は無力化だけで充分なんだっ！今まで何習ってきやがったッ!!』

あの隊長機からの怒号が響いて来る。

このキツくも的を得た言い回し。

何処と無くあの人スミカさんを彷彿とさせる。

それにしても、この部隊は光線級の漸減ないし殲滅を担っていたのか。

確かに光線級が重要ターゲットなら、他の個体種は必要最小限の対応だけで事足りる。

攻撃力を奪うか、機動力を削ぐか。

それさえ出来ていれば、後で幾らでも対処できる。

『隊長は戦闘起動中に気が散っているな……、まるで基本がなっていないよ……基本通りにやってるんだ、弟アイツだって、そうやって頑張ったのに

……!!』

——ん?……弟?

『うるさいわかったよ、立ち上がればいいんだろ……、そんなの自律制御ががやる仕事じゃん。そんな基本も知らないのか……!?』

……無理だ。

もう彼女は戦えない。

もう彼女の下半身は——。

コックピットから緊急脱出のメッセージが表示される。

だがもう手遅れなんだ。

自力での脱出は望めない。

誰かがコックピットハッチを強制解放し外部から救出するか、機体ごと拠点へと連れ帰り其処で救助するか。

少なくとも彼女は、もう満足には動けない。

要撃級の攻撃と吹き飛んだ衝撃で、コックピット部分の一部が拉げ、彼女の下半身は押し潰されていたのだから。

『安芸っ、安芸っ!!』

『ファング8、脱出してッ!!』

『ファング1より中隊各機へ、これより陣形を再編するっ!!』

『『『『——了解っ!!』』』』

現場はかなり混乱している様だ。

正直戦況は余り好転しているとは言い難いだろう。

そんな中でも、あの赤い隊長機は自らの役割を果たし部隊を活かす為に最善の選択肢を取っている。

流石と言うべきだろう。

『うっさいな……。邪魔しないでほしいんだけど……。……。……。——!?……やっ……。た……。』

うわ言の様に何かを呟き、安芸は弱々しくも喜びの声を上げた。

『はは……。やっ……。たん……。だ……。……。う……。れ……。』

彼女に死が近いのだろう。

緊急時にも拘らず、何かを成し遂げ達成感に満ち溢れた表情をしている。

既に瞳孔は開いたままで、もはや焦点も定まっていはいない。

『……そっか…こういう気持ち…、制限されない…は…は…』
『早くしろ、敵は待ってちゃくれななんだぞっ!!』

『——安芸、敵が来ちゃうよっ!!』

『——ファング8、石見少尉っ!』

中隊各機が尚も安芸に脱出勧告を促す。

『あ、はは…なんだ、まだきづいていないのか…、やれやれ…これだから、譜代のお嬢様は…、手間が掛かる…、やった…よ…、唯依…』

『——えっ…?』

『なに…?その顔…、多分…、えっ?!』っていったんだな…』

聴覚も失われつつあるようだ。

彼女の死が濃くなりつつある。

せめて見届けよう、最後の瞬間まで。

今の僕に出来る事を見るだけだ。

『あ…はは、…変な顔…、これ…教えてやったら…驚くだろうな…』

安芸の声音に勢いも無くし始めていた。

『やったんだよ…私達…『死の8分』を…乗り越え…たんだ…』

死の8分…。

言葉の意味は良く分からない。

だが言葉の本質は何故か分かる。

勘でも冴え渡っているのだろうか。

恐らく、出撃し接敵してからの8分を指しているのだろう。

あれだけ経って、まだ8分しか経っていなかったのか。

随分長時間戦っていたような気がする。

『——早くして安芸っ!何やってるの、早くッ!!』

『——何やってる、ファング2!負傷者の回収は後回しだ、バカ者ッ!!』

『——安芸、早くっ!早く立ってっ!!』

捲し立てる彼女達の声は、もう届いていない。
安芸の意識すらも、途切れようとしていた。

『私たち……死の……8分を……』

何故この娘は、死の8分とやらに拘るのだろうか？

『早くつ安芸——緊急脱出をッ!!』

『私は……やったんだ……、これ……で……やつと……弟の……』

……

そういう事だったのか。

彼女の“弟”さんと“死の8分”……その因果関係が全てに起因していた訳だ。

もしも、彼女にもう少し割り切れる冷徹さが備わっていたら、結果は変わっていたかも知れない。

クソつたれっ！

せめて僕もACで戦場に立っていれば、何かが変わえられたかも知れないっていうのに！

だが戦いはまだまだ続く。

……

—— B G M 故郷 ——

何だろう、この歌？

どこか懐かしく、優しく、何となくだが寂しい。

歌っているんだ。

彼女達が——。

故郷を想いし歌——。

その歌が唄われた途端、彼女達は人が変わったかのように獅子奮迅の戦い振りをみせた。

だが突如として赤い中隊長機、『如月きさらぎ||佳織かおり中尉』に通信が入った。

内容が僕にも明確に聞こえて来る。

今の敵群の殲滅を以て前衛防衛を放棄し、基地直援に当たれとの命

が下ったようだ。

砲撃陣地や防衛戦線は何とか機能している様だが、戦況は芳しくない。

頻発するBETA群の進行。

圧倒的数の暴力。

そして入り組んだ、起伏に富んだ複雑な地形。

こうまで敵に接近されては、アームズフォートも真面に生かす事は難しい。

そう言えば、如月中尉と司令部との間で何やら揉めていたな。

僕にとって、この『京都』とやらの地形は全く以て無知だ。

だが一つだけ分かった事があった。

もしもこの戦で大敗を喫し、八幡なる地域がが完全制圧された場合

国連所属の米軍第七艦隊による『戦術核』攻撃が敢行されるらしい。

軍全体で鑑みれば、それも有用な手段と言える。

だが、この国に住む人々にとってはどうだろう。

レイヴンを目指す過程で、日本という国に拘る教導官から聞いた事があった。

何よりも日本には、連綿と受け継がれし伝統と文化が尊ばれる。

企業との戦争に負け国家解体が宣言された時、文化を愛する日本人たちから数多くの自殺者が出たそう。

国家解体後世代の僕にとって、国や文化という概念はあまり深く刻み込まれてはいない。

しかし、この国を：故郷を守り抜こうと今も戦い抜く、この人達にとって核攻撃など到底容認出来るものではない筈だ。

唯依を始めとする各小隊の面々には知らされてはいない様だが、彼女達には命懸けでこの地域を守り抜く使命がある。

正直僕も今直ぐ参戦したい位だ。

中隊各機は如月機に追従し、サーフェーシング噴射地表面滑走での超低空のブースト移動ホバーストで移動を始めた。

だがここで、問題が発生した。

それも些細な個人の感情でだ。

『何をやっているの？ファング1ーツ!?——和泉いずみっ!!』

後続の僚機が隊列を乱し、突如BETAに対し攻撃を仕掛けた。もう死んでいるというのに。

唯依機から戸惑いの声が聞こえる。

ファング1ー、和泉いずみ、それが彼女の名前らしい。

彼女は一心不乱に、もう死んでいる要撃級に剣を何度も叩き付けた。

何度も何度も——。

一体どうしたというんだ？

『——和泉っ、そいつはもう死んでっ——』

『——いやっ!!——逃げるなんてできないっ、仇を……、此処で仇を討つんだっ!!』

唯依の制止も聞かず、彼女……能登のと||和泉いずみは剣を叩き付けた。

『——能登少尉っ!!』

『——うるさい邪魔をするなっ!何も知らないお姫様の癖にっ!!』

両者とも逆上しているのか、激しい口論が始まった。

そんな事をしていないだろうに。

強引にでも和泉機を連れ出すか、最悪……見捨てるか——。

『——忠道は……私の全てだったんだっ!!——忠道と結婚する事が——田上家との縁組がっ!——私が能登家の役に立てるっ……能登家に必要とされる……たった一つの事だったんだっ!!』

唐突に発露される彼女の心。

……そんな事情が。

今の言葉から察するに、恐らく彼女の婚約者はもう……。

半ば発狂しながら、和泉機はBETAの死骸を切り刻んでいた。

そして尚も続く、彼女の罵り、激情、怒り、悲しみ。

もう居ない、愛しき人への想い。

『摂家遠縁の縁組で救われた家に生まれ、なに不自由なく生きてきたアンタには——絶対にっ!だからあんな青臭い事が言えるのよっ!何が同じ訓練生よっ!何が皆で頑張ろうだよっ!家格替えがあつて

撰家に繋がるアンタはさ、上に行けるって知っているのかもしれないけどね、私達は何をやるうが生涯外様なんだよッ!?——上に行けないって分かっているのに、何でアンタと同じ頑張り方しなきゃいけないのッ?! 私たちはね、そういう——アンタから見たら哀れな範囲で幸せを満喫できるように生きるしかないんだよ!!——余計な夢見させないでよっ! そんな事してアンタ…責任取ってくれんのッ!』

かなり親しい間柄に見えたのだが、今の和泉という娘の憎悪は寧ろ唯依に向けられていないか?

身体はBETAに、心は唯依に向いている。

詳しい事は良く分からないが、彼女たちの家柄や環境に大きな隔たりや柵しがらみが存在しているらしい。

だがそれを差し引いても、唯依一人を責めるのは論点が違う気もするし、何より身勝手な独断専行が許されるとは、どうしても思えないのだが。

半泣きの唯依に同情の念を禁じ得ない。

しかし、唯依も唯依だ。

そんな事で一々委縮してないで、力づくで強行しても良いだろうに。

若しかして彼女…弱いのか? あらゆる面で……。

それにしても和泉の行動がこの先、部隊全体の士気に関わるようなら……。

『——何もわからない癖に……出しゃばらないでよ、お姫さ…!?!』

『——わかりませんわね! ええ、全く!』

——!?!

意外な事に、二人の仲裁に入ったのはファング3だった。

彼女は装備していた剣で、死んでいる要撃級をバラバラにする。

これ以上、無意味な攻撃が行われない様に。

それでも気に入らないのだろう、能登和泉の矛先はファング11に向けられた。

しかし、そんな彼女はまるで動じていないかの如く、難なく受け流し遂には完全に論破してしまう。

途中、唯依が彼女の名を口にした。

山城やましろう かずさⅡ上総。

それがフアング11の名だった。

完全には収まっていなようではあったが、和泉は渋々と行為を中断し移動を再開し、唯依、山城機も移動を始めた。

『私が不甲斐無いばかりに、ごめんなさい……』

噴射地表面滑走中、唯依機が山城機へと謝罪と感謝の意を述べる。

『虫酸が走りますわね、あなた方の関係……。散々ぶら下がって甘やかし放題。見るに堪えませんわ!』

山城機から帰って来た言葉。

これはこれで随分と手厳しい。

彼女は、孤高の道を歩んで来たのだろうか？

同じ女性でも、スミカさんや如月中尉なる人は、激しい炎を彷彿とさせる。

しかし、この山城という少女は、薄く鋭い白刃の様なイメージを僕に抱かせた。

本当に何者だろう、この山城という少女。

改めて只者ではない様に思える。

もし僕が目の前に居たら、彼女はこういう反応を示すだろう。

ついどうでも良い事を考えてしまう。

多分、唯依以上に蔑んだ眼で見られ、罵られる処か居ない者として無視されてしまうだろうな。

仮に同じ部隊所属になったとしても、必要最小限の接触以外会話するも事なく、再び別れるに違いない。

正直、真面に相手をしてくれる姿など想像も付かない。

さて、そんなどうでもいい想像に耽っている内に、またもや場面が切り替わる。

……

絶望的と言わざるを得ないだろう。

どこからどう見ても彼女……如月佳織が生き延びる可能性は、ほぼゼロだ。

匍匐飛行の最中、部下のファング9とファング4がレーザーの餌食となった。

あの悲痛な叫び声は、今も深く脳裏に焼き付いている。

『——いやああああっ！た、たす……——助けて中尉いいいつ!!中尉いいがごぼぶふうばば……!!』

『——やだ……やだあ……地面が……地面があ……赤いよ……全部赤いよおおぶばまぼぶつぶげっ……!!』

ファング4と9は、もう居ない。

そして中尉は地面スレスレの超低空飛行で戦車級と接触——。

ただでさえ不安定な匍匐飛行は機体バランスを崩し、呆気無く墜落——。

地面を埋め尽くさんばかりに溢れた、戦車級の真っ只中に放り出された。

そして“待ってました”と言わんばかりに、機体に取り付く戦車級の群れ。

赤い機体に赤い戦車級。

ここまでくると、どれが戦術機でどれがBETAなのか見分けも付かない。

そして群れに取り付かれた者が、どの様な末路を遂げるのか僕は何度も見てきた。

絶叫を上げながら、全身を生きたまま食い千切られ、想像を絶する苦痛を味わいながら死んでゆくのだ。

空中を跳び上がり、レーザーで爆散できればまだ幸運な方だ。

しかし、そのまま死ねず、墜落し戦車級に取り付かれ機体の装甲を食い剥がし、脱出もままならず食い殺される恐怖は如何ばかりか。

こうやって第三者の視点からでも、充分恐怖は伝わって来る。

これから食われる当の本人からしてみれば、恐怖に耐え切れず発狂してもおかしくはない。

いや、発狂し正気を失った方が幸せかもしれない。

だが彼女の強い精神性は、未だに自我を保っていた。負傷した身体で力を振り絞り、機体に装着された自爆装置を作動させようとしていた。

彼女は最後まで、己が役目を全うしようとしている。強い人だ。

願わくば、こういう人には生き残ってほしい。

本当に悔やまれる。

僕にしてやれる唯一の事。

見届ける事だ。

彼女の高潔な“死”を最後まで見届けよう。

本心で言えば、僕が変わってやりたい位だ。

もし彼女が生き残れば、これからも多くの新兵たちを育て教導してくれるだろう。

……

こんなのアリかよ！

……

自爆装置が作動しない。

「ツ!!——ツ!!——ツ!!——ツ!!——ツ!!——ツ!!」

如月中尉は、何度も何度もスイッチに拳を叩き付けている。

「ツ!!——ツ!!——ツ!!——くつそおオオオツツ!!」

だが起動する様子はなく、ウンともスンとも反応する気配はなかった。

「ハアツ…ハアツ…ハアツ、フアング4…、これを見たくない一心だったのかも知れないな……!」

地面を埋め尽くす戦車級に慄き高度を上げたフアング4。

結果的レーザーに焼かれてしまったが、戦車級に生きたまま食い殺されたくない一心でとった行動だったのかも知れない。

「皇帝陛下…、征夷大將軍殿下…、任を果たせぬまま果てる不忠をお許し下さいっ!」

彼女は懐から拳銃を取り出す。

そうだな……。

それもアリだ。

「誰も好き好んで生きたまま喰われる奴なんて居やしない。僕だって同じ選択肢を取っただろう。」

「山城…、篁…、能登…、後は頼むっ！」

それが彼女、如月佳織中尉の最後の言葉だった。

意外にも静かな発砲音が響き、彼女は果てた。

さようなら…：高潔な戦士…：如月中尉。

僕は彼女に敬礼を送った。

…

またもや場面が切り替わる。

如月中尉率いる部隊が全滅し、生き残った唯依たち。

師団規模のBETA群に包囲されるも、琵琶湖からの艦砲射撃により帝都ごとの面制圧が行われた。

全兵装をパージしギリギリの機体面積で、新老ノ坂トンネルを突破。

そこで彼女等は、燃えゆく帝都『京の都』を目にする。

満身創痍だった篁唯依率いる生き残り達は、道中BETAの奇襲に遭うものの、真田大尉の部隊に助けられた。

必要最小限の装備だけ受け取り、唯依たちは再び目的地『京都駅』へと移動する。

そして彼女達に試練が押し掛かった。

京都駅一步手前の地点で、不意打ちを食らったのだ。

『——これは、衝角腕っ?!まさか、要塞級ツ!!』

気付いた時には手遅れだった。

建物の影から姿を現した、大型のBETA『要塞級』が立ち塞がったのである。

不味いな!

今の彼女達は十分な装備ではない。

真田大尉から一応の武器は受け取ったが、消耗と損傷を負った今、

とてもではないが要塞級と張り合える状態ではない。

アレの恐ろしさは身を以て知っている。

僕が対処できたのは、常に装備が忠実していたお陰だ。

何とかしてやり過ぎすか、強行突破すべきだろう。

光線級さえいなければ、高度を上げ跳び越える事も可能だ。

もし高度に制限が掛かるとなると、僕が思い付くのは壁蹴り噴射だ。
ブリストドライブ

幸い此処は市街地。

壁には事欠かない。

問題は、混乱状態の彼女達にブリストドライブの発想が有るか否か。

あの戦術機、それなりの高性能機に見える。

決して不可能ではないだろう。

だがそんな僕の望みも空しく、強行突破を図る唯依機は衝角腕に撃墜されてしまった。

残る二人は、自動回避プログラムが機能しているのか、鞭の如く自在に振り回す衝角腕を何とか避け続けてはいるが、正直いつまで持つか。

誰かが囷となり、誰かを逃がす作戦しか残されていない。

射程内の要塞級とは、それ程恐ろしい相手なんだ。

やがて能登機は山城機と接触し、彼女の機体はバランスを崩し墜落してしまう。

最後に残されたのは、能登和泉…だけだった。

錯乱し、操縦桿から手を放す彼女。

「——やだヤダヤダヤダやだやだやだあつ!!——うわあ…うああああああやだあツ!!」

要塞級は一切の容赦がなく、彼女を攻撃し続けた。

「——助けて、忠道っ!!——私を護ってえええッ!!」

だが遂に衝角腕は彼女を捉え、機体は空しく墜落した。

こうしてフアング中隊は全滅した。

……

もういいだろ？

何でこんな光景を見せられなければならないんだ？

何にもしてやれないじゃないか！

身代わりになってやる事も。

駆け付けてやる事も！

助けてやる事も！

BETAを殲滅する事も！

出来るのは……。

見る事だけ。

「んもう……、遅いよ……、忠道いぐべいべおあいつ!？」

能登和泉は死んだ。

BETAに食い殺された。

白色の小型BETA。

確か『兵士級』だったか？

何を思ったか彼女は、京都駅一階の改札口に向かい、其処で何かを待っていた。

最後に語った“忠道”という言葉で、大方察する事は出来た。

彼女は最後の最後まで、彼を寄る辺としていたんだ。

田上忠道 彼だけが、彼女にとって全てだったのだろう。

改札口へ向かう途中、彼女は呟いていた。

婚約者である忠道と出会った思い出の場所だと――。

その結末がコレだ。

せめて、あの世で愛しい彼と再開できたらいいな。

僕がそう願うのは傲慢だろうか？

喰われゆく能登和泉の冥福を祈らずにはいられなかった。

「能登少尉の……K I Aを……確認っ……」

それを目撃していたのは僕だけではなく、篁唯依もだった。機体は撃墜されたものの、何とか脱出を果たし能登和泉と山城上総を捜索していたのである。

能登和泉が戦死した今、残るは山城上総一人。

だが、そんな僕は最も凄惨な光景を目にする羽目になる。

こんなのアリかよっ！

チクシヨウめっ!!

「お願い……私を……撃つて……」

戦車級に取り付かれていた、山城機――。

唯依がそれを見付けた時には、そんな状態だった。

そのコックピット内に彼女は未だ取り残されていたのだ。

山城上総は脱出しなかった、否、出来なかった。

「撃つてよ……お願い……だから……!」

途切れ途切れながらも、精一杯懇願する上総。

墜落の衝撃で、彼女の手脚は骨折し身動きの取れない状態に陥っていた。

それを見付けた唯依に彼女は必死に介錯を頼む。

「……餌になる前に……殺してよお……っ!」

「あ……あ……ああ……」

篁唯は茫然とするだけで、銃すら満足に構えられない状態だ。

「――お願いっ撃つてっ!早くっ!撃つてよおっ!こいつ等に食われる前にっ……!」

山城上総は最後の力で目一杯叫ぶ。

「――撃つてよ唯依いいいいいいいいいいいいっ!……!」

……。

もういい。

もう沢山だ……。

……。

結局…唯依は残り少ない弾丸を最後まで彼女に向ける事が出来なかった。

山城上総は生きたまま食われた。

戦車級に――。

ボリボリと戦車級に貪り食われ、最後に彼女の頭部が唯依の元へと転がり落ちて来た。

せめてもの救いは、山城上総は最後まで悲鳴や絶叫を上げる事無く、逝った事だろうか？

彼女の頭部を抱え込み、泣き叫ぶ篁唯依。

そして彼女に迫り来る複数の戦車級。

…それからどうなったのかは分からない。

気が付けば僕の目の前には、よく見知った彼の顔があったからだ。

「……」

「――おいつ、大丈夫かっ？」

「……ユウ……キ……さん……？」

飛鳥は周囲を見回す。

其処はいつもの部屋。

自室だった。

「はあ…はあ…はあ……ゆ…夢…か…？」

全身が気怠く汗を掻き喉がひどく乾く。

「取り敢えず飲め！」

ユウキがペットボトルを手渡す。

飛鳥は透かさず飲料水を一気に飲み干した。

少し落ち着いたのか、徐々に呼吸も静まり意識もクリアになる。

「ホントに大丈夫か？…かなり、うなされていたぜ!? 起こしても中々起きなかったからな、水でもぶっ掛けようかと本気で思った処だ」

あの出来事は、どうやら夢だったらしい。

正直水を掛けられてでも覚めたかったぐらいに、胸糞悪くなる悪夢だった。

「……もう朝か……」

「何言ってやがる、もう昼だぜー!」

朝はとつくに過ぎ去り、時刻は正午を過ぎていた。

「ミッシヨンの依頼が来ていたがな、今回は勝手にパスの返信をさせて貰ったぜ。そんな状態じゃ先ず失敗するだろうからな!」

「……すいません、手数をお掛けしました」

「気にすんな!とにかく、今日はゆつくりと休みな!あと、風呂入って来い、汗だくじゃねえか!」

ユウキは飛鳥を気遣い、シャワーで汗を流すよう促した。

「そうですね……そうさせて貰います」

飛鳥は言葉に甘える事にし、おぼつかない足取りシャワー室へと向かった。

「ホントに大丈夫か、アイツ?どんな悪夢を見たのやら」

そんな飛鳥の背を心配そうな顔で見送る、ギン・ユウキ。

やや温めの温水が飛鳥に降り掛かる。

熱めの温水で喝を入れても良かったが、時間に追われている訳でもない。

シャワーを浴びながら、飛鳥は床に座り込んだ。

そして大きく息を吐く。

「ふうふうあああ……」

先程まで見ていたあの悪夢が、再び蘇ってきた。

——チツ!!

温水のシャワーの中で、彼は顔を顰め舌打ちした。

目の前で次々と戦死していく少女達。

レーザーに焼かれた者、要撃級に粉碎された者、自害した者、そして生きたまま食われていった者。

何もしてやれなかった。

ただ見ている事しか出来なかったのだ。

どれだけ叫ぼうとも、必死に手を差し伸べようとも——。

彼女達は反応しなかった。

いや、あの戦場は実際に起こった事なのだろうか？

夢の中で聞いた会話に、『日本』『京都』といった名が出て来ていたのは覚えている。

あの戦場は日本の京都が舞台だ。

それに今、世界情勢はどうなっているのだろうか。

BETAの侵攻が、世界にどれ程の影響を及ぼしているのか？

——どうせ今日は暇なんだ、少し調べてみるか。

飛鳥は立ち上がり身体を洗浄する。

シャワーを終え簡単な食事を済ませた後、自室の端末を起動させた。

……

今でも鮮明に覚えている。

あの彼女達の名を——。

甲斐かひ志摩しま子こ

石見いわみ安芸あき

能登のとう和泉いずみ

如月きさらぎ佳織かおり

フアング中隊の隊員たち。

そして——。

山城やましろ上総かずさ

篁たかむら唯依ゆい

彼女達の死に様を忘れる事など出来そうにない。

たとえそれが夢の出来事であったとしても、一生自分の心を刻み続けるだろう。

忘れない内に、紙に彼女達の名を書いておいた。

どう言う訳か漢字も理解出来た。

直接視覚で捕らえた訳でもないというのに。

本心で言えば、夢の彼女達が実在しない人物である事を、切に願わん。

あの戦場も過去に起こった事なのか、これから起こり得る未来の出

来事なのかは、判断しかねる。

願わくば、あの夢の中だけで完結して貰いたいものだ。

「……うくん、出て来ないなあ……」

世界中のサイトにアクセスするものの、BETAの進行状況に関しては余り順調ではなかった。

BETA関係の情報は、大抵企業や軍組織が独占状態にある。

民間の表のサイトでは大まかな情報が、大まかにしか記載されていなかった。

だが、そんな僅かな情報でも、ある程度は推察が付く。

「少なくとも、有澤統治区^{日本}には、まだ上陸されていない。それに京都とやらの陥落情報も無い……か」

——となれば、あの悪夢^{戦場}は、これから起こり得る未来かも知れないという可能性が出て来た。

「おいおい、真剣な真顔で女の名前まで書いて……そういう、お歳か……？」

ユウキに横槍を入れられた。

「……」

しかし飛鳥は、無言で、無表情で、彼に向き直るだけだ。

「……悪夢でも見たんだろ？ 話位なら聞いてやれる」

「……はい……実は……」

飛鳥の纏う雰囲気を感じ、ユウキは彼の話を聞いてやる事にした。それで全てが解決できる訳ではない。

しかし、抱かえ込んだ何かを吐き出す事で、その重石を軽くしてやる事は出来る。

飛鳥はポツポツと語り出す……、あの燃ゆる都での悪夢^{戦場}を——。

……

「……そうか」

あの山城上総という少女が、戦車級に食い殺され夢から覚めた処までを語り終えた。

飛鳥もユウキも小さく息を吐き、暫し無言でいた。

「——今の所、BETA共の進軍は大陸部で停滞している」

「——スミカ…さんっ…?」

「——セ…スミカさん…」

突如、声のした方に振り向く飛鳥とユウキ。

何時から居たのだろう。

傍には、カスミ・スミカが立っていた。

彼女の話によると、BETAは日本列島には上陸しておらず、アジア大陸で人類側と激戦を繰り広げられている状態だという。

「そうでしたか」

彼女の話なら信用できる。

飛鳥は一先ず安堵した。

「だが飛鳥よ。お前は近いうち、重要な岐路に立たされる。どういう選択肢を取るにせよ、悔いる事のないようにな」

「……どういう事です?」

スミカの言に飛鳥は聞き返すが、「今に分かる」と部屋を出ようとする。

「ああ、後、言い忘れていたんだが。国連と企業連の共同声明があつてな、国家解体以前の旧暦…つまり『西暦』を使う事に同意したそうだな。当然告げられる驚愕の事実。

「——ええ?!旧暦…西暦が使用されるってツ!」

「ああ。実は今日、区内速報が通達されたんだ。お前が寝ている間にな」

“ 後で端末を確認してみろ、更新されている筈だ” そうユウキに告げられた。

そしてスミカも、言葉を付け加える。

「因みに今日の日付はな——」

—— 1997年05月09日 ——

ハイブースト

A?に装着されたブースターを、瞬間的に爆発的な推力で移動する機動法である。

主に緊急回避や相手を攪乱させる為に使用され、その用途は幅広い。

しかし使用の際は多くのエネルギーを消耗し、連続的な多用は推奨されていない。

ACネクストのクイックブースト比べれば、性能に明らかな隔たりはあるが

これのお陰で生存性は飛躍的な増した。

一刻も早い、通常兵器への実装が待たれる。

第8話―人類種の天敵が見た、ヒト―

アームズフォート (AF)

企業間戦争におけるパワーバランスの調整の果て。

希少なリンクスへの個体依存性に強く影響するネクストACから大勢の凡人による総合制御に生まれた、超巨大戦略兵器。

大艦巨砲主義を地で行く無駄なほどの巨大さと、それに似つかわしい圧倒的火力と物量で戦場を蹂躪する、まさに機械仕掛けの化け物。ネクストですら、その火力と射程に苦戦を強いられることが多く、こいつらを相手取るのに

ヴァンガード・オーバード・ブリスト (VOB) と呼ばれる長距離飛行用の特殊パーツで相手の射程を掻い潜ることから始まる任務も存在する。

代替え可能な大多数の凡人――。

代替え、即ち部品であり消耗品なのだ。

それが企業連の導き出した for answer 答え なのだろう。

―― 1997年5月9日 AFギガベース ――

(推奨BGM マブラヴオルタ ―― ブリーフィング)

アームズフォート『ギガベース』、有澤重工が所有する巨大要塞兵器。

英国圏のミミル軍港を発ち、欧州西端部より上陸を開始していた。その道中の出来事である。

「巨大交易所？」

「うむ。そこへ立ち寄る予定だ」

香月夕呼に対し有澤隆文は応える。

インテリオルユニオン所属のミミル軍港にて、多くの物資や技術獲得に成功した日本帝国と有澤重工業。

次なる目的は、欧州アジア寄りに位置する大規模交易所――。

そこは統治企業連盟――通称『企業連』の管轄であり、多くの人々が思惑を抱き往来する交易都市でもあった。

近年、脅威となりつつあるBETA群に抗する為、企業連が部隊を割き、巨大交易所へと差し向けていた。

有澤、日本帝国の連合軍も其処へ向かい、更なる必要物資の確保と戦力となる人員の増強を図る予定だ。

ミミル軍港でも、日本帝国に興味を抱いた傭兵達が専属契約を結び、このギガベースへと搭乗している。

だが終結したのは、小型軽MT12、中量MT6、ACノーマル4、歩兵傭兵30、と少々心許ない戦力ではあった。

彼等の質にもよるが、総合力では連携訓練を受けた戦術機一個中隊に見合うかどうかの戦力値だった。

流石に、これだけでは大した戦力の増強は望めず、首脳陣との協議の結果、巨大交易所に立ち寄る追加修正案に踏み切ったのであった。

「集ってくれるでしょうか？我々の志に、共感してくれる人達が……」
「厳しいわね、正直な処」

崇宰恭子に夕呼は厳しい現実を突き付けた。

一応、有澤重工の呼び掛けに応じ、参戦を決めてくれた傭兵達。

本来損得勘定で動く事を是とする彼等に、帝国特有の志があるかどうかは疑わしい。

ギガベースに居る帝国軍の衛士たちは、基本国防の為にこの作戦に参加していた。

だがそんな彼等と傭兵達との間で、余計な軋轢が生じるのは火を見るより明らかだろう。

そうでなくとも帝国軍人と国連軍人との間ですら、只ならぬ差別意

識や摩擦が発生しているのだから。

何の前触れもなく次元を隔てた世界同士が融合した、価値観も思想も何もかもが違う傭兵と衛士――。

上層部もこの事を念頭に入れ、応急策として傭兵達の居住区間を分ける事になっていた。

丁度ギガベースは双胴型の船体に、艦橋部で繋げるような形をしている。

帝国衛士側と、傭兵側とで区別するには都合が良かった。

とは言え――。

帝国衛士側では矢張りと言うか傭兵戦力の参入を歓迎しておらず、彼等に聞こえない事を良い事に過剰な陰口を叩いていた。

(全ての衛士が、こうではない)

「ただ、この巨大交易所は陸地に存在する故に、人が訪れ駐屯するのにも都合が良い。上手くいけば、更なる傭兵達が参入してくれましょう」

「そうですね。その中から、帝国軍に所属してくれる者達が居てくれる事を願います」

巨大交易所での期待を抱く、隆文と恭子。

少しでも共感を得られるよう、可能な限り日本人或いは日系人を優先して、呼び掛けを行っていた。

基本的に利益と報酬で動く彼等傭兵――。

しかし、彼等全てが欲のみで動く人々とは限らない。

可能性は低いが、そんな彼等にも帝国側の価値観を共有してくれる者達が居てくれる事を、崇宰恭子は切に願った。

「――そういえば。あの少年も例の交易所に居を構えていたわね」

夕呼が指し示す少年――。

数々の依頼をこなす内に、次々と新種のBETAと接触した若きレイヴン。

ACハイエンドノーマルを駆る、まだ幼さを残した独立傭兵。

「ゴイツは是非とも此方側に引き込みたいわね。あらゆる報酬をチラつかせてでも」

大型のモニターに投影された少年。

その画像を見据え、夕呼はどうやって引き込むかを画策していた。金で釣る。

心を責め、興味を引く。

女を使い誑かす。

かくなる上は、実力行使で――。

「――その様な手段では却って逆効果だと思われませんが？香月中佐殿？」

今まで無言で成り行きを見守っていた、一人の女性衛士が発言した。

彼女の名は、神宮寺――まりも。

香月夕呼の護衛兼補佐として同行している、ベテランの衛士だ。

「あら、珍しいわね。アンタが意見するなんて」

「見た処、この飛鳥と言う少年。未だ傭兵色に染まり切っていない気がします。此処は誠実に……、正攻法で接触してみるべきかと」

「神宮寺大尉殿。レイヴンを少々甘く見てはいないかね？たとえ少年と言えども、こ奴は一端の傭兵。下手に出れば足下を掬われかねませんぞ？」

まりもの提案に、隆文は警告を呈す。

確かに、まだ幼く経験も浅いレイヴンではある。

しかし彼は他の同年代のレイヴンに比べ、遥かに高い実績と技量を有しているのである。

尤も、それは彼一人だけの實力ではなく、二人の元リンクスの力添えがあつてこそ、今の領域に到達できていたのだが。

「貴方の言にも一理あります、有澤さん。でも私には分かるんです。私なりに傭兵達を観てきましたが、この子……いえ『彼』は、何処かが……何かが違う様に思えます。伊達に教導任務に携わってきてはいません故に、多くの教え子を導いてきたという実績と自負が御座いま

す」

「……」

「まりもの言に隆文は黙り込むが、少しの間を置き再び口を開いた。「神宮寺大尉のお心は理解出来た。私としても、ハイエンドノーマルを自在に駆る戦力は欲しい処ですしな。しかし、彼の者はあくまで傭兵。ギガベースに引き込むまでは、私のやり方でやらせて頂く！それで構いませんか？」

「……仕方がありませんね、本来の決定権は貴方がお持ち。貴方がそうお決めになれば、私には反論の余地はありません」

結局、有澤隆文が傭兵の流儀で、飛鳥に呼び掛けるという方針に出た。

彼も元リンクス、傭兵としての流儀は弁えている積りであった。

だがここで或る問題が生じる。

仮に火無飛鳥を引き込めたとしよう。

一体誰が彼を管理するかだ。

ギガベースへ招いた後、どういう扱いを施すのか。

あくまで傭兵として、一戦力として扱うのか。

国連、若しくは帝国軍人として編入させるのか。

それとも、斯衛軍に招き入れるのか。

日本帝国一つをとっても、様々な派閥が存在し政治的な理由で互いを牽制し合っているのだ。

下手に独占欲を引き起こせば、それこそ帝国内にも拘らず、要らぬ諍いが湧き起ころう。

BETAの脅威に頭を悩ませている日本帝国。

たった一人のレイヴンを巡って、争うなど愚の骨頂だ。

「——愚策と言われれば身も蓋もありませんが、彼の意思を尊重しつつも各部署で協力を仰ぐというのが、この時点では無難かと」

崇宰恭子が妥協案を提示する。

身内で骨肉の争いなど見せれば、それこそ火無飛鳥は愛想を尽かし、ギガベースを降りてしまう可能性も存在する。

そうなってしまうっては、引き込む意味が消失してしまうのだ。

有澤隆文は飛鳥を一レイヴンとしてしか見ていない故、さして執着はない。

しかし香月夕呼と崇宰恭子は、多少なりとも独占欲が芽生え始めていた。

少なくとも本国に帰る迄は、恭子の案を採用した方が良いだろう。

「ま、仕方ないわね。まずはコイツを引き込まない事には始まらないんだし。頼むわよ、有澤社長！」

「……最善を尽くす」

夕呼も此処は引き下がる事にし、引き入れる役目は隆文に一任する事にした。

巨大な砂埃を上げながら、ギガベースは巨大交易所へと向かった。

—— 同日 ——

一台の車両が砂煙を巻き上げ、荒野を只管突き進む。

運転手と助手席に一人ずつ、そして備え付けの12.7ミリ機銃座に一人の計三名。

最近になりコジマ粒子濃度は急激に緩和され、防護服は不要となった。

彼等は素顔を晒し、近付きつつある目的地を目指していた。

「見えて来たぞ、アレが例の交易所だ」

運転席の男が顎で指し示す。

交易所自体かなりの規模を誇り、都市機能をも有した施設だ。

輪郭が視認できたからと言って、直線距離はまだまだかけ離れている。

「兄ちゃんも物好きだねえ、あの施設で一旗揚げたいってか？」

助手席の男も釣られ、機銃席の青年に話し掛けた。

「はは…、まあそんなところですよ」

多くを語らぬこの青年。

元は軍人という経歴を持っていた。

大陸での作戦に従事し、激しい戦闘を繰り広げていたが、力及ばず

大敗——。

その後、命からがら逃げ出したものの荒野を彷徨い続け、ゲリラ部隊や傭兵組織と関わり『ミグラント』として今日まで生きてきた。

近日中、あの巨大交易所に多くの部隊が集結するという情報を入手した。

そして有澤重工業を名乗る組織から一通のメールが送信されていた。

—— 志ある者達よ、いざ祖国を救済せん ——

余りに短く、不明瞭なメッセージ。

しかし、たったそれだけで彼は心動いた。

「まあ俺等もBETAが恐いから、あの交易所で住む予定なんだがな」
「あそこに行きやあ物資も環境も整っている分、仕事も生活も今よりはマシになるだろうぜ」

「……」

二人の会話も、彼は無言で耳を傾けるだけだ。

—— もう直ぐ……もう直ぐだ……。我が祖国……我が家族よ……！

ある決意を胸に、青年は眼前の施設を見つめていた。

—— 同日 夕暮れ 巨大交易所 ——

交易所の一区間に位置する公園施設——。

既に時刻は夕暮れとなり、装甲壁に設置されたライトが橙の光が灯り、天井を照らす。

飛鳥は設置されたベンチに座り込み、植物を鑑賞しながら精神を落ち着かせていた。

あの時見た悪夢は消せようもないが、此処に居れば荒んだ心を癒す事が出来る。

飛鳥にとって、数少ない安らぎの場でもあった。

ただ普段なら此処へはいつも一人で赴くのだが、今日は珍しくユウ

キも居た。

「何時、此処を発たれるんです?」

飛鳥は訪ねる。

「早くて一週間、長くても二週間以内だな。お前はどの先どういう予定を?」

ユウキもスミカも元から此処で永住する気はなく、遅かれ早かれ旅立つ積りでいた。

本来なら、もっと早く発つ気でいたのだが、部屋と環境を提供してもらった飛鳥に恩義を感じ、今まで引き延ばしていた。

そして自分達の知識や技術を伝授する事で、彼に報いようとしていたのだ。

今度はユウキから飛鳥に質問を返す。

「独立傭兵を続ける——……、昨日の僕なら、そう言い切っていたでしょうね」

「……あの夢か?」

「——!?……やっぱり、分かりますか?」

「おいおい、それなりに組んで来たんだ。大体分かるさ。——まっ、お前は特に分かり易い奴だがな」

このまま独立傭兵を続けるつもりでいた。

BETAなる生物が現れず、あのような夢など見なければ、彼は迷いもなくこの交易所で独立傭兵を続けていただろう。

これまでの作戦で、生きたまま食い殺される人々をこの目で何度も見てきた。

現実は何度も——。

しかし、実在するかも分からない少女たちが無残に死んでいったあの悪夢——。

追い詰められ、退路を断たれ、万策尽き、果てに食い殺されてゆく。自分は傍に居ながら何一つ手を差し伸べる事も出来なかった。

夢から覚め数時間——。

後からふつつつと憤りが湧き起こった。

誰に対してではない——。

——自分に対してだ。

そして妙に気になるのだ。

自分の生まれ故郷である日本が——。

国家解体後世代である自分にとっては、日本ではなく有澤統治領という認識は抜け切れてはいなかったが。

兎にも角にも、あの夢が切っ掛けとなり日本という国が、どうにも心に引っ掛かるのであった。

「日本へ行きたいのか？」

「……迷っています」

行くべきか？行かざるべきか？

仮に行って何が成せるのか。

何を指すのか。

何処につき進めばいいのか。

全く指標すら見出せず、何をどうして良いのかも見当が付かない。

「……………」

「……………」

暫く二人は無言のまま、橙に染まった装甲壁の天井を見上げていた。

「人類種の天敵もな……路頭に迷ったんだ……」

「……………」

特に前触れもなく、ユウキは呟く。

相次ぐテロ、紛争、慢性的なエネルギー不足、食糧危機、格差社会の二極化、汚染されゆく自然環境。

次第に国家は統治能力を失い、或る日を境に巨大複合産業である企業がクーデターを実行。

新発見されたコジマ粒子を利用した超兵器、アーマードコア・ネクストを用いて国家軍に圧勝。

完敗を喫した国家に再建の活力は無く、国家という枠組みは解体され新たな秩序が形成された。

(推奨BGM アーマード・コア4——Change Gears)

国家解体戦争である。

新たな新秩序の下、世界は再び回り始めるが活力を失った人類は、諦観の内に壊死しようとしていた。

時は進み企業間の紛争、リンクス戦争が勃発し、戦場の主役となったのはACネクストであった。

しかし加速度的なコジマ汚染が進み、最早地上は人類が生存不可能な程に汚染され尽くす。

企業は広大な空へと住処を定め、巨大航空プラットフォーム・クレイドルを建設し、地上の汚染から逃れる。

しかしクレイドルを支えるエネルギーは、コジマ粒子に大きく依存し、汚染から逃れる筈が汚染物質で支え続けるという矛盾で成り立っていた。

そして、ORCA旅団なる武装組織が台頭し、クレイドルを支えるアルテリア施設を襲撃――。

世界は更なる混迷の度合いを増し、既に人類も世界も滅びに向かい加速していった。

そんな中、一人のリンクスが混迷の時代を駆けていた。

彼も独立傭兵で、企業連から斡旋される依頼で生計を立てていた。

しかし、ORCA旅団長『マクシミリアンIIテルミドール』からの勧誘を受け、ORCA旅団の一員となる。

彼の思想に共感し世界のシステム変えようと奮戦するが、次第に彼の精神は荒み歪み始めていた。

いや、純粹だったのだろうか？

彼は世界を終わらせようと考え始めていた。

こうまで世界が歪み、荒れ果て、終末に向かわせたのは何か？

企業連？

いや違う。

技術？

それもあるだろう。

では経済？

そのシステム無くして人類は生存できない。
経済……。

システム……。

生存……。

人類……？

それを育むもの……。

文明。

文化。

どうすれば良い？

どうすればこの世界を変える事が出来る。

何時か何処かで、学者から聞いた事があった。

人間は自然サイクルの中で、何の恩恵も与えてはいない——と。

取るに足らない虫や微生物でさえ、自然サイクルの中で何らかの役割を果たしているのだと。

その学者は、最後にこう付け加えた。

—— 自然界の中で人類は……ゴミだと ——

その直後、学者は拳銃自殺を凶りこの世を去った。

その死に顔は憎悪と絶望で、とうに正気など失っていた。

そうか……人類だ……、それが全ての元凶だ。

だが単純に人類そのものを断つ訳ではない。

それでは世界を変える意味を無くす。

あくまで人類を生かしつつ、歪みの元を断つ。

人類種を歪めたモノ——。

企業。

技術。

概念。

文化。

文明。

それ等を伴う力——。

先ずは企業の土台を成す概念、クレイドルを断つ。
弱者を見捨て空へと逃げ込んだ、企業の富裕層。

汚染された地上に取り残され、今も懸命に生きる貧困層。

そんな或る時――。

『よう、首輪付き、オールドキングだ。クレイドル03を襲撃する。付き合わないか？』

ORCA旅団の一人、オールドキングの誘いを受けた。

彼もクレイドルを標的とし、その時点で思惑は一致。

彼と共にクレイドルを襲撃し、その戦闘だけで延べ一億人を虐殺するという凶行に至る。

――ただ殺す事だけを覚えさせたか…残念だ…。お前とは、もう一緒にやれんよ――

作戦は成功。

大事なモノを代償に……。

一億人という大虐殺、当然企業連が放置する筈もない。

偽りの依頼で彼等呼び寄せ、5機のネクストで襲撃するも、彼等は返り討ちに遭った。

その戦闘でオールドキングは戦死したものの、一人のリンクスは生き残り、ここで初めて彼は『人類種の天敵』と呼ばれるに至った。

その後も彼は、他のクレイドルを襲撃し企業の基盤を破壊し続けた。

文明を無くし、力を奪い、もう一度ゼロから人類を再出発させる。歪んだシステムを根底から破壊し尽くし、人類をやり直しさせる。

オールドキングの思い描いていた革命とも、また違った道ではあるう。

だがそんな事はどうでもいい。

この狂い切った、灰被りの亡者の如き世界。

もう一度ゼロから歩み直せばそれでいい。

彼は後悔など微塵も無かった。

或る現実を知る迄は

有力な5人のリンクスを喪失し、いよいよ焦りに焦る企業連首脳陣。

彼等は最後の賭けに出る。

—— ホワイトグリン ト ——

企業とは対立関係にある、独立自由都市『ラインアーク』所属のリンクスとネクスト。

度重なる襲撃で斜陽の時を迎えていたラインアークであったが、企業連は前代未聞の巨額の報酬で彼に依頼。

人類種の天敵の討伐を画策した。

敵対関係であったラインアークに資金だけでなく戦力と技術をも提供し、作戦成功に向けて徹底した。

ほぼ全戦力を用い、退路を断ち、支援部隊を整え、万全の態勢で作戦に望む。

人類種の天敵とホワイトグリン トが激突。

激戦の末、ホワイトグリン トが辛くも勝利を収め、人類種の天敵は消え去った。

「だが実際は、少々異なる部分があつてな……」

ユウキの言に飛鳥は黙って耳を傾ける。

確かに激しい戦闘で、双方共に傷付き決着は時間の問題かと思われた。

だが此処で、ホワイトグリン トは予想外の行動に出る。

苛烈さと精密さを併せ持った変幻自在の攻撃が急に鳴りを潜め、——かと思えば、攻撃が止んだのである。

そしてあろう事か、後退を始め逃走を図ったのだ。

罨である事も誘いである事も承知の上で、ホワイトグリン トを追撃し、やがて追い詰める。

そして逃げ場のない地形を背にホワイトグrintは動きを止め、全ての武装をパージした。

あり得ない事だ。

ランク9でありながら、実際はトップランカーすら凌ぐホワイトグrintが武器を捨てるなど。

これではまるで、降伏ではないか。

彼が使用していた武器――。

弾切れを起こすには、まだ早過ぎる。

人類種の天敵は、余りに不可解な行動に動きを止めた。

それが勝敗を決定付けたのだ。

突如サイドからの狙撃を受け、人類種の天敵は呆気無く戦闘力を消失した。

それまでの激しい戦闘で、ホワイトグrintはアサルトアーマーを何度も行使し、彼のコジマ粒子を引き剥がしていた。

それが災いし、プライマルアーマーは機能せず直撃を受け、彼のネクストはどうとう倒された。

『……騙して悪いが仕事なんぞな』

それがホワイトグrintの残した、最後の言葉だった。

薄れゆく意識の中で聞こえて来るあの人の声。

『お前には山ほど説教がある……愉しみに待ってろヨお!!』

途切れ行く視界の中で、ゆっくりと近付いて来る半壊した桜色のネクスト。

程無くして大爆発を起こす両機――。

……

……

……

眠っていたのだろうか？

揺れを感じ、人類種の天敵……彼は目を覚ます。

混濁する意識の中ぼやけた視界で辺りを見回し、揺れの正体が車両に乗せられている事を知る。

隣は運転席、自身は助手席に座らされている事を認識した。

運転手は自分の良く知る人物、彼女以外は誰も乗ってはいない。小型で古い車両だ。

揺れは酷く、何時故障しても不思議ではない程に。どうやら生きているらしい。

必要最小限の治療だけ施されているのが分かった。

尤も隣の彼女も同じ状況で、かなりの重傷を負っているのが分かる。

それもその筈。

戦闘不能に陥った後、彼女が自爆を敢行し、自分諸共後処理を図ったのだから。

彼女は曰く。

ホワイトグリントは直ぐに立ち去り、自爆を敢行する事で辺り一帯は吹き飛び企業連は撤収。

だが自分達は奇跡的に生き残り、ネクストの残骸に埋もれていた。

結果的に、死に損なった彼女は彼を引き摺り、運よく古びた車両を発見、現在に至った。

「……聞こう、お前の本心を……」

運転しながら彼に尋ねる。

何故あのような凶行に奔ったのか。

彼も語った。

本心を――。

……

「……そうか……。馬鹿野郎だよ、お前は……」

彼女はそうとだけ返し、車を止め或る場所へと彼を引き連れた。

何も無い荒れ地、降り注ぐ放射線を含んだ灰。

「お前は大事な事を見逃している。今からそれを視るといい」

満足に動けない彼の襟首を無理やり掴み、或るものを見せた。

「お前が如何に馬鹿野郎か、身を以て知れ！」

荒い呼吸でボロボロの身体を押し、それを見た。

其処は小さな集落――。

殆ど寂れ、コジマ汚染対策も満足になされていない、最底辺の人々が集う貧困極まりない寄せ集めの集落だった。

廃材で辛うじて住居の体を成し、今日を食うにも四苦八苦する住民達。

しかし意外にも若い層が多く、幼い子供達も数多く住んでいた。

そして植物を必死で育て畑を耕し、それぞれが役割を分担し懸命に生きていたのだ。

汚染された灰が降るのを半壊した装甲材で凌ぎ、植物や畑を守り抜いていた。

そして何より彼が驚いたのは、住民の表情は皆明るく活力と生命に満ち溢れていた事だ。

聞けば、今育てている植物はコジマ汚染を浄化する特徴を持ち、これを育て栽培する事で世界中に広めようというのだ。

そんな事が知れ渡れば当然、利権まみれの企業連が黙っている筈も無い。

必ず圧力を掛け、忽ち搾取されてしまうだろう。

しかし、彼等は決して諦めていなかった。

既に何度も搾取され懲罰を受け、この地上に追放されたのだと言う。

そう――。

彼等の中には、元企業連やクレイドル住人も混ざっていたのである。

民族、人種、能力、そんな障害など此処では何の意味も成さない。

彼等は、力を合わせ一致団結し知恵を絞り、懸命に生きていたのだ。自分達の力で。

人間として在り方を信じ。

再び世界を再生させようと。

そして、それは何も此処だけではない。

彼等は彼らなりに繋がりを持ち、似た様な試みを行っている他地域と交流を持ち、徐々に活動を広めていた。

元クレイドルの住人は語った。

全ての住人が企業連のやり方に賛同している訳ではなく、再び古き良き社会を築こうと活動している団体が、幾つも存在しているのだという。

そういった彼等と提携し、徐々に地上を再生させようとプロジェクトを拡大しているとの事だ。

人類種の天敵は愕然とした。

自分のやろうとしている事は何だったのか。

そんな事すら知らず……否、知ろうともせず安易な殺戮に奔った挙句、正しき善良な彼等まで殺そうとしていたのではないか？

言葉すら出なかった。

「俺は……俺は……」

脚が震え立つ事すら困難となるが、住人の一人が作物と水を差し出してくれた。

「何があったかは知りませんが、これでも食って精を付けて下さいな！」

……

集落を出てやや離れた所に二人は居た。

「良く分かっただろう？お前の視野が如何に狭かったのが」

「……………」

返す言葉など見当たらなかった。

彼は打ち拉ひがれ、瞳を宙に泳がせるだけだった。

そして蹲り嗚咽を漏らす。

「……………rして……く……さい……。お……れを……ころ……して……下さ……い……。俺を……殺してください……！」

光の伴わない瞳で彼女に懇願する。

終わらせて欲しいと。

「……………いいだろう、死なせてやる——。私ではなく、寿命がな！」

彼女はゆっくりと彼に近付き、絶望に駆られた彼の顔面にストレー

トをお見舞いした。

真面に受け気を失った彼を担ぎ座席へと放り込んだ後、彼女は再び車両で移動を開始する。

そして行く先々で、様々な集落を廻った。

汚染が進み、企業から見捨てられながらも、懸命に生きる人々——。そして見ず知らずの素性をも知れぬ自分達に、物資を分けて与えてくれた人々——。

その度に思い知らされる——。

取り返しの付かない過ちを犯してしまった事を——。

「こんな……、こんな事を……もっと……もっと早く知っておけば、最初から……最初からオールドキングの誘いなどッ……!!」

拳を握り締め、彼は激しく後悔した。

「私も同罪なんだ。お前に戦う事だけを覚えさせてしまった……この私もな」

「……セレン……」

多くを教えた積りでいた。

自分の持つ知識、技術、価値観、精神——。

「だが私たちは、まだ生きている……そうだろうか？」

「……はい」

「なあ……生きてみないか？……リンクスとしてではなく、人として」

「……償い切れるでしょうか？余りに多くの出血を強いてしまった、……この俺に？」

「……もう忘れたのか？何もしなければ、何も変わらん。最初に教えた筈だったか？」

諭す彼女に、彼はほんの僅かに笑みを浮かべた。

「そうでした」

「……ふ……少しだけ、調子が戻って来たな。じゃあそろそろ物資の集まる場所にでも向かうか。私もお前も本格的な治療を受けんと、身体がもたん」

「……何処かアテがあるのですか？」

傷は未だ癒えておらず、精々止血パッドを施したに過ぎなかった。

幾らリンクスと言えども物資は無論、人々との繋がり無くしては到底生きていく事は出来ない。

それが人間というものだ。

「頼むからもってくれよお？オンボロ！」

既に燃料も心許なく、エンジンも限界間際まで酷使された古い車両。

ギシギシと音を立てながら、二人は巨大交易所を目指す。

……

「人類種の天敵……」

飛鳥は静かにその名を口にす。

「お前はどっと思ってる、ソイツに？」

ユウキが訊ねた。

「……。許す事は出来ませんよ。…そう…許せる筈がない！」

「……そうだな、普通はそうだ。…許せる奴の方がどうかしている！」

飛鳥の言にユウキも賛同し、深く目を閉じた。

(推奨BGM アーマード・コア—— SUNRISE)

「——だけど、その人は今も苦しんで償う道を！そこに至る答えを必死に探し求めている！——でなくば、あのクレイドル墜落現場で（序章にて）、住民救出に拘ったりはしない！そうでしょ？ユウキさんツ！！」

「——！！」

「決して私欲や悪意のみで、あのような凶行に奔った訳じゃない！人類種の天敵……彼は彼なりのやり方で…答えに行き着こうとしているたのではないでしょうか。そして今も…答えに行き着く道を——」

“ やった事自体は許されませんがね ” そう付け加える。

—— 何のために戦うのか ——

—— その答えを追い求めて ——

たとえ許されざる大罪を犯したとしても、過去を消す事は不可能だ。

終わりを迎えつつあった、この世界――。

人類種の天敵は、自身なりに世界を憂いた。

それは世界全体で観れば、取り返しの付かない前代未聞の大悪行である。

同時に彼自身も、ある意味で幼かった。

人そのものを見ていなかったのである。

「人類種の天敵……、許す事は出来ませんが同時に感謝もしています。もし出会う事がなければ僕はとづくに……」

「火無……飛鳥……」

戸惑うユウキに感謝の意を述べる飛鳥。

負傷し困窮していた彼等を見付け、必要最小限の環境を整えた。

二人は恩義を感じ、飛鳥に知識と技術を授け、作戦にまで同行してくれた。

紙一重な状況は幾つもあった。

今でこそ、こうして生きてはいるが、正直スミカとユウキの働きによる事が大きいのも確かだ。

本心で言えば、彼等と共にいつまでも活動を続けたい。

しかし、そんな願望は甘え以外の何物でもない。

彼等には彼等の人生がある。

いつまでも付き纏う訳にはいかないのだ。

「……残された期間、可能な限り、俺の知識と技術をたっぷりと叩き込んでやる。どうだ、受けてみるか？」

「――望むところですよ！是非ありませんッ！」

別離が訪れるまで少しばかりの猶予がある。

共に居られる期間も残り僅かだ。

ユウキの提案に飛鳥は即答で快諾した。

「ようしっ！そうと決まれば、今日はパアツと豪勢なモンでも食いに行くか！スミカさんも誘って三人でなっ！」

「いいですねー！今日位贅沢しましょうっ！」

先程までの暗い陰鬱とした空気感は、もう無い。

二人の表情は活気に満ち溢れ、公園を後にした。

「全く無駄使いの多いガキ共め——」

スミカは小言を零すも、笑みを浮かべていた。

—— 随分変わったな：アイツも：^{ユウキ} ——

ヴァンガード・オーバード・ブースト（V O B）

ネクストがアームズフォートに対抗するために開発された新装備。
通称V O B。

機体背部に接続する巨大な追加ブースターで、これを使用することでネクストは時速2000kmにも達するスピードで飛行することが可能。

『長射程と高火力を誇るアームズフォートに対して超高速で接近、その懐に入り込むことで損害を最小限に抑え、また、火力を封じる』というコンセプトに基づき開発された。

その速度と航続距離を活かし、アームズフォート以外の目標に対して奇襲を仕掛ける場合などにも用いられる。

行き過ぎた技術の発展——。

それが齎したのは、崩壊に加速する世界——。

技術を生み出した者達は、それを望んだのだろうか？

第9話―国家解体は成らず―

有澤重工業

日本を本拠とする、伝統ある重工業系総合企業。

形式上は独立企業だが、G Aとの関係が深く、実質的に同グループの一員として扱われている。

軍用車輛と炸薬の分野に秀でている。

過去、A Cネクスト製造の際、実弾防御とグレネードに特化したタック型に拘りを見せていた。

その専門性は今も相変わらずだが、決して他の分野が遅れている訳ではない。

世界が融合した時、逸早く異変に気付き状況把握と周辺調査に乗り出した。

そして現日本帝国首脳陣と接触を図り、同盟および協力関係を築く。

また第4計画にも一定の理解を示し、提唱者である香月夕呼に多大な援助を施した。

元々、国家の復古を悲願として掲げていた。

社長は、有澤隆文。

優れたリンクスでもある。

『国家解体は成らず』 先ずは、この言葉を贈ろう。薄々君も感じていると思うが、世界は次元を隔て融合した。君が信じようと信じまいと関係ない。過程の追及も意味を成さん。結果と現実が全てだ。さて…、不躰で申し訳ないのだが、力を貸して欲しい。BETAの存在は知っているだろう。その地球外起原種どもが、我々人類に牙を向いている事も。我々と共に日本へと来て頂きたい。我々の祖国『日本』が未曾有の危機に瀕している。企業連の大半は宇宙への進出を目論んでいるが、力無き人々は地球に取り残され、堪えずBETAの脅威に晒され続けるだろう。もし君にも日本人としての“血”と“魂”が宿っているのなら、我々と共に来ないか？金や利益の為ではなく、今日を懸命に生きる人々の為に！だがこの依頼を受ければ、君は純粋なレイヴンではなく衛士としての側面も併せ持つ事になる。言葉を飾る事に意味は無い、後は君の判断を待っただけだ。最後にもう一度、
“国家解体は成らず”』

(推奨BGM アーマードコア5 —— Lament Over
the Howling Age)

「十分、言葉で飾り立てているじゃないか」

飛鳥は溜息を漏らし、端末の画面を見つめていた。

突如として寄せられた奇妙な依頼。

依頼人は、あの有澤重工業からだ。

添えられた音声は、何と『有澤隆文』本人のものだった。

「仲介役すら、有澤本人が演じるとはな。あの男らしいと言うか何と
言うか……」

傍に居たユウキも似たような表情を浮かべ、頭をポリポリと掻いていた。

「やはり来たか」

飛鳥の自室にはユウキの他にスミカも居る。

この事を予期していたかのような口振りだ。

「……で、どうするんだ？」

「お前の答えだ。どんな選択肢を選んだとしてもな」

「……」

ユウキとスミカは飛鳥に問い掛ける。

だが飛鳥は意外にあっさりと、受諾の意を送信した。

「……随分あっさりと決めたな」

「後悔は無いな？」

飛鳥の行動にユウキは意外そうな顔をし、スミカは飛鳥のとった選択に覚悟を問う。

「……後悔しますよ……どっちを選んでも！」

飛鳥の答えは意外なものだった。

「……………」

彼の言葉にユウキとスミカは顔を見合わせる。

日本に向かうにせよ、此処に残るにせよ、必ず悔いる時はやって来るだろう。

—— こんな時、ああしとけば良かった ——

—— もしもこうしとけば、今頃はきっと ——

恐らくそんな想いに駆られる日が訪れる筈だ。

人間は生きている限り、常に選択を迫られる。

何気ない日常で選んだ答え——。

そして訪れる結果——。

全て自身が選び齎した道だ。

しかし自分の人生だ。

どんな選択肢でどの様な運命が降り掛かろうとも、それ等は全て己自身に降り掛かる。

誰かに強要され様とも環境に支配されようとも、選ぶ権利と義務は全て自分にある。

「どうせ後悔するんなら、自分で選んで後悔したい！」

何かに強制され選んだ答えでは、後悔しても仕切れない。

しかし自身で選んだ答えで招いた運命なら、少なくとも受け止める事が出来る。

「貴方が教えてくれたんですよ、スミカさん」

唐突に飛鳥はスミカへと振る。

「!?……そうだったか?……忘れたな、もう歳かな?」

恍惚とぼけるスミカ。

「……30代や40代の女性には、聞かせられないお言葉ですね」

苦笑いを浮かべるユウキ。

因みに彼女は、20代半ばから後半の年齢だと言っておく。

「有澤の連中が此処にやって来る迄、後10日後と言った処か」

「……なんで分かるんです?」

かなりの確に予想するスミカに対し、飛鳥は訪ねた。

1週間ほど前、スミカはユウキを伴いインテリオルが所有するミミル軍港へと赴いていた。

そこには、有澤重工率いる部隊も駐屯していたのである。

嘗ての知人で後輩でもある『ウイン・D・ファンシヨン』から、有澤の今後を密かに入手していた。

(人類種の天敵について多少言及されるも、彼女はあくまでシラを切る)

「今の有澤も少し変わっていてな。日本帝国斯衛軍を数多く引き連れていたよ」

「日本帝国!?!日本国じゃなくて……?」

「そ、結構物騒な国名だろ?アイツ等、石頭ばかりで参るぜ……」

——ソ連が現存している事といい、日本帝国といい、僕等の知る歴史とは差異が見られるな。矢張り世界が融合したというのは、間違いないのか。

自分の知る国名とは若干違う事に驚き、ユウキも帝国軍人に対し愚痴を零した。

こうして飛鳥も今後の指針を決め、それぞれの道を歩む事になる。

「さて、やるべき事が決まったんだ。残された時間を有効活用し、準備といこうか!その過程で、色んな事を叩き込んでやる。ちよつと厳しめにいくから覚悟しとけよ、飛鳥!」

「——はいっ!お願いします、ユウキさん!」

「——おうッ！ついて来いっ！」

彼等は旅立つ準備を始める事になり、飛鳥はユウキの後に追従した。

有澤重工、企業連、ミグラントを始めとした様々な人々が、この巨大交易所に集まり運命は交差する。

……

「オラあつ！どうしたあつ！早く立てえッ！やられたいのかあ！」

「——す、すみませんっ！」

……

「いいか、何度も教えたと思うが、！迷いは即、”死”に繋がる。決断したら即座に動け、敵は待つてはくれんぞー！」

「——はいっ！勿論ですっ！」

……

「バイパスを直結すれば確かに起動するが、直通の過電流で大抵のコнденサはイかれちまう。あくまで緊急時に留めておけ！」

「——分かりました！なるべく追い込まない様に努めます！」

……

「あんまり消耗の激しい部品は無理して使うなよ？代用品が有るならそつちを使え！無理が祟つての機能停止じゃ、笑い話にもならん」

「……奥が深いですね」

……

「何も打撃戦に拘る必要は全くない。投げ、関節技、そこいらの環境と道具を利用する。これは生身でもAC戦でも共通だ、忘れるな！」

「——いいいたたたつ……、わかった！分かりましたから放して下さいッ！腕が折れるッ……！」

……

あれから1週間、ユウキは飛鳥に対し持てる技術と知識を徹底的に叩き込んだ。

飛鳥も愚痴一つ零さず、彼について行く。

迫り来る別れを惜しむかのように、1分1秒を噛み締めながら。

そんな二人の光景を、スミカは穏やかな表情で見つめていた。

「まさかアイツが教える側に回るとはな……人は変わっていくな」
そして瞬く間に時間が過ぎ、その間に数多くの部隊が交易所に到着する。

—— 1997年5月20日 欧州東方・巨大交易所 ——

(推奨BGM アーマードコア2 —— C o r d e)

『見ろよ、あの大部隊を』

『ここまでくると、もう軍団規模だな』

『スゲエ数だ!』

『それだけ此処も、安全じゃねえって事だろ?』

『近くでもBETAの目撃が相次いでいるそうだぜ?』

『BETAだけじゃねえ、汚染AIも脅威だつてよ!』

『だけど、AFも来たんだ! BETA“^{おそ}恐るる”に足らずつてな!』

交易所に続々と集結する、企業連の軍。

AFを始め、大型陸戦艇、輸送車両などが大挙して押し寄せる。

その異様な光景に、住民は挙って物見遊山で集まった。

GA、オーメル、インテリオル、三大企業が部隊を割きこの交易所
防衛の為に動いたのだ。

その規模は下手な国家軍すら凌ぎ、大国ですら容易に手出し出来ない
いであろう。

そんな中、一つの企業『有澤重工業』もAFギガベースを伴い、こ
の交易所へ辿り着く。

野次馬の如く密集する人混み集団から少し離れた位置で、飛鳥達三
人もAFを眺めていた。

既に移動の為の準備は済ませてある。

住居として間借りしていた部屋は解約し、飛鳥用とユウキ・スミカ
用に車両も購入できた。

その車両に各々の荷物を詰め込み、いつでも動ける状態だ。

ユウキ達の私物はそう多くなく一般の軽車両で事足りたが、飛鳥はACを所持しているため、専用の輸送車両が必要となった。

少々値は張ったが、これまで稼いだ額は、他のレイヴンと比較しても抜きん出ている。

それ程の痛手とはならない。

AFは巨大である為、交易所に駐屯するには専用の港に着艦する必要がある。

受け入れ準備を終えるには、後1時間は掛かるだろう。

各企業の重役や、軍の上級将校たちが専用車で、交易所総督府へと移動を開始する。

無論、有澤重工もそれに倣い、上層部は専用車で移動した。

そしてAFや大型輸送車両が物資の搬入出準備を終えたかと思えば、各企業は一斉に動き始める。

食料や飲料水は言うに及ばず、防衛力強化の為の資材や兵器の数々が運び出され、交易所へと納められてゆく。

有澤重工も例外ではなく、防衛用の武器や兵器を提供する代わりに、数々の補給物資をギガベースへと搬入していた。

そして有澤重工は戦力増強の為、欧州や大陸の至る所に呼び掛けを行い志願兵を募っていた。

此処は陸路である為、人や物資も集まり易く今まで以上の戦力確保に期待が寄せられる。

資金や生活に困窮した者、名声を得ようとする者、武力を誇示したい者、共感した者――。

実に様々な人々が思惑を抱え、有澤との契約に応じていたのである。

当然傭兵だけでなく、技術者や知識層といった非戦闘員も含まれていた。

過去にBETA戦の為に大陸へと派遣され、祖国へ帰国する術を失った者も存在したのであった。

そんな彼等も有澤のギガベースへと移動を開始し、乗艦手続きの為に長い行列を形成する。

「今迄本当にお世話になりました。ユウキさん、スミカさん！」

飛鳥は二人に感謝の意を述べ、深く頭を下げる。

「それはお互い様だ。見ず知らずの私たちに施しを与えてくれたのだ。本当に感謝しているよ」

「俺達は急いで此処を発つ訳じゃないから、途中まで送るぜ」

スミカとユウキも彼に応じ、途中まで見送ってくれると言う。

「じゃ、行きましようか」

飛鳥はそう言い、二人を伴って車両まで向かう。

大半の住民は、集結した企業軍に釘付けとなっていた為、普段の喧騒が嘘の様に静寂に満ちていた。

「それにしても本当に良かったんですか？あんなに物資を頂いて……」

「ん、気にすんな。良いんだよ、お前への餞別だ！」

「お前にとってのこれからは、過酷で険しい道となる筈だ。私達からの、せめてもの手向けだ」

今日という日を迎える迄、ユウキとスミカは様々な物資を買い漁り、飛鳥の車両へと詰め込んでいた。

それ等はAC用のパーツを主軸に、衣食住を賄う生活用品も含まれていた。

他にはOSやプログラムのといった、ソフトウェアなどもある。

「正直言うと時間が足りなくなてな、実験段階の兵装やソフトが結構あるから、改良はそっちで協力者でも見付けてくれ」

あのインテリオルから購入した『多連装レーザーキャノン』を始めたとした兵器の事を言っているのだろう。

あれ等は改良の余地が多分であり、上手く事が運べば対BETA戦に於いても有用な兵装となるだろう。

そんな雑談を交わしている内に、車両格納ハンガーに到着する。

「——ん？誰か居る」

飛鳥が購入した輸送車両の傍には、装甲者らしき軍用車両が停車しており、複数名の人物がこちらに視線を向けていた。

飛鳥達は一応警戒しながら、歩を緩める。

「おやおや、まさかな」

「依頼のみならず出迎えまで、御本人のお出ましとは恐れ入る」

ユウキとスミカは、複数人の人物に対し苦笑いを浮かべる。

飛鳥は兎も角、二人は警戒を解いてしまった。

「お二人は彼等を御存じなのですか？」

「ああ、よく知っている」

二人の態度に驚き、飛鳥は眼前の人物達について質問した。

複数人の人物の中心に立つ、一際大柄な偉丈夫は二人にとっても良
く知る男であった。

「……」

「……」

彼等の前に立ち、お互い無言で視線を交わし合う。

「久方振り……という程でもないか。ミミル軍港で顔を合わせたから
な」

「アンタ本人の……登場とはな、有澤隆文さんよ」

スミカとユウキが軽く声を掛ける。

有澤・隆文——その名前に飛鳥は些かたじろいだ。

彼が有澤重工を代表する社長でもあり、優れたリンクスである事は
知っている。

しかし飛鳥が抱いていたイメージとは、大きくかけ離れていた。

もう少し知的で無口な紳士を想像していたのだが、目の前の本人は
現場重視の作業服に黄色のヘルメットという出で立ちであったのだ。

「相変わらず御挨拶だな。しかし、……両人が態々こんな所までやって
来るとは、心変わりし我等に同行して頂けるのかな？」

隆文も不敵な笑みで、軽口で返した。

「残念だが、コイツを見送りに来たただけだ」

スミカも即答で返す。

「ほう……この少年が——」

「——っ!!」

大柄な体躯、そして射貫く様な眼力——。

ここで気圧されれば、相手の思う壺ではないかとさえ思える。

しかし飛鳥がどう足掻こうとも、リンクスとして数々の戦場を渡り歩いて来た彼の視線を受け切る事は出来なかった。

視線を逸らす事は無かったものの、急激に体温が上昇し汗が一気に噴き出す。

——何て迫力だ。これが歴戦の戦士と僕との差か……！

隆文の視線を真面に直視するだけでも、相当の覚悟を強いられる。

「おっと——。威圧した積りはなかったのだがね、失礼した。私はありさわ たかふみ有澤ありさわ隆文、依頼を請けてくれた事、誠に感謝する」

「僕……いえ、私は独立傭兵の火無わたぐし隆文《ひむ あすか》と申す者です！少しの間、お世話になります！」

彼の視線に気圧されながらも、飛鳥と隆文は短くも簡単な自己紹介を交わした。

……

—— 有澤ギガベース ——

『志願兵及び非戦闘員は此方側に移動して下さい！隣の区間は正規軍用の区間です、立ち入らないで下さい！』

有澤重工の所有するギガベースに搭乗する為、多数の傭兵や非戦闘員たちが手続きを済ませ乗艦する。

此処の乗艦口では、特に車両やMTを持たない歩兵や一般人を担当していた。

『ん？お前で最後か？簡単な自己紹介を頼む？』

長い行列も一人の青年で最後となり、担当していた有澤専属の担当官は“漸くか”といった具合で彼を見た。

一応野戦に適した迷彩服を着用し、所持している武器は安物のナイフだけという、如何にも冴えない風貌で顎周りには無精髭を生やしている。

大方、敗残兵と成り果てた哀れな落ち武者と言った処だろう。

面倒ではあったが、これも職務だ。

担当官は、早々に仕事を片付けようと青年を急かす。しかし行列最後の青年は、ここで意外な行動に出た。

唐突に毅然とした態度で姿勢を正し、見事な敬礼で声を大にして名乗り出た。

「——自分は元・日本帝国斯衛軍所属、サーベル中隊サーベル2、山城
上臣《やましろ かずおみ》少尉であります！どうか、斯衛軍指揮
官殿にお目通りを嘆願したき所存！」

「!?……………」

突然豹変した態度に、担当官は面食らい言葉を失った。

「…………それを証明できる物は有るか？」

口だけなら何とでも言える。

偽りの身分を騙り、軍部に取り入る輩はゴロゴロと居るのだ。

つい先程も、偽造した身分の作業員が紛れ込み、捕縛したばかりだ。

この男が、帝国軍人とも限らない。

証明出来る物を所持していたとしても、油断は慎まれるべきである。

「これを」

男は首にぶら下げていたドッグタグ認識票を手渡す。

「……………」

担当官は暫く無言で、認識票の識別ナンバーを照らし合わせていた。

「此処の待機部屋で待っている！おかしな真似をするなよッ！」

担当官は近くの待機部屋へと連行し、監視員を二人付ける。

そして、大急ぎで帝国側の区間へと連絡を入れた。

……

(推奨BGM マブラヴオルタ —— 霞)

「そろそろ私達の事も紹介してくれないかしら？社長さん」
軍服の上に白衣を羽織った女性が催促した。

服装からして研究者の類だろうか？

傍らには、複数名の女性仕官と小柄な少女を伴っている。

「おっと失礼。紹介しよう、彼女は……」

「——香月夕呼、日本帝国軍所属なの。宜しく！こつちが、神宮寺まりも、伊隅みちる、藤澤月子、竹宮千夏、三浦園子、イリーナ・ピアツティフ、そして社霞（やしろ かすみ）よ」

隆文が皆迄言い終わる前に、夕呼が自分と連れ添いの部下を紹介した。

「……ど……どうも……、火無飛鳥……です」

少々緊張感を滲ませながら、飛鳥と夕呼は握手を交わす。

——何だろう、この感じ？ザワザワした何か……、僕に向けられている？

握手をした瞬間、飛鳥は彼女に何か言い様の無い感覚を覚えた。

それは決して心地良いものではなく、出来る事なら避けたいという想いに駆られる。

「……」

だが、そんな感覚は僅か一瞬で塗り換えられ、飛鳥はとある人物に視線を移していた。

「……」

「……」

火無飛鳥と社霞——。

互いに目が合い、無言で見つめ合う。

——この違和感、覚えがある。……確かオーメルの大規模作戦で。嘗てオーメルとソ連の共同作戦があった。

そこで確かに感じた、あの心地良い感覚——。

あの時に比べれば、更に透明度を増したような何とも形容し難い不思議な違和感——。

眼前の小柄な少女から流れて来る感覚だった。

「なにになに？二人して見つめ合っちゃって、若しかして運命のお相手に出会ったのかしら？」

「どうした飛鳥？その少女を知っているのか？」

夕呼とスミカは互いに声を掛ける。

飛鳥は“何でもない”とはぐらかし、霞はゆつくりと首を振るだけだった。

そして残りの人物達も紹介を始める。

「崇宰恭子、階級は大尉。一緒に戦っていきましょう」

「如月佳織、恭子様のご護衛を務めている。階級は中尉。宜しくお願ひする！」

青と赤の軍服を纏った彼女達も軍人であるらしく、敬礼で飛鳥を迎え入れた。

「こちらこそ！独立傭兵のレイヴン、火無飛鳥です！」

飛鳥も敬礼で応えた。

「あら？海軍式なのね」

恭子は、飛鳥の敬礼を目にし意外そうな表情をする。

飛鳥の敬礼は、脇を閉め手の平を内側にした、海軍人が行う礼式だった。

過去レイヴンを目指し養成学校へ入学する際、教導官が海軍出資者だった事に起因していた為、飛鳥の敬礼は、専ら海軍式となっていたのである。

「……直した方が宜しいでしょうか？」

どうやら有澤と帝国連合軍は陸軍が主を占めているらしく飛鳥は念のため、是正の必要性を恭子に問う。

「いえ大丈夫よ、そのままでもいいわ。貴方が軍に正式入隊するならば別だけどね」

恭子は特に気にするでもなく、強要する事は無かった。

「……さて、お見送りもここ迄だ。くれぐれもしつかりな」

「生きて、また何処かで会おうぜ。飛鳥！」

「スミカさん……ユウキさん……」

互いの自己紹介も終わり、“我々は用済みだ”と言わんばかりに、飛鳥を送り出すスミカとユウキ。

飛鳥も深い一礼で、二人に感謝を示した。

スミカとユウキが踵を返した、その時……である――。

「色が」

「この圧っ！」

ほぼ同時に霞と飛鳥は、あらぬ方角へと首を傾けた。

「どうしたっ、飛鳥——ぐっ!？」

二人の様子に異常を感じたユウキは、飛鳥に問い質そうとするが、不自然な揺れが施設全体を襲った。

『緊急事態発生！緊急事態発生！敵勢力接近！これは演習ではないッ！繰り返し、敵勢力接近っ！これは演習ではないッ！非戦闘員は速やかに退避！非戦闘員は速やかに退避！』

(推奨BGM アーマードコア5 —— Strive)

突如、区内速報が流れ、ここ車両格納区域も赤い警報ランプが点滅を始めた。

「——今の気配と揺れっ!!BETAのレーザーによるものですっ!!」

「奴等が来ました……」

「霞はまあ分かるわ!——けど何で、アンタまで同じ反応してるのよ!」

飛鳥と霞はBETAの来襲を告げ、夕呼は彼の反応を不可解に思ったのか問い詰めようとするが——。

「——な、なによ、邪魔する気っ!？」

夕呼の手が飛鳥にと届く前に、ユウキとスミカが立ち塞がる。

「悪いな、お姉さん!何企んでるか知らんが、そう思い通りにはいかねえんだわ!」

「そういう事は、少なくとも我々の目が届かん所でやって貰おうか。尤も、コイツを余りナめない方がいい」

——速いッ!これがランカー級リンクスの実力っ……!斑鳩崇継が欲しがるのも頷けるわね!

恭子は二人の元リンクスの動きに慄いた。

五摂家の一角、斑鳩崇継が部下の真壁介六郎を使い、ユウキとスミ

カに接触を凶っている事は、恭子自身も承知している。

結局それは失敗に終わり、二人が日本に同行しない事も。

「大丈夫です、二人共。……そんな事よりも、防衛部隊は展開出来ているのですか？」

飛鳥は二人を宥め、隆文に部隊の展開状況を聞く。

隆文の情報によれば、幾つかの即応部隊が迎撃に出ているが、防衛戦の構築には幾許かの時間を要するという。

頼みの綱であるアームズフォートは、巨大兵器である故に着艦態勢にて待機状態だ。

このまま戦闘態勢に移行するには、一度野外に出て搭載機を展開させる必要がある。

直ぐに動ける戦力は、かなり限られるのだ。

「……残念だが、直ぐには動けん。しかしだ……」

隆文は意味有り気な台詞と視線で飛鳥を見る。

彼の視線を察し、他の面々も飛鳥の方を向いた。

既に状況を察しているのだろう。

飛鳥も直ぐに頷く。

「分かっています！この車両に僕のACが格納のされていますから、直ぐに動けるのはこの場で僕しか居ません！」

幸い彼の輸送車両には、ACが格納され起動すれば直ぐにでも戦力として展開できるだろう。

「済まん、早速だが仕事に取り掛かって頂こう」

「私達も可能な限り早急に出撃します！それまで何とか持ち堪えて！」

「急ぎましようか、社長さん？出会ったばかりのコイツを失うのも、ちよつと……ねえ……」

「仕方が無いな。正真正銘これが最後だ、お前を目一杯サポートしてやる！」

「香月さんだっけ？折角だからアンタ達は、飛鳥の戦い振りをたっぷり見物してつたらどうだい!？」

隆文を始めとする面々も、急いでギガベースへと向かうとするが、

突如ユウキが夕呼を呼び止めた。

A Cを格納してある輸送車両にも、指揮機能は備わっている為、其処からでも飛鳥をモニタリングする事が可能だ。

「……そうね、折角だしお言葉に甘えようかしら。……あんた達はどうする?」

一瞬戸惑ったが、彼女はユウキの提案に乗る事にし、部下に行動指針を訪ねる。

「私達は出撃致します!」

「相手がBETAともなれば、傍観する訳にはいきませんから!」

「お二方、無事の帰還を!」

神宮寺まりもと伊隅みちるは、出撃する意を示し竹宮達を率いて有澤側の車両へと向かった。

ピアッティフはそんな彼女等の無事を願う。

「——私達も急ぎましょう!」

「——ハッ!」

崇宰恭子と如月佳織も、車へと乗り込み早々とギガベースで走り去った。

「本当に最後の最後、サポートお願いします!スミカさん、ユウキさん!」

「おうっ!最後はきっちり、格好良く決めようぜ!」

「いいだろう。一仕事してやるか」

「火無飛鳥くん…だっけ?御手並み拝見させて貰うわよ!」

「……………」

そして皆が各々の持ち場へと移動を開始した。

皆が輸送車両へと乗り込み、ユウキが運転を担当、他の面々は指揮室へと移動する。

飛鳥は当然A Cへと乗り込み、既に起動準備を終えていた。

後は、ユウキが車両を野外に移動させるだけだ。

『飛鳥、まだアセンブルはそのままだったな。例の設定は熱源最優先にしておけ!どの道、光線級を優先して潰すんだ』

『こんな事なら、さっさとパーツを換装させておくんだったな。ブツ

「はちゃんと積んであるんだが……」

「コックピットに、スミカとユウキからの通信が流れ込む。」

「大丈夫、やれますよ！」

「センサー設定を熱源特化へ変更する事で、レーザーへの事前警報を促し、回避へと繋げてきた。」

「しかし、今車両に積んであるパーツには新型のセンサーが内蔵され、態々設定を弄らずともレーザー照射を事前警告してくれる仕様の新型であった。」

「だが今迄でも、このアセンブルで生き抜いてきた。」

「まだ部隊は完全に展開し切っていないが、味方と交易所の支援がある分却って軽い負担で戦える筈だ。」

「よし、もう直ぐ野外へ到達するぞ。準備は良いか！」

「いつでも行けます！」

「そうこうしている内に、輸送車両は野外へと到着した。」

「既に幾つかの直衛部隊が展開し、BETAの侵入を阻止する為に奮戦している。」

「しかし、大半はMT部隊でノーマルの姿は見えない。」

「正直、MTだけでBETAの進軍を防ぐのは厳しいだろう。」

「輸送車両そのものをBETA群に晒す訳にもいかず、ユウキは野外と装甲壁の境界線付近で停車させた。」

「充分ですユウキさん！ACさえ展開出来れば——！」

「済まねえ、後は頼んだぞ！」

「ギャラリも居るんだ！存分に証明して見せろ、お前の有用性を——」

「——了っ！AC『白天翼』、いきますッ！」

「車両のカーゴブロックが展開し、白色のACが大地へと立つ。」

「——さて、光線級まで一気に行くか！」

「そう決意したと同時に、通信が割り込んだ。」

「汚染AIも居ます……気を付けて……」

「——何!?それは本当かつ!?」

「か細くもしっかりした口調の主は、あの小柄な少女『社^{やしろ}Ⅱ霞^{かすみ}』とい

う人物だった。

「…霞さん…だったかな？…通達、ありがとう！」

飛鳥は、霞なる少女へ礼を述べると、そのままブースターを吹かしACを前進させた。

…

「——今用意できる機体は、この試作型だけだ」

「充分ですよ、MTの操縦訓練も受けてます！篁少佐殿っ！」

—— 有澤ギガベース ——

BETAと汚染AIの混成群が、巨大交易所へと襲来。

各部隊は迎撃の為、慌ただしく動いていた。

そんな中、譜代武家でもあり技術仕官でもある斯衛軍人『篁裕唯（たかむら まさただ）』は、一人の青年に機体を託す。

その青年は、『山城上臣（やましろ かずおみ）』といい、数年前に行われた大陸戦の生き残りであった。

その大戦から数年の月日が経過している為、彼は既に戦死扱いとなっていた。

しかし乗艦口で認識票を提示し、敢えて帝国軍側の区間へと足を踏み入れたのである。

その時は、五摂家である『崇宰恭子』も有力武家である『如月』や『真壁』も席を外していた為、こうして裕唯が対応していたのである。

だがギガベースは物資の搬入の為、直ぐに部隊を展開する事が可能な状態だ。

今即応できる部隊は率先して出撃準備に移っているが、少々の時を要するだろう。

ACノーマルにせよ戦術機にせよ、専用のハンガーからカタパルトへと移動し、機体を固定させ漸く出撃準備が整うのだ。

それに比べMTは比較的小型で、構造も起動手順もごく短時間で済む。

それに加え、彼は数年の時を得て帝国軍へと合流を果たした。

一応予備の第一世代戦術機で初期型の『激震』も有るには有った。だが、数年の時は戦術機の操縦系統にも技術系統にも大きな隔たりを齎し、いきなり彼が戦術機に対応するのは些かに厳しいものがある。

聞けば、上臣は戦術機には数年触れてはいないと語る。

故に、操縦も構造も単純なMTを用意した次第である。

このMTは、逆関節型で跳躍力とブースター機能を備え、三次元的な動きに長ける。

固定装備として自衛用の12、7ミリ機銃2門、胴体上部に武装用アタッチメントが設置され、スナイパーライフルが装着されていた。

スナイパーライフルはACノーマル用を流用した物で、このMTはノーマル用の武装を装備する事が出来る機体である。

「試作型ゆえ対レーザー塗膜も施してはいない、くれぐれも前衛は避けろ！」

裕唯は警告する。

「ええ無論です！高台で狙撃に徹する積りですので——！」

交易所周辺の地形は平地で視界も開け、地上でも光線級に狙われる状況だ。

だがBETAの攻撃優先度は、人が搭乗した兵器や高度な演算器を搭載したものを狙う習性を持つ。

それが高性能であればある程、それ等を優先する傾向にあった。

今もBETAは、交易所装甲壁や着艦しているAFを優先して接近していた。

実際MTやノーマルを狙うのは、進軍のついでといった感が強い。恐らく高台に陣取った処で、光線級に狙われる可能性は極めて低いだろう。

それに念には念を押しして、砲身だけを覗かせる『稜線射撃』に徹すれば、万が一狙撃されても退避する時間を稼ぐ事が可能だ。

障害物に使える自然の丘や、何かしらの残骸位は存在するだろう。

「——では、出撃致します！」

「——死ぬなよ？山城上臣少尉ッ！生きて祖国の土を踏めッ！」

「——ハッ！」

裕唯は彼に奮起を促し、敬礼で見送った。

『MT、山城機……出撃しますっ！』

機体に入り込んだ彼は、主脚移動でギガベースから出撃する。

『おい！出撃準備急げえっ！』

『もたもたすんなあっ！』

『物資の搬入、早くしろっ！』

『BETAは直ぐ其処まで迫っているぞっ！』

『それだけじゃねえ、汚染AIまで居やがる！』

『対空にも気を付けろ！奴等は撃つて来るぞっ！』

ギガベースだけでなく、交易所全体にも右往左往する職員が声を張り上げる。

『住民の避難急げえっ！』

『避難所が足りないッ!?適当な建物を使え！』

『MTの配備はまだかっ!?』

内壁部の居住区は避難民で混雑し、半ばパニックに近い状態だ。

無理もない。

今迄平和を享受していた住民達は、BETAの事など対岸の火事の如くほぼ無関心であった。

しかし、今日初めてのBETA襲来で恐怖に慄いているのだから。

……

(推奨BGM アーマードコア5 ——Vulture)

「…突撃級、かなりの数だ。規模はどの位なんだ？」

戦線へと到着した飛鳥。

頭部カメラは、地面を埋め尽くさんばかりのBETAを捉えていた。
た。

既に乾いた黄土色の土は、突撃級の甲殻で埋まっている。

ACの頭上には、無数のレーザーが交易所の装甲壁に照射されている。

交易所の装甲壁は、ACは元よりAFをも凌ぐ厚さだ。そう簡単に焼き切れるものでもない。

しかし時間を置けば、それだけ被害が拡大するのは自明の理だ。

『飛鳥、分かっているとは思いますが今回は最初から射線が開けている』

「ええ、地上は無論…少しでも飛翔すればレーザーの的になります！

……それでも——」

スミカからの通信に応えると同時に、飛鳥はブースターを起動させ空中へと跳び上がる。

『——ちよっ…正気なのっ?!レーザーに飛び込む気っ?!』

『——黙って見ていろッ、女!』

飛鳥の行動に、夕呼が声を張り上げるがスミカに遮られた。

『——ぐっ…』

滅多な事で動じる事がない彼女も、カスミ・スミカの迫力には気圧された。

その瞬間、飛鳥のAC目掛けて幾多のレーザー群が殺到する。

——案の定来たなッ!

先ずハイブーストで、射線軸をズラし第一波を回避——。

続いて殺到する第二のレーザー群、サイドブースターを僅かに吹かし、慣性運動と推進力で小刻みに躲す——。

更に間断なく襲い来るレーザーの第三波——。

今回はかなりの光線級が存在しているのだろう。

機関砲の様に連続で照射されるレーザーの嵐。

一旦高度を下げながら突進するBETA突撃級の背を踏み付け、間髪入れずに再跳躍——。

そのままブーストドライブで、低高度を維持しつつ光線級に向かって跳ぶ。

『——う…うそでしょ?あれだけのレーザーを全て……』

『だから言ったろ。黙って見ていると』

『こんな事が現実に……手動で……』

『まだまだこれからですよ。ピアツティフさん、アイツの実力は——』
夕呼とピアツティフは、未だ信じられないと言った表情でモニターに釘付けとなり、スミカとユウキは「これは序の口だ」と言った。

——彼は先ず死なない……そんな感じがする。

唯一人、社霞だけは表情を崩す事なく、画面に投影されるACを見つめていた。

「こちらAC『白天翼』、これより光線級の陣地を指します！」

『了解だ、常にモニタリングしておく。ギャラリー共の前でしくじるなよ?』

「——了っ!」

スミカからの熱い声援を受け、怒涛のレーザー群を悉く躲しつつ、飛鳥のAC『白天翼』はBETA光線級が居ると思わしき陣地を目指した。

GA (グローバルアーマメンツ)

統治企業連盟の3大企業の一角。

北米大陸の軍産複合体を前身とする巨大企業で、環太平洋経済圏に

おいては最大規模の企業である。

食料、エネルギー資源に強い企業。

単にGAと言えば、普通GAアメリカを指す。

ノーマルAC、パワードスーツ開発において主導的役割を果たしており

実戦的で安定した兵器を作り出している。

ACネクストにおいてもそれは同様で、防御力、特に実弾防御に優れたフレーム

ガトリングガン、バズーカなどの実弾重火器などを開発している。

反面精密機器やエネルギー技術は不得意で

オーメル、インテリオルと不仲である為、未だに後塵を拝している。

また、インテリオルと同様に、クレイドルの建造も行なっている。

第5計画を指示しており、宇宙進出を目論みバーナード星系移住を計画している。

第10話―交易所防衛線―

A Fギガベース

GA（グローバル・アーマメンツ）所属の拠点型アームズフォート。双胴の本体と、設置された多数の砲台群、中央に設置された大型の連装砲塔によつて構成されている。

AFとしては小型の部類に入る量産型のひとつで、クレイドル墜落後に更なる増産を行い、現在10数隻を越える。

底部にホバーとキャタピラを備えており、水上、地上での行動も可能。

主砲である連装砲の威力、精度は非常に高く、射程も極めて長い。尚、地上限定で大型レールガンを使用可能。

全長：600メートル

全高：250メートル

全幅：400メートル

武装・大型実体弾砲（100センチ連装砲）×2

・速射野砲（30センチ単装砲）×8

・多連装ミサイルランチャー×12

・近距離防御用砲（75ミリ速射砲）×12

・近距離防御用マシンガン（40ミリ機関砲）×2

・推進機兼用レールガン×1

(推奨BGM アーマードコア3・サイレントライン —— Sil
ent Line)

迫り来るBETTA突撃級——。

殺到するBETTA光線級のレーザー——。

突撃級を跳び越え、レーザー照射を悉く躲し、只管に突き進む白い鋼鉄巨兵——。

「——光線級、依然目視出来ずっ！」

『——目標、彼我との距離、約17000ツ!!』

白い機体の中で飛鳥が叫び、輸送車両からスミカの声が返ってくる。

——17kmか!まだ遠いが、やってみるか!

標的としている光線級、重光線級の群れは、17km先に陣取っているらしい。

一応、ロングバレル化された『WS—16C』なら辛うじて届く距離でもあった。

しかし、命中させるには高い狙撃技術を要するだろう。

更によえば、飛鳥自身は遠距離戦は苦手な部類に入り、狙撃技術には自信がない。

だが少しでも光線級の数を減らし、戦況を有利に進めたいのも事実である。

一旦高度を下げ、脚部を地面に接地——。

それと同時に、深く踏み込み一気に真上へとブーストジャンプ——。

高度400メートルまで、瞬時に到達した。

そして間髪入れずに、地上からのレーザーが殺到。

数百を超える、多数のレーザー群が機関砲のように押し寄せる。

——かなりの数だっ……!だがっ……!

普通なら、そのレーザー攻撃だけで一瞬にして蒸発させられるだろう。

だが、飛鳥のAC『白天翼』は機体位置をズラし、敵射線軸を流し、全く被弾する事は無かった。

とは言え、何時までも回避ばかりに専念してはいられない。

飛鳥は映像を拡大させ、レーザー射撃地点に座標を絞った。

——一応見えるな、殆ど密集形態で照射しているのか。これなら何とかっ……！

尚も迫り来るレーザーを躲しながら、飛鳥はガイドラインを頼りにノーロックで射撃を開始——。

取り敢えず、3点射スリーバーストで光線級集団に撃ち込んだ。

三発放たれた36ミリ徹甲弾は、2発が光線級を逸れ1発が胴体部へと命中——。

一体の光線級を撃破した。

『——命中を確認っ！光線級一体を撃破ッ！』

スミカから光線級撃破を通達される。

「……」

しかし飛鳥は無言のまま、ヘルメットの中で表情を歪めていた。

——結果的に当たっただけだ。

目視とは言え光線級集団に狙いを絞って、引き金《トリガー》を引いた。

しかし放たれた三発の弾丸は二発が外れ、残り一発は目標物とは別の光線級に命中していたのである。

加えて言えば、光線級の顔部を撃ち抜く積りではあったが、結果的には胴体部を貫いていた。

それでも一体を仕留めた事に変わりはないのだが——。

怒涛のレーザー群を全弾回避しながら、ノーロックで目視での起動射撃——。

普通、狙撃は動作を止め、姿勢と銃身を固定し、外部からの様々な情報と環境特性を加味し、その特性を味方につけた上で初めて成り立つ高度の射撃技術である。

飛鳥が行ったのは悪条件が幾重にも重なった、最早狙撃とは呼べな

い唯の威嚇に近い応射とも呼べた。

——あの、山城上総やましろう かずさという娘の様にはいかないか！

少し前に見たあの悪夢——。

その夢の中に出て来た、白刃の様な気配を纏った美しい少女——。
彼女は打撃支援インパクトガードというポジションで、支援突撃砲を用いて光線級を仕留めていた。

その時の距離は約13km——。

初弾で命中させ、複数の光線級を撃破していた。

あの時の瞬間は今でも鮮明に記憶している。

尤も、彼女の置かれた状況と今の自分の状況では、雲泥の差が出て
当り前でもあるのだが……。

「こちらレイヴン、更に距離を詰めます！」

この距離では、有効な打撃を与え辛い——。

そう判断し、飛鳥はフットペダルを踏み込み更に加速した。

その時である——。

『光線級撃破ッ！』

突如として響く、スミカからの通信。

——ッ!?

飛鳥は、つい無意識に耳を傾ける。

『光線級、更に撃破を確認ッ！』

——まただっ！

飛鳥はモニターを凝視し、光線級の群れへとカメラを向ける。

其処には現在進行形で、光線級が次々と体液を撒き散らしながら絶命していくのである。

「——誰かが狙撃している……一体何処からっ!？」

飛鳥は咄嗟に声を上げる。

『交易所の高台からだ！光線級との相対距離、約20000！』

「——20000ですってっ!?!狙撃特化の友軍機ッ！」

スミカから諸元を告げられ、飛鳥は驚愕の声を上げた。

『——自分の心配をしろッ！』

「——は、はいっ！」

彼女に怒鳴られ、飛鳥は意識を地上へと戻した。

尤も、飛鳥は夥しいレーザー群を躲し続けながら、こうやってスミカに訊ねていたのだが……。

「——ターゲットインサイト、ファイアツ！」

その声と共に弾丸が射出され、モニター向こうのBETA光線級が四散した。

「命中、撃破を確認…次！」

光線級を仕留め、次の光線級への的を絞る。

「——ターゲットインサイト、ファイアツ！——命中、撃破を確認…次！」

「——ターゲットインサイト、命中、撃破！」

その動作を繰り返し、当たり前の様に次々と光線級を仕留めてゆく。

試作型のMTを駆り、機体上部に装着されたACノーマル用のスナイパーライフルで光線級を狙撃——。

レーザー発射機構である眼部を射抜いていた。

交易所の高台に陣取り、小高い壁面をバリケードに見立て、銃身の身を露出させた稜線射撃を繰り返す。

BETAにとってMTの攻撃優先度は低く、半ば一方的な狙撃が成立し、弾切れまで光線級50体を仕留める事に成功。

「——此方、やましろ かずおみ山城上臣！主兵装、弾薬欠乏！繰り返す、主兵装、弾薬欠乏！」

試作型MTの搭乗者、山城上臣は弾切れを通告する。

『此方CコマンドポストP、了承した！山城少尉、帰投してくれ！後続部隊の展開目途が付いた、帰投してくれ！』

「——了解！これより帰投します！」

どうやら増援部隊が展開できる態勢が整った様だ。

まだ自衛用の機銃が残っているが、こんな豆鉄砲でBETAの大群に挑むほど愚かではない。

味方が居ないのなら話は別だが、この戦闘では辟易する位の味方が

後方に控えているのだ。

加えて、決戦兵器であるA F——それも、複数。

何とも頼もしく、一種の安心感さえ覚える。

——これだけの味方、せめてあの時に居てくれれば……！

嫌でも思い出す数年前の大陸戦線——。

絶望的なB E T Aの大群に呑まれ、容易く戦線は崩壊——。

真面にトリガーを引いた時は、既に陣形も崩壊した敗走時だった。

あの絶望下で、どうやって生き残ったのかは正直よく覚えていない。

気が付けば、ゲリラに拾われ軍用車両の中で目を覚ましていた。

そして大陸各地を転々とし、紆余曲折を得て今に至る。

——こうやって帰国の切符を得たのだ、必ず生きて祖国の土を踏んでやる。待っているよ愛しき我が祖国日本、そして愛すべき我が家族よ！

彼はM Tを巧みに操作し、ギガベースへと難なく帰還する。

「あの子は……もう随分大きく成っているだろうな。我が妹……上総かずさよ」

家を発ち、はや数年——。

機体を降りた彼は、妹上総に想いを馳せた。

(推奨B G M マブラヴオルタ —— 殲滅せよ！)

「これより、出撃するッ！」

出撃準備が整い、多数の戦術機がギガベースから発進した。

82式戦術歩行戦闘機『瑞鶴』と呼ばれる機種で統一された、日本帝国斯衛軍の部隊だ。

12機一個中隊で編成され、崇宰恭子が中隊指揮を執り先陣を切る。

『ネイルーより各機へ！これより小隊単位で、B E T A群の駆逐に当たる！各位奮励せよっ！』

『『『——了解ッ！』』』』

3個小隊に分かれ、崇宰恭子、如月佳織、真壁介六郎が小隊を率い、迫り来るB E T Aを迎え撃つ。

因みに、譜代武家である篁裕唯は大事を見越して、ギガベース内で待機していた。

万が一機体に不具合が生じた場合に、即時対応する為だ。

——思った以上にレーザーが来ないわね。例の少年が……！

既に射線は開け、地上であろうとも光線級からのレーザーが飛来していた筈だが、今は上空に向けて照射されていた。

『小隊各機へっ！レーザーの来ない今の内に、BETAを漸減します！徹底的に叩けっ！』

今がチャンスと見た恭子は、部下達に呼び掛けBETA群に激しい攻勢を仕掛け、次々と駆逐していった。

『目標との距離、7000！』

「——ここまで詰めれば——」

光線級との接敵まで、あと7キロメートル。

飛鳥は頃合いと判断し、本格的な反撃態勢に移行した。

しかし——！

『——待って、ミサイル来るっ!!』

スピーカから響く、幼い少女の叫ぶ声。

声からして、あの社霞という少女の声だろう。

次の瞬間、コックピット内に警報音が鳴り響いた。

気が付けば、機体下方から数十発のミサイルが迫っていた。

「——っ!!」

飛鳥は透かさず、ハイブーストで位置をズラし一旦は回避する。

だがミサイルは誘導兵装で、一度はやり過ぎたものの弧を描き旋回機動で、再び襲い掛かって来た。

『——レーザーも来るぞ、警戒しろっ！』

ミサイルに加え、光線級のレーザー群も飛鳥に殺到する。

——くそおっ！

更にハイブーストでレーザーをも躲すが、完全に出鼻を挫かれた形となり反撃のタイミングを逃してしまった。

「さっきのミサイルは、汚染AI郡か。ミサイルとレーザーの波状攻

撃、これ程かよっ！」

現在の高度は約400メートル――。

地上には光線級や重光線級が群れを成しており、高度200メートル付近には戦闘ヘリと飛行型MTが編隊を組み飛行している。

――機銃弾は兎も角ミサイルは厄介だ、このまま放置する訳にもいかないか。

汚染AIを放置し光線級を目指しても良かったが、意表を突かれミサイル攻撃を受ければ、思わぬ被弾を招く恐れもある。

不意を突かれた攻撃で被弾し、それが元で死を迎える恐れも充分にあるのだ。

「まずは、汚染AIに的を絞ります！」

飛鳥は汚染AI郡へと標的を定めた。

戦闘ヘリ、飛行型MT共に、ミサイルとロケット弾で武装しており、集団での弾幕は予想以上の火力に達する。

先に潰しておくのが得策であった。

「――ブーストッ！」

フットペダルを深く踏み込み、ブーストパワーを引き上げ降下した。

そのまま汚染AI郡へと距離を詰め、目標をサイトへと捉える。

戦闘ヘリや飛行型MTは、ロケット弾や機銃で迎撃を開始――。

――注意するのはロケット弾！

飛来するロケット弾のみを警戒し、WS-16Cの突撃砲でロケット弾ごと破壊しながら汚染AI郡へと弾幕射撃を行う。

殺到する機銃弾は20ミリ口径だ。

被弾した処で、表面装甲で全て弾き返し損傷にも至らない。

そのまま射撃を続け、戦闘ヘリ群を悉く撃墜し全滅させる。

その間にも、光線級のレーザーと飛行型MTのロケット弾が殺到する。

しかし飛鳥は、回避と反撃の一体化を図りブースト機動で位置を変えながら、左腕のライフルで飛行型MTを次々と撃ち抜き撃墜する。

汚染AIの総数は約40――。

数はそう多くはなく、然程の時間を要せず殲滅できた。

「よし！付近の汚染A Iの処理完了つ！これより、光線級の殲滅を再開しますッ！」

汚染A I航空戦力を殲滅し、本来の目標である光線級の群れへと急行する。

当然、地上からの激しいレーザー攻撃に晒されるがミサイルやロケット弾が止んだ分、回避は容易となった。

滑空機動に移りブーストエネルギーを節約しながら、距離を一気に詰める。

『目標との距離、6500、6000、5500、……4000——』
「——これより殲滅するッ！」

スミカから告げられる、光線級との相対距離。

4 kmを切りモニターには、光線級と重光線級が群れを成して待ち構えていた。

付近には複数の要塞級や新種の『投石級』も確認できる。

投石級は、板状の頭部に多数の『戦車級』を乗せ投擲していた。

投石級に攻撃したい衝動に駆られるが、何とかそれを抑え込み光線級にのみ狙いを絞る。

「——光線級捕捉つ、今ッ!!」
目標物をロックオンし、WS-16Cで射撃——。

単射で光線級の眼部を撃ち抜き、一発につき一体ずつ確殺してゆく。

その間も、光線級はレーザーでの反撃を試みるが、自在に位置を変え飛び回るACを捉える事は出来ず掠りもしない。

飛鳥は回避と反撃を同時に行い、付近の光線級を仕留めていった。

巧みに位置を変えては撃ち、撃つては位置を変え絞らせない動きに、光線級は翻弄される。

そうしている間にも光線級は次々と数を減らし、200体居た光線級は全滅した。

「——光線級殲滅ッ！次ッ、——重光線級ッ！」

比較的運動性の高い光線級を片付け、50体ほど残っていた重光線

級に狙いを定める。

重光線級はその名の通り高い攻撃力を有し、射程距離も極めて長大だ。

しかし動きは全体的に鈍重で、近距離戦に持ち込めば有利に事が運ぶ。

重光線級は眼部に防御用の被膜を展開でき、36ミリ弾では効果が薄くなる。

しかし左手に装備されているAC用のライフルなら被膜ごと破壊が可能だ。

60ミリの中口径弾に加え、貫通力も申し分ない。

「――貫ったッ！」

透かさず重光線級の眼部目掛けてライフルを発射。

弾丸は防御皮膜を貫通し眼球を粉碎しながら体組織を破壊する。

重光線級は、赤い体液を撒き散らしながら倒れ伏した。

その隙目掛けて、他の重光線級が高出力レーザーを照射するが、Aの機動性に追い付けず命中させる事が出来ない。

またレーザー照射中は防御皮膜も展開していない為、無防備でもある。

がら空きの眼部に弾丸を放ち、並み居る重光線級を撃破――。

延べ50体程居た、重光線級の殲滅を完了した。

――残りは要塞級と投石級、そして疎らにウロついている要撃級だ
な。

巨大な要塞級は移動こそするものの、動きは緩慢で主力武器である衝角腕も50メートルの射程距離ではない。

その射程外に居る限り、直接攻撃される心配はないだろう。

時折、搭載していたBETAを生み出す事もあるが、生み出した瞬間は無防備で其処を攻撃すれば問題は無い。

警戒すべきは、戦車級を次々と放り投げる投石級と要撃級だろう。

飛鳥はその場で投石級の脚目掛けて、ライフルと背部武装のロケット弾を放つ。

甲殻に覆われていない投石級の脚部は肉質が柔軟でその分、弾丸が

通り易い。

5体居た投石級の脚部を次々と破壊し、行動に制限を掛ける。複数の投石級はバランスを崩し、地面へと崩れ落ちた。全体重を支える脚部が破壊されたのだ。

最早満足に立ち上がる事さえままならず、投石級は無抵抗に等しい状態を晒す。

これで投石級は、実質無力と言っている。

止めは友軍に任せておけばいいだろう。

飛鳥は、迫り来る要撃級を迎え撃つ。

この付近のレーザー級は存在しない。

飛鳥は空中からの射撃で要撃級を仕留め、そのままの流れで群れを全滅させた。

残りは3体の要塞級のみ。

其処へスミカからの通信が入る。

『^{要塞級}そいつ等は後続の友軍機に任せておけば良い。そんな事より緊急の追加依頼だ、そっちに回す！』

程無くしてモニター内に、依頼内容と音声の流れ込んで来た。

(推奨BGM アーマードコア・fa — Scorchers)

『緊急を要する。依頼主はいつものGA——。事を急ぐのでな、手短に行くぞ。悪いが手を貸し欲しい、此方にも光線級がわんさか陣取ってやがる。下手に跳び上がった機体から即、お陀仏って事例が増えてきてな、コッチも手を焼いているのさ。正面から押し切りたい処だが、突撃級と要撃級に加え、盾を装備した汚染AIのノーマルのお陰で時間が掛かる。お前さんならレーザー避けながら光線級を黙らせられんだろ？見てたぞ!?有澤の方には事前に許可を貰ってるんでな、根回しの方は問題ないし、特別報酬も用意させた。…ま、そう言う訳なんで頼むぜ、レイヴン！』

GA社からの緊急依頼だった。

この巨大交易所を防衛する為の部隊だろう。

此処より少し離れた地域でも、BETA群との戦闘が繰り広げられている様だ。

どうやら光線級に、手を焼いているらしい。

それに此処では確認できなかった、汚染AIも敵陣に加わっている様だった。

『GAの連中、受ける事前提で依頼して来たな』

飛鳥の自由意思など無関係で、GAは緊急依頼を寄越してきた。それ程までに戦況は思わしくないのだろう。

「請けたいのは山々ですが、もう弾薬と推進剤が——」
事情はどうであれ、GAは一応此方側の陣営だ。

必要とされている以上、救援に駆け付けたい気持ちも存在していたが、既に弾薬が心許なかった。

『——補給の件なら心配するな。指定座標に移動しろ、補給部隊が待機している筈だ』

「……僕の選択権、殆ど無意味ですね」

『そう言うな、今の内に精々恩を売ってやればいい』

飛鳥の選択肢など何処吹く風。

既に補給部隊が準備を整えているらしい。

『座標を送る、其処へ向かえ！』

「——分かりました、直ぐに急行します！」

スミカから指定座標が送信され、モニターに表示された。

飛鳥は指定座標に方向転換し、ブーストパワーを引き上げ一気に加速し、目的地へと向かう。

「…物の見事にレーザー全弾避けたわね、あの子……！」

輸送車両内にて、香月夕呼は飛鳥の戦闘内容に舌を巻いていた。

「これもACの性能のお陰でしょうか？」

イリーナ・ピアツティフもACについて言及する。

「……それもあるだろうけどアイツ、俺達とは何かが違うみたいなんですよ」

ギン・ユウキが飛鳥について少し説明した。

思えばあのクレイドル調査の時から、予兆はあった。

高度を上げれば、遙か遠方からレーザーでほぼ撃ち落とされるという非常な現実。

しかし、飛鳥はどう言う訳か、その前兆を感知する事ができるらしく、そのお陰で今日まで生き延びてきた。

今の処、その能力は光線級のレーザー回避に生かされてるようだが、他にも新たな可能性が発見されるかも知れない。

「……予知……の類、でしょうか？」

「そいつは何とも言えませんが、一つ言える事は、アイツは他の人間とは少し違うって事は確かだと思うんですよ。——俺はね」

ピアツティフは“予知ではないか？”と推察するが、ユウキにも詳しい事は分からなかった。

「あの子、何処かの施設で何らかの処置を受けたとか、そういう疑いはない？」

夕呼は、飛鳥が何処かの施設や実験所で強化処置を施されたのではないかと、訪ねてみた。

彼女は視線を向け、その先には小柄な少女『社霞』が映っている。「精密な検査を受けん事には何ともな。——だが、簡易検査では何の異常も診られなかった」

スミカが言うには、既に簡易的な検査は済ませており、特に異常は無かったと語る。

「そう……。ああそうだ、その子の脳波やバイタルの波形もモニタリングしてあるんでしょ？」

「一応な。私は医療に関して少々不得手でな、さほど細かくチェックしてはいないのだが」

「此方に回して貰えるかしら？調べてみたいの」
「分かった、直ぐ寄越す」

夕呼は、飛鳥の脳波や生体波形に興味を示し、スミカは予めモニタリングしてあるデータを夕呼へと送信する。

夕呼も画面に向かってキーボードを叩き、早速調査を開始する。

——私の憶測が正しければ多分……。

夕呼は思い出していた。

最初飛鳥を紹介された時に見せた、奇妙な反応——。握手を交わした時といい、社霞と同じ反応を示した時といい——。——さあ見せて貰うわよ！火無飛鳥君とやら……！
彼女は一心不乱に分析を開始した。

(推奨BGM マブラヴオルタ —— ヴァルキリーズ)

「補給任務……ですか？」

ギガベース内にて、慌ただしく走り回る軍人達。

その中で、帝国軍人とは一線を画す迷彩服を着た青年と、山吹色の軍服を纏った男性仕官が対峙していた。

「そうだ。緊急を要していてな、正直人手が足りん。こき使って心苦しいが、頼まれてくれんか？」

山吹色の軍服を纏った仕官、篁裕唯は迷彩服の青年、山城上臣に頼み込む。

「お気になさらず、任務の詳細を——」

上臣は快諾し、任務内容を聞く態勢に入った。

篁裕唯が述べるには、一機の白いACが弾薬欠乏状態に陥っているとの事。

そこで弾薬や推進剤を搭載したMTを用いて出撃して欲しいとの要請だった。

BETA群真つ只中での進軍だ。

当然彼には護衛部隊が随伴され、その部隊は国連軍の特殊部隊『A-01』と呼ばれる部隊が担ってくれるとの事だ。

「先程の戦闘見せて貰った。貴官はMT操縦にも高い適性を備えている様だな」

「……恐縮です！」

彼自身MTに触れたのはごく最近であったが、MTは操縦が非常に簡潔で、特性さえ理解できれば僅か即日で戦闘起動が可能になる程だ。

日本帝国も当然この特性に目を付け、国土防衛に最適なMT開発に

着手していた。

MT開発自体は、有澤に随行している帝国企業『大空寺重工』を始めとする数多くの企業が担当していた。

「既に『A-01』部隊は出撃を終え、野外にて待機している。急いでくれ！」

「——了解っ！お任せを！」

篁裕唯の命で、上臣は直ぐに用意されたMTへと搭乗し、主機に火を入れる。

『こちら山城機、起動を確認！これより現場へと急行します！』

「頼んだぞ、山城少尉！」

裕唯の声に、上臣はライトを短く点灯させる事で応え出撃する。

彼の搭乗する機体は、四脚型のMTで各種アタッチメントには、武器弾薬ボックスと推進剤入りのタンクが装着されている。

一応自衛用として、7,7ミリ機銃が2門装備されているが、精々少数の小型BETAに対応するのが関の山だろう。

護衛には、友軍機頼みとなる。

ブースト移動で、ギガベース外と出た山城機——。

「指定座標確認、これより急行する！」

『こちらA-01部隊ヴァルキリー1、貴官の座標を確認した。此方に向かわれたし！』

野外へと出た彼に、A-01部隊からの早速通信が入る。

「——了解！」

上臣は応答し、MTを移動させた。

……

F-4J撃震の主兵装、87式突撃砲から36ミリ徹甲弾が射出される。

「相変わらず数が多いね、BETA共は——」

A01部隊の衛士である藤澤月子は、群れで殺到する要撃級を仕留めた。

「唯でさえBETAの数に手を焼くつてのに、今度は空中にも対応しなきゃならないなんてッ！」

月子の同僚である竹宮千夏の撃震は、上空に向かって突撃砲を連射していた。

空中で徘徊しているのは、多数の航空兵器群――。

無人の自律兵器にBETAが取り付き、人類に牙を剥いているのだ。

通称――汚染AI。

敵はBETAだけではない。

いや厳密に言えば、この汚染AI郡もBETAが関与しているのだが、人類が生み出した自律兵器も今や敵対勢力として稼働していた。

上空を低空飛行で飛び回り、低出力で単発式のパルスレーザーで地上を攻撃する、円盤状のガードメカだ。

単体なら戦術機の敵ではない。

しかし、200を超える群れで編隊を成し、空中を飛び回りながら地上に向け攻撃を仕掛けて来るのだ。

低威力の攻撃も、束になれば瞬く間に脅威と化す。

当然、汚染AIを放置する訳にもいかず、地上と空中、両方に対応しなければならぬ。

それは即ち、火力を対空にも割かねばならず、弾幕は必然と薄くなる。

「――ど、どうするんですかあ！汚染AIの対処なんて経験してませんよおツ……！」

月子、千夏の同期でもある三浦園子は悲鳴交じりに、対空射撃で応戦していた。

彼女は同期に比べ練度がやや低いものの、追加装甲である盾でパルスレーザーを防ぎながらも一機一機確実に、洗脳級BETAごとガードメカを撃ち落としてゆく。

「――こちらヴァルキリー2、無駄口を叩いている暇があるなら一機でも多く墜とせツ、貴様ら！」

そこへ、ヴァルキリー2のコールサインを持つ、伊隅みちるの叱咤が飛ぶ。

彼女の機体は、地上のBETA群を相手取っていた。

——まだかしら、補給機と例の少年は……!

BETA軍と交戦し、まだ5分足らずではあつたがBETAと汚染AIの苛烈な進軍に、焦燥感が芽生え始めていた。

既に光線級の殲滅は完了したという報告が入っている。

しかし他方面の光線級は未だ健在で下手に飛翔すれば、その光線級からレーザー照射もあり得るのだ。

「——ヴァルキリー1だ! 貴様ら随分余裕だな。訓練校での扱しきは、まだ足りなかつたか、ああ?」

そんな彼女等に現隊長職のヴァルキリー1、神宮司まりもの怒号が鳴り響いた。

「——各機集中を乱すな! 我々以外の友軍も、死に物狂いだという事を忘れるなツ!」

『『『——了解ッ!』』』』

——そろそろ辿り着いても良い頃合いだけど。

奮戦しながらも、まりもはレーダーに目をやり、補給機の位置を再確認する。

『——こちら山城機! 現場に接近!』

『——こちらレイヴン! 指定座標を視認しました!』

程無くして、補給用のMTとAC白天翼から通信が入り、現場に接近している事を伝えた。

「こちらヴァルキリー1、貴官らのマーカーを確認! ヴァルキリー3、補給機を誘導してやれ!」

『——了解!』

まりもは、竹宮機に補給MTの誘導を命じた。

「ヴァルキリー4は、あのACを出迎えてやれ!」

『——了解いッ!』

そして藤澤機には、ACの誘導を命じる。

——指定の座標は……あれか!

光線級を殲滅してからは戦局は一気に此方側に傾き、BETAの大群は確実に数を減らしていた。

しかし未だ尚、多数のBETAが群れを成し、飛鳥のACは残り少

ない弾薬でBETAを仕留めながら、指定座標を視認する。

視界には一機の戦術機が、探照灯を点滅させながら彼を誘導した。

『——遅いぞ、君い！急げ急げえっ！』

『——スイマセン！直ぐに、補給を済ませます！』

藤澤機に導かれ、飛鳥のACは補給地点に到着した。

一方、補給MTを駆る山城上臣も、竹宮機の先導兼護衛を受け補給地点に到着する。

『——ここが指定の現場です！補給機とACは直ぐに補給作業を開始して下さい！』

「山城機、速やかに補給作業に移ります！ACは座標軸を合わせ、暖機運転アイドリング状態を維持されたし！」

——山城っ!?まさか、その名まで聞く事になるとは！

山城を名乗る青年に、飛鳥は一瞬だが動揺する。

あの時見た悪夢——。

碌な抵抗もままならず、活きたままBETAに食われた少女、山城上総。

スピーカーから聞こえて来た声は青年のものだが、彼女と関連性があるのだろうか。

だが今は、そんな事を気に掛けている時ではない。

飛鳥は彼の指示に従い、補給作業に移行した。

飛鳥のACは、山城のMTに背を向ける形で片膝を突き、待機状態を維持する。

山城のMTも複数の作業用アームを作動させ、先ずACの弾薬を交換させた。

MT各所に設置された弾薬マガジンをアームで掴み取り、ACの武器に座標を合わせ設置していく。

更に背部武装のロケット弾も同じ手順で交換させ、弾薬作業は一通り完了した。

——残るは、推進剤の補充作業か。あまり慣れてないんだよなあ、正直な処。

上臣は本来、斯衛軍の衛士でこういつた補給作業に長けている訳で

はなく、推進剤の補充には多少なりの時間を必要とした。

AC各所の給油口にノズルを刺し込み、完全に入った事を確認する。

その後、下手な衝撃でノズルが抜けない様にロックを掛け、此処で漸く推進剤を注入する手順に移った。

彼の不慣れな面も手伝い、一連の補充作業を終える頃には数分が経過していた。

『ケーブル解除！、補給完了！』

給油口からケーブルを取り外すと同時に、上臣は作業完了を宣言した。

「——弾薬よし、推進剤よし、計器異常なし、…生き返った！」

『システム、戦闘モード、起動』

多少の損傷はあれど、弾薬、燃料共に息を吹き返し、飛鳥はACシステムを戦闘モードへ切り替えた。

「こちらレイヴン、これより他方面の光線級殲滅任務へと移行します！」

そしてブースターを起動させ、依頼された戦域へと移動開始した。

『武運長久を、レイヴン！』

『しつかりね、君！』

上臣と月子から声援が飛ぶ。

「——補給感謝します！貴方達も、無事の生還を！」

飛鳥もAO1部隊に感謝の意を述べ、更に加速させながら現場を飛び去った。

「——よし、補給任務は成功だ！幸い、此処の戦局は優位に傾いている！各機、気を抜かず最後まで任を果たすぞ！」

『『『——了解！』』』

ヴァルキリーの“まりも”から檄が飛び、隊員たちは呼応し奮起した。

飛鳥が光線級を殲滅した事により、この方面の戦域は既に掃討戦へと移行しつつあった。

支援砲撃も本来の効力を発揮し、各部隊が火力を集中させる事によ

り、BETA群の勢いは鳴りを潜めていた。

「山城機は念の為、後方へと待機されたし、此処は我々だけで対応可能だ！」

『了解、山城機、後退する！』

ACの補給という任を終えた山城機のMTは、戦闘部隊にとって足枷にしかない。

「BETA群の勢いに陰りを認む。ヴァルキリー4、貴様は山城機の護衛を担当しろ！方が一を想定してな！」

『了解！こちらヴァルキリー4、補給MTの護衛任務に就きます！』

竹宮千夏は、“まりも”の命を受けMTの護衛に就き、山城機と共にギガベースへと後退を始めた。

既に、有澤方面の戦域はBETA群の掃討戦に移り、勝利を収めるのも時間の問題であった。

「よし、アイツがGA方面へと向かったな」

「そんじゃ、こつちも向かいますか」

スミカとユウキの乗る輸送車両も、飛鳥の動きに合わせてGA方面へと車両を向かわせた。

多方面のBETA群は、未だ数多くが交易所に殺到しており、それを各企業軍が必死に食い止めていた。

相対的な戦況は、まだまだ予断を許さない状況であった。

AFギガベース（有澤重工業仕様）：有澤ギガベース

GAのAFギガベースを有澤重工業が買い取り、独自に改良した物。

元々有澤重工はAFを所有していなかったが、クレイドル墜落、B

E T A出現、次元の融合という目まぐるしい変化を皮切りに購入を決意。

(日本の国土に合わないのではないかという意見が多く、比較的小型で安価なA Fランドクラブの購入も検討されていた)

日本は海洋国家である為、水上移動が可能なギガベースが選ばれた。

当然、有澤独自の改良が加えられ、巡航速度や航続距離を主眼に延長が図られている。

また武装面も有澤十八番の榴弾砲が搭載されている。

全長：615メートル

全高：250メートル

全幅：420メートル

武装・大型実体弾砲(80センチ連装砲)×2：大型榴弾、拡散対空弾、徹甲弾、電磁パルス弾、各弾種を搭載

・速射野砲(30センチ単装砲)×6：O I G A M I砲へと換装されており、副砲扱いである

・多連装ミサイルランチャー×12：連装巡航型×2、6連装中距離型×4、25連装短距離型×6

・近距離防御用砲(56ミリ速射砲)×16

・近距離防御用マシンガン(25ミリ機関砲)×8

・推進機兼用レールガン×1

・多連装レーザーキャノン(搭載予定)×?

第11話―交易所防衛線2―

突撃砲

小型種BETAの掃討を想定した機関砲と多目的大口徑砲を組み合わせた戦術機サイズの銃器。

戦術機の主兵装。

射撃時に戦術機の腕にかかる負担を抑えるため

大口徑砲には無反動砲の原理を採用し初速を抑え反動を軽減するようにしている。

その一方で速力が必要なAPCBCHEやAPFSDSなどの砲弾には

発射後にロケット推進で速力を増す補助加速装置を複合したものを採用したことで

装甲貫徹力と射程を確保している。

多くの派生型を生み出し、幅広く運用されている。

戦場に斃れた戦士を貪る屍漁り――。

卑しき彼等の悪行も、決して無意味ではない。

多くの戦利品が市場に流れ、傭兵やゲリラに行き渡っているのだ。そんな彼等も、確かに戦場を支えていた。

(推奨)BGM

アーマードコア3

―― In My Heart

バレルより放たれる弾丸――。

施条加工された銃身から加速された、徹甲弾は目標へと命中。

しかし弾丸はそこで停まり、目標を僅かに傷付けただけに過ぎなかった。

「こちらACエスペランザ！ 駄目です、撃破に至らず！」

紅と黄でカラーリングされたAC『エスペランザ』の射撃は、思いのほか効果が薄い。

それもその筈。

ACの放った射撃相手は、BETAではなくACノーマルだった。

ACノーマルは洗脳級BETAに取り付かれた汚染AIで、機種はGA社製のGA03―SOLARWIND。

この機体は重装甲と積載重量に長け、重武装を施す事も可能な機体だ。

他企業製に比べ若干機動性は劣るものの、高い防御力や生存性の高さは一部のACハイエンドノーマルをも凌ぐ。

そして汚染AIと化したこの機体は、盾を装備していた。

特に実体弾に高い耐弾性を誇り、生半可な攻撃ではビクともしない。

ACエスペランザの装備しているライフルは、CR―WR69Rと呼ばれる初期ライフルだ。

対ACというよりは対MTや軽車両向けに開発された武器で、明らかに火力が不足していた。

殺到するBETAの大群を迎え撃とうにも、前衛に展開している盾付きのノーマルのお陰で、戦線が思う様に押し上げる事が出来ない。

「――アップルボーイ！ 汚染AIは俺に任せ、お前はBETA突撃級の足元を狙い搦座させろ！」

『――り、了解です！』

彼の傍らで戦う四脚型ACから通信が入り、エスペランザのレイヴンである『アップルボーイ』にBETA突撃級への対処を命じた。

盾付きのノーマルに、これ以上構っても弾薬の無駄だ。

アップルボーイはブースター起動で場所を変え、BETA突撃級へ

と標的を変更する。

「アイツの機体構成は、^{アセンブル}まだ初期とほぼ変わらん。重装甲で盾持ちの SOLARWIND 相手では荷が重い、俺が何とかせんとな」

アップルボーイに指示を出した、四脚型の AC は更に前へと位置取り汚染 AI 郡に対峙した。

——こういう時は、コイツが役に立つ。

四脚型 AC は、特殊兵装の ECM ロケット弾を AC ノーマルに向けて発射。

盾の隙間から覗く脚部へと命中させた。

ECM ロケットの弾頭が砕け散り、ノーマルから電流が迸る。

すると、そのノーマルは急激に機能不全を起こし、戦闘中にも関わらず右往左往と動き回った。

彼が放った特殊兵装、ECM ロケット。

弾頭に強力な妨害電波発生装置を組み込み、炸裂と共に電子機器にダメージを及ぼす電磁波を発生させる。

物理的に破壊する武器ではないが、こう云った耐弾性に長け尚且つ無人の自律兵器には特に有効だった。

——貰った！

四脚型 AC は、背部武装のグレネードキャノンを展開させ、先程のノーマルへと発砲。

高威力の榴弾は、がら空きの脇腹へと直撃し敢え無く粉碎された。

「——ノーマル撃破！次っ！」

主砲の役割を果たす、グレネードキャノン。

弾数は決して多くはないものの、今回は弾薬補給用の野戦コンテナが戦場各地へと投下されていた。

四脚型 AC は残弾数を気にする事なく、盾付きノーマルへと狙いを絞り戦闘を継続させた。

「そろそろ弾薬がッ——！」

群れで殺到する BETA 突撃級を攔座させ、進撃を阻んでいたアップルボーイ。

流石に数が多く、ライフルの弾薬が底を尽き始めている。

摺座した突撃級を乗り越え、大量の戦車級が此方に迫り来る。

「――ターゲットロック、ファイアッ！」

戦車級の群れに、背部武装のミサイルを発射。

数匹を纏めて吹き飛ばすも、小型ミサイル単発発射するだけの貧弱な武装だ。

とても戦車級の群れに対抗できるものではなかった。

『こちらGAノーマル部隊、貴官は今の内に後退せよ！』

焦るアップボーイに、GAグループの部隊が救援に駆け付けた。

どうやらGAグループも主力部隊の展開の目処が立つたらしい。

合計70機を超える、二個大隊規模の援軍だ。

「こちらACー一旦後退し、体勢を立て直しますー！」

アップボーイは機体を反転させ、野戦コンテナまで後退した。

――この戦闘が終われば、パーツを更新してみるか。

流石に性能不足を痛感し、彼は新たな機体構想を画策する。

駆け付けたGAノーマル部隊は、SOLARWINDを主軸とし、随伴機は重武装のMTで構成されていた。

ノーマルは腕部にアサルトライフルとバズーカ、背部にはミサイルを搭載した火力重視で、随伴機のMTは120ミリキャノンの主砲と30ミリ機関砲2門を搭載した重装機であった。

『隊長、部隊の展開完了、射撃準備よし！』

『――ようし、総員一斉射撃！撃ちまくれ！』

早期に射撃準備を終えたノーマル部隊は、一斉攻撃を開始し迫り来るBETA群に濃密な弾幕を浴びせた。

全搭載火器を駆使した一斉射撃の前に、前面防衛に優れたBETA突撃級も甲殻ごと粉碎され、唯の肉片と化してゆく。

「……。此処の戦域はノーマル部隊に任せても良からう。そう言えばあのバカ娘は、無事だろうか？」

ノーマル部隊の奮戦の様子見していた四脚型AC。

自身の弾薬も殆ど使い果たし、補給の為に野戦コンテナへと後退する。

その道中、自分の肉親を気に掛けていた。

彼には年頃の一人娘が居る。

その一人娘が、よもやレイヴンに成つていようとは想像だにしていなかった。

それを知ったのはごく最近で、何度も辞めるよう勧告したのだが、彼女は一切聞く耳を持たなかった。

尤も家族に職業を告げなかった彼にも、非は有るのだが。

——この戦いが終われば、じっくり話し合おうとしよう。

野戦コンテナで簡易補給を済ませた後、奮闘している一人娘を救援する為に今の戦域を離脱した。

「こちらACエキドナ！ああもう！気持ち悪いのよ、こいつ等！噛み付くしか出来ない癖に！」

黒色と赤錆色に塗装されたACエキドナを駆る女性レイヴンは、赤褐色の小型BETA、戦車級の数に辟易しつつも腕部の主兵装であるグレネードライフルで、纏めて戦車級を吹き飛ばしていた。

「——敵機撃破！よし、順調ね！」

高威力の榴弾を放つ中口径のグレネードライフル。

小型BETAを纏めて粉碎するには都合が良かった。

しかし装弾数に難があり、アツという間に弾切れを起こす。

「——えっ嘘っ弾切れっ!?!」

主兵装である腕部武装が弾切れを起こし、彼女は焦りの声を上げる。

既に両背部の3連ロケット砲は全弾打ち尽くしており、コアユニットに装着されている自動攻撃端末も再チャージ中だ。

残る武装は腕部のレーザーブレードのみだが、生理的嫌悪感を催すBETA。

今の彼女では、積極的に格闘戦を挑む気概は無かった。

「——うわっわ……ど……どうしよっ！」

実質的な攻撃手段を失い、彼女は冷静さを欠く。

「——こちらトルーパー！待っているレジナー！父さんが助けてやるからな！」

「——ええっ!?!な、何でお父さんが此処につ!?!」

ACエキドナを駆る女性レイヴンの名は、レジーナと言う。女性と言うよりは、まだ未成年の少女といった年齢だ。

彼女の父である四脚型ACのレイヴン、トルーパーは最大出力のブースト機動で救援に向かっているが、未だ距離が開いている。

こうしている間にもレジーナのACエキドナは、戦車級に囲まれたつあった。

BETAは空を飛ぶ事が出来ない。

普通なら空中に飛び上がり包囲を脱すれば良いだけなのだが、BETAには厄介な光線級が存在している。

下手に飛び上がれば即座に光線級に捕捉され、高出力のレーザーで焼き払われてしまうのだ。

『もう少しだ、持ち堪えろレジーナ!』

「ム、無理い!もう、どうしようもないよっ!」

いよいよ戦車級が、足下にまで迫り彼女のACに取り付かんとしていた。

——そんな時である。

戦車級の顎が弾け飛び、次々と戦車級は肉塊へと変貌していった。

レジーナのACエキドナに殺到していた戦車級は、体液を撒き散らし体組織を破壊され瞬く間に砕け散った。

「……な……何?何が起こったのっ?」

余りに唐突な出来事に、レジーナは理解が追い付いていなかった。

その後も、彼女に迫る戦車級は悉く粉碎され、偶然モニター内に曳光弾の軌跡を捉える事が出来た。

よく見れば、曳光弾の軌跡は上空から飛来しているものだった。

「——え、なに、航空支援!?!」

彼女は頭部カメラを上空へと向ける。

モニターには、ハイエンドノーマルの白いACが映り込んでいた。

「な……何なのアレ?レーザー避けながら援護してくれてたの…?」

レジーナは驚きの声を上げた。

上空では白いACがレーザーを回避しながら、付近の戦車級を掃討していたのである。

遠方から飛来するレーザーは、間違いなくBETA光線級によるものだろう。

このGA陣営にも、果敢に空中戦を挑む猛者は何人も居たが、悉くレーザーの餌食となり散っていった。

こうして見上げている間にも、白いACは回避行動を執りつつ地上に向かって射撃を繰り返していた。

気が付けば、付近の戦車級は皆肉塊へと成り果てていた。

「す、すごい…。誰だか知らないけどサンキュー、君のお陰で助かったわ！」

あと少しで戦車級に食われる所だったにも拘らず、レジーナは極めて快活な声で礼を述べた。

『有澤重工の援軍だな？協力感謝する。後は此方に任せて、光線級の殲滅を頼む！』

「――えっ!?!ちよっ…父さん!?!」

程無くして四脚型ACを駆るトルーパーも現場に到着し、白いACに光線級殲滅を託す。

『久し振りですね！レイヴン試験依頼ですか、アスカ・ヒム君!…僕です！アップルボーイ、覚えていますか？』

「――アップルボーイ!?!君まで…!」

トルーパーに続き、アップボーイもこの戦域に辿り着き、白いACに語り掛けた。

彼も現場に到着した事で、レジーナは更に驚きを見せた。

少しして白いACから応答が入る。

『こちらAC白天翼。レイヴン名、火無飛鳥。ゆっくりと話をしたい処だけど、戦闘中だ。何時かまた何処かで、生きて会おう!』

会話もそこそこにAC白天翼は、BETA光線級の方へと飛び去った。

どうやら飛鳥とアップルボーイは同じ時期にレイヴンを目指した間柄で、同時期に試験に合格した。

友人という程親しい訳ではなかったが、訓練生時代そこそこ会話をする位には顔見知りではあった。

『レジーナ、お前も早く補給を済ませて来い。後続部隊が来るまで我々で此処を抑える』

「わ、分かっているわよ！」

——頼んだぞ、若きレイヴンよ！

トルーパーは白いレイヴンの飛び去った方角に、頭部カメラを向けていた。

……

(推奨BGM アーマードコア3 —— Artificial Sky I)

——慣れ——

一言で言えば、そう表現すればいいのだろうか。

殺到する、レーザーの嵐——。

絶え間ない、レーザーの雪崩——。

無限とさえいえる、レーザーの豪雨——。

ブースターを吹かし、機体の位置を変え、全てを避け切る。

地上の要撃級を踏み台とし、踏み込んだ反動とブースターの推力との相乗効果で、回避と接近の一体化。

彼のACには、もはや掠りもしない。

間断無く照射されるレーザー攻撃を避け、只管に光線級へと目指す。

『目標との距離、12000:10000:8500:7000:』

オペレーターである、スミカの通信が聞こえて来る。

徐々に狭まる光線級との距離——。

『距離5000ッ！』

——この距離なら十分ッ！

そして距離5000を切ったと同時に、飛鳥は攻撃へと転じた。

「——今ッ！」

左右の銃器が火を噴き、銃口から無数の弾丸が解き放たれた。

銃口から眩いマズルフラッシュがチラつき、飛翔した弾丸はBET

A光線級を次々と貫き砕いてゆく。

防御と耐久性の低い光線級はWS―16Cの36ミリ弾に貫かれ、動きは鈍重ながら高い耐弾性を有す重光線級はCR―YWH05R3のライフル弾により撃ち抜かれた。

飛鳥のACは光線級を仕留めながら、距離を詰めて行く。

時には空中、時には地上を自在に駆け抜け、光線級に対しの絞らせず自身は的確に射撃を加える。

時間を追う毎に光線級は数を減らし、反撃とばかりにレーザー照射を見舞うものの、悉くが反撃に遭い粉碎された。

僅かな残存体が、要塞級を盾としながらレーザーを浴びせるが、射線を確保できているという事はAC側も射線を確保しているという裏返しでもある。

結局運命は変わらず、光線級は殲滅された。

『――光線級、殲滅を確認！よくやった！』

スミカから、付近一帯の光線級殲滅の報を受け取る。

「――よし、後は残りのBETAだけだな。要塞級が数体に、要撃級が十数体」

『放っておけ、お前の役割は果たした、このまま帰投すればいい』

スミカから通信で、後続の部隊が此方に急行していると言う。

後の処理は彼等が担ってくれるだろう。

「了、これより帰投します……」

『――どうした？』

帰投しようとする矢先、飛鳥は言葉を途切れさせた。

「レーザー確認……さっきの……アップルボーイの居た方角だ！」

先程レジーナたちを援護した地点で、激しい戦闘が行われている様だった。

『此方では確認できんぞ、何が起こっているのか分かるか？』

「詳しい事は何も……しかしレーザーを見る限りではBETAの反応は殆ど見られません！寧ろACの反応が増大しているみたいです！」

装備しているレーザーユニットは未だ初期で、捉えた波形からでは事の詳細は確認できなかった。

しかし、アイコンが激しく動き回る毎にBETAの数は瞬く間に減少し、程無く消滅してしまった。

——にも拘らず、尚を戦闘は継続されたままだ。

友軍の識別を示すアイコンも次第に数を減らしつつあり、識別不明のアイコンが縦横無尽に動き回っているのだ。

『気になるのは分かるが、好奇心猫を殺すともいう。お前の役割は終わったのだ、理解出来るな?』

「……………」様子だけ見に行きます。冷たい様ですが、危険と判断したら即撤退と言う方向性で——」

『…いいだろう、お前の判断が正しい事を祈ろう』

現場の確認を徹底するという条件で、飛鳥は件の場所へと機体を移動させる。

——一応飛んでみるか。

広い視界を確保する為、試しに高度を上げる事にした。

機体をジャンプさせ、そのまま高度を上げてみたがレーザーが飛来する事は無かった。

考えてみれば、交戦してからかなりの時間が経過している。

多方面の光線級も、ほぼ駆逐されても不思議ではない状況だ。

飛鳥はこのまま飛行を継続——その時!

突如としてコックピット内から、アラームが鳴り響いた。

「——なっ、被弾警報っ!」

機体が僅かに揺れる。

——この衝撃…:実体弾ッ!

『——おい、撃たれたぞっ!高度を下げろッ!』

スミカの怒鳴り声が木霊し、言われるまでも無く飛鳥は機体を降下させた。

『——被害状況はッ!』

「左肩部、損傷!弾種は対AC用ライフル弾——なれど戦闘に支障なし、装甲で止まった!」

モニターには、機体のダメージ状況を示す映像が表示されている。

左側の肩部が赤く点滅し、損傷している事を示していた。

『——ちよつと君、レーザー全弾避けた癖に、何でそんなつまらない射撃に当たるのよっ!?!』

通信に香月夕呼が割り込んで来た。

声を聞く限り、怒りや呆れが混在している様だ。

更に別の声——社震までもが割り込んで来る。

『汚染A Iとは違う完全な無人兵器……これでは色を読み取る事が出来ません!』

『——どう言う事だい、嬢ちゃん?』

彼女の言葉にユウキが反応する。

光線級のレーザーにせよ汚染A Iの攻撃にせよ、必ずBETAが関係している。

汚染A I自身は機械兵器だが、洗脳級BETAが取り付き支配する事で攻撃信号を送信している。

故に生物である彼等の思念を感じ取る事で、霞や飛鳥は攻撃を予測する事が出来ていた。

だが今対空射撃を行ったのは、完全な無人自律兵器であった。

生物が関わっていない以上、思念を感知する事が出来ず、飛鳥は被弾を許してしまったのである。

「レーダー確認、機種……ACと断定!アセンブルまでは分かりませんが……」

地上へ着地しレーダーを確認した処、ACの反応を示していた。

また計測されたエネルギー反応からして、ハイエンドノーマル級だと判断出来た。

ついでに取得できたデータを輸送車両にも送信しておく。

『——もうお前を補足しているぞ、数は3機……全て四脚タイプ。逃げんなら今の内だ、判断を迷うなよ?』

先程対空射撃を行った無人AC軍が飛鳥に向かって、ホバー移動で迫っていた。

「弾薬推進剤共に、7割残っています。このまま奴等をやり過ぎし、彼等と合流し共闘します!」

このまま撤退すれば、間違いなく自分は安全を確保出来るだろう。

しかし、それでは有澤方面に無人ACを引き連れる結果となり、彼等を危険に晒す恐れもあった。

ならばアップルボーイたちと合流し共闘した方が得策と判断したので。

レーダーには50機以上の友軍機が残存している。

まだ味方機が残っている内に合流した方が、敵意を駆逐できる確率も高かった。

地上にはBETAの死骸が、そこら中に転がっている。

飛鳥はこれ等を遮蔽物にしながら、無人AC軍の射撃をやり過ぎ切り抜けた。

『クソ何だコイツら!』

『汚染AIとは違うのか?!』

『漸くBETA倒したつてのにッ!』

ACノーマル部隊は、正体不明の無人AC群へと一斉射撃で迎え撃つ。

先程の戦いで損耗したとはいえ、火力重視のノーマルとMTの混成部隊だ。

濃密な火線は、無人AC群に幾らかの効果が見られた。

だが高機動型の無人ACが前衛に躍り出た途端、流れが一変する。

低空を自在に飛び回り、ブーストドライブやハイブーストを駆使した変幻自在の機動は、濃密な弾幕を見事に擦り抜けた。

そして反撃とばかりにパルス弾の連射を浴びせる。

その武器は従来のパルスライフルとは違い、一定距離で電磁爆発を引き起こし、範囲内に継続ダメージを負わせた。

また引き起こされた電磁爆発は、電子機器や電装系に深刻なダメージを引き起こし、友軍部隊は瞬く間に機能障害へと追い詰められる。

『や、やべえ…モニターがッ!』

『至急、至急!応答乞う、応答乞う!』

『クソ、動け、動きやがれッ!』

混乱状態のGA部隊に、無人AC群の苛烈な追撃が襲い掛かった。十数機程度の群れだが、四脚ACから放たれる対AC用ライフル弾

が、ノーマルACを次々と撃ち抜き撃破された。

「——何なのよツコイツら！さつきまで居なかつたでしょっ!?!」

「——残念ですが、包囲されました。撃破して突破するしかありません！」

「——各機、火力を一点に集中させ突破口を作り出せ！」

友軍機を次々と撃破しながら無人AC群は包囲網を生成し、彼等を取り囲む。

レジーナ、アツプルボーイ、トルーパーの3人は火力を集中させ一点突破を図った。

だが無人ACの装甲は予想以上に強固で、一機撃破するにも時間を要した。

無人AC一機を撃破できたものの、レジーナとアツプルボーイは損傷を受け戦闘力を著しく低下させる。

更に追い打ちを掛けるように、無人AC群の集中砲火がレジーナのACに深刻な損傷を負わせた。

「——う、嘘っ？脚部破損っ!?!」

彼女のACエキドナは、片脚が大破状態となり歩行は疎か直立姿勢さえ困難な状態へと追い込まれる。

「——レジーナっ!」
彼女の父であるトルーパーは、前へと立ちほだかり盾になろうとする。

「——父さんッ!」

「——トルーパー隊長ッ!」

「——貴様だけでも逃げろ、アツプルボーイ！俺が敵を引き付けている間に、無理矢理でも空中へ退避するんだ!」

BETA光線級はもう居ない。

三人の中では、比較的損傷度の低いエスペランザを逃がそうと、トルーパーは叫んだ。

『し……しかし……』

「——急げっ！俺もこの部隊も長くはもたんッ！お前はまだ若い、生き延びろッ!」

逡巡するアツプルボーイを怒鳴りつける。

こうしている間にも、無人AC群は友軍機を次々と撃破し、残存している味方機は12機と数を減らしていた。

「……生き残れたら今度こそ、ゆっくりと話し合おうと思っていたのによ。ツイてねえぜ……」

『とう……さん……』

『——申し訳ありません……ブーストツ!!』

レジーナ、トルーパー親子に敵機が無慈悲にも迫って来る。

その間、アツプルボーイはブーストを吹かし、包囲網を突破する為に空中へと無理やり上昇した。

刹那——!

機体のモニターに一瞬だが、白いナニカが映った。

——えっ!?

彼が気付いた頃には、モニターにはもう何も表示されていない。

しかし、レーダーには擦れ違ったナニカをしっかりと捉えていた。間も無くしてオープンチャネルで通信が入る。

『——こちらAC白天翼、これより貴隊を援護する!』

『——その声……君ですかっ!?!』

アツプルボーイは機体を反転させる。

頭部カメラが捉えたのは、白いACだった。

……

(推奨BGM アーマードコアVD —— Mechanized Memories)

飛鳥は低空で位置を変えながら、両腕のライフルと背部のロケット弾を地上に向けて乱射する。

なるべく敵部隊に満遍なくばら撒き、此方に注意を向けさせた。

「よし、掛かった!」

思惑通り敵の殆どが彼を標的とし、高機動型は飛び上がり、四脚型はライフルで対空射撃を試みる。

『——占めた!……今の内だ、突破しろおッ!』

敵の注意が飛鳥に向いた事で、包囲網に穴が生まれる。

好機と捉えたトルーパーは、残存機には退避を呼び掛け、自身は半壊したレジーナの機体を担ぎ脱出を図った。

——注意を引いたまでは良かったが、敵は予想以上に強固な装甲を誇っている。……どうするッ!?

敵の注意を引く為の乱射ではあったが、実質全搭載火器を用いた全力射撃であった。

だが完全撃破できたのは僅か一機で、生き残った機体は殆どが戦闘を継続。

『システム・スキャンモード』

飛鳥は回避行動を執りながら、スキャンモードに切り替え周囲を索敵する。

すると、交易所付近にはG A本隊が戦闘を続けていた。

——押し付ける様で悪いが……!

未だ10機以上を残す無人AC達。

流星に今の武器では、明らかな火力不足だ。

頼みの綱である味方機は殆どが消耗し損傷し、撤退という体を保ちつつも敗走に近い状態だ。

過度な期待は出来ないだろう。

飛鳥はブースト機動で、G A本隊へと進路を取った。

G A本隊に多くの味方機が居る。

敵を引き連れ、彼等に押し付ける形となってしまうが、この際綺麗事は言っていない。

そもそも、こちらは追加の依頼で光線級を殲滅し役割を果たしたのである。

文句を言われる筋合いも無いというものだ。

だが厄介なのは彼に追い縋る、高機動型のAC達だ。運動性、速度で彼のACに肉薄し、パルスマシンガンを浴びせて来る。

——何だ、あの武器? 空中で電磁爆発を引き起こした。彼も初めて見るのだろう。

被弾こそしなかったものの、敵の使う武器は未知の領域だった。だが高機動型の包囲網は徐々に狭まり、無人ACに捕捉されてしま

う。

——不味い、ロックされたッ！

コックピット内に響く、被ロックオンのアラーム音。

無人ACの銃口が彼に向けられた。

その瞬間、爆発が巻き起こる。

「——何だッ!？」

突如として、銃口を向けていた高機動型一機が爆発を引き起こしたのである。

——自爆っ……? いや違う……何が起こったんだ？

疑念を抱きながらも飛鳥は、GA本隊へと飛行を続ける。

そんな彼の元へ通信が割り込まれる。

『その白いAC……こちら機体構成は狙撃特化型だ。射程内にそれらを連れて来い。ここで死にたくなければ、此方の指示に従え』

「——今度は何だッ!？」

若い女性だが、カスミ・スミカとは似て非なる低く落ち着いた音声が、彼の耳を打つ。

『飛鳥、お前を中継して姿を捉えた。ビーコン情報受信、交易所付近の瓦礫の上だ!』

一連のやり取りを聞いていたのだろう。

スミカからの通信が入り、彼のモニターにはマーカーが表示される。迷っている暇は無かった。

少しでも隙を見せれば、忽ち敵の餌食と化するのだから。

ブーストエネルギー残量をも無視し、多少無理をしても飛鳥はビーコンの方角を目指す。

そう時間を置く事なく、更に高機動型の一機が爆発した。

白い軌跡を描く火線が、無人ACを貫いたのだ。

その瞬間、残り3機の高機動型は回避行動を執り始め、次々と狙撃を躲してゆく。

「…思ったよりも対応が早い」

このままでは、謎のACの狙撃も功を成さなくなるだろう。

『——気を付けろ！——機来るぞ、真正面！』

——真正面っ!!

またもやスマカからの通信で、進行方向から接近警告が流れて来た。

だが、考える間もなく黒い物体が彼と擦れ違い、追い縋っていた高機動型無人AC達と撃ち合いを繰り返していた。

「——今のは黒いAC…あの時のツ!?!」

機体はそのままに、後部カメラを起動させ後方の戦闘を撮影。

戦いを繰り返す黒いACには見覚えがあった。

数週間前オーメル主導で行った、大規模作戦で遭遇した記憶がある。

その時も黒いACが先陣を切り、多数のBETAを苦も無く駆逐していた。

黒いACも高機動型にアセンブルされているらしく、無人AC相手に互角以上の戦いを展開していた。

高機動型無人ACの後方には、無人四脚型ACが集団で此方に迫っている。

先程の狙撃型ACは、地上へとターゲットを切り替え、次々とスナイパーライフルで貫いた。

「あんなAC…見た事がない……」

狙撃を行っていたACへと接近し、飛鳥は目視で姿を捉えた。

『あのカラーリング、そしてエンブレム…まさか……』

スピーカーごしに、スマカの呟く声が漏れて来る。

黒を基調とし赤を血管の様に入り混ぜたカラーリング、双剣を携えた一本尻尾の獅子のエンブレム。

そして、見た事も無いパーツで構成された、独特の姿形をした異質のACだった。

今も長大なスナイパーライフルで狙撃を継続し、一機また一機と無人ACを仕留めてゆく。

そして流れる様に無人AC群を殲滅し終え、黒いACと狙撃特化のACは撤退を始めた。

「――黒いAC！貴方は何者です!?独立傭兵なのですかッ!」

飛鳥は堪らず、抱いていた疑問を口に出した。

すると黒いACは一旦飛行を止め、空中を制止しながら此方に振り向く。

『戦場在る所、我ら顕れり』

淡々とした口調でそう答え、そのまま飛び去ってしまった。

それから幾許かの時は流れ、BETA、汚染AIとの戦闘は人類側の勝利に終わり、巨大交易所の防衛は成功した。

幸い交易所内に侵入したBETAは皆無で、装甲壁がレーザーで損傷しただけに留まった。

「……終わったな、ユウキ」

「ええ」

「……」

「……」

一方、輸送車両内ではスミカとユウキは戦闘終了を確認していた。

「そろそろ行くか」

「……」

スミカは席を立ち上がり、ユウキにもそれを促す。

「あら、行っちゃうの?」

隣で夕呼が呼び止めた。

本来は、交易所で飛鳥とは別れる予定だった。

しかしBETAによる予想外の介入により、二人はなし崩し的に飛鳥のサポートへと回ったのだ。

戦いが終わった以上、二人に留まる理由はなかった。

「……………」

ユウキは押し黙ったままだ。

一言も発さず唯々無言を貫き、拳を握り締めているのをスミカは見逃さなかった。

「なあ、ユウキよ」

スミカは一人言葉を紡ぐ。

「あの軽車両…放っておけば、ゴロツキ共に接收されてしまうなあ？」

「…セレン…？」

「大きくもない車両だが、そこそこに荷物も詰め込んである。それ等を心無い連中に持つて行かれるのも、どうかと思うんだ…私はな…？」

「……」

「お前の導き出す答えだ、私はそれで良いさ」

「……セレン・ヘイズ……」

スミカの淡々とした口調に、ユウキは反応を返す。

飛鳥と別れ、自分達が旅立つ為に購入した軽車両。

BETA群の思わぬ乱入により今は駐車区域へと停車してあるが、状況が落ち着き放置しておけば、心無い無頼の輩に持ち去られてしまうのは明白だ。

都市機能が忠実した巨大交易所ではあるが、人と物資が流れ着く地である以上、貧富の二極化も激しく、富裕層地区以外は治安も不安定な場所でもあった。

ユウキは、突如として席を立ち上がった。

「あの車…チンピラ共にくれてやるにはチイツとばかり勿体ないですよね！俺、取ってきます！」

そう言った彼は勢い良く輸送車両を飛び出し、そのまま交易所へと走り去った。

——全く、世話の焼ける。

去り行くユウキを見送ったスミカも静かに席を立ち、運転席へと移動する。

そんな彼女を無言で見つめる、夕呼、ピアティフ、霞の三名。

「……なんだ？」

見つめる彼女等の視線に、スミカも気付き訝し気に問う。

「いえいえ、お気になさらず♪」

「私達は静観しているだけですから★」

「絆…ですね（へへ）」

三者三様に、言葉を並べ薄つすらと笑みを浮かべた。

「……フツ……、まあ、仕方なかったって奴だ」

スミカも軽口で返す。



(推奨BGM マブラヴ オルタネイティヴ —— 小隊前進！

)

戦場跡。

大地の至る所に煙が立ち込め、硝煙と火薬の臭いが充満する。

其処彼処に転がる、金属の破片と残骸。

半壊した兵器。

赤黒い体液を撒き散らし、原形を留めぬBETAの死骸。

そして千切れ散乱する、嘗て人だったものの肉片。

そんな大地に佇む、人型を模した鋼鉄の巨人が数体。

『あの黒いAC、お知り合いですか？』

「アップルボーイ……」

アップルボーイと呼ばれた、一人のレイヴンから通信で呼び掛けられた。

「いや、そんな関係でもない。知っている……只それだけ。僕自身も彼の素性は分からない」

白いACのレイヴンである飛鳥は、曖昧な答えで返した。

あの黒いACとは、以前共闘した事がある——。

ただそれだけの関係なのだ。

『じゃあさ、もう一機のACの事は？』

今度は少女が呼び掛けて来る。

ACエキドナを駆る、レジーナを名乗る少女のレイヴンだ。

黒いACと共に居た、狙撃特化型のACを指しているのだろう。

「あれは僕も初めてだ。見た事も無いパーツで構成されてた、一体何

者だろうか？」

無人AC群に追い継られていた時、狙撃で飛鳥の窮地を救ったあのAC。

既存のACとは一線を画すパーツで組み上げられていた。

『俺もあんなACは見た事がない。新型なのか、若しくは国家解体以前……いや、それより更に昔の機体なのか……。撃破した無人AC群も、我々の知らんパーツで構成されていたな』

レジーナの父であり、ベテランレイヴンでもあるトルーパーも会話に加わった。

黒いACと狙撃特化のACのみならず、彼等に撃破された無人AC群も似た様なパーツで構成されている。

——この無人AC：洗脳級BETAの反応は無かった。誰かが、遠隔操作でもしていたのだろうか？……一部でも回収すべきか？

飛鳥は無人ACの残骸をカメラに収め、記録撮影しながら回収を考えていた。

『——ちよつとお君い、聞こえる〜？』

「!？」

思案中の飛鳥に、香月夕呼が通信で割って入った。

「ええつと確か……香月……夕呼……さん、でしたっけ？」

『そうそうご名答、これから長い付き合いになると思うからしつかり覚えておいて!——で、そんなアタシから、チョットしたお仕事を頼むわ』

「——無人ACの回収ですか？」

『あら？分かってんじゃないの』

この場で、このタイミングの通信だ。

しかも相手が研究者とくれば、大体の要求は察する事が出来た。

『話が早くて助かるわ。回収お願いできるかしら？』

「……実はマニピュレーターが空いていないので、ウインチで牽引するしかありません」

現在飛鳥のACは両腕部に銃を保持している為、新たに物を掴む事が出来ないで状態だ。

戦術機の機能である、副腕サブアームや背部担架ユニットの様に腕部武器をマウントする機能は備わっていない。

武器を投棄すれば手は空くが、軍から支給された物ではなく全て自費で賄った品だ。

安易に捨てる事など考えられなかった。

従って、補助装備のワイヤーウインチで対象物を絡め取り引き摺るしかないのだが、無人AC丸ごと一機を牽引するのは予想以上に手間と時間を要するだろう。

『ああ、そんな事？ちよつと待ってて、ウチの部隊を寄越すから確保だけしておいて！』

「了、お早めに」

夕呼は応援に、A01部隊を派遣してくれるらしい。

だがこの戦域はGAの管轄下だ。

一応同じ陣営とは言え余り長居できるものでもなく、このまま拘束されGAに引き込まれるのではないか、という疑心に囚われそうだった。

数分後、“神宮司まりも”率いる戦術機部隊が現場に到着した。

有澤隆文が、GAに根回ししてくれたのだろう。

特に現場が騒がしくなる事もなかった。

『——此方A01部隊、これより回収に移る。各位、作業開始！』

『『『了解！』』』』

まりもが部下に命じ、回収作業が速やかに開始される。

『これが有澤統地区…もとい、日本帝国の戦術機…ですか』

『F-4だっけ、それがベースになってるんだよね？』

『第一世代機だが、コストパフォーマンスに優れ世界中に配備されている筈だ』

アツプルボーイ、レジーナ、トルーパーの3名はA01部隊の作業を見ていた。

当然彼等も、ある日を境に異なる世界同士が融合し、戦術機やBEAT Aが異世界の産物である事は知っていた。

だが彼等もあくまで傭兵だ。

世界の存亡や国家の理念などは二の次で、重要なのは今を生き抜く術こそが肝要。

故に、異世界同士の融合などという荒唐無稽な現実には、さして拘る事象でもなかった。

『こちらヴァルキリー2、回収作業完了!』

ヴァルキリー2のコールサインを持つ伊隅みちるが、作業完了の旨を宣言する。

四脚と高機動型の無人ACを一機ずつ確保する事に成功した。

『A01部隊、これより帰投する。レイヴン…火無飛鳥。貴官は我々の後に続いてくれ!』

まりもの指示を受け、飛鳥も彼女等に追従する事にした。

『借りができたな、若きレイヴン』

『ほんとに助かったわ、サンキュー!』

『また何処かで、お会いしましょう!』

三人が飛び立つ飛鳥に言葉を贈る。

「勿論、生きて会おう!何処かで!」

飛鳥も彼等に応え、そのままA01部隊と共にその場を去った。

……

(推奨BGM アーマードコア ― ガレージ)

『よくやってくれた、火無飛鳥君。君はそのまま、ギガベースへと直接向かってくれ。輸送車両は、既に此方で格納してある』

A01部隊に追従している最中、有澤隆文から直接通信が入った。

「――了。……有澤さん、あの二人はどうなったんです?」

戦闘が終了した時から、ユウキとスミカからの音信がプツツリと途絶えていた。

飛鳥は気になり、訊ねずにはいられなかったのだ。

『もう分かっている筈。…つまりは、そう言う事だ』

「……はい」

大方の察しは付いていた。

元々あの二人とは交易所で別れ、それぞれの道を歩む予定だったのだ。

つい何時も通りに彼等のサポートを受ける事で、感覚が麻痺していた事も否定できないだろう。

——割り切らないといけない事は分かっている。それでも……せめて別れの挨拶ぐらい、ちゃんと言いたかったな。

どの様な状況であれ戦場で身を置く以上、別離は唐突にやって来るものだ。

それは飛鳥自身も頭では理解していたが、感情を処理し切れる程、少年は大人ではなかった。

有澤陣営のギガベースは、既に交易所から出港しており荒野を微速で航行している。

此処は陸上だ。

ギガベースの移動方法は、無限軌道に置き換わっていた。

ギガベースの後部ハッチより、戦術機とAC白天翼は着艦する。

他の友軍機は皆撤収を完了し、彼等が最後の回収機だ。

『A01部隊は此方のハンガーへ、ACは此方の専用ハンガーにて移動して下さい』

艦内オペレーターの誘導に従い、飛鳥はACを移動させ専用ハンガーへと機体を設置する。

——これがギガベースの内部か。思ったより随分広い。

外側からは見慣れた、AFギガベース。

しかし、中に入ったのは今日が初めてだった。

全長600メートル、全高250メートル、全幅300メートルの圧倒的巨体を誇る拠点型AFだ。

内部は様々な兵器が立ち並んでいた。

ACノーマルを始め、多様なMTに通常兵器群、そして戦術歩行戦闘機。

そして艦内を忙しなく走り回る、作業員達。

奥の方には、自分で購入した専用の輸送車両が停まっている。

コックピットハッチを開け、飛鳥は機体を降りた。

「先ずは生還おめでとう、火無飛鳥君！」

降りた先には白衣を着た女性、香月夕呼が待っていた。

彼女だけではない。

「あれだけの猛攻を潜り抜け——モニター越しに見ていたけど凄かったわね！」

帝国斯衛軍で五大撰家の一人、崇宰恭子を含め衛士の面々が挙つて彼を出迎えていた。

「……」

その光景に圧倒されたのか、飛鳥はたじろぐばかり。

「では恭子様、私はデータ解析に移ります」

「頼むわね、篁少佐」

——た、篁っ!?

巨軀の傍らに居た山吹色の軍服を纏った一人の士官——。

恭子が口にした、彼の姓は『篁』だと言った。

聞き覚えのある名に飛鳥は、まともや動揺する。

その場を立ち去る篁雅唯の背を、自然に目で追っていた。

「此度の戦闘ご苦労。見事と言わせて貰おう、火無飛鳥君」

飛鳥を迎える面々に、今回の雇い主である有澤隆文が声を掛ける。

「……いえ、これが役割です」

気の利いた社交辞令など今の飛鳥には期待出来よう筈も無く、彼は短い言葉で応えるしかなかった。

「今後展開されるであろう作戦、細やかな君の任務、確認したい事は山ほどあるだろうが、今はゆつくりと休み次に備えて頂きたい。君の部屋は既に用意してある。案内は彼等に任せよう……では私はこれにて！」

必要事項を伝え、彼は直ぐにその場を立ち去った。

——彼等つて誰だろう？

隆文に説明された人物など見当たらず、飛鳥は周りを見回す。

その視線の先々に、夕呼や恭子達と目が合ったが、彼女らは全員首を振るばかり。

「取り敢えず、あの通路を進んでみると良いですよ！」

衛士の一人である三浦園子が声を掛け、とある方角に指を指す。

「は、はい…」

ここに留まった処で埒もあかず、その通路に向かう事にした。少し進むと、忘れようもない聞き覚えの有る声が掛かった。

「ようつ、おかえり…つてか?」

「——えっ…?!?」

その声に反応し視線を向けた先に、二人は居た《／b》。

「ユ、ユウキさん?!?スミカさん?!?」

……

《b》そういう事だった。

ユウキとスミカは、日本へと向かう事にしたのである。

もしも飛鳥が何事も無くあの戦闘を終えていたなら、彼等はそのまま交易所を去っていた。

しかし、二人は飛鳥と共に日本行きを選択肢を取った。

二人をそうさせた要因、それは最終局面での戦闘だ。

BETA光線戦級をほぼ殲滅し、突如の無人AC来襲。

そして結果的に飛鳥を救った、黒いACと狙撃型のAC。

あの二機は、無人ACよりも飛鳥を気に掛けていた様にも思えた。

これと云った確証がある訳ではない。

ただ、少なくとも二人には、そう感じ取れたのである。

「あの黒いAC共、どうにも気になる——」

「このまま欧州に留まるより、日本に向かった方が大きな意義が有ると判断したのでな」

ユウキとスミカは、そう語った。

「だが、今迄の様に俺達に甘える事は出来んぜ!」

「——充分です! 貴方達が居る…それだけでっ!」

そうこうしている内に用意された部屋に辿り着いた。

「我々の部屋もこの近くだ。豪勢な事に個室まで用意してくれたよ、有澤隆文め——」

スミカが語るには、彼女等の個室もこの階層だと言う。

「明日から忙しくなるぜ、色んな意味でな！お前のACの事は俺に任せておいて、お前はゆつくりと休みな！」

「……お言葉に甘えますー！」

「ではな、飛鳥」

二人から労いの言葉を受け、飛鳥は新たな部屋で早速ベッドへと身を投げ出した。

絶妙に調整されたスプリング式のベッドに、身体にフィットするマット。

飛鳥用に合わせ用意された代物だろうか。

身を投げ出した飛鳥は、ボくと天井を何気無く見つめた。

……

(推奨BGM マブラヴ オルタネイティヴ —— 宿命)

飛鳥を見送り廊下を歩くスミカとユウキ。

そんな二人の前に、赤い軍服を纏った青年将校が姿を現す。

「……良く決心してくれた、お二方！」

青年は敬礼で彼等を迎える。

「——勘違いするなよ六郎！お前等の為じゃねえ、此処に来たのは俺達の意味だ！」

「——だとしてもだ、お前達の英断に感謝を表したい！」

「リンクスとしてではなく、あくまで我々個人として同行する。それでいいか？真壁介六郎よ」

「——あの方には会って頂けるのですか？カスミ殿」

「……その積りだ。一度、直接会う必要があるだろうな」

二人の姿と言葉を確認した真壁は、笑みを浮かべた。

「日本国民を代表して歓迎する、カスミ！スミカ、ギン！ユウキ！」

真壁は更なる敬礼を以て二人を迎えた。

……

ベッドに身を投げ出したものの、一向に睡魔が襲って来る気配もなく、飛鳥はあの夢を思い返していた。

未だ鮮明に覚えているあの夢。

顔も名前もはつきりと記憶している。

架空の出来事であって欲しかった。

それ程までに、彼女等は無残にBETAの餌食となった。

しかしギガベースを訪れ、覚えのある名を冠した人物に出会ってしまった。

如月、山城、篁。

その内の一人、如月佳織など当事者そのものと言っても過言ではない。

だがこれで確信が持てた。

「あれは唯の夢なんかじゃない」

次々と犠牲となってゆく彼女達。

そして火の海に包まれる、古の都・京都。

「これから起こる、現実——」

飛鳥は身を起こし、シャワーを浴びる事にした。

ギガベースは一路、東へと向かう。

87式突撃砲

日本帝国及び在日国連軍所属戦術機の主兵装。

36mmチエーンガン(36mm突撃機関砲:RG-36)と120mm滑腔砲(GG-120)が一体となっている。

36mm弾倉は副腕(サブアーム)による自動交換。

背部兵装担架からの射撃も可能で、最大4つの突撃砲で弾幕を展開する事も出来る。

帝国軍戦術機の主兵装である87式突撃砲は、基部の36mmチエーンガンシステムと

その前上部にマウントされた120mm滑空砲ユニットによって構成されている。

120mm砲モジュール最上部には装弾数6発の弾倉が装填されており

砲弾の選択は主腕による弾倉交換が必要である。

後上面にあるブロックモジュールは2000発の装弾数を誇る36mm砲弾倉であり

その驚異的な装弾数は国連軍規格の特殊形状ケースレス弾によって実現されている。

なお、前上部は任務に応じたモジュールへの換装が可能となっている。

一般的な突撃砲とは36mm弾の給弾方法が大きく異なり、弾倉を銃身と水平に装着する。

銃本体と一体化するため弾倉の突起がない分、取り回しに有利となっている。

また他の国の弾倉であっても使用可能。

無理やりだが極論では、ACでも運用が可能。

その際、若干の手が加えられ最適化が図られるのが大半だ。

企業軍に所属しない、フリーランスの傭兵達にも愛用する者は多い。